
うたかたの嘘

壬代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うたかたの嘘

【Nコード】

N1388P

【作者名】

壬代

【あらすじ】

無意識に嘘を見破る異端の力——蒼眼をもった少女は、赤騎士に追いつめられた森で魔族の少年に助けられる。少年は魔王の座を巡る争いに勝つために少女の力を借りたいと言うが、少女はこれにべもなく断る。頑なに受け入れない少女に少年はある賭をもちかけた。——毒舌な梟、語り部のエルフ、お調子者の情報屋。迷走する少女騎士、王女の元侍女、島国の王子。彼らが抱える嘘と真実。ヒトを信じた先にあるものはなにか。

登場人物（前書き）

ざっくりと人物紹介。ネタバレなしで随時更新していきます。

登場人物

□主要人物

イザヤ…主人公。＜蒼眼＞という他人の嘘を見抜く目をもつ少女。

ソレイユ…魔族の少年。自分の一族を守るために仲間を探している。

リオ…白梟の姿をした魔族の女性。ソレイユの従者。

ルカ・スマラクト…エルフの少女。語り部。

ラケル…三十代前後の人間の男性。情報屋。

□アルヴィア宗教団体

教皇…アルヴィア宗教団体の最高指導者。聖クレストラウム王国の国王。

ラザロ・ニーニスト…エレバン在中の司教。バラクの兄。

□枢機卿団

リリス・シン・リンツィアフィール…第十一使徒。リンツィアフィール王国の元王女。

セト・アーディ…使徒候補。リリスの従者。

バラク・ニーニスト…使徒候補。

□聖クレストラウム王国

エレミヤ・エンデ・クレストラウム…国王の嫡子。第一王位継承者。

メトセラ・リツ・クレストラウム…第一王女。第五王位継承者。

アベリア・オル…王家に仕えていた侍女。前教皇の娘。

0-00 詠う、聖女の旅路

むかし むかし 世界はエデンと呼ばれていました

緑豊かなエデンの園は楽園と呼ぶにふさわしいものでした

エデンには 魔族とエルフが仲良く暮らしていました

数多の聖霊に見守られ エデンはいつも平和だったのです

しかし ある日 魔族の少女とエルフの少年が聖霊との約束を破
ってしまいます

聖霊は怒りました

少女と少年は何度も何度も謝りましたが 聖霊は許してくれませ
んでした

大変怒った聖霊は 約束を破った少女と少年に罰を与えます

それは 楽園 エデンからの追放でした

少女と少年は嫌がりました けれど 聖霊は許してはくれません

約束を破った少年と少女は楽園を出て行きました

悪い子はいなくなった　それでもう大丈夫

聖霊は安心しました

ですが　少年と少女が出て行ってすぐ大変なことが起こります

禁忌を犯してしまった楽園に　大いなる闇が現れました

最初は小さな小さな灯火だった闇は　どんどん大きなものへと変化していきました

魔族も　エルフも　聖霊さえも巻き込んで　闇は楽園を覆いつくします

闇より生まれし十の大罪　それは聖霊の力を破り　楽園を滅ぼすには十分すぎる力でした

それから間もなく　聖霊の努力も叶わず　エデンは崩れ去りました

平和だった楽園は荒れた大地へと変わってしまいました

崩れた楽園に　楽園の民は聖霊に助けを求めます

ですが　聖霊が応えてくれることはありませんでした

エデンの崩壊と共に　聖霊も力を失ってしまったのです

エデンが崩れ去り 世界は闇に飲まれていきました

蒼かった空は 黒へと変わってしまいました

瑞々しい果実を実らせていた大樹は 枯れ木になってしまいました

魔族も エルフにもどうすることもできません

迫りくる闇に ただ怯えることしかできなかったのです

みんなが希望を失っていました みんなが何もせずじっとして
いました

大きな闇に立ち向かう勇気を 誰も持つことができなかったのです

そんなとき 一人の少女が立ち上がりました

少女の名は ノア

蒼い蒼い瞳をもつ 聖霊の加護を受けた女の子でした

ノアは言いました

『わたしが世界を守ります だから力を貸して下さい』

ですが その言葉は希望を失った民に届くことはありませんでした

それでも ノアは諦めませんでした 世界を救う為 彼女は戦う
ことを決めていたのです

ノアは楽園の民の中でもっとも勇敢な三人と共に闇と戦いました

魔族の少女 エルフの少年 そして 闇より出でし光

ノアは戦いました 終わりのない戦い 終わりが来ると信じて戦いました

長い 長い戦いでした

辛い 辛い戦いでした

ですが ついに ノアは闇に打ち勝ったのです

晴れていく空に 楽園の民は喜びました

去っていく闇に 楽園の民は喜びました

ノアも仲間もとても喜びました

世界に青空が戻り 聖霊はまた楽園の民の前に姿を現しました

楽園の民は聖霊に謝りました

聖霊も楽園の民に謝りました

もう二度と禁忌は破らない　そう誓ったのです

それから　楽園の民は二度と約束を破ることはしませんでした

今度こそ　楽園は平和になったのです

楽園の民と聖霊は平和を取り戻してくれたノアに感謝しました

そして　ノアは楽園の民から聖女と呼ばれるようになります

聖女になったノアは　楽園をずっとずっと見守っていくのでした

イリエス・ラ・セフィロト著　『ノアの物語〜聖女の言葉〜』

作者の言葉

『世界には数多くのノアの物語がある。私が書いたこの物語は、とても短く簡単なもの。でも、だからこそ多くの子供達に読んでほ

しい。ノアがどれほど世界を愛していたか。そのことが少しでも伝わればいい。そして、この話を讀んだヒトたちが、ノアのように世界を愛してくれることを、祈っています』

1-01 逃げろ、迫り来る緋色

廃れた田舎町にある宿屋のロビーで、黒い外套に身を覆った少女は塗装が剥げた壁に据え付けられた額を見上げていた。正確には、額の中にある白い紙に書かれた詩にその双眸を向けている。

室内だというのに、まるで顔を隠すかのように目深にフードを被る様は傍から見れば少しばかり不気味だが、生憎とここにはそんなことを思う人すらない。

ロビーは無人。宿屋の店主も今は留守にしているようだ。細々とした蠟燭の明かりだけが暗い空間に少女の影を形作っている。

まるで人形のように微動だにせずに額の中の詩を見つめていた少女は、最後に詩の著者の言葉を見、踵を返した。

外は夜。酒場もない、明かりが点々と灯るだけの町。

誰もいないカウンターに一人分の家賃を支払い、出て行こうとした時、

「どこへ行くんだね？」

不意に、扉の前に壮年の男が姿を見せた。

無精髭を生やしてはいるが、人の良さそうな笑顔。口元にできるえくぼが一層性格の良さを引き立てる。この宿屋の、主人だった。

少女は無愛想を貼り付けたような口調で言った。

「宿代と治療代はカウンターに置いてある」

決して高いわけではないが、低くもない。澄んだアルト。

「……そんな心配をしているんじゃないよ。ただ、まだ傷が治っていないだろう」

一昨日の晩、全身に大小の切り傷を負いながら部屋を借りたいと言ってきたこの少女を、主人は受け入れた。

どこでこんな傷を負ったのか。どこから来たのか。名前は何か。いくつもの質問を少女に尋ねたが、そのどれにも少女が答えることはなかった。

「あと一晩、ゆっくりしていきなさい。宿代はいらないよ。だからあと一晩はゆっくりしていきなさい。私は、君が心配なんだよ」

少女の肩に手を置き、主人は宥めるように言う。

「――っ」

一瞬、少女が苦しげなうめき声をあげる。

「ど、どうしたんだい？　傷が痛むのかい？　やはり、今日は休んだほうがいい」

そう言い、主人は少女の肩に置いた手を宥めるように優しく動かす。

少女はその豆だらけの手をフードの中から見下ろすと、踵を返して宿の中へ戻った。

主人は少女の外套の裾が二階へと消えるのを見届けると、大きく息を吐く。

「全く……生きた心地がしないねえ」

※

月が真上に昇る時刻。少女はベットから起き上がった。真っ暗な部屋を照らすのは、雲間から見える月が照らす僅かな光だけだ。

ベットサイドにある小さな棚の上から長い包帯を取り、左目を隠す長い前髪の下、包帯を器用に巻いていく。

静かな部屋に、包帯を巻く衣擦れの音だけが響く。

そして、しっかりと包帯の端を固定した少女は、皮で出来た汚れたブーツ、そして所々がほつれている黒い外套を身に着ける。最後にベットの横に立てられた二振りの細身の剣を取り、少女は深くフールドを被った。

小さな皮袋を担ぎ、音を立てないように窓から下を見下ろす。真夜中だというのに、宿屋の裏口に数人の人影が蠢いていた。

「やはり——そういうことか」

諦めたような口調。少女は極力音を立てないように部屋を出ると、今居た部屋から一つ離れた部屋へと身を移す。

それから数分も経たないうちに、いくつかの足音が階段を上ってくる音が聞こえ、少女は息を殺した。

足音は少女がいる部屋の前を通り過ぎ、更に進んで足を止めた。距離からして、先ほど少女がいた部屋の前だろう。

扉が開かれる音。少女は耳を澄ませる。

「いないぞっ!？」

誰かが怒鳴る声。しゃがれた男の声だ。

「きさま、俺たちに嘘の情報を流したんじゃないだろうな？」

「い、いえっ、確かにいました!」

焦るような男の声の後に聞こえたのは、宿屋の主人の声。

「待ってください」

次に聞こえたのは、まだ幼さの残る少女の声。凜とした、強い意志を持つ声だった。

カツカツ、とおそらくその少女が履いているであろうブーツの音が響く。すぐに音は止み、暫しの沈黙。

「……まだ暖かい。おそらく我々に感付き、逃げたのでしよう」

「なるほど。流石は〈蒼眼のイザヤ〉。——長い間我々から逃げ続けているだけありますね」

また新しい声。穏やかな青年の声。

「ちっ、俺たちが来るまで上手く引き止めておけって言ったのによ
お」

「も、申し訳ありません」

しゃがれた男の声に、主人は身を竦ませたようだ。

「バラク、止めてください。あのイザヤ相手では、感付かれるのも無理はないでしょう。ここまで引き止めてくれただけでも感謝すべきです」

壁の向こうでその会話を聞いていた少女の顎を一筋の汗が伝った。今まで賞金狙いで自分を追い続けてきたごろつきとはわけが違う。そう直感した。

だが、まだ動けない。動くのは、彼らが逃げた自分の後を追って

外へと出たとき。その好機しかない。

「どうしますか？」

「どうもこうもねえだろ、すぐに追いかけるぞ。まだ遠くへは行つてねえんだ」

金属の音。しゃがれ声の男が持っている武器の音だろう。

その音が扉のほうへと歩いていく。少女がほっと安堵の息をついた。が、

「いいえ。追う必要はありません」

涼やかな少女の声。

その声に壁の向こう側の少女が息を呑む。

カツ、と少女の靴音が壁際に迫る。壁向こうの少女の心臓が大きく脈打った。

靴音は止まる。ひたり、と壁に手を当てる音。

「そこに、いるのでしょうか……〈蒼眼のイザヤ〉」

ぞっ、と背筋を悪寒が走りぬける。まるで心臓を素手で掴まれたような、そんなおぞましいほどの寒気。

そして、少女が次の行動に走る間もなく、

「かくれんぼは終わりです——イザヤ」

稲妻が走る。

眩い雷鳴が視力を奪い、騒音を轟かせながら壁が崩れていく。

見開いた目で最初に見たのは、横一文字に剣を振り切った少女が身に纏っていた、血のように鮮やかな緋色の服。

砕けた瓦礫が宙に舞う。目の前の少女の綺麗な翠の瞳が、真っ直ぐにこちらを見つめていた。

「くそ……っ」

もはや何の迷いもなかった。

少女はすぐさま後ろに飛ぶと、窓ガラスを割って外へと飛び出した。膝を折って着地し、痺れる足に鞭を打って村の外へと走り出した。

壁を破った少女は壊れた窓から少女の逃げた方向を見ると、背後に控える緋色の衣を纏った青年二人に向き直った。

「セト、バラク。追って下さい」

「了解」

「任せろ」

短い返事の後、青年二人は同じように窓から身を投げ出した。

逃げた少女の後を追う二人の背中を見送った少女は、懐からぎしりと何かが詰まった、両手に乗るほどの皮袋を取り出し、主人に渡した。

「これは壁と窓の修理代と、情報料です。ご協力感謝します」

少女が微笑む。

「それでは、失礼します。良い眠りを」

首から提げた黄金の十字架を揺らし、少女は踵を反した。その翠の瞳は、もう主人のことなど忘れてるように遠かった。窓枠に手をかけ、外へと身を躍らせる。

主人が窓から見下ろせば、少女の緋色の服はどこにも見えなかった。

「本当に……化け物染みだ連中の集まりか」

三階の高さから迷うことなく飛び降りた精神。あの細腕で壁を破壊する業。

「あれが……^{ラスール}〈使徒〉か」

そう畏怖の籠った声で呟き、主人は皮袋を抱えて部屋を出て行った。

暗い森の中をイザやは風のように駆けていた。
夜に慣れた目は、光一つない暗闇の中でも枝や蔦に氣をとられることなく進む。

「ほう、速いじゃねえか」

だが、それは彼らも同じこと。
まだ距離は開いているが、声が聞こえるほどには近づいている。

「なんでこんな場所に〈使徒〉がいる……っ」
「あんたを追って、に決まってるだろ。イザヤちゃんよお」

息を呑む。バラクの鋭い眼光が、すぐ横にあった。

イザヤはすぐさま方向を変えて駆け出そうとするが、急に地面から湧き上がった水に足を取られ、思考が止まる。目だけを横に向ければ、茶髪の青年が剣を地面に突き立てていた。

「いいぜ、セト。よくやった」

その一瞬が致命的だった。伸びてきた手に手首を掴まれ、そのまま太い木の幹に押し付けられる。

「〈水の神魂〉か……っ」

空いた手で剣を握りバラクを突き刺そうとするが、それは空を切るだけだった。

「正解だ」

膝で手を蹴り上げられる。ビキリ、と頭の芯にまで響く傷みに、イザヤは顔を歪めながら剣を落とした。

バラクはイザヤの手首を頭上の幹に押し付け、大きな刃のついた槍を首に当てた。

「動くなよ。頭と胴が真つ二つになるぜ？」

まるで獲物を捕らえた鷹のように尖った瞳で見下ろしてくるバラクに、イザヤの口元が歪む。自由な手でなんとか反撃しようとするが、手首から先がまるで動かなかった。

先ほどの攻撃で麻痺したか、あるいは、折れたか。どのみち状況は最悪だった。バラク一人でもまずいというのに、

彼の背後にはもう一人青年が構えている。あの壁を壊した少女がくるのも時間の問題だろう。

「おいセト、こいつのフード取れよ。あのイザヤがどんな顔してるか、拝んでやろうぜ」

「……あまり乗り気じゃないけど、顔を見ておく必要はあるね」

セト、と呼ばれた青年がイザヤに近づく。

まるで野生の獣のようなバラクとは正反対に、大人しそうな顔立ちをした青年だった。決して乱暴にならない手つきで、セトがイザヤの顔を隠すフードを取る。

その下から出てきた顔に、セトとバラクは軽く目を見開いた。

「——こりやなかなか。犯罪者にしておくには勿体ねえ」

「こんな……女の子だったのか」

宵闇のような深い濃紺の髪。まだ僅かに幼さが残る整った顔立ち。意志の強い紫の瞳。

年の頃十七、八歳といった少女は、世界全てを憎むかのような憎悪を秘めた瞳で、バラクとセトを睨み上げていた。

「リリースと大して変わらないじゃねえか。そんなガキを死刑台に立たせなきゃなんねえなんて、心が痛むなあおい」

まるでそんなことを思っていない口調で、バラクは笑う。対するセトの方は、眉を潜めてイザヤを見つめた。

「ああ……本当に」

同情の籠った瞳。イザヤは奥歯を噛み締めると、低く呻るような

声で言った。

「黙れ。きさまらに同情されるなど虫唾が走る」

「ハッ！ いいねえ。強気な美人は好きだぜ？」

愉快そうに顔を歪ませ、バラクはイザヤの手首を掴む手に力をこめる。細い手首はそれだけで軋む。

「ついでにあんたの罪の証も、見せてもらおうじゃねえか」

バラクの槍が、イザヤの喉元から彼女の左目を隠す包帯へと向けられる。イザヤの目が見開かれ、足をばたつかせて抵抗するが、小柄なイザヤがいくら暴れたところでバラクには何の意味もなかった。

「動くなよ。その小奇麗な顔を傷物にされたくないやよ」

そして、バラクの槍が小さく動く。

ゆっくりと重力に逆らわず落ちていく白い布。視界が広がった。

「これが……噂の蒼眼か」

バラクの顔から余裕の笑みが消える。セトは落ち着いた表情でイザヤの左目を見つめた。

蒼く、まるで晴天の空のように蒼い瞳。全てを見透かすかのよう
な、深い蒼。

「他人の嘘を見抜く眼……こうして改めて見ると」

「案外普通じゃねえか。ただ蒼い目だろ」

その、一言。バラクが放ったそのたった一言が、イザヤの顔色を

変えた。

「が——ッ！」

強い、一瞬眩暈すら覚える衝撃がバラクの顎を強打した。耐え切れず、バラクはイザヤの手首を掴んでいた手を離し、地面に蹲る。

「バラク！ 避けるっ！」

すぐに聞こえてくるセトの叫ぶような声。そして鞘走る音。バラクは何事かと顔を上げ、目を見開いた。

「知った風な口を利くな！」

そこには、蒼紫の両眼を憎悪と殺意で染め上げたイザヤが短刀を振りかざす姿。

「くそっ！」

バラクは反射的に体をよこにずらす。風を切る音が耳元で唸る。振り下ろされた短刀は、バラクの腕を縦に切り裂いた。紅い鮮血がバラクと、そしてイザヤの顔を汚す。

イザヤは血に塗れた短刀を握り直すと、すぐに二撃目を繰り出そうと振りかぶるが、同時にセトの手から放たれた何かによって短刀が弾かれた。

それがなんであるのか理解する前に、水が顔に降り注ぐ。血と水が混ざり合い、イザヤの頬を滑り落ちた。

イザヤはギリ、と歯を噛み締めると、バラクが蹲る目の前の地面に爪先を捻じ込む。そのままバラクの顎を蹴り飛ばし、セトの目を砂で覆った。

「うごっ！」

「くっ」

二人が怯んだ一瞬、イザヤはバラクとセトの間を擦り抜けて走った。

僅かしか月明かりの届かない夜の森。数メートル先すら見えない暗さ。振り向いたときにはイザヤの影も形も見えず、微かに聞こえた茂みの音もすぐに聞こえなくなった。

「やられたね」

「やるじゃねえか。こりやますます俺の手で殺してやりたくなるぜ」

服の端を千切って作った布を腕の傷に巻きながら、バラクは愉快そうに笑う。と、

「セト、バラク」

透き通るような声が、静かな森に響く。さく、と地面を踏む音にセトとバラクは同時に振り向いた。

セトは現れた少女の前に膝をつき、バラクは胡坐をかいたまま手をあげる。

「よっ、リリス。悪いな、逃げられた」

「逃げられた？」

リリスが軽く目を見開く。バラクは、ああ、と頷いた。

「やっぱり伊達に賞金首狩りどもから逃げてるだけある。なかなか手強い女だ」

「そうですか」

闇の中でも映えるブロンドの髪を揺らし、リリスは目を細めた。

「それで、その怪我は？」

「これもイザヤにやられた。つか、さっきからなんなんだよ」

取り逃がしたことを責めるでもなく、すぐに追いかけようとするでもないリリスにバラクは首を傾げるばかりだ。

リリスはそうですか、と答えると、バラクの前に膝をつき、乱雑に巻かれた緋色の布を取った。腰から下げた小さな筒を取り出し、清潔な白い布に薬液を垂らす。

「少し、沁みますよ」

傷口に柔らかい布が当たる。突っ張るような小さな痛み。リリスは丁寧に傷口を拭くと、腰袋から白い包帯を取り出して器用に傷口に巻いていく。

「バラク」

「あ？」

その様子をただ眺めていたバラクは、不意な呼びかけに生返事で反す。

リリスは視線はバラクの腕に落としたまま、至極穏やかな口調で言った。

「命拾いをしましたね」

「……は？」

思わず間拔けな声を出すバラク。

「どういう意味だ？」

「簡単なことです。あなたはイザヤを捕らえられず、そればかりか負傷までした」

事実なのだが、自分の失態を繰り返されるのは心地よいものではない。つまらなさそうに舌打ちをし、バラクは口を曲げる。

「だから、それがなんだってんだ？」

リリスは包帯の端をしっかりとテープで止め、立ち上がった。

「イザヤは〈神魂〉を目覚めさせていません。それなのに、イザヤはあなたたち二人から逃げ延びた」

バラクの表情が凍る。セトも、言葉を失ったように呆然とリリスを見上げていた。

二人の反応に、リリスは束の間目を閉じ、すぐに開いた。

強い意志の籠った翠緑の瞳は、月明かりを受けて静かに輝く。

「これでわかりました。彼女を目覚めさせてはいけない。この場で、必ず討ちます」

※

音を立てないように暫く走り続けたところで、イザヤはようやく足を止めた。

太い木の幹に寄りかかり、ずるずると体を落とす。極度の緊張と

痛みで、体にはびっしりと汗をかいていた。
吐息を殺し、背後を振り返る。追ってくる気配はないが、油断は出来ない。

「これで諦めるわけ……ないだろうな」

は、と乾いた笑いを零し、イザヤは空へと顔を向けた。
蒼い瞳は、夜空に浮かぶ双子月を映し、揺らめく。

「今度ばかりは、逃げられない……か」

異端として教団から賞金を賭けられている自分を狙うものは今まで腐るほどいた。

だが、そのどれもそこらのゴロツキばかり。最初こそ苦勞もしたが、慣れてしまえばあしらうのにそれほどの手間はかからなかった。稀に手強い相手もいたが、なんとか逃げ延びれた。

しかし、今の相手は格が違う。

現にいまも、手も足も出ずにこうして逃げている。三人でかかってこられたら、もう逃げる道はない。

「くそ……っ」

どうして、こんな目に遭わなければならないのか。

いつまで、こんな生活が続けなければならないのか。

ずっと、繰り返し続けてきた問い。答えは、いつも出なかった。

「この——眼さえ」

他人の嘘を見通す、蒼い瞳。自らの意思は関係なく、嘘を見抜いてしまう、呪われた瞳。

たった、これだけ。

周りと違うのは、この眼一つだけだ。

普通に母親から生まれ、普通に生を受け、普通に産声を上げた。それだけのはずなのに、世界はイザヤを否定した。神より与えられし力を、神が否定したのだ。

そして、蒼眼はイザヤに世界の醜さと愚かさを突きつけた。

いくらイザヤが誰かを信じようとしても、誰かが嘘をつけばそれは痛みとなってイザヤを襲う。

勘違いだと思ったかった。この眼が間違っているのだと信じたかった。だが、痛みを殺して信じた先には、いつも絶望だけが待っていた。

正しいのはこの呪われた瞳で、間違っているのは世界だと、イザヤは理解してしまった。

「何が……平等と支配を司る神だ」

空を見上げたまま、イザヤは片手で左目を押さえる。その顔は憎悪に彩られ、まるで鬼のような形相へと変わっていた。

「この世界に……平等などない」

噛み締めた奥歯が、軋む。

「この世界に……神などいない」

指の隙間から覗く蒼眼は、孤独だ。

「もし神がいるというのなら、今すぐ私の前に降りて来い。その腐った口から出る戯言を、きさまが押し付けた目で全て否定してやる……！」

しかし、いくら天を睨もうとも、降り注ぐのは優しい月明かりだけ。

イザヤは強張っていた肩の力を抜くと、膝に顔を押し当てて小さく蹲った。酷く、疲れていた。

死んでしまえば、楽になるのだろうか。

この眼を潰してしまえば、普通の生活を過ごせるのだろうか。

そう思い、何度剣を握ったことだろう。

だが、イザヤは出来なかった。

自分の命を、運命を絶つことは、決してしなかった。

運命から逃げてはいけない。生きることが止めてはいけない。抗うのだ。

「……そうだ」

この腐った世界を見続けること。

この腐った世界で生き続けること。

「それが——私の贖罪なんだ」

1-02 戦え、重なる双月

宇宙に瞬く数多の星の中の一つ、月を二つ持つ、緑豊かな星があった。

「アル・アティク」。

そこに住むのは数多の生命。

人間、魔族、エルフ。そして、聖霊が存在すると信じられていた。しかし、彼らが共存することはなかった。

人間と魔族は古来より相容れる事はなく、大規模な戦争こそ現在では収まっているものの、戦いの歴史は創世記より続くとされていた。

エルフは他族と関わりを持つことを避け、エルフのみが暮らす地で静かな生活を送っている。

聖霊はその存在すら確かではないものだ。

彼らを隔てるもっとも大きな壁は、住む世界が違うということである。

このアル・アティクは一つの星の中に三つの世界を持つ星だった。決して朝のこない世界、「ア・ベリタス」。魔の世界。決して夜のこない世界、「メモリア」。エルフの世界。

朝も夜も存在する世界、「アルカ・フォルトゥーナ」。人の世界。一つの星でありながら、三つの異なる世界を持つ、不思議な星。世界がどうしてこのような形をしているのか、それとも、どうしてこのような形となったのか。

真実を語れるものは誰もおらず、ただ世界のありのままを受け入れていた。

三つの世界のうち、人間の世界を取り仕切っているのは、アルヴィア教団。平等と支配を司るアルヴィア神を主神とする宗教団体で

ある。

人々は決して教団には抗えない。どんな不条理も、教団が認めれば受け入れなければならない。

なぜ、そんなにも教団の力が強いのか。

それは、この星に生まれてくる生命体の特殊な力を利用しているからである。

アル・アティクに生まれる生命体には、一つ的能力を授かり生まれてくる。

〈神魂〉。

神より与えられしもう一つの魂。あるいは、聖霊の恩恵。

その力はこの世の自然界の万物に当てはまり、個々によって異なる。

光、闇、風、水、火。とにかく様々だ。

だが、生れ落ちたときより〈神魂〉が宿っているとはいえず、その時点ではまだ目覚めてはいない。〈神魂〉は眠っているままだ。

人間は十の誕生日になると教団で洗礼を受け、〈神魂〉を目覚めさせ、身に宿る神魂を知る。

そこで、その人間の運命は決まる。

人間界では数多の〈神魂〉に階級がつけられおり、それによって人間にも同じように階級がつけられるのだ。

階級は全部で十三段階。

最も崇拜されるべきは〈光の神魂〉を持つ者、最も忌むべきものとされるのは〈闇の神魂〉を持つ者である。

〈光の神魂〉を持つ者はアルヴィア神に最も近い力を持っているとされ、社会的に高い地位と生活を保障される。

逆に〈闇の神魂〉を持つ者は、人在らざる者、〈落人〉とされ、社会から排除される。

故に、この世界では親の権力などは関係ない。

教団の教皇の子として生まれようとも、階級の低い〈神魂〉を宿していれば、子に待っているのは威光ある席ではない。十の誕生日

を迎えるまでは想像もしていなかったような、過酷な運命だ。

これが、アルヴィア神が平等を司る神と謳われる所以である。

〈神魂〉は血統や人種に左右されない。よって、人には必ず機会が与えられる。そこに親や周りの環境は一切の加入の余地がない。

このような世界だからこそ、親と子の関係性は薄かった。下層の〈神魂〉を持つ者の子が十歳になり洗礼を受け、高位の〈神魂〉を持つ子と判断されれば、すぐにでも二人は離される。逆もまた然り、だ。

昨日共に食卓についた子供が、明日になって急に手の届かない高みへと行ってしまう。そのようなこと、この世界では珍しいことではなかった。

そして、教団はこの完全なる階級制社会を保持するために、一つの政策を行っている。

〈神魂〉の抑制。

個人差があるとはいえ、〈神魂〉はいわば生命を兵器へと変える力である。無闇にその力を放置すれば、教団に反抗する勢力が拡大しないとも限らない。

しかし、個人毎異なる〈神魂〉は目覚めるまではわからず、一度目覚めてしまった〈神魂〉を再び眠らせることは出来ない。

苦心の末、教団はとある鉱石の精製に成功した。

体内に取り入れることで、〈神魂〉の力を著しく弱める性質を持った鉱石。後に〈魂縛石〉と名付けられた鉱石により、教団は人々から武器を奪った。

人間の〈神魂〉を目覚めさせ、階級付けを行い、すぐに〈魂縛石〉を体内へと取り込ませる。こうすることにより、大半の人間は〈神魂〉の力を完全に抑えられ、一部力の強い者も、そのほとんどを抑えこまれるのだ。

だが、この段階ではまだ教団の支配体制は磐石なものではない。全ての人間から〈神魂〉を奪う方法では、問題が二つほど残ってしまう。

一つは、人間の力が全て平等であるのなら、やはり教団へ蜂起する者が現れてもおかしくはないということ。

一つは、幾度となく人間界侵攻を繰り返している魔族へ対抗する力がなくなるということ。

この二つを解決する為に、教団は唯一〈神魂〉の自由を許された戦闘集団を組織した。

――教会騎士団。

アルヴィア神に絶対の忠誠を誓い、かつ戦闘能力に優れた人間だけが属することの出来る軍隊。

生命エネルギーの源である〈神魂〉を制限された人間は、制限されていない騎士たちと比べ、遥かに身体能力に差が出る。

それこそが、人々から教団への反乱意思を摘み取る大きな原因なのだ。

何百という人間が集まろうとも、たった一人の騎士の前にひれ伏す。それほどまでの力の差。一体誰が教団に抗えるというのだろうか。

平和維持の名の下、教団は国から軍隊制度を廃止させ、国同士の争いを根絶した。

教団が抱える騎士という人間兵器の前に、人々は抗う術を絶たれてしまった。

こうして、アルヴィア教団の支配は磐石なものへと代わり、世界から大規模な争いは消えた。

アルヴィア神の元で、人は平等に分けられ、支配されるのだ。

※

「冗談だろ？」

リリスの凜とした背中を見ながら、バラクは乾いた笑いを零す。

「〈神魂〉が目覚めてない人間は、目覚めた人間より遥かに身体能力が劣る……はずだよな？」

「ええ、魔族やエルフでどうかは知りませんが、少なくとも人間はそうです」

肩越しに振り返り、リリスは頷く。

これに反論したのはセトだ。

「しかし、リリス様。常識的に考えてそれは在り得ないのではないかと」

「――常識？」

ふ、とリリスが笑う。清廉潔白という言葉が相応しい彼女には似つかわしくもない、冷めた微笑みだった。

「蒼眼に常識など有りはしません。あれが齎すのはただの不幸。イヤヤも気の毒です。彼女に罪はない。ただ、選ばれてしまっただけなのに……」

「リリス様……」

セトが表情を沈める。リリスは視線を伏せると、胸の十字架を強く握った。

「……あんなものがなければ……」

そこまで言いかけ、リリスは顔を上げた。額に手を当て、深く息を吸い、吐く。

「いえ、すみません。いまはこんな話をしている場合ではありませんね」

「命令を、リリース様」

セトが頭を下げる。バラクも腰を上げると、長槍を肩に担いで爪先で地面で叩く。

「早くしろよ。こっちはうずうずしてんだ」

「……各々自由に動いてもらって結構です。見つけ次第何らかの合図を。ただし、くれぐれも『殺さない』ように」

「は」

「教皇様のご命令ってか。めんどくせえけど仕方ねえ」

リリース、セト、バラクがそれぞれ別方向を向いて背中を合わせる。

「散開！」

音もなく、三つの影が森へ消えた。

「――動いたか」

一つの気配がこちらへ迫ってくる。まだ完全に位置を特定されたわけではないだろうが、見つかるのも時間の問題だ。

イザヤは腰からもう一振りの剣を引き抜くと、静かに走り始めた。おそらく逃げ切るのは無理だ。ならせめて少しでも他の仲間との距離を離し、一対一に誘い込み、討つ。

勝算は少ない。だが、やらなければならぬ。

こちらの動きに気付いたのか、気配は的確に追ってくる。

「この剥き出しの殺意……あいつか」

灰銀の髪に紫のメッシュが入った長身の男。確か、バラク、と呼ばれていたはずだ。

しかし、最初に相手をするのがこの男というのはイザヤにとって都合が良かった。もしバラクがイザヤの想像する通りの男なら、おそらく応援は呼ばない。それはイザヤも望むところだった。

〈神魂〉を目覚めさせていない自分が、目覚めさせた人間と比べどれほど不利かは十二分に理解している。

だが、それでも今まで切り抜けてきたのだ。二対一ではどうにもならなかったが、一対一ならば対処法はいくらでもある。

そして、走り始めてから十分ほど経った頃、背後からはっきりとした足音が聞こえた。

肩越しに振り返る。黒い茂みの中から、銀色の刃が覗いた。

「はっはあ！ 見つけたぜイザヤあ！」

イザヤの予想通り、追ってきていたのはバラクだった。血走る紫色の切れ目を見据え、イザヤは足を止めた。

「おっと、鬼ごっこは終わりか？」

「ああ。それより、早く仲間を呼んだらどうだ？ 三人でかかってくればいい」

「……いらねえよ。能無しのおまえなんて、俺一人で十分過ぎるだろう？」

僅かに、イザヤの口元が吊り上がる。

馬鹿で助かった。そう口の中で呟き、剣を構えた。

「そうか。危なくなったらいつでも呼べ。負け犬が尻尾を巻いて逃げる時間くらいくれてやる」

最後の念押し。

フードを取り、視界を広くする。高圧的に笑ったイザヤに、バラクは歯を見せる。

「いいねえいいねえ！ 気に入ったぜ、イザヤ！」

バラクが槍を構えた。

「サービスだ。俺の力を見せてやる」

トン、とバラクの足が地面を蹴る。

一見無意味な行動。だが、イザヤは剣を構えたまま静止し、気を張り巡らせた。

「!!」

瞬間、地面が鳴動する。

バラクが蹴った場所から広がるように蠢く揺れは、イザヤの足元に迫り、

「な——っ!？」

大地を、切り裂いた。

およそ数メートルに渡る亀裂。足場を失った体は重力に沿い、下へと落ちる。このままでは底の見えない闇に飲まれてしまうだろう。イザヤは咄嗟に剣を亀裂の断面に突き立て、留まった。

片手はまだ痺れて動かない。一本の腕で全体重を支えるが、これも長くは持たない。

「別に落ちてもいいんだぜ？　ちゃんと底は作ってあるからよ」

ジャリ、と地面を踏む音が聞こえ、イザヤは顔を上げる。愉快そうな紫の瞳が、見下ろしていた。

額から零れる汗を感じながら、イザヤは表情を崩さずに言う。

「へ土の神魂」か。流石はへ五大神魂」に数えられるだけはある。厄介だ」

「そんな軽口叩いてる場合か？　俺がこの槍でお前を突けば、死ぬんだぜ？」

「殺すつもりならわざわざ底を作らないし、なによりさっさとこの亀裂を閉じればいい」

視線はバラクに向けたまま、小さく震える手を腰袋の中に潜ませる。

「だが、そうしない。どういふつもりかは知らないがおまえたちは――」

腰袋から取り出した手榴弾についたピンに咥えるイザヤに、バラクの表情が変わる。イザヤは口でピンを外すと、それを握り締めた。

「私を殺せない、だろう？」

「しょ、正気かよ！？」

バラクが槍を放り投げる。手を伸ばせば届く位置にあった剣に掴まるイザヤの手首を掴み、一気に地上へと引き上げた。

そのままイザヤを地面へと押し倒し、手から手榴弾を奪う。
手榴弾を遠くへ放り投げ、バラクは地面に手を突く。刹那、手榴弾とを隔てるように地面が隆起し、土の壁を作り上げた。

「なに？」

いつまで経っても爆発する気配のないそれに、バラクの目が点になる。

視線を地面に仰向けに倒れるイザヤへと向ければ、口元に薄っすらとした笑みを浮かべる姿。

「馬鹿か。偽者だ」

「が——っ！」

イザヤの蹴りがバラクの脇腹を抉る。

横に吹き飛ぶ。脇腹を押さえ、地面に転がったバラクは先ほど投げ捨てた槍を優雅に拾い上げるイザヤを睨んだ。

「て、め……っ」

「……わざわざきさまを隔離したのに爆音でこちらの位置を知らせるようなことをするわけがないだろう」

そう言い、イザヤはバラクが作り出した亀裂に槍を落とした。
外套の中に手を入れ、太腿に隠しておいた小刀を抜く。

「終わりだ」

「てめえは歩く武器庫かよ。次から次へと獲物取り出しやがって……」

「きさまたちと違って、私は身一つで戦えない。備えは当然のことだ」

「は……」

口元の汚れを拭いながら、バラクはゆっくりと立ち上がる。

鈍い痛みが脳に響いた。体の動きが鈍い。肋骨を数本、折れている。

「……おまえ、足になんか仕込んでやがるな」

いくら力の強い女でも、あの小柄な体系に見合う細足で骨を折ることは考えにくい。

バラクの問いに、イザヤは答えず、小刀を抜く。

「先に手を出してきたのはきさまたちだ。なら、殺されても文句はないな」

「ああ、ねえな。だが、殺される気もねえな」

ぺっ、と血の混じった唾液を地面に吐きつけ、バラクは笑う。

イザヤはフードを被り直し、小刀を手の中できりと回すと、逆手に持ち替える。

「正面！ 舐めてんのかぁ!？」

真正面から突っ込んでくるイザヤに、バラクが顔を顰める。

地面を足で強く打つ。小さな揺れ。イザヤの足元がぼこりと膨れ上がり、高さを増していく。

数メートル頭上に持ち上げられたイザヤを見上げ、バラクは地面を二度蹴った。地面から突き出る一本の鋭い土で出来た杭。その切っ先は真っ直ぐにイザヤへと向いていた。

「いまからおまえの足場は粉々に碎ける。空中は身動きはとれないぜ？」

フードの中から見える翠の瞳を見上げ、バラクは指を鳴らす。強固だった土の台が崩れる。いや、砂の粒になった。

がくり、と体勢を崩し落下してくるイザヤ。その口元が、緩やかな弧を描いた。

「本当に……馬鹿なやつだ」

ピン、と何かが外れる音がする。

それが何であるかをバラクが理解するよりも早く、僅かに月明かりが差し込むだけだった森を眩い閃光が包み込んだ。

「せ、閃光弾!？」

暗闇に慣れた目に当てられた強力な閃光。まるで目が焼けるようだった。

目が開けられない。背後で何かが着地する音が聞こえた。

「そこか!？」

杭が方向を変え、音のしたほうを貫く。何かを貫く音。バラクの表情に安堵が浮かび、

「残念だな」

凍った。

凜としたアルトは目の前から聞こえた。

「……目を潰されて戦ったこともないのか」
「ちい！」

バラクが地面を足で打つ。

分厚い土の壁がバラクを覆うように四方を覆った。高さ十メートル、厚さ一メートルはある土の壁。イザヤの持っている小刀などでは掠り傷をつけるのが関の山だ。

「どうだ。能無し」

「だから、能無しはきさまだ」

「は……？」

ひゅう、と風を切る音が頭上で響く。

一瞬イザヤが中へと飛び込んできたのかと思ったが、在り得ないと速断する。ジャンプで飛び越えるなど不可能。とっかかりも何もない壁だ。よじ登ることも出来ないはずだ。

では、何が。

直後に聞こえた、金属が地面に落ちる音。

それだけ聞けば、今までのイザヤの戦い方からは用意に想像がつく。

「また、偽者かよっ!？」

「さあな。そう思うならそこで粉々になるといい」

「こ、のやろう！」

目が見える状態ですら偽物と本物の区別をつけることは難しい。目が見えない今なら尚更だ。

バラクが手で壁を叩く。すぐさま砂へと変わった壁を擦り抜け、バラクは転がるように飛び出た。

そして、

「があああああっ！」

両足の脹脛に鋭い痛みが走る。

押さえた手に生暖かい液体が触れた。

「この女……俺の足を！」

「きさまはよく転がるからな。確実に止めを刺させてもらう」

まだ目を開けられないバラクを冷酷な瞳で見下ろしたイザヤは、小刀を構えたままゆっくりと歩き、彼の背後で止まった。

「……こうも頭の悪い男が〈使徒〉か。噂ほどじゃないな」

正直、拍子抜けをしていた。

世界を治める教皇に次ぐ地位である枢機卿。その枢機卿が独自に組織する集団、枢機卿団が抱える少数戦闘部隊〈使徒〉。

アルヴィア教団の中でもトップクラスの地位を持つ司教が、一等騎士と同等の戦闘能力を得て初めてなることが出来る、いわば文武を備えたエリート。その個人の戦闘能力は、教会騎士団の騎士を遥かに凌ぐとさえ言われている。

彼らには臨時の際は枢機卿の代行として一国を動かす権利すら与えられている。それほどまでに、教皇や枢機卿から信頼を得ている者達なのである。

全十二人で構成されている〈使徒〉は枢機卿団の紋章、数多くの伝承に登場する生命の樹が刺繍された緋色の衣を纏い、胸には金色の十字架を下げているのが特徴だ。

改めてバラクを見下ろすと、確かに特徴は一致している。おそらく純粋な戦闘能力だけを見ればかなりものだろう。

だが、単純すぎるのだ。

とてもではないが、最高の頭脳と戦闘能力を備えた〈使徒〉だとは思えない。

そういえば、バラクと一緒に襲ってきた青年ならまだしも、一瞬だけ見たブロンドの少女などはまだ幼かった。

イザヤが想像していた〈使徒〉とはかけ離れたものがある。

「……〈使徒〉も人員不足なのか、それともきさまたちが紛い物なのか」

私には、どちらでもいい。

そう口の中で呟き、イザヤは小刀をバラクの喉目掛けて振り下ろした。が、

「そう言わないであげて下さい。バラクはまだ正式な〈使徒〉ではないのですから」

澄み切ったソプラノと共に現れた白銀の刃が、イザヤの小刀を受け止めていた。

目の前には、透けるような白い肌に映える綺麗な翡翠色の瞳。優しい、とても戦場にあるとは思えない色だった。

一瞬そのあまりの透明感に目を奪われるが、すぐにイザヤは刃を引く。

「ち……」

時間をかけすぎた。

仕方なかったとはいえ、閃光弾を使ったのも失敗だったかもしれない

ない。範囲がさほど広くないものを使ったとはいえ、感付かれる危険性はあった。

イザヤがフードの中から目の前の少女を睨みつけていると、少女は柔らかに微笑んで細身の剣を下ろした。

そして、

「初めまして、〈蒼眼のイザヤ〉。私の名はリリス・シン・リンツ
イアフィール」

優雅に一礼。

頭を上げ、リリスはこの上なく穏やかな声で、言った。

「〈使徒〉です」

「……その馬鹿は、〈使徒〉じゃないのか」

「はい。彼は候補です。もし私たち十二人の内誰かが消えれば、彼を含む候補者たちの中から新しい〈使徒〉が生まれることでしょう」

なるほど、とイザヤは納得する。

使徒候補。

要は万が一〈使徒〉に欠員が生じた場合すぐにでもその穴を補充する要員というわけだ。

「道理で。頭が悪すぎる」

「すみません。彼はよく周りが見えなくなるんです。良くない癖です
すね」

くすり、とリリスが笑う。悪意の欠片もない、まるで天使を思わせるような純粋な微笑みだった。

だが、

「では、いまからは私がお相手いたしましょう。安心して下さい、殺しはしません」

無防備に剣を持つ佇まいは、天使のそれとは程遠く。死神の方がより近い。

リリスは少し首を傾けると、困ったような笑みを浮かべてイザヤを見つめる。

「出来るならあまり傷つけたくはありません。大人しく捕まってくれは……しないのでしょうかね」

「当然だ」

「残念です」

刃を反し、リリスが一步足を前へ出す。

「おい——リリスっ！」

掠れた声。リリスはイザヤから視線を逸らさずに言った。

「すみません、バラク。少し辛抱して下さい。セトもあと十分もすればこちらへ着くはずですよ」

「そうじゃねえ……そいつは俺がやる。俺の手で捕まえないければ気がすまねえんだよ！」

ようやく視力が回復したのか、薄目を開けたバラクがイザヤを強く睨みつけた。

リリスは軽いため息を吐く。

「その状態で、ですか？」

両足を切られ、立つことすらままならない。出血はなんとか押さえたようだが、足元の血溜まりの量。浅い傷ではないはずだ。

「だから一度そいつを見逃して――」

「駄目です。あなたの私恨はこの好機を逃す理由にはなりません」

「……足が痛いんだが治療して……」

「出血は止まりましたね。なら、すぐに死ぬことはありません」

バラクの言葉を次々と斬り捨て、リリスは再びイザヤへ意識を向けた。

「では、始めましょうか」

その言葉と同時に、緋色が流れるのを感じた。

まるで風のような動作。最小限の動きで、最小限の音で、リリスはイザヤとの間にあった数メートルの間合いを一瞬にして消し去った。

懐に入られる。

ブロンドの隙間から覗く翡翠に見上げられ、イザヤは咄嗟に上半身を仰け反らせた。風を切る音。銀色の刃が月明かりで煌き、眼前を突き抜けた。

どうする。

頭の中に語りかける。一つ判断を間違えば終わり。そんな極限状態の中、イザヤの頭は酷く冴えていた。

何度も切り抜けてきた死線がそうさせるのか、危機に陥れば陥るほどまるで清流のごとく澄み渡る。

「……っ！」

目の前を通る細い腕を痺れの残る右手で掴む。

出来る限りの力で横に投げ飛ばした。思ったよりもずっと軽い体は、予想を超えて飛ぶ。

リリスは不安定な体勢で投げ飛ばされたにも関わらず、難なく着地する。

「なるほど。バラクが手を焼くもの領けます」

真剣な眼差し。翡翠の瞳が鋭く細まった。

また、リリスが駆け出す。

風の如く、疾く。

イザヤよりさらに小柄なリリスの武器は力ではない。速さである。だからこそ、正確に刃を合わせてやれば、片腕で持った小刀でも受け止めることは出来る。

イザヤの小刀とリリスの剣が金属を磨り減らす音を立てて鏗り合う。

リリスは張り詰めていた表情を和らげると、フードから零れる濃紺の髪を見つめた。

「イザヤ、あなたは どうして……そこまでして生きようとするのですか？」

「……」

「もし、今運良く私たちから逃れたとしても、それは一時凌ぎにし かすぎません。私はあなたを追うのを止めない。あなたの逃げ続ける日々は終わらない」

ぐ、と剣から伝わってくる力が強くなる。

「こうして逃げ続け、いつか死ぬ人生の先にあなたは何を見ているのですか？」

「……別に、何も見えてやしない」

「なら、何故？」

「それが私の唯一の道だからだ」

止まっていた風が動き出す。

揺れるフードの中の強い光を瞳の奥に移しながら、リリスは僅かに目を伏せる。

「そうですか」

そう、リリスの蚊の鳴くような声と同時に、小刀が宙に飛んだ。剣を振りぬき、瞳孔を開いたリリスと目が合う。

「――何も見えていない、何もない道を行くのは今日で終わりです」
「おまえっ」

先ほどまでは手を抜かれていた。そうでなければ、こんなにもあつさりと獲物を弾かれたりはしない。

リリスが地面を蹴る。剣の柄がイザヤの肩を強打した。肩の関節が外れる音が、頭の中に響く。

「あ――ぐう！」

そのまま、地面に背中を強く打ち付けられる。冷たい土の感触。そして、

「ここまでです。抵抗はしないで下さい」

冷たい翡翠の瞳が、月明かりの逆光を受け黒く染まった輪郭の中で煌いた。

刃の先端が喉元に向けられる。動けば自分の血で汚れることにな

るだろう。

ゆっくり、左手を動かす。

「動かさないで。斬りますよ」

止めた。この少女に隙はない。

この状況下で自分を見逃す要素を与えるとも思えない。リリスの言葉を信じるなら、あと数分でもう一人の青年も来る。万に一つも、勝機はない。

——ここまでか。

諦めたように、イザヤは長く息を吐く。

リリスは一度剣を引くと、それを地面に突き立てる。腰に下げていた袋から一枚の白い布と瓶を取り出し、透明な液体を、布に染み込ませる。

剣を抜き、イザヤの喉元に宛がいがらゆっくりとリリスは足を折って姿勢を低く落とす。

「少しの間眠って下さい。いまだけは、安らかに」

優しい声だった。同時に、悲しくも聞こえる声だった。

近づいてくる白い布。薬品の香り。

イザヤは空を見上げる。二つの月が重なっていた。

「私は……」

口が布で覆われる。

無意識に息を殺した。無駄だと知りつつも、体は勝手に動いた。だが、

「……っ」

緩やかに、だが確かに襲ってくる眠気。

目に映る月がぼんやりと霞みだした。

このまま眠れば、楽になれるのだろうか。再び目を開けることは出来るのだろうか。

考える力が奪われていく。脳が働きを失っていく。

息も、苦しくなってきた。

耐え切れず、イザヤは大きく息を吸い込む。

口の中一杯に、薬品の香りがむせ返る。軽く咳き込むと、押し当てられていた布がなくなるのを感じた。

月がいつも以上に遠い。

まるで、逃げていくようだ。

「……ここで死なせてあげたほうが、あなたの為なのでしょうか」

死。

その言葉すら、遠かった。

もう、目を開けていられない。もう、意識を保てられない。

——ここで、終わるのだ。

そういえば、随分と長いこと熟睡したことなどなかった。今なら、いくら寝てもいいだろう。

そう思い、イザヤが目を閉じかけたとき、

「教皇様は、なぜイザヤを生かしたまま連れてこいなどと仰ったのか……」

意識は見えない糸に手繰り寄せられるかのように覚醒し、気付けば体を起き上がらせてリリースの手首を掴んでいた。

「な——ば、馬鹿な……」

信じられない、とリリスの目が見開かれる。

イザヤは体の動くままりリスの手首を地面に押し付けると、掠れた声で言った。

「教、皇……？」

「葉が効かない!？」

「教皇……教皇……教皇」

まるで壊れた人形のように何度も呟くイザヤに、リリスは背筋を凍らせた。

そこから感じられるのは今まで感じたこともないほどの憎悪。静かで、深い怒りの感情。

「……死ねない——私は、死ねない」

素早くリリスの腰から剣を引き抜き、イザヤはリリスから離れる。

「駄目だ……まだ、おまえたちに捕まるわけにはいかない」

「大の大人ですら一分とかからずに眠りに落ちる葉なのですが……驚くべき精神力です」

リリスが起き上がる。

剣を取り出す気配はない。どうやら、リリスの武器はこの剣一本のようだ。

しかし、

「く、そ……っ」

絶好の好機だというのに、足は動かない。剣に縋っていなければ

立っていることすらままならなかった。

額から零れる汗が地面に落ちる。意識を保っているのがやっとだった。

「全く効いていない、というわけでもなさそうですね」

リリスが無防備に足を進める。一步踏み出す度に揺れる長いブロンドを見つめながら、イザヤは歯を食い縛った。

動け。

走れ。

頭で強く命令するも、体は思うようには動いてくれない。

「わたし、は……こんなかたちで……あいつに……」

「今度は力ずくで気絶してもらいます」

無慈悲に、リリスがイザヤへと近づいていく。

イザヤは強く足に力を入れると、リリスに背を向け、よろけながら走った。

だが、すぐに動かない足は絡まり、地面に倒れんでしまう。

「う……」

起き上がれない。

それでも、イザヤは手を伸ばし、体を引き摺るように前に進んだ。

「誰、でもいい……」

手を前に伸ばす。奥歯を噛んで、ずっと封印していた言葉を吐き出す。

「助けて……」

もし奇跡があるならば、聞き届けて欲しい。
やり残したことをやるために。約束を守るために。

「私は――死ねないんだっ！」

そして、

「いいぜ」

奇跡は、起きた。

誰かに掴まれた。――そう理解するのに随分と時間がかかったのは、触れた手があまりに冷たかったからだだろう。

ゆっくりと顔を上げる。

そこには、血のような真紅の瞳の少年が、無邪気に笑っていた。

「イザヤ、あんたを助けてやる」

1-03 目覚める、神の魂

「よいしょ、と」

前触れもなく現れた少年は、イザヤを抱きかかえるようにして立ち上がる。

もう指一本すら動かすことの出来ないイザヤは目だけを少年に向けた。

「お、まえ……は？」

「ああ、俺は——」

「なぜ、魔族がこんな場所に」

少年の言葉は、驚愕と目を見開くリリースによって遮られた。リリースは表情を強張らせると、真横に腕を伸ばして少年を見据える。

「目的は何ですか。単身で攻め込んできた、にしては場所が奇妙です」

「そんなに殺気立つなよ」と、少年は手を軽くふった。「別に戦いに来たんじゃない」

まったく敵意の感じられないその仕草は、しかしリリースの警戒を緩めるには至らなかった。

「なら、何が目的ですか」

「そうだな。いまは——イザヤだ」

「蒼眼——魔族が蒼眼の力を欲している？」

「違うな。別に蒼眼だろうがなんだろうが関係ない。こいつは俺に助けてくれと言った。だから助ける。理由はそれで十分だ」

「別に——おまえ限定で、言ったんじゃ……ない」

抱きかかえられたまま、イザヤが不満気に呻く。ソレイユが笑う。

「おいおい、可愛くない反応だな」

「なら捨ててしまいましょう」

不意に聞こえた第三者の声。リリスの目が鋭く細まり、ある一点を捉えた。

「白い梟……いえ、魔族ですか」

リリスの視線の先、一本の木の枝に純白の梟が鎮座していた。少年は白梟を見るなり顔を輝かせる。

「おお、リオ！ おまえどこ行ってたんだよ。心配したんだぞ」

「食事です」

「——よし、一発殴らせろ」

「それよりも」と、リオと呼ばれた白梟が羽ばたく。木の枝からふわりと飛び上がると、そのまま少年の頭の上へと着地した。「私はこの人間は反対です。強情な人間を手懐けるのは面倒ですよ」

「そりゃわかってるけど……助けてって言われたのに見捨てられないだろ」

「……お人好しにもほどがあります、主さま」

やれやれ、と首を振るリオ。

「それで、私は何をすればよろしいのですか？」

「あれ、協力してくれんのか？ 珍しい」

「どうせ私が協力せずとも主さまはお一人でなさるつもりなのでし

よう。それには、少し厳しい相手です」

「助かる。五分時間稼げ」

少年がリリスを見ながら言う。

リオは一度目を閉じると、澄ました声で答えた。

「五分、でよろしいのですか？」

「おう。無理はするなよ。おまえの言うとおり、強いぞ」

「言われなくてもわかっていますよ。あの若さで、大したものですよ」
「お話は終わりですか？」

ざ、とリリスが前に踏み出す。武器は持っていない。
だが、

「あなたたちの目的ははっきりとはしませんが、私たちの障害となるようならば全力で排除します」

次の瞬間、リリスの手にはしっかりと何かが握られていた。剣の形をした蒼白い光の塊。不安定な刀身の周りには、火花が絶え間なく弾けている。

「〈雷の神魂〉ですか。これは珍しい」

リオの感心するような、それでいて楽しそうな声。

リリスは雷を凝縮した剣を軽く振る。空気が震えた。

「出来るならば、あまり使いたくはありませんでした。まだ、私程度の力では」

両手で剣を構え、リリスは切っ先をリオへと向けた。

「加減……できませんから」

一瞬で森を光が包み込む。

「早く行って下さい、主さま。あと四分ですよ」

頷いて、少年が走り出す。

このとんでもない状況をいまだに理解できないイザヤは、ただ冷たい少年の体を感じていた。

「――ぶねえ、あの赤服……とんでもねえな」

どれくらい走っただろうか、少年は不意に立ち止まって深呼吸をした。

俵を担ぐように抱えていたイザヤを下ろし、木の幹に寄りかからせる。

「大丈夫か？」

「……そう、見えるか？」

顔面蒼白で睨みつけてくるイザヤに、少年はぶんぶんと首を振った。

「見えない」

「当たり前、だ……ただでさえ薬で頭が朦朧、と……しているのに……」

口を押さえて蹲るイザヤ。少年は慌てて懷から小さな袋を取り出すと、小さな木の実を取り出した。
それをイザヤの口の前に持っていく。

「飲めよ。気付けた。頭はすっきりするぞ」

赤に紫のまだら模様が入ったそれに、イザヤはあからさまに顔を顰める。

「……これ、食べられるのか？」

「だから気付けたって。食える」

左目は痛まない。

イザヤは意を決して木の実を齧り、

「ぶっ！」

盛大に吐き出した。

「あ！ちゃんと食えよ！」

「食えるか！」

「おぶっ」

少年の頬を殴り飛ばす。

「あ——う、動く……」

先ほどの痺れや眩暈が嘘のように、体が本来の動きを取り戻した。

「だ、だから気付けたって言っただろ……」

赤くなった頬を押さえながら、少年がぼやく。

イザヤは二、三度掌を握ったり開いたりを繰り返すと、大きく息を吐き出した。

「おまえ……どうして私を助けた？」

隣で胡坐をかく少年に向き直る。

少年は心底不思議そうに眉を潜めると、肩をすくめた。

「どうしてって、あんたが言ったんだろ。助けて、って」

「だからといって見ず知らずの……ましてや人間を助ける魔族がどこにいる？ 人間はおまえたちの敵だろう？」

——人間と魔族。

世界が生まれた創世記より続くとされる、耐えない争いの歴史。

どうして争いが始まったのか。一体誰が戦いを始めたのか。理由など誰にもわかりはしなかった。

ただ、人間と魔族は永遠に相容れることはない。手を取り合うには、戦いの歴史が長すぎた。溝が深すぎた。

人間と魔族、どちらかが滅ぶまで戦いは終わらない。そう、誰もが思っていることだけは紛れもない事実だった。

「それとも——」と、イザヤがフードを取る。濃紺の長い前髪から覗く蒼が、ソレイユを捉えた。「目的はこの眼か？」

蒼眼。

詳しいことは未だ解明されてはいないが、膨大な力を秘めた神魂の結晶とされている。

人の嘘を見抜いてしまうのは、蒼眼が齎す力のほんの一部に過ぎない。アルヴィア教団が恐れ、排除しようとしている最も大きな理由は、その強大な力。人の手には負えず、しかし野放しにしておくにはあまりにも危険すぎる力だ。

そして、人間にしか発現しないその特異な力が、他族の手に渡ること。教団はあくまで異端排除と銘打っているが、人々の間ではこれが一般的な筋の通った話として流れている。

だからこそ、魔族が蒼眼の力を欲したとしても別に不思議なことではない。

蒼眼とは、未知なる強大な力。

戦争をしているなら、力以上に欲しいものなどないはずだ。

事実、今まで出会った幾人かの魔族も、イザヤの蒼眼の力を欲し、襲ってくるものばかりだった。だから、きっとこの少年もそうなのだ。――狙いは蒼眼。

だが、いくら言葉で誤魔化そうが、自分には通用しない、とイザヤは蒼眼を細める。

少年が嘘を言えば、すぐにわかる。それは少年も承知の上だろうが、肯か否かしかない質問を浴びせれば、簡単に白黒はつく。沈黙は黒だ。

イザヤがじっと少年の反応を待っていると、彼は目を大きく瞬かせ、それから首を傾げた。

「あんた、俺の言ったこと聞いてなかった？」

「……一割程度は、聞いてた」

「少ないな」

どこか据わった目で肩を落とす少年に、イザヤはもう一度繰り返す同じ質問をする。

「それで、なぜ私を助けた？ 敵であるはずの私を」

「だから言ったら。魔族も人間も関係ないって。あんたが助けを求めて、俺があんたを助けると決めた。それだけだ」

言葉が、出なかった。

少年の言葉には、一切の嘘がない。痛まない左目を押さえ、イザヤは唇を震わせた。

「本気、か？」

信じられなかった。

人間ですら、今までなんの企みもなくイザヤを助けようとする者はいなかった。――否、最初こそ心からの善意で助けてくれる者もいたが、やがてはイザヤを裏切った。それは、一番イザヤを傷つけることだった。

しかし、この少年は違う。

助けてと言われたから助けた。

そんな単純で、純粋な思いだけで、イザヤを助けたのだ。

「本気だ」

少年が笑う。やはり左目は、痛まなくて。そのことに、初めて不安を抱いた。

「ああ、でも、全然下心がないっちゃあ嘘になるかも」

「は？」

「実は頼みがある。いや、これは二の次だ。あんたを助けたのはそのためじゃない」

手を大きく振って弁解しようとする少年。イザヤは視線を逸らした。

「嘘じゃないことはわかっている」

「そ、そうか。便利な目だな」

普通なら、殴り飛ばすところだった。そんな無神経な言葉は。

だが、不思議とそんな気は起こらなくて、イザヤはただ少年を見返した。

「頼みとはなんだ？ 不本意だが助けられたことには変わらない。私に出来ることなら――」

イザヤの言葉をかき消すように、轟音が地面を鳴動させた。鳥が木々から羽ばたく音が聞こえる。

まるで落雷のような衝撃は、この巨大な森全体を揺るがすほどだった。

少年がはっとして腰を上げる。

「――リオ」

不安気な少年の声。イザヤは視線を地面に落とした。

「イザヤ！」

勢い良く名前を呼ばれ、イザヤが身を竦ませる。

「な、なんだ？」

「あんたの〈神魂〉、目覚めさせるが、いいか？」

「は？」

目が点になる。唐突過ぎて話についていけない。

「誰の、何を目覚めさせるって？」

「あんたの〈神魂〉だ。この場を切り抜けたいんだろ？」

「そ、それはそうだが……」

「正直俺じゃあいつは厳しい。あんたの力が必要だ」

きっぱりと言い切った少年に、イザヤは思わず声を荒げていた。

「私のって……私はあの使徒に勝てなかったから死にかけてたんだぞ!？」

「でも、それはあんたが〈神魂〉を目覚めさせていなかったからだ。もしあんたが目覚めれば、きっとなんとかなる」

「なんとかって……」

「とにかく、それしかない。リオが心配だ、頼む」

真剣な目で見つめられ、イザヤは先ほど轟音が響いた方向を見る。あれが自然現象などでないことはわかっている。十中八九、リリースだろう。

イザヤは束の間天を仰ぐ。

そして、

「わかった。やれ」

意を決したように、言った。

込み上げる不安を隠すかのように拳を握り締めるイザヤの肩に、少年はそっと手を置く。

「ちょっと痛いけど、我慢できるか？」

「痛みには慣れてる。いいから、早くしろ」

言葉が微かに震えているのは、何が起こるかわからない恐怖からか。それとも身を震わせるような未知への期待からか。

わからない。今は、冷静に自分を見られない。

だが、今残された道はこれしかないのだということだけはわかる。リリスを退けるには、力が必要だ。

強く瞼を閉じ、イザヤは唇を結んだ。

「いくぞ」

少年の細い、それでいて力強い腕が頭に回され、引き寄せられる。抱きしめられた。

そう、イザヤが理解するよりも早く、

「——っああああああッ!!」

数多の剣に、体を貫かれた。——否、それほどの激痛が全身に走ったのだ。

あまりの痛みに目を開ける。

気が狂いそうな激痛に耐えながら視線を痛みの中心へと向け、イザヤは目を見開いた。

「あ、ぐ——あ」

少年の手が、胸に埋まっている。

血は出ていない。だというのに、まるで胸を凶太い剣で刺し貫かれているような痛みと熱が襲う。

痛みは治まることなく激しさを増していき、視界が真っ白に染まる。

なにも見えない。なにも聞こえない。ただ痛みだけが体を、脳を支配している。

「ああああああッ!!」

絶叫をあげずにはいられない。

体中を何かが暴れまわってる。内側から弾けてしまいそうな感覚。皮膚が裂けんばかりに突っ張っているような気がした。

痛い。

痛い

痛い。

痛い。

イタイ。

いたい。

意識が遠のく。

白濁とした意識の中、少しでもこの痛みから逃れたくて手を伸ばした。

その手の先、遠い遠い場所に、一つの人影。

人の形であることは確かだった。だが、遠すぎてよく男か女かすらわからない。

ただ、その唇の動きだけは、なぜか読み取ることが出来た。

「——やっと……目覚め、る……?」

痛みが急速に遠のいていく。

視界が冴え渡る。今自分がいる場所の形を把握できる。

「こ、こは……どこだ？ 私は、夢でも見ているのか？」

さほど広くもない結晶の中。四方は鏡のように反射し、結晶の中心で覚束なく浮いている自分を映す。

足元に広がるのは黒紫の光。まるで結晶の底から湧き出たように、それは大きさを増していく。

その禍々しくも美しい色に、イザヤは無意識のうちに手を伸ばした。指先が波状した光の先端に触れる。触れた感触はない。だが、確かに触った。そう感じ取った瞬間、黒紫の光は閃光のように輝き、イザヤの手の中に吸い込まれていく。

「う、ぐう——！」

巨大な光の渦が次々と体内へと流れ込む。指先から零れ落ちた黒紫の光が結晶の内部を満たしていく。

気を抜けば飲み込まれるほどの激しさ。速い濁流に飲まれたように流れる意識の中、不意にイザヤは誰かに抱きしめられるような暖かさを感じた。

目は開かない。

誰かはわからない。ただ、暖かい。

それから、どのくらいの時間が経っただろうか。いつの間にか流れは止まり、知らない手が背中を押す。

ゆっくりと目を開けた先に、光の亀裂が見えた。

出口だ。

イザヤは光に向かって手を伸ばし、最後に後ろを振り返ろうとした瞬間、光が視界一杯を包んだ。

——光に飲まれる間際に見えたのは、二つの蒼い瞳だった。

※

視界を遮る大量の土煙が晴れていく。

「――はぁ……っ、はぁ……」

荒い息遣い。地面に片膝をついていたリリスは神魂で作り出した剣を支えに立ち上がると、半壊した一本の木を見上げ、微かに笑った。

「参りましたね」

土煙が風に流され、霞がかったいた足元が晴れていく。

「傷一つ、つけられませんか……」

地面を抉る、無数のクレーター。周りの木々は倒れ、壊れ、中には燃えているものまである。

およそ半径数十メートル。先ほどまで月明かりを遮っていた木々はその役目を果たせず、ただ無残な姿を月明かりの下に晒していた。リオは木の枝の上からリリスを見下ろすと、片羽を広げて笑う。

「いえ、右の羽が少し焦げました」

ほら、とりオが羽の先端を示してみせる。確かに、ほんの少しだが焦げた跡があった。

「……本気、だったのですけれど」

微笑に焦りを乗せ、リリスは息を吐き出す。リオは金の瞳を細めて羽をたたむ。

「そう悲観することもないでしょう。私は完全に避けたつもりでいました」

「そうですか。私は確実に仕留めるつもりで攻撃しました」

「あなたが焦らず、もっと落ち着いていれば、腕一つくらいはもっていかれていたでしょうね」

「……怖いひとですね。これでもうまく誤魔化せていたと思っていたのですが」

支えにしていた剣を引き抜く。蒼白い電流を纏うそれを片手で構え、リリスはリオを見上げたまま口を開く。

「――セト」

「ここに」

いつの間にか現れたセトが、リリスの背後に立つ。

「バラクは？」

「応急手当を済ませました。もう心配はいらないでしょう」

「良かった。では、あなたはイザヤを追って下さい。――手遅れになる前に」

つ、とリリスの頬を滑る汗を見つめ、セトは一つ頷いて駆け出した。

「ふふ、間に合うといいですね」

リオが楽しげに体を揺らす。リリスが眉を潜めた。

「……イザヤの〈神魂〉を、目覚めさせるつもりなんですね」

「彼女が望めば」

「なぜ？」

「それに私が素直に答えると思うほど、あなたは愚かではないでしょう」

大きく羽を広げ、リオが飛び立つ。やや飛び方がぎこちないのは、右羽に出来た傷が原因だろう。

そのまま高く飛び立とうとするリオ。リリスが剣を握る手に力をこめた。

「何処へ!？」

「もう十分は経ちました。これ以上この場において、巻き込まれるのはごめんですから」

「何を——ッ!？」

瞬間、リリスは足先から頭にかけて背筋が凍るほどの寒気が走り抜けるのを感じた。

言葉さえ失う。

得体の知れない恐怖が、足の下を這いずり回っているようだった。

「な、んですか……これは」

ようやく搾り出した声は、震えていた。強く、両腕で自分の体を抱きしめるようにして震えを抑えようとする。

「……ある程度予想はしていましたが、予想以上です」

落ち着いたりオの声。リリスが顔をあげる。

「まさか……これは」

「ええ、そうです。彼女が目覚めました。人間、命が惜しければすぐに逃げなさい」

そう言い残し、リオはどこかへ飛び去っていった。

追う気にはなれなかった。否、追うことができなかった。リリスの視線はもうリオを移してはおらず、森の奥のただ一点を凝視している。

鬱蒼と生い茂る草木の向こう、黒で塗りつぶされた闇の中。何も見えない。何も聞こえない。だが、何かがある。近づいてくる。

イザヤが目覚めた、とリオは言った。これはリリスが考えられる限り、最悪の事態である。

もし、この寒気がするほどの恐怖の正体がイザヤだったとしたら。

「セトっ」

先行したセトの身が心配になった。

リリスは汗の滲んだ手で剣を握りなおすと、地面を蹴って走り出そうとし、

「リリス様！」

誰かに、体を抱きしめられたまま宙を飛んだ。

背中を強く地面に打つ。地面から覗いていた岩に当たった肩が軋んだ。

リリスがその痛みに目を閉じて顔を顰めていると、不意に頬に生暖かい液体が落ちる。

頬に当たった液体に触れ、目を開ける。

そして、

「セト!？」

自分に覆いかぶさるようにして倒れるセトに、リリスは思わず声を荒げた。

セトは虚ろな目を開くと、ごほっと血の塊を吐き出す。血飛沫がリリスの頬にかかり、白い肌を染め上げた。

「り、りすさま……お逃げ——下さい……」

「セト、あなた……血が」

「あれは、我々の……手に負えるもの、では……ありません。早く、逃げ……」

セトの瞳が力なく閉じられる。

背中に手を回すと、べっとりと付着する血。緋色を汚すおびただしい赤に、リリスは顔を顰めた。

乱暴にならないようようにセトを地面に横たえさせると、リリスは一度消えてしまった剣を再び発現させる。暗い森を、蒼白い閃光が切り裂いた。

「セト、死んだら許しませんからね」

立ち上がる。

木々の天井を失ったこの場所は、満月の光が遮られることなく降り注ぐ。

その月明かりが一層強く照らす場所。そこに佇む黒い影に、リリスは切っ先を向けた。

「イザヤ……」

顔はフードで隠れていて見えない。

だが、今のイザヤの状態が正常でないことは明らかだった。十数分前に剣を交えた時とはまるで別人のような気配。

イザヤに変わったところは見られない。

たった一つ、両手に一本ずつ握られた黒紫の剣以外は。

まるで空気が重さをもったように、リリスの体に襲い掛かる。

息をするのさえ苦しかった。

イザヤから目を離せない。瞬きすら許されない。

一瞬でも目を離したら斬られる。自分の体が切り裂かれる映像が容易に想像できた。

一秒が長い。呼吸が自然と速くなり、剣を握る手が麻痺してくる。

「!!」

イザヤの体が僅かに動く。リリスの瞳孔が大きく見開かれた。

音はない。僅かに風を切る音だけが、リリスの鼓膜に届く。

真っ直ぐに向かってくる黒い塊。

それは、まるで死そのものに見えた。

剣を構える。――振りかぶられた二振りの剣を防ぐように。

リリスの剣は、確かにイザヤの剣を捉えた。タイミングも、位置も完璧だった。

だが、

「――え？」

左肩から飛び散る、赤い鮮血。

月明かりで光るブロンドの髪が、舞い散った。

「か、は……っ」

膝をつく。

手元を見ると、その手には何も握られていなかった。

まるで洪水のように流れ出る赤。リリスは片手で肩を押さえ、空いた手で地面に手をつく。

痛みはない。ただ、斬られた肩が酷く熱い。血が、地面に赤い水溜りを作っていく。

砂を踏む音が目の前で響く。

俯いていた視界に、茶色いブーツが入る。イザヤが、目の前にいた。

（ああ——ここが、私の終わり……）

そう唐突に理解した。

不思議と恐怖はなく、リリスの口元には笑みさえ浮かんでいた。ゆっくりと顔をあげる。

低い位置から見上げたことで、フードで隠されたイザヤの目と目が合った。

蒼い瞳。なんと綺麗な色なのだろう、と不謹慎なことを考えた自分にまた笑ってしまう。

「……殺さないのですか？」

いつになっても振ってこない痛みにも、リリスはイザヤを見上げたまま微笑む。

イザヤは片方の剣を振り上げると、リリスの喉元にぴったりと刃の先端を当てた。少し押し出せば、白い喉は容易く破れるだろう。だが、

「え……？」

何を思ったのか、イザヤは剣を引くとリリスに背を向けて歩き出した。

「どういふ……つもりですか？」

肩を押さえ、リリスが声をかける。

イザヤはほんの一瞬だけ足を止めるが、すぐにまた何も言わずに足を進めた。

森の中に消えていくイザヤの背中を、リリスは何も出来ずに見送る。

そして、気配が完全に消えた頃、張り詰めていたものが切れたようにリリスは背中から地面に倒れこんだ。倒れた際に聞こえた水の音は、気にしないようにした。

霞んでいく視界で空を見上げ、リリスは視線を少し離れた場所で倒れるセトへと向ける。

「ごめんなさい、セト。負け、てしまいました……」

返事はない。

体が僅かに上下していることから、気を失っているようだ。

——早く医者に見せなくては。

そう思うも体は動かない。

瞼が重い。視界がぼやける。

顔を空へと向けると、月が酷く近くにあるような気がした。

1-04 揺らぐ、真偽の瞳

「良かったのか？ 殺つとかなくて」

リリースの元を離れ、暫く歩いたところで、不意に頭上から降りかかる声。軽く視線だけを上げれば、足で体を支えた少年が木の枝からぶら下がっていた。

イザヤは別段驚きもせず、黙って視線を落とす。

「……殺してくれと縋るようなやつを斬る趣味なんてない」

そう、リリースは死を望んでいた。いや、死を常に受け入れていた。いつ、どこで、どのような終わりを迎えたとしても、彼女は何も思わないだろう。ただ静かに、死を受け入れる。そこには、なんの未練もない。

それほどまでに、リリースの瞳には生に対する執着がなかったのだ。

「まあ、俺は構わないけどな。だが、後々後悔することになるかもしれないぜ」

「いい。また襲ってくるなら相手をしてやるまでだ」

「甘いんですね、見た目どおり」

不意に聞こえた鼻につくような笑い声に、イザヤはしかめっ面を隠そうともせず斜め後ろにある木を睨みあげた。

木の枝で羽を休める純白の梟と目が合い、眉を顰める。

「言いたいことがあるならはっきり言え、性悪梟」

「リオです。たったの二文字も覚えられないのですか？」

呆れたようにため息を吐くリオに、イザヤの眉間の皺は一層深く刻まれる。

少年はそんなイザヤとリオを苦笑しつつも微笑ましく眺めていたが、やがて思い出したように手を叩き、地面に降り立った。

イザヤの前に立ち、手を差し出してくる。

「……なんだ？」

訝しげの差し出された手と少年の顔を交互に見るイザヤに、少年は笑顔を見せる。

「ソレイユだ。名前、言ってなかったよな」

「聞いていないし、覚える気もない」

「あんた、本当に可愛げないのな」

くくく、と喉を鳴らして笑うソレイユ。イザヤの唇が結ばれた。

「……力を貸してくれたこと、感謝はする。だが、これ以上私に用がないのならすぐに消えてくれ」

強く、突き放すような拒絶の言葉。

ソレイユとリオを見るイザヤの目は、これまでにないほど冷たい色を浮かべていた。

「私は一人以上になるつもりはない」

「用ならあるさ」

差し出したまま止まっていた手を引き、ソレイユはその手を腰に当てる。

「俺たちの仲間にならないか？」

「死ね」

「泣くぞ」

「うるさい勝手にしろ。私の話を聞いてなかったのか馬鹿」

額に青筋を浮かべ、イザヤは腕を組む。

「聞いてた。聞いてたけど、言ってる」

「……やはり目的は私の力か。きさまも」

ぐ、とイザヤの表情が歪む。一步ソレイユから離れ、手を宙に翳す。

辺りを包み込む闇が、イザヤの手に収束していく。瞬く間に形を成した黒紫の剣をソレイユへと向けた。

「消えろ」

「〈闇の神魂〉。現存する神魂の中で最強を謳われる魂だよな。けど、その力の大きさゆえに教団からは危険視され非道な扱いを受ける。世界に五人いるかどうかって言われてる力だっただけなのに、勿体無い話だ」

「……消えろ」

「蒼眼と〈闇の神魂〉。どっちも人間界じゃ排除すべき対象だろ。今だってもしあんたが教団で洗礼を受けていれば、あんたは殺されてたかもしれない。それでもあんたはこっちに拘るのか？」

「消えろと言っている！」

ひゅ、と空気を切り裂く音が聞こえると同時に、ソレイユの眼前には剣の切っ先が突きつけられていた。

ソレイユは木の上で瞳を細めたリオを手で制止すると、イザヤを

見下ろす。

「三十年ほど前に魔王が死に、魔界では今も魔王の座を巡って大きな争いが起きている」

「……何を、いきなり」

「魔王ってのは魔界で一番強いやつになるもんだ。それ以上の資格なんてない」

イザヤの言葉を遮り、ソレイユは続ける。

「誰もが魔王の座を狙った。だが、一人で魔界全土のやつらを倒すのは難しい。時間もかかる。だから、魔族たちは手を組むようになった。最初はそれこそ何千とあった集団も吸収され、滅ぼされ、ほとんど数を減らしていった」

手を開き、その手に人差し指を重ね、ソレイユは口元をあげる。

「で、結局今じゃ残っているのはたったの六つ。王座争いも、そろそろ終盤ってわけだ」

「……」

「俺たちは六つの勢力の中で一番数が少ない。一部族だけの構成だから、当然と言えば当然なんだけどな」

イザヤの反応はない。だが、立ち去ることもせず、ただ黙って剣を消した彼女に、ソレイユは顔を綻ばせる。

「で、だ。俺たちは一人一人の力は強いと自覚している。だが、物量で一気に総力戦に持ち込まれたら正直お手上げだ。今はまだ六つの勢力がお互い睨みを利かせているから激しく戦力を消費する総力戦なんて手段に出る馬鹿はいないだろう。だが、もし他の五つの勢

力がいずれ一つになったら、そのときこそ俺たちは潰される」

個人個人が強い力を持つ少数の集団に勝利するには、物量に頼る総力戦が有効だ。一対一や少数同士など、数が均衡する戦いを仕掛けても勝ち目はない。

しかし、六つもの勢力がある中で、総力戦を仕掛ければ当然負けたほうはもちろんのこと、勝った方ですら多大な損害が出る。

そうすればすぐにでも残った勢力に潰される。

だからこそ、ソレイユの勢力は最後に潰される、ということだろう。

「うちのトップの読みじゃ、あと数年のうちに戦況は動き、勢力は二つになるって話だ。だから俺たちに残された時間はあと数年。その間に、戦力を少しでも増やしておきたいんだ」

「……魔界じゃ確保できない戦力を、人間界から補充するということか」

「その通りだ」

「なぜ、おまえたちは一部族で戦っている？」

多くの勢力が吸収合併を繰り返し拡大したというのなら、当然ソレイユが属する勢力にも他の部族が介入してもおかしくはないはずだ。

ソレイユはイザヤの疑問を当然とばかりに受け止めると、木の幹に背を預けるようにして寄りかかった。

「俺たちの中に、魔王の座なんて欲しがるやつはいなかった。だから、いままでは静観していたんだ」

「なら今までどおり静観を決め込めばいい……そうしない理由はなんだ？」

「意外と頭は悪くないのですね。安心しました」

先ほどまで沈黙を保っていたリオが割ってはいる。

ソレイユの肩へと飛び移ると、月によく似た金色の瞳を瞬かせた。

「その通りです。もう二十年以上前になりますが、私たちが争いから遠ざかっていられた理由が消えてしまった」

一瞬、ほんの僅かに曇りを見せたソレイユとリオの表情を、イザヤは見逃さなかった。だからといって、何を言うわけでもなかったが。

「正確には、抑止力となっていた魔族が亡くなったのです。魔界でも五指に入るとされる彼女のおかげで、私たちに手を出す勢力は少なかった」

「最初こそなんとか誤魔化し通せていたが、それも長くはもたなかったよ。十数年経つ頃には、もう魔界中に知れ渡っちまった。手を出してくる奴らも増えた。今はなんとか退けられてるが、時間の問題だ」

つまり、とソレイユは真っ直ぐな瞳でイザヤを見つめる。

「力が欲しい。俺たちの仲間を守るために、俺は魔王になる。この戦いを終わらせる。その為には、力が必要だ」

濁りのない、純粋な響きだった。

無意識に左目を押さえながら、イザヤはソレイユから目を逸らす。

「……他を当たれ。私は、こっちでやることがある」

「やること？ それは何だ？」

「おまえたちには関係のないことだ」

「いいじゃないか。減るもんじゃないだろ？」

「そういう問題じゃない。言う意味がないと言っているんだ」

苛立たしげに眉を潜めるイザヤに、ソレイユは不満そう唇を尖らせ、それから何かを思い立ったように手を叩いた。

「なあ、あんたさ、俺らに助けられたよな？」

「……」

「うっわ、何その、あからさまに嫌そうな顔」

まるでゴミでも見るかのようにソレイユを見据えるイザヤに、ソレイユは思わず突っ込む。

イザヤは大きくため息を吐くと、額に手を当てつつソレイユを見上げた。

「……何が望みだ？」

「二つ、頼みを聞いてくれればいい」

「仲間にはならない。魔界には行かない。消えてくれ」

「最後のは無視するぞ。じゃあまず一つ目」

白手袋のはめられた指を一本真っ直ぐに立て、ソレイユは口端を上げる。

「あんたの目的を教えてくれ。死ねない理由……あるんだろ？」

イザヤは言った。

死ねない、と。

死にたくないではなく、死ねないと、イザヤは言ったのだ。それは酷く、ソレイユの耳の中でざらつくように残った。

「自分の為に生きてるわけじゃないって聞こえたぜ」

「勝手な妄想だ。私は自分のためだけに生きてる。誰だってそうだろう。結局は自分が一番可愛いんだ」

「それは違う」

思いの外、強い口調だった。

イザヤが視線をソレイユへと向けると、静かに燃える真紅の瞳と目が合った。

「そりゃ、自分は大事さ。いくら建前を装っても、身の危険が迫れば途端に掌を返すやつだって大勢いる」

「そうだ。ヒトは嘘をつく。上手く生きる為に、自分を守るために……嘘をつく。他人を傷つける」

「あんたの言ってることは正しいよ。けどな、誰かの為に、笑って死ぬやつだっている」

気付けば、ソレイユとの距離はなくなっていた。

イザヤは後ろに下がろうとするが、二、三步下がったところで木の幹に背中がぶつかる。

ソレイユはそれ以上イザヤに近づこうとはせず、言葉を滑らせた。

「誰かを信じて、守って……でも、裏切られて。——それでも、笑って死んだやつだっている」

「……馬鹿なだけだ。ヒトを信じるこそ間違っている」

一瞬、鋭い殺気が体を貫いた気がした。

動揺を隠しながら視線を向けるが、その先にいたりオは澄ました顔で毛づくろいをしている最中だった。

「そうだな。馬鹿だ。けどな、イザヤ」

一度言葉を切り、ソレイユは笑顔を見せた。

「そいつは後悔なんてしてなかったぜ。自分の生き方に満足して、笑って逝った」

「……だから？」

「あんたは、どうなんだ？」

風が吹いた。

木々の間を擦り抜け、秋の到来を予感させる冷たい風が、イザヤとソレイユの髪を散らせる。

「ヒトを信じることをやめたあんたの人生……満足か？」

追い風だった流れが、向かい風へと変わる。夜空に浮かぶ二つの月が、離れていく。

イザヤは固く拳を握り締めると、ソレイユを見上げて口元を吊り上げた。

「きさまは、何様のつもりだ？」

「……」

「さっきから黙って聞いていればべらべらと無駄口ばかり言って。ヒトを信じることをやめた？ 止めさせたのは誰だ！」

腕を横に薙ぐ。

その際に指先がソレイユの胸を掠めたが、イザヤは構わず続けた。

「信じられなくさせたのは——誰だ。この目がある限り、私はもう自分の意思でヒトを信じることなんて出来ない」

真が偽か。

それを判断するのはこの目だけ。自身の意思や感情などは、入る余地などない。いくら信じたくても、信じようとしても、左目の痛みが目覚まさせる。

優しい笑顔。優しい言葉。優しい心遣い。

そんなものは信じる要素にはならない。ヒトは嘘を優しさで隠して他人へと手渡すのだから。

「嘘をつかれていると、騙されているとわかるのに、信じることなど出来るものか」

「俺は信じる」

風が止む。

木々が揺れる音が消え、虫の声すら聞こえなくなった。

「俺はたとえ嘘をつかれているとわかっていても、信じる。それが自分で決めたことなら。俺が信じたいと思えるやつなら信じる」

否、イザヤの耳が、聞く事をやめていたのだ。

無音の世界の中、響く声は、たった一つ。

「もしそれで裏切られたとしても、それは俺が決めたことだ。後悔なんてない。誰かを信じずに後悔し続けるよりも、俺は後悔の少ない道を選びたい」

「嘘、だ」

「あんたの目がそう言うなら、そうなんだろうな」

「……っ」

動揺を隠せない。

ソレイユは嘘など言っていない。痛まない左目がそう告げる。

「そんなもの……誰にも裏切られたことなんかないやつが言う戯言だ！」

「あるさ。たくさん」

笑顔で、ソレイユは真実を言う。

「でも、後悔したことはないぜ。俺が自分で決めたことだからな」

足元が覚束ない。ソレイユの放つ一言一言が、イザヤの頭から正常な思考を取り去っていく。

「なん、でだ。なんで……そんなことが言える？」

その声は、情けないほどに震えていた。

徐々に弱弱しくなっていくイザヤの頭に、ソレイユは軽く手を乗せた。

「大事なのはどうして信じるかじゃない。自分自身が信じたいかどうか……だ」

「……」

「簡単だろ？ ま、全部受け売りだけどな」

頭の後ろで手を組み、ソレイユは歯を見せて笑う。その肩にとまっていたリオも、心なしか微笑んでいるように見えた。

イザヤはソレイユの手を跳ね除けると、僅かに顔を俯かせた。

「……自分が信じたいかどうか……そんなこと、考えたことなんてなかった」

騙されているのがわかっているのに信じる。そんなこと、普通は考えもしないだろう。

それでも、目の前の少年は嘘偽りなく言い切った。

陳腐な言葉。この苦しみをわかるはずもないのに、無責任で勝手な言葉だと思う。

だが、不思議と納得してしまった自分に、少し笑ってしまった。受け入れることは出来ないが、納得は出来た。

「は……馬鹿は痛い目を見ないとわからないというのはどうやら嘘だったみたいだな」

肩の力を抜き、顔を上げる。

正面で笑うソレイユを見つめ、精一杯皮肉を籠めて言ってやった。

「本物の馬鹿は……痛い目を見たってわからない」

※

いつ〈使徒〉の増援が来るかもわからない森に留まるのは得策ではないと判断し、イザヤはひとまず森を抜けることに決めた。

夜は過ぎ、既に朝日が昇り始めている。

昨晩の騒動が嘘のように清々しい朝に、イザヤは目を細めて木々の隙間から覗く太陽を見上げた。

そこへ、

「イザヤ、飯！ 飯取ってきた！」

急に聞こえた騒がしい声に、イザヤの顔が一瞬にして不機嫌なそれ

になる。

くると振り返り、フードの中から片手一杯に果実を抱えたソレイユを睨む。

「なんで当たり前のようについてきている？」

「いや、だって俺まだ条件一つも飲んでもらってないしさ」

しゃく、と赤い林檎を頬張ったソレイユの顔が輝く。

「お、いけるなあ、これ。ほら、あんたも食べよ」

「いらん。というか食いかけをよこすな、馬鹿魔族」

差し出される林檎を一蹴し、イザヤは腕を組んでそっぽを向く。

「なんだよ。食わないと体力持たないぞ。ほら、新しいのやるから」

「別に一食抜かしたからって死ぬわけじゃない」

「まあ、その通りなのですけど。体、大きくなりませんか？」

急に会話に入ってきたかと思えばそんなことを抜かす梟に、イザヤは顔を引き攣らせる。

「あなたが幾つなのかは知りませんが、少なくとも年齢とそのサイズが見合っていないのは確かなようで……」

「余計なお世話だ！ 顔サイズのおまえに言われたくない！」

「梟と張り合うなよ」

呆れ顔でツツコミを入れてくるソレイユを睨みで黙らせ、イザヤは視線を逸らした。

「ああもう……本当に早くどこかへ行け！ 私はおまえたちに付き

合うほどの余裕はないんだ」

今回のことで、リリスに目をつけられたのは間違いない。あのへ使徒〉はまた必ず現れるだろう。

そうなったとき、果たして逃げ切れるのか。

〈闇の神魂〉の力。確かにあれは驚異的な力だ。

しかし、昨晚再び発現させてみたが、リリスを打ち負かした時のような力が出なかった。

リオの話では、〈神魂〉を『目覚め』させた直後は高確率で力の暴発が起こるようで、それが原因ということだった。今まで眠らせ、押さえ込んでいた魂を目覚めさせる。それはつまり、生まれてから十年間溜め込んでいたものが一気に放出されるようなものだ。それがイザヤの場合十七年分だというのだから、力の放出は恐ろしいほど強かったことだろう。

つまり、次も上手くいくかどうかはわからないということだ。

力の弱まりはもちろんのこと、リリスも警戒し準備を怠ることはしないはずだ。傷が癒え、準備が整った時、彼女はまた現れる。

今度こそ、イザヤを鎖に繋ぎ、教皇の前へ差し出すために。

イザヤにはリリスと戦う理由はない。

無論襲ってくれば身を守る為に戦わざるを得ないが、それ以上に戦う必要はないのだ。

だからこそ、出来ればもうリリスとは接触したくなかった。速やかにこの地を離れ、また身を潜めながら旅を続けることが望ましい。

「もう私に構うな。私はおまえたちの喧嘩に加担してやる義理も理由もない」

「それはわかってる。俺が聞いているのはあんたの目的だ」

よほど林檎が気に入ったのか、もくもくと赤い実を齧るソレイユ。

「さあさあ、ぱっぱと言っちゃまおうぜ。あんただって俺達なんかに貸しを作ったままってのは気持ち悪いだろ？」

「それは……」

否定できず、イザヤは黙り込む。

暫くの沈黙。ソレイユが林檎を齧る音だけが響く。

イザヤは一度目を瞑ると、包帯が巻かれた左目を長い前髪ごと押さえ、大きく溜息を吐き出した。

「……わかった。言う。その代わり聞いたら消えろ」

「二つ目の条件もあるからな。まだ無理」

頭痛がした。

「歩きながら話す」

そう短く言い、イザヤは足を進めた。ソレイユはその後を一步下がる形でついて行き、リオはソレイユの頭に止まる。

イザヤは歩きながら横を通り過ぎる巨木を見つめ、

「へエデン」を探している。以上だ」

吐き捨てるように、言った。

静寂。イザヤはただ黙々と歩き続ける。

「短い！ 早い！ 理解できん！」

ソレイユの叫びが、森の中に木霊した。

「一文言った。普通だ。されたくない」

「身も蓋もないこと言うな！」
「うるさい」

イザヤの剣が音もなく抜刀され、ソレイユの眼前に突きつけられる。

何度目だ、という疑問はこの際無視しソレイユは両手を上げた。

「すまん。だけでもうちよつと詳しく教えてくれないと二つ目の条件に移れないんだが……」

「そうなればこのままずっとついていくしかないですね？」

ずっと、をやけに強調しながらリオは言う。

イザヤは舌打ちを鳴らすと、剣を引いた。

「そもそも、おまえたちは〈エデン〉を知っているのか？」

「……えーと、あれだろ？ 伝説の剣。それか幻の珍味」

「知らないなら素直に言え。面倒くさい」

「すまん」

両手を上げたまま固まるソレイユに、イザヤの溜息は一層深くなる。

「幻の地でしよう。世界の何処かに存在されるとされる、誰も辿り着いたことのない楽園。一説では東の果てに存在すると言われていますが、真実は怪しいものです」

耳に心地良いほど流暢に言葉を滑らせたのは、ソレイユの肩で羽を休めるリオだった。

イザヤはリオを一瞥すると、踵を返してまた歩き出す。

「そうだ。魔族の間でも〈エデン〉は知られているのか」

「いいえ。そのような伝説を信じているのは人間くらいなものでしょう。私は単に物好きというだけです」

「……で、その〈エデン〉を探してるって言ってたよな。なんでだ？」

ようやくエデンが何であるかを理解したソレイユが尋ねる。

だが、イザヤは一向に口を開こうとはせず、沈黙だけが続いた。

「何か、赦されたいことでもあるのですか？」

イザヤの肩が微かに震える。ソレイユが片眉をあげた。

「赦されたい？ どういうことだ、リオ」

「幻の楽園〈エデン〉は全ての罪を赦し、浄化する園と伝説では謳われているのです。そして、真の理想郷がある園だと。今では皆御伽噺の話だと思う者が大半ですが、数百年前までは実在すると信じる者も多かったようですよ。そこへ行けば、罪が赦される。そう思い、〈エデン〉を探す者も少なくなかったと言います」

ですが、とリオは続ける。

「所詮は御伽噺です。イザヤ、あなたは本当に〈エデン〉の存在を信じているのですか？」

「信じる信じないの問題じゃない。誰かに赦しを貰って癒される程度の罪など、背負ってはいない」

肌寒い風が濃紺色の髪を揺らす。包帯の巻かれた左目に触れ、イザヤは眉を吊り上げた。

「私は〈エデン〉を探す。この道を外れるつもりなんてない」

空を覆う木々のせいで、早朝だというのに森の中は薄暗く、歩く道は黒かった。

足元に広がる草と木の根を踏みつけ、イザヤは足を止める。黒い外套を翻し、ソレイユとリオを真っ直ぐ見つめた紫水晶の瞳には、悲しいほど冷たい光が宿っていた。

「だから、諦めろ。私といっても得はない。別の人間を当たれ」

それは、いつもの棘のある言葉ではなく、助言にも似た忠告だった。

ソレイユは無表情を貼り付けるイザヤを見返すと、穏やかに笑って最後の林檎を放った。

綺麗な放物線を描いた林檎は、寸分の狂いなくイザヤの手元へ向かう。無意識のうちにそれを受け取ったイザヤは、林檎を握り締め、口を開く。

「おい……」

「二つ目の条件な」

イザヤの言葉を遮り、ソレイユは笑う。

「一つ、俺の賭けに乗ってくれ」

「賭け？」

目を瞬かせ、イザヤは問い返す。ソレイユが頷いた。

「そうだ。あんたが〈エデン〉を探すのが先か、俺があんたを引き込むのが先か。勝負しようぜ」

「は……?」

「あんたは今まで通りへエデンを探せばいい。俺はそれにくっついてあんたを仲間に引き込む。別に手荒な真似はしないし、強制もないぜ。ただ、あんたが俺達の仲間になってくれるように努力する」

木々の隙間から差し込んだ光がソレイユの顔を照らす。光を受けたその顔は、今までに見たことがないほど自信に溢れたものだった。

「あんたが俺の説得に応じる前にエデンを探し出したらあんたの勝ち。俺だって踏ん切りの付け時くらいわかる。素直に諦める。だが、その途中であんたが俺の説得に応じたら俺の勝ち。あんたは俺と一緒に魔界に行く」

次期魔王付きの護衛だ、と幼子が夢を語るように楽しげに話すソレイユ。

「……意味が、わからない」

対するイザヤの顔は、情けないほどに間抜けなものになっているだろう。

頭を振り、イザヤは前髪をくしゃりと掴む。

「そんな賭け、最初から結果がわかりきっているようなものだ」
「どうかな? やってみないとわかんないぜ?」

一体その自信はどこから出てくるんだ、とイザヤは頭を抱えた。そして、ふと思いついたことに、顔を引き攣らせる。

「ちょっと待て。その条件だとおまえたちは……」

「ああ。これからよろしく、イザヤ」

そう、ソレイユの賭けを了承するなら、これから先賭けの決着がつくまで共に旅をしなければならぬということだ。

「ふざけるな！ やってられるか、そんな賭け！」

差し出された手を通り抜け、イザヤがソレイユの胸元を掴み上げる。とは言ってもこの身長差、ソレイユは露ほども苦しくはないのだが。

感情を露にして怒鳴るイザヤに、ソレイユは殊更楽しげに喉を鳴らす。

「まあ、いいじゃないか。邪魔するわけでもないんだし」

「存在が邪魔だ！ 見ているだけでイラつくんだ！」

「……そこまで言うことなかりうに」

ソレイユは苦笑混じりに肩を落とすが、すぐにまたいつもの表情に戻る。

胸倉を掴むイザヤの手を掴み、目を細めて笑う。

「本心を言うとな、見てみたくなった」

「何、を……」

「あんたが他人を心から信じる瞬間」

そこまで言いかけ、ソレイユは不意に視線を空に向け、唸る。

「ん、ちょっと違うな」

一つ頷き、またイザヤを見る。

「あんたに他人を信じさせたい。俺が、教わったようにな」

咄嗟の言葉が出ず、イザヤはただ目を見開くだけだった。

一体この男は何を言っているのだろうか。

自分の意思で他人を信じることなど出来るはずがない。真偽がはっきりとわかるのに、それを自分の意思で覆すことなど出来はしないのだ。

そもそも、なぜこんなことを言ってくるのかが理解できなかった。例えば自分が他人を信じられるようになったとして、一体ソレイユに何の得があるというのか。

仲間に引き込む為にしては回りくどすぎる。時間だってあまり残されてはいないはずだ。

ソレイユの意図を図りかね、イザヤは訝しげにソレイユを見上げる。

「おまえ、何がしたいんだ……？」

「言ったら。イザヤに人を信じて欲しい。その目なんか関係なく、ただあんたの意思で、人を信じられるようになって欲しい」

いつの間にか、太陽は高さを増して、森に差し込む光も多くなっていた。

「それで、それがどんなにいいことかっていうのを、知ってもらいたい」

足元を照らす光。空から降り注ぐ眩しいまでのそれに、イザヤは目を細める。

「それで……おまえに何の得がある？」

「何もないさ。ただ、俺は俺の信念を貫こうと意地になってるだけ。それと、あんたをほっとけなくなったってだけだ」

「馬鹿でお節介か？ 性質が悪いな」

「俺に色々教えてくれた人も、よく言われてたなあ、それ」

イザヤを通り抜け、ソレイユは懐かしそうに目を何処か遠くへ向けた。

「イザヤ、俺昨日も言ったよな。大事なのは、理由じゃなくて、自分の意思だって。例え嘘をつかれているのがわかっていても、それでも信じぬいた先には、絶対何かがあるんだ」

「戯言だ。夢物語はベットの床だけにしろ」

「そうやって何もかもを突き放すのは、一度試してみてもいいんじゃないか？」

「一度どころか……何度も裏切られた。だから、私は人を信じた先には何もないと知っている」

「それはあんたが最後まで信じようとしなかったからだ」

音が聞こえるほどに、イザヤは奥歯を噛み締めた。

「最後まで信じて……金持ちの物好きに売られれば何か見えるのか？ 魔族の奴隷になれば何か感じれるのか？ 教団に捕まって処刑台へ立てば何か聞こえるのか？」

高まっていく語調。それでも、ソレイユはイザヤの言葉を聞き続けた。

イザヤはもうソレイユなど見てはおらず、ただ自分の過去に思いを馳せる。苦しみや痛み、憎しみしかない、黒く染まった過去に。

「信じた先に待つのが死だと見えているのに、おまえは私に信じろというのか!？」

苦悩と絶望の汚濁に塗れた過去は、心を引き千切るには十分過ぎるほど残酷だった。

「誰も、助けてはくれないんだ。一人で生きる為には……誰も信じることなどできない」

「そうか。それじゃあ、俺が助けてやる」

深い記憶の底にいたイザヤの意識が、引っ張りあげられる。

「その金持ち信じてみるよ。ヤバくなったら俺が助けてやる。魔族の奴隷……は俺との先約があるからパス。教団も一度捕まってみるといいかもな。何かわかるかもしれない」

馬鹿か。

いつもの強がりすら出てこなかった。

「もしあんたが処刑台に立たされて殺されそうになったなら、俺がそこから助け出してやる」

一瞬視線を足元へ落とし、すぐに顔を上げたソレイユの顔は、優しかった。

「それがあんたに人を信じろって言った俺の役目だ。責任はきちんと取ってやる」

「……」

「イザヤは俺が守ってやるよ」

「……な」

「イザヤ？」

「……か……な」

俯きながら小さく呟くイザヤの声が聞き取れず、ソレイユは耳に手を翳して顔を近づける。と、

「へぶっ！」

急に掌が顔に押し当てられ、くぐもった声が零れる。

ソレイユは顔に当てられた手を引っぺがすと、情けない顔でイザヤを見下ろすが、俯いているせいで表情は読み取れなかった。

「……なんだよ、いきなり」

「本当に……馬鹿だな」

「は……？」

「こんな馬鹿げた台詞……本気で言うなんて」

そう呟き、イザヤはソレイユに背を向けた。そのまますたと歩き出すイザヤの背を、ソレイユは慌てて追いかける。

「ちょ、おいっ！」

「馬鹿魔族」

「……ソレイユだっつの」

「その賭け、乗ってやる」

不満気に唇を尖らせていたソレイユの目がゆっくりと大きくなる。肩越しに振返ったイザヤは、微かに口元を吊り上げた。

「私も見てみたくなった。きさまの偽善者面がいつ崩れるのかをな」

ソレイユは呆けていた顔を引き締めると、腰に手を当てる。

「その賭け、あんたに勝ち目ないぜ？」

自信たっぷりに言い返すソレイユに、イザヤはほんの一瞬だけ目を細め、視線を前へと戻した。

「……勝手に言ってる」

どこか軽いその声を満足そうに聞き、ソレイユは何時の間にか木の枝に移動していたリオに声をかけ、イザヤの後を追ったのだった。

1-05 踏み入る、海風漂う街

広大な大陸を二つ持つ人間界、〈アルカ・フォルトウーナ〉の中心にある小さな陸地。

聖地カナン。

人々からそう呼ばれているカナンには、雲を越える山とその麓にある巨大な湖、そしてアルヴィア教団の総本山、エレバンがある。

巨大な湖――シロアム湖の上に建設された、水上の街エレバンへ行くにはまず大陸から船に乗り、カナンへと渡る必要がある。シロアム湖の畔にあるキルケラという街で厳重な審査を行い、それを通った上で初めてエレバンへの渡航許可が下りるのだ。

キルケラには教会騎士団が常に常駐しており、エレバンにも騎士たちは当然いる。各国々が軍事力を持たない人間界で、教団がここまで慎重になっているのは、無論魔族の侵攻を恐れてのことだ。

魔族が次元の違う人間界へ侵入するには、二つの条件を満たさねばならない。

一つは月。

世界に二つある満月が重なり、それが離れるまでの数刻。それが、人間界と魔界を繋ぐ門が開いていられる時間だ。

そして、二つ目こそがその門である。

人間界と魔界とを繋ぐ門。アルパドの門。

高さ十メートル、幅三メートルはある、荘厳な漆黒の扉。いかなる手段でも破壊できず、扉を封じることすら出来ない門だ。

双方の世界を行き来するのはこのアルパドの門を通らなければならない。しかし、この門は決してどこにでも存在するというわけではないのだ。

現時点で確認されているアルパドの門は三つ。

東の大陸の最南端に一つ。西の大陸の北部にある群島地帯の中に一つ。

最後は、聖地カナンのすぐ傍にある小さな島に、一つ。

このいずれからか、魔族は人間界へと刺客を送り出しているのである。

しかし、近年このアルパドの門から魔族が侵入してくるという報告は非常に少なくなっていた。理由は定かではないが、魔界で何かが起きているのだと教団の聖職者達は読んでいる。

その理由こそがソレイユがイザヤに話した王座争いなのだが、魔族と違い魔界へと侵略を行っていない人間は知る由もなかった。

エレバンにある大教会の一室、巨大な円卓には、緑の祭服を纏い、肩に長方形の布を下げた面々が腰を下ろしていた。

その数およそ七十人。十代前半から八十を越える老若男女が、集っている。

「皆、よく集まってくれた。本日緊急ながら司教会議を執り行うのは外でもない、〈蒼眼のイザヤ〉についてだ」

初老の男が口火を切ると、一瞬、場がどよめく。そこかしこで声を響めた会話が繰り広げられ、議場は一時乱れた空気となった。

男が大きく手を叩くと、議場がまた静寂を取り戻す。

「先日、クレストラム領内のエフライムの森にて、第十一使徒、リリス・シン・リンツイフィール、並びその補佐であるセト・アーデイ、バラク・ニーニストを保護したという報告があった。三人とも命に別状はなかったとはいえ、重傷を負っていたそうだ」

「負傷ですって？」

三十路過ぎの女性が、驚いたように声を上げた。

「何かの間違いではないかしら？　いくら蒼眼所有者とはいえ、あのリリスが神魂を目覚めさせてもいない者に遅れを取とは思えないのだけれど」

女性の言葉に、円卓に座る司教達の大半が頷く。

そんな中、異見を唱えたのは一人の青年だった。特徴とも言える赤い長髪を揺らし、机の上で手を組む。

「それはどうでしょうか。蒼眼の力はあくまで未知数。何が起るかなどわかったものではない」

「ラザロ、あなたはご自分の弟くんが負傷したというのに随分と落ち着いていますね」

「ええ、まあ。バラクは生きているなら問題ありません」

ラザロ、と呼ばれた青年が足を組む。

「ですが、私も正直なところリリス君が負けた、というのは信じられませんね。なんせ彼女は天才なんですから。――皆さんも覚えていらっしゃるでしょう？　彼女が使徒へ入る際の試験を」

まるで物語を話すかのように喋りだしたラザロは、両手を組んだ足の上に乗せた。

「当時若干十四歳だった彼女は十二から六までの使徒を破り、試験官は慌てて試験を中止にしたそうじゃないですか。当然ですけどね。この勝ち抜き式の試験で第十使徒以上を破った新参者など歴史上数えるほどしかない。それも第六までとなると、初めてのケースです。彼女が有能過ぎたのか、はたまた使徒が無能なのか。考え物ですねえ」

「ラザロ、口を慎め。今は関係のない話だ」

初めに口を開いた初老の男がラザロを嗜める。

ラザロは「失礼」と悪びれもなく答えると、口を閉ざした。

「それで、リリスは今どこに？」

「首都デバイラだ。相当消耗していたようだな、発見から三日経った今でも目を覚まさぬらしい」

「そう。では、セトとバラクからは何か聞き出せなかったのかしら？」

女性が聞き返す。初老の男は首を横へ振ると、小さく息を吐いた。

「セト・アーディ、バラク・ニーニストに関しては意識を取り戻しているが、詳しい事はわからないようだ。彼らは宿屋の主人の通報でイザヤを発見し、追い詰めた。だが、一度逃げられ、バラクが戦闘不能に。次いでリリスがイザヤを確保寸前にまで追い込んだが、ここで魔族の介入があったようだ」

「魔族？」

「そうだ。白銀髪の少年と、白梟。少年はイザヤを連れ去り、白梟が足止めを図った。セトはリリスに命じられたバラクの応急処置を済ませた後少年の後を追ひ、イザヤを発見した」

だが、と男の眉が顰められる。

「セトは一瞬にして力の差を悟ったそうだ。すぐにその場を離れ、リリスの元へ戻り、セトはそこで追いつかれたイザヤにより戦闘不能にされた。それから先の事は、リリスに聞くしかないだろう」

ラザロの口元が緩やかな弧を描く。

「イザヤの神魂が目覚めた。そう考えるのが妥当ですね」

男はラザロの言葉に頷き、口元の白髭を撫でる。

「セトも確信はないがそうではないかと言っている。急にイザヤの纏う空気が変わった、と」

「厄介ね」

女性が口到手を当てて呟く。額には薄っすらと汗が滲んでいた。

「神魂を目覚めさせてすぐは安定せず力の放出が激しいとはいえ、リリースが負けるなんて」

「ああ……神魂も不明。イザヤの神魂を目覚めさせたと考えられる魔族二名の力も未知数だ」

「そんな力が魔族の手に渡ってしまったら……考えるだけでも恐ろしい」

司教の一人が呻く。

「確かイザヤには教皇より生きたまま確保せよとの達しが出ていましたね。教皇は、なんと？」

「変わらぬ。命令の撤回も変更もない」

そこで言葉を切り、男は腰を上げる。

「皆、聞け。これより教団は本腰を入れて〈蒼眼のイザヤ〉の拘束に当たる。各地の騎士へ通達。枢機卿団へも伝えよ。イザヤを生かしたまま捕まえよ、とな」

※

窓から入ってくる柔らかな風を頬に感じ、リリスは目を開けた。大きなガラス窓から差し込む陽光が眩しい。鳥達の囀りが耳を撫でた。

覚束なかった視界が鮮明になると、見慣れた天井が目に入る。霞がかった頭の中が、醒めていく。

「いっ、は……」

背中にあたる感触で、自分がベットの上にいるのだと理解する。起き上がろうと上半身を起こしかけたとき、

「駄目よ。まだ寝ていなさい」

とん、と指で額を小突かれ、リリスはまたベッドに倒れこんだ。

「え、あ——え？」

額を押さえて目を白黒とさせていたリリスだが、ベッドの傍に椅子を置いて腰掛ける女性を見、今度こそ勢い良く起き上がった

「め、メトセラ様!？」

「こら、まだ起きちゃ駄目だっていってるじゃない」

褐色の肌によく映える金目を細め、聖クレストラム王国第五王位継承者メトセラ・リツ・クレストラムは微笑んだ。

リリスはそんなメトセラの言葉など耳に入らないほど動揺し、わたたと言葉を紡いだ。

「ももも申し訳ありません！ えっと、その……あ、挨拶がまだ――」

慌てて頭を下げようとしたリリスは、肩に鋭い痛みを覚え、思わず肩を押さえて蹲る。何事かと思いい服を少し肩からずらすと、包帯がぎゅしりと巻かれていた。

呆然と目を瞬かせるリリスに、メトセラは声を押し殺して笑い、リリスをベッドへと倒した。

「だから寝てなさいって言ったのよ。怪我人なんだから」

「いえ、あの……すみません、私」

何を言っているかわからない、という風に細い眉をハの字に下げるリリス。

メトセラはそんなリリスを見下ろすと、微笑みながら柔らかいブルンドの前髪を梳いた。

「相変わらずね、リリス。仕事してるときの凛々しさはどこへいったっちゃうのかしら？」

「……それは、その……え、と」

しどろもどろになりながらもなんとか言葉を見つけようとするリリスは、束の間視線を右往左往させ、

「あの、メトセラ様……私はどうしてここに？ 私はエフライムの森で倒れたはずですが」

そんなことを、聞いていた。

仕事の話になると途端に饒舌になる少女をおかしく思いつつ、メ

トセラは知っていることを話してやる。

「そうね。私も詳しいことは知らないけれど、近くの村の人があなたたちを見つけたらしいの。でも、あなたたちの傷は深かったから、ここまで運んできたってわけ」

「二人は大丈夫なのですか？」

不安で揺れる翡翠の瞳。メトセラは優しく微笑んでみせた。

「もちろんよ。今は二人とも別室で目を覚ましているわ」

「そうですか……良かった」

全身の力が抜けたように、リリスはベットに深く沈んだ。

「私も色々聞きたいことはあるんだけど、先約がいるからね。また後で来るわ」

「先約？」

「ほらこれだもの。全く、少しは女の子っていう自覚を持ちなさい」

その言葉に、リリスは曖昧に笑っただけだった。

メトセラはそれに気付かないフリをしながら椅子から腰を上げ、リリスの髪に手を添える。

「この髪もよ。自分で切ったんでしょ。こんなに適当に切って」

せっかく綺麗な髪だったのに、と愚痴を零すメトセラにリリスはようやく自分の髪が短くなっていることに気がついた。

肩ほどもでに短くなった髪に触れ、リリスはメトセラを見上げる。

「あ、これは違うんです。イザヤと戦ったときに……ちょっと」

自分でも気付かなかったということは、最後の一撃の時に切られたのだろう。

特に髪に拘りがあったわけでもないリリスとしては、何も思うところはなかった。ただ、少し手入れが楽になる。思ったことは、それだけだった。

「気にしないで下さい。またすぐに伸びますし、結んでいればわかりませんか」

にっこりと笑うリリスに、メトセラは掌で顔を覆いつつ大げさなため息を吐いた。

「本当にこの子は……」

「あの、メトセラ様……いたっ」

ぴん、と額を弾かれ、リリスは思わず目を瞑る。

何事かとメトセラを見上げると、困ったような、それでいて呆れたような顔が見下ろしていた。

「あとでまた来るわ。髪、整えてあげるから」

「い、いえ……そんな、とんでもないです!」

「あら、リリスったら何時から私に異見するようになったのかしら?」

メトセラの背後に見えた般若に、リリスの顔色がさっと青ざめる。

「――すみません。お願い、します」

「よろしい。それじゃ、あとでね」

ひらひら、と手を振りつつ、メトセラは長い漆黒の髪を靡かせて扉の向こうへ姿を消した。

リリースは扉がしつかりと閉まるのを確認すると、大きく息を吐き出した。

天井を見上げ、記憶を手繰り寄せる。

イザヤと接触し、一度は追い詰めたものの、結局は神魂を目覚めさせた彼女の前に一撃で敗れ去ってしまった。

ずきり、と肩が痛む。

瞼の裏に鮮明に残る黒紫の剣。

あれは、

「〈闇の神魂〉……」

最悪のケースだ、とリリースは顔を顰める。

いまだ未知数の蒼眼に最強の魂。この二つが合わされば、一体どれほどの脅威となるのだろうか。

イザヤはこれまで教団や人々に対して悪事を働いたことはない。それを考えればすぐにでもどうなるというわけではないが、捕まえるのが格段に難しくなったのは事実だった。

（それに、あの魔族……蒼眼が目的ではないとは言っていたけれど、本当かどうか……）

上半身を起こし、視線を手元に落としながらリリースが考えを巡らせていると、

「相変わらずだな、リリース」

突然かけられた、あまりにも聞きなれた声に、リリースはゆっくりと顔を上げる。

何時の間に現れたのだろうか、視線の先にいた精悍な顔立ちの青年に、リリスの目は大きく見開かれ、

「ででで殿下っ!？」

廊下を突き抜けるほどの大声をあげたのだった。

耳鳴りのする耳を押さえ、比較的落ち着いた貴族服を着こなした青年は眉を顰める。口を金魚のように開閉させるリリスを見つめ、軽く溜息を吐いた。

「そこまで、驚くことはないだろう。ノックはしたつもりだ」

「えっ? す、すみません……聞こえ、ませんでした……」

最後のほうは尻すぼみになってよく聞き取ることが出来ないほどに小さな声だった。

確かに仕事とプライベートで差がありすぎる、と青年は頭を抱える。

「それで、傷のほうは痛むのか？」

「いいえ、もう大丈夫です。ご迷惑をおかけいたしました、エレミヤ殿下」

エレミヤ・エンデ・クレストラウム。

これが、この青年の名前だった。東の大国、聖クレストラウム王国の第一王位継承者にして、メトセラと同じく、現教皇アザルヤ・エディ・クレストラウムの息子である。

「そうか。おまえがそういうなら、あと三日は寝ている」

「……な、なぜそうなるのですか。私なら……」

言い切る前に、エレミヤは手で軽くリリスの肩に触れた。

「……っ」

微かに歪む表情。エレミヤは肩から手を離すと、メトセラが置きっぱなしにした椅子に腰をかける。

「私なら……なんだ？」

「――すみません」

眉を下げつつ謝罪するも、エレミヤは何も言わず、ただ一言も喋らずにリリスを見ている。

最初こそ黙って耐えていたものの、流石にこの沈黙は居心地が悪い。意を決してリリスはエレミヤに躊躇いがちに声をかけた。

「あの……殿下」

「なんだ？」

「怒って、ます？」

「なぜそう思う？」

短く聞き返され、リリスは一瞬言葉を詰まらせ、

「昔から、殿下は機嫌が悪いと口数が、減ります……から」

目を逸らしながら、答えた。

エレミヤは表情を一切変えずに、口を開く。

「ああ、その通りだ。機嫌が悪い」

「……私が何か無礼なこと、でも？」

「そうだ」

はつきりと頷かれ、リリスの顔が強張る。シーツを皺が出来るほどに強く握り締め、頭を深く下げた。

「も、申し訳ありません！ イザヤを逃した挙句、このような迷惑まで……」

リリスの言葉は、続かなかった。

最後まで言い終わるよりも早く腕を引かれ、そのままエレミヤの腕の中へすっぽりと収まる。

「で、殿下!？」

状況を理解できず、上擦った声をあげるリリス。エレミヤは驚きつつも抵抗できずにいるリリスの髪に口をつけると、細い体を傷に触らない程度に抱きしめた。

「リリス。使徒をやめることは出来ないのか」

うるさいくらいに鳴り響いていたリリスの心臓が、一瞬にして静まる。

エレミヤの体温を感じながら、リリスは首を振った。

「出来ません」

「おまえに剣など向いていない」

「向き、不向きではありません。私には、もうこの道しか残されていないのです」

そう言い、リリスは思わず小さく吹き出してしまった。

「なぜ笑う？」

「いえ、申し訳ありません。結局私もイザヤと同じなのだと思います
ら……なんだかおかしくて」

生きる意味を問うたリリスに、イザヤは答えた。

それが、自分に残された唯一の道なのだと。

リリスもまた同じだった。生きる理由を失ってしまったあの雪の
日から、リリスの道は先の見えない暗闇へと変わったのだ。

「イザヤ、か。おまえが奴を気にかけるのは……奴が蒼眼所有者だ
からか？」

「……はい」

「あいつと……同じだからか？」

「……はい」

静かに肯定を繰り返すリリスに、エレミヤの表情が歪む。

リリスはゆっくりと顔を上げると、エレミヤの胸を軽く押して体
を離れた。

「ですが、自分でもよくわからないのです。私は、イザヤを……彼
女をどうしたいのか」

「……」

「私は……蒼眼が憎いのか、そうでないのか」

消え入りそうな声だった。泣いているようにさえ聞こえた。

「あの方を奪ったのも……蒼眼です。けれど、あの方と私を出会わ

せてくれたのも蒼眼です」

「リリス」

「人とは……いえ、私は弱いです、殿下。理由がなければ戦えない。真っ暗な道の中、私は何かに縋らなければもう立つことすら出来ません」

強く、自分の手首を掴むリリスの手は震えていた。それでも気丈に振舞おうと作る笑顔ほど、痛々しいものはない。

エレミヤはリリスの震える手をしっかりと包んだ。

「もう一度言う、リリス。使徒をやめろ」

「出来ません。この道さえも失ったら、私にはもう何も残らない。だから、殿下。私から剣を、生きる理由を奪わないで下さい」

「私が作る」

ぐ、と力を籠められた手。リリスが目を瞬かせて顔を上げると、意思の強い金色の目があった。

「エレミヤ、殿下……」

「私の――いや、俺の妻になれ、リリス」

そして、広い部屋は静寂に包まれた。

「フラれちゃったのね、ミヤ」

部屋を出たエレミヤを待ち構えていたのは、メトセラだった。

エレミヤは無表情を崩さないままメトセラの横を通り抜け、立ち止まった。

「セラ」

「何かしら？」

振り向くことなく、メトセラは答える。エレミヤは数瞬間を置き、言った。

「リリースにとって……あいつはそれほどまでに大きな存在なのか」

「……」

「俺にはわからん。たった一度、たった一度だ。リリースとあいつが会ったのは」

「時間ではないのよ、きつとね。それにほら、リリースはとても純粹でしょう。それはきつと、昔から変わらないと思う」

瞳を伏せ、メトセラは息を吐き出した。

「リリースはあの子から生きる意味をもらった。たとえ、それが果たされなかった約束でも——リリースにとって、それは全てだった」

「そうか」

「……一途な子よね。あんな子に愛されれば、それは幸せだったでしょう」

扉の向こうにいる少女を思い描き、メトセラは肩越しに振り返る。

エレミヤは、背中を向けたままだった。

「けれど悲しいわね。あの子は愛を知る前に、永遠に誰かを愛することが出来なくなった。これはもう呪いとも言えるかもしれない」

「呪いを解くには何が必要だ？」

「さあ？　王子様のキスじゃないかしら？」

「……なら、俺には無理なようだ」

だが、とエレミヤは振り向く。小さくも激しい炎を宿した瞳が、メトセラを越えて扉を凝視した。

「俺は諦めん。可能性の一つが無理ならば、別の方法を探す」

エレミヤは踵を返して長い廊下を早足に歩いていく。

メトセラはその後ろ姿を見つめると、困ったように微笑んだ。

「でもね、ミヤ。私は思うのよ。呪いを解くことが出来るのは、呪いをかけられた本人か、あるいはかけた者かのどちらかしかないんじゃないかって」

そう言ったメトセラの視線の先には、大きな窓ガラスから差し込む日差しが、まるで水晶の煌きのように輝いていた。

※

聖クレストラウム王国領の最南端に位置する湾岸都市カルディア。首都デバイラからは決して近くはないものの、クレストラウム王国一の交易都市として栄えていた。

海岸沿いに建設された街並みは美しく、白を基調とした石造りの建造物の中にも緑が溢れている。漂う塩の香りと活気付いた声。

そして、一際目を引くのが、灯台の傍に建てられた大聖堂である。

アルヴィア教団の決めた法により、都市と呼ばれるほどに大きな街には必ず大なり小なりの聖堂を設置することになっている。

人間界の決まりには十の誕生日に〈神魂〉を目覚めさせる事が絶対である。本来ならばエレバンへ行き、そこで洗礼を行うことが望ましいのだが、聖地へ行くにはそれなりの費用と時間が必要である。港町近くに住む者はまだいいが、内陸の中心に住む者は馬車で何日も揺られ、そこから更に船で聖地を目指さなければならないということもありえるのだ。

さすがにそれは厳しく、かつ人の出入りが激しいと治安が乱れると判断した教団は、各都市毎に聖堂を建て、そこに洗礼の方法を知る大司教を置くことで分散を図ったのである。

小さな町や村に住む人々は一番近くの都市へ行き、洗礼を受ける。手間はかかるが、聖地へ行くよりはよほどいいだろう。

今日もまた、小さな子供を連れた親が階段を登って聖堂へ入っていく様がちらほらと見受けられた。

「親が一人で出てきましたね。あの様子からすると、子どもとは違う階級だったようで」

階段を一人俯きながら下っていく男性を見上げながら、リオが呟く。

外套を羽織ったソレイユもまた同じように男性を見上げつつ、尋ねた。

「そーいやさ、階級制度って具体的にはどんななんだ？」

視線はイザヤへと向いている。イザヤは面倒臭そうに答えた。

「階級は小さく分類すると十三段階。大きく分類すると三段階になる。貴族、平民、奴隷」

指折り数え、イザヤは続ける。

「第一級……これは〈光の神魂〉しかないが、一級は教団の教皇、もしくは大司祭以上の地位。二級から三級までが貴族として様々な特権を与えられる。四級から十級までが平民。十級から十三級までが奴隷。十三級の〈闇の神魂〉は即刻処刑か一生牢の中だ」

「で、階級が違うと何が変わるんだ？」

「関係を絶たれる。特に貴族と奴隷は接触することすら許されない。親と子どもが同階級だったらそのまま家へ戻されることが多いが、別階級だった場合、子どもは貴族荘、平民荘、奴隷荘へとそれぞれ収容される」

階級が違う親と子どもは、同じ生活をするのは出来ない。

だから、親は十の誕生日まで子供に愛情を注ぐことはほとんどせず、ただ健康に育てることだけに専念するのが一般だ。

「そして、子どもはそれぞれの階級に見合った家に引き取られる。特に貴族なんかは代々続く名家を継がせるためだけに貴族階級の子どもを迎え入れることが多い」

「血の繋がりもないのか？」

「そんなもの、この社会じゃなんの意味もない。よく考えてみる。ここは〈神魂〉で位が決まる社会なんだ。当然、親と子の身分が違えば家を継ぐことなんて出来ない。どこの家もたった一代で終わりを迎えれば後処理が大変になるし、何よりも国が安定しない」

確かに、とソレイユは頷く。

貴族だけではなく、それは人間全てに言えることだろう。

例えば宿や店。店主が死ねばすぐ閉店、では利用する客はたまったものではないはずだ。

「要は名前さえ継いでもらえばいいんだ。誰の子かは関係ない。これが当たり前の世界だからな、誰も疑問も持たずに他人の子に愛情を注ぐ」

言葉を切り、イザヤは軽く息を吸い込んで続ける。

「ただし、王族だけは例外だ。これも教団が決めたことだが、王族だけは世襲制になっている」

「自分より位の低い王族に頭を下げるやつなんているのか？」

「いないだろうな。だから王族には自らの〈神魂〉を隠す義務がある。自らの〈神魂〉を晒すとき、それは王族としての名を捨てるときだ」

「……」

「歪んでる、と思うか？」

風に流れる髪をフード越しに押さえながら、イザヤはソレイユを見上げる。ソレイユは肩を竦める。

「どうだろうな。それにしても、あんた結構物知りなんだな」

街の中を流れる水路に架かった橋に頬杖をつきながら、ソレイユは感心したように言った。

「……子どもだって知っている。こんな下らない制度で、自分の運命が決められるんだからな」

吐き捨てるように呟き、イザヤはフードの下で目を細める。

ソレイユは横目でイザヤを見ると、また街の中に視線を戻した。

「そか。でも、俺には平和に見えるぜ。あれの管理が行き届いているのか、暴動もないみたいだしな」

聖堂を指差し、ソレイユは目を閉じて笑う。

「ま、そんなものは平和って言わないか」

「ただの抑圧ですね。争いを失くす代わりに自由を奪う。本当に、人間の世界は与え奪われるものが多い」

「魔族は違うのか？」

イザヤが問う。ソレイユは目を太陽へと向けると、曖昧に頷いた。

「そうだなあ。もちろん例外だっているけど、基本は奪うか奪われるかだな。与えるなんてことは滅多にしない」

人間は複雑だな、とソレイユは肩を竦めた。

イザヤは潮風にフードが飛ばされそうになるのを片手で押さえながら、橋の下に流れる水を見つめた。

「弱いだけだ。人間は、常に自分より下を作らなければ強くはいられない。どんな形でも、自分を保つ為に弱者を虐げて生きている。」

——この制度は、そんな人間の弱さの現われだ」

「じゃあ、これ以上虐げるものがない最下級のあんたは、何を踏み躪って強くあるんだ？」

「神」

水面に映る自分に向かって強く言い切ったイザヤに、ソレイユは一瞬言葉を失い、

「ふ——はは……あははははっ！」

青空に響き渡るほど大きく笑った。

通行人が何事かと視線を送ってくるが、全身を外套で覆った怪しい二人組みに話しかけてくるものなどいなかった。

ソレイユはひとしきり笑うと、目尻に溜まった涙を指で弾く。

「あんたやっぱ面白いな、イザヤ」

「おまえに褒められても嬉しくない」

「そう言うなよ」

くくく、と笑いを噛み殺すソレイユを無視し、イザヤはただそこを流れるだけの水を見続ける。

流れて。流れて。流れて。

一体その先には何があるのだろうか。

終わりはあるのだろうか。

そんな、答えも出ない下らないことを考えながら、イザヤはゆっくりと目を閉じた。

冷たい潮風が心地良い。フードを取りたいが、片目を包帯で隠しては怪しまれてしまうし、先日の一件で顔が広まっているかもしれない。危険な真似は出来なかった。

「そろそろ今晚の寝床を決めたほうがよろしいのではないですか？
せっかく街に入っただです。宿屋に泊まるのもいいでしょう」

リオの言葉に、イザヤは目を開けて橋の手摺から体を離れた。

「……無理だ。こういった聖堂のある都市の宿に泊まるには洗礼を受けた際に教団から発行される階級が書かれた証明書がいる。私は偽造で持っているが、おまえたちはないだろう」

「あら、私たちを心配してくれてるんですか？ 優しいですね、イ

ザヤは」

にっこり。まるでそんな擬音が聞こえてきそうなほど楽しげな声で嫌味を投げつけてきたのはリオだった。

途端にイザヤの顔が仏頂面へと変わり、ソレイユはまたか、と肩を落とした。

「誰が心配なんかするか！ 何も知らないおまえたちが余計なことをして私に被害が加わるのが嫌なんだ！」

「ええ、そういうことにしておきましょう」

イザヤの剣幕などどこ吹く風。リオはいたって涼しげに微笑んだ。

「ですが、御心配なさらずとも結構ですよ。この街に入った時に私と主様の分の証明書なら偽造しておきました。絶対にバレない完璧なものだと断言します」

まるでこの晴天の青空のように爽やかに言っただけのリオに、イザヤの目が見開かれる。

「い、何時の間に……いや、そもそもおまえのはいらないだろう。ミミズクだし」

「嫌味ですか。嫌味ですね」

「嫌味だ。悪いか？」

「聞かないで下さい。話を戻しますが、人間界に思ったより長く滞在しそうですし、あったほうが便利かと思ひまして」

ソレイユに何処からともなく取り出した一枚の証書を渡しつつ、リオは言う。

だから、時間が長くなったって梟にはいらないだろう。

そう言いたいのを寸でのところで押しとどめ、イザヤは溜息をつきながら宿屋への道を歩いたのだった。

1-06 遠のく、夢見た明日

「イザヤ、この街来たことあるのか？」

大都市、とまではいかずともそれなりの規模を持った街を迷うことなく宿屋へ進んでいくイザヤに、ソレイユは視線を右往左往させながら声をかける。

水路にかかる橋を渡り、イザヤは足を止めずに答えた。

「昔、一度だけ」

「そっか。いいな、ここ。海が綺麗だ」

夕日の光に当てられて紅色に輝く海を眩しそうに見つめるソレイユ。

足を止めて振り仰げば、フードの下で柔らかに微笑む顔が見えた。いままで出会ったどの魔族とも違う少年に、イザヤは一瞬言葉を忘れるが、すぐに顔を逸らした。

「ただの海だ。どこにでもある。——魔界にだって海はあるだろう？」

実際見たことはないが、文献で読んだことがあった。

ソレイユは、そうだな、と頬を掻く。

「あるけど、いつも真っ黒だからな」

「真っ黒？」

「魔界には朝がない。だから、いつも黒いんだよ」

そういえば、とイザヤは納得する。

朝晩がある人間界と違い、魔界には朝がない。正確には、太陽がない。永遠に終わることのない、常夜の世界なのだ。

「黒い海も月の光に当てられりゃそれなりのもんだと思ってたけど、やっぱり太陽の光に当てられたほうが俺は好きだ」

「魔界の海も、綺麗なのか？」

「そりゃ綺麗さ。波の穏やかな日なんかは真っ黒い水面に月や星がはっきりと映っててさ、いつも輝いてる」

不思議と、その光景は容易に想像できた。

波一つない静かな海。黒い水面に浮かぶ光の粒は、確かに美しいと呼べるものだ。滅多に波が耐えることのない人間界の海では、まづ見れない光景だろう。

「見たくなったか？」

黙り込んだイザヤの顔を覗き込みながら、ソレイユは笑う。

「だったら魔界に来いよ。そしたらすぐにでも見せてやぶっ」
「下らん」

ソレイユの顔に掌を押し当て、イザヤは早足に歩き出す。

「あ、おい！」

もはや走っているとさえ思える速度で進むイザヤをソレイユは慌てて追いかけようとし、

「きゃ！」

「——っと、おわっ！」

何かに、ぶつかった。

突然のことでもろくな受身も取れずに尻餅をついたソレイユは、予想外に固い石畳に打った腰を摩る。

「……てててて」

一体何にぶつかったのか、と顔を上げると、目の前で同じように地面に座りこむ少女。肩下まである亜麻色の髪を左側で高く結った、いかにも華奢な少女だった。

ソレイユは慌てて立ち上がると、少女の前に屈み込んで手を差し出した。

「悪い、気付かなかった。大丈夫か？」

だが、少女からの反応はない。大きな翡翠の目を瞬かせ、呆然とソレイユを見つめている。

「どうした？ どっか痛むか？」

顔を近づけると、少女は小さな肩をびくりと震わせて尻餅をついたまま後ずさる。

幼い顔に浮かぶのは恐怖。唇をかたかたと震わせ、瞳には涙すら浮かんでいた。

「お、おい……」

「いやっ！」

ついには頭を抱えて蹲ってしまった。

流石にこれには戸惑うソレイユ。打ち所が悪かったのでは、と懸

念するが、次に浴びせられたイザヤの怒声にも似た言葉で疑問は解決する。

「馬鹿！ フードを被れっ！」

「は……あ、やべ！」

手を頭へと伸ばし、ようやく顔を隠していたフードがなくなっていることに気付く。

ばつとフードを被り直すが、時既に遅し。魔族特有の青白い肌と尖った耳は少女の目に焼きついてしまったことだろう。

夕暮れ時の路地裏近く、少女の外に人がいなかったのが幸いではあるが、

「わ、悪い……」

見られたことには代わりはない。渋い顔をしながら走りよってきたイザヤに、ソレイユは口元を引き攣らせた。

同行を許可した際、ソレイユとリオにはイザヤからいくつかの条件が出された。

その内の一つが、魔族であることを絶対に回りに悟られないこと、だった。

イザヤは大きく溜息を吐いて額を抱えると、ソレイユに下がるように言う。蹲ったまま身を震わせる少女の前にしゃがむ。

「おい、おまえ」

「や——わ、わたし……何も……ごめんなさいっ！ やめて……殺さ、ないで……」

「……」

「完全に悪役ですね」

「うるさい毒舌臍」

何処からともなく降り立ってきたリオを一蹴しつつ、イザヤは何度目かわからない溜息を吐く。

「いいから話を聞け」

極力落ち着かせるような声音で言っただが、少女の目からはぼろぼろと涙が零れる。

罪悪感に襲われつつ、イザヤは自分を落ち着かせた。フードを取り、しっかりと少女の目を見る。

「私の質問に答えろ。返答次第では殺さずに――」

「こ、ころ……っ!？」

嗚咽を引き攣らせる少女は、この世の終わりのような目でイザヤを見る。

「いやっ、いやぁ!」

「……本当に不器用ですよね、あなたは。もっと言葉を選べたでしょうに」

「う、うるさい!」

「と、鳥が、しゃべっ……!?!」

腰が抜けているのか、少女はろくに動かず、だが必死でイザヤとその頭にとまるリオから離れようとしている。

イザヤは頭の上の梟を不快に思いつつ、据わった目で言った。

「おまえ、余計なことを……」

「そのようです。普通は喋りませんよね、鳥」

「これまた平然と返され、イザヤは頭を振ってリオを飛び立たせる。

「やだ……わたし、なんで……やめてっ！」

そうこうしている内に、少女の錯乱状態はもはや無視できない域にまで達しようとしていた。

このまま大声で叫ばれ続けて人が来たら面倒だ。

かと言って、

「殺してしまったほうが早いのではないですか？」

少女に聞こえないよう、イザヤの耳元で囁かれた言葉には従いたくなかった。

殺すことに手が震えるわけではない。生きるための殺しなら、今までいくらでもやってきた。だが、必要以上の殺しはしたくなかった。イザヤは殺人快楽主義者ではない。どんな理由があるにせよ、人殺しは決して心地のいいものではないのだ。

そして、それが目の前の少女のような幼い子供なら尚のことだ。まして今回は完全にソレイユの不注意。自ら渦中に飛び込んできた馬鹿ならまだしも、少女は完全な被害者だ。それで殺すのは、あまりにも理不尽というものだろう。

「仕方ない。一度気絶させて宿に連れて行く。話はそれからだ」

とにかく、この何時人が来るかもわからない路地に長居をするのだけは避けたかった。

少女には悪いが、少しの間眠ってもらうほかないだろう。

イザヤの手が少女に伸びる。少女は目を見開いて怯えるが、逃げることも出来ない。ただ、浅く早い呼吸を繰り返し、イザヤを見つめる。

「……すまない」

そう、イザヤが少女の首に手刀を落とそうとした時、

「ノエル！」

甲高い声が、夕暮れ時の路地に響いた。

「――以上だ。わかったか」

あれから一時間。

少女を助けようとソレイユとイザヤに殴りかかろうとした少年をなんとか黙らせ、こっそりと宿屋へと移動し、事の次第を説明し終えた頃には、イザヤはすっかり神経をすり減らしていた。

しかし、少女の幼馴染と名乗った少年、マギは幼い年の割に非常に頭が回る少年で、イザヤの話をたった一度で理解するほどだった。

「つまり、俺たちが何も喋らなきゃいいんだろ？」

「ま、そういうことだ。頼む、少年」

もう姿を隠す意味もないソレイユは外套を脱いでいる。イザヤも少年達が喋らないのなら問題はないと顔を露にしているが、少年の反応は特になかった。どうやらまだ顔はそれほど割れていないらしい。

ベットに堂々と座るマギは、その横で自分の服の裾を掴んで身を寄せる少女に目を向ける。

「だってよ、ノエル。この間抜けな魔族のこと言わなきゃ帰してく
れるらしいぜ」

「おい、間抜けってなんだ間抜けって」

「事実だ、間抜け」

マギに詰め寄ろうとするソレイユを睨み、イザヤがノエルを見る。

「守れるか？」

「……教えて下さい」

ぎゅっとマギの服を小さな手で掴み、ノエルは震える唇で言葉を
滑らせる。

「本当に、悪いこと……しないの？」

「しない」

「マギちゃんを……殺したり、しない？」

「しない」

「街の人は」

「殺さない」

「本当に？」

「私は嘘はつかない。絶対にだ」

これは、イザヤの信念の一つだった。

たとえどんな嘘だったとしても、他人を欺く行為である嘘は無条
件に罪だ。嘘は人を苦しめるものにかなり得ない。それが、イザ
ヤが今までの人生の中で出した結論。

その苦しみが誰よりもわかるからこそ、イザヤは嘘をつくことだ
けは頑なに避けてきたのだ。

「わかった……言わない」

幼いなりに、イザヤの言葉の信憑性を理解したのか、ノエルは小さく頷いた。

その言葉に嘘はない。イザヤは無言で首肯すると、マギに目を向ける。

「俺も言わねえよ。めんどくせえことはごめんだ。何もなければ、それがいい」

痛まない左目に、イザヤはようやく一息つく。

ソレイユはイザヤの心配をよそに、マギの肩をばんばん叩いて笑っていた。

「なんだなんだ。おまえガキのくせに随分枯れたこと言ってんな」

「痛えよ……俺は面倒ごとは嫌いなんだよ」

青髪を乱雑に掻き、マギは大げさに溜息を吐いてノエルを見下ろす。

「ほんとこいつといるとよく面倒ごとに巻き込まれる。めんどくせえったらないぜ」

その言葉に、ノエルの体がびくりと震える。

「ごめん……ね」

すぐに前に向き直ったマギには、ノエルの歪んだ顔も、口の中だけで呟かれた言葉も届かない。

「さて、と。それじゃあもう俺たちに用はないだろ？」

「ああ、行け」

「そうさせてもらうぜ。明日早いからな」

「何かあるのか？」

ノエルの手を引いて立ち上がったマギに、ソレイユが声をかける。途端に顔を俯かせたノエルに、マギは面倒くさそうに頭を掻く。

「俺たち、明日洗礼の日なんだ」

俯くノエルが、強くマギの手を握った。

「おお、おまえら幼馴染で誕生日も一緒か。そりゃすげえな。どっちが早いんだ？」

「ノエル。ほんの少しだけけどな」

「そっか。明日終わってもまた、一緒にいられるといいな」

ソレイユの言葉は時に無神経だ。だが、それでも頭に来ないのは、彼が心の底から素直な言葉を述べているからだろう。

マギはソレイユに向かって軽く笑うと、手をひらひらと振る。

「残念だがその通りだよ。どうせ二人そろって平民さ。確立的にいつても、な」

貴族は二、三階級。奴隷は十から十三階級。それ以外は平民だ。確かに、平民になる確率はかなり高い。

「明日も今日と同じだ。何も、変わらない」

まるで老人のような落ち着きで、マギは扉に手をかける。

「じゃあな、ソレイユとお姉さん。あとその梟も。もう会うことはないだろうけど、魔族と話せたのは楽しかった。変な魔族だけど

な」

「褒め言葉か？　ありがとな」

机に頬杖をつきながら歯を見せて笑うソレイユに、マギは肩を竦めると扉から出て行く。と、

「ノエル、追いていかれますよ？」

なかなかマギの後を追おうとしないノエルに、リオが首を傾げつつ声をかける。

ノエルはきゅっと唇と噛むと、自分の腕を強く掴んだ。

「……だよ」

「なんだ？」

吐息のように細い声に、イザヤは耳を傾ける。

ノエルは涙の溜まった顔をイザヤへと向け、繰り返した。

「ないよ……今日は今日しか、ないよ。今日と同じ明日なんて……ないんだよ」

「お……」

イザヤがノエルに声をかけるよりも早く、階下からマギの声が響いた。ノエルは腕で涙を拭うと、イザヤたちに一礼して部屋から出て行った。

静かに閉められる扉の音が、やけに大きく室内に響く。

しっかりと閉じられた薄茶色の扉に、イザヤはほっと胸を撫で下ろす。

これで、解決した。少なくとも、今夜彼らの情報で襲われる心配はないだろう。

後は明日、〈エデン〉に関しての情報を集められるだけ集めてこの街を離れるだけでいい。万一、マギとノエルの気が変わったとしても、十分逃げ切れるだけの距離は稼げるはずだ。

そう、もう心配事はない。何もない。

それなのに、

「……関係ない、私には……」

ノエルの最後の涙が、瞼の裏に焼きついて離れなかった。

※

翌朝、マギが支度を整えて外へ出ると、そこには視線を地面に落として立ち尽くすノエルがいた。

マギは朝一番の溜息について頭をかくと、ノエルの傍に足を進める。

「んだよ……今日是一緒に行かないんじゃないかなかったのか？」

「うん。ちょっと、聞きたいことがあったから」

「何？」

「あのね、誕生日プレゼント何が良いか、考えてくれた？」

ほんのりと赤くなった頬で、ノエルはマギを上目遣いに見上げる。マギは思い出したように曖昧に返事をする、首を振った。

「なんもねえよ。欲しいもんなんて特にないな」

「だめ。なにか言って」

珍しく引き下らないノエルに、マギはだるそうに目を細める。

「どうしたんだよ、毎年おまえ適当にくれるじゃん」

「今年は、マギちゃんが本当に欲しいもの、あげたいの」

だって、とノエルが顔をあげる。

「今日が……最後、かもしれないから」

マギが息を呑んだ。

見慣れていたはずなのに、ノエルの泣き顔が酷く痛々しく儚げに見える。まるで、今にも消えてしまいそうな、そんな不安に狩られた。

その不安を打ち消すように、マギはポケットに手をつ込む。

「なんねえよ。言っただろ、俺らの家系はずっと平民だ。俺らも例外じゃねえんだ」

「……でも、マギちゃん。〈神魂〉に、血は関係ないんだよ……？」

「知ってるよ。確率の問題で言っただ、馬鹿」

「ご、ごめん……なさい」

つい語調が荒くなってしまい、マギは後悔した。心の奥底で膨れ上がる不安と焦燥が、いつもの余裕をなくさせていた。

「怒ってねえよ。つかおまえもいちいち謝るな。そんなだから貴族街の馬鹿ばかりか同じ平民にも馬鹿にされんだぞ」

「うん……ごめんね」

「だからそれだよ！ おまえ、もし俺がいなくなったらどうすんだ！？」

てつきり、いつもみたいに泣き出すと思っていた。
泣いて、そんなの嫌だよ、と泣きじゃくるかと思っていた。

「大丈夫、だよ」

だから、そうではない反応に、マギは心の奥に隠していた不安の先端を、引きずり出されたのだ。

「大丈夫……わたしは大丈夫だよ、マギちゃん」

瞳に涙を浮かべつつ、ふわりと笑うノエルに、マギは自分の胸を服越しに掴む。

酷くうるさい心臓に、初めて気がついた。

「……大丈夫なわけ、ねえだろ」

「え？」

「おまえが一人で大丈夫なわけないって言ってんだ。俺が傍にいないと、すぐ泣くくせに」

「泣かないよ」

小さく首を横に振り、ノエルはマギに小指を差し出す。

「約束。わたしは——もう泣かない」

ノエルがおかしい。

わかっていた。それは十分にわかっていたはずなのに、今のマギはそのことよりもノエルに拒絶されたような不安感しか感じる事が出来ずにいた。

小指を差し出しながら、悲しそうに微笑むノエルの表情に気付いてやることすら出来ず、マギは舌打ちをして歩き出す。

「そうかよ。泣き虫卒業なら良かったじゃねえか。できるはずねえけどな」

どうせこの洗礼が終わればすぐにまた泣きついてくるのだ。

近所の子供に苛められたとか、道で転んだとか、そんな馬鹿みたいな理由で、ノエルはまた頼りに来る。

洗礼のせいで、少し情緒不安定になっているのだ。

明日になれば、また今日が戻ってくる。

変わらないはずだ。

またいつものように一緒に学校へ行って、一緒に授業を受けて、一緒に帰って、また明日と言う、退屈な日々。

「明日もまた……今日が来るんだ」

自分に言い聞かせるように呟き、マギは大聖堂を見上げた。

※

港湾都市カルディアは大きく分類して四つのエリアに分かれている。

北の貴族街。貴族だけが住むことを許される大聖堂にもっとも近く、治安が安定した区域。西は平民が住む区域。南は奴隷やゴロツキなどが密集した治安が最も悪い区域。

そして、東は漁業や交易に係わる者達が鹿生活する区域である。

イザヤ達は東区域、海にもっとも近い場所の酒場に来ていた。

情報を集めるなら人が集まる酒場。しかも交易が盛んなこの場所では海の向こうからも多くの情報が寄せられていることだろう。情報

収集にはうってつけた。
が、

「……誰にも声かけないんじゃないよなあ」

ソレイユがくつくつと笑う。

イザヤはフードに隠れていてもわかるほどにあからさまに顔を顰めると、頬杖をつきながらソレイユが勝手に注文した林檎パイに口をつける。

「イザヤ、今まではどうしていたのです？ まさか酒場で情報を集めるのが初めて、というわけではないのでしょうか？」

「当たり前だ。だが、あの一件で顔が知られているかもしれない。かと言ってこんな顔を隠したまま相手が気前良く話してくれるとは思えない」

「正論です。しかし、あなたのその仏頂面ではどのみち無理かと思っていますけれど」

小皿に置かれた林檎パイを啄ばみつつ、リオはイザヤを見つめる。返す言葉が見つからず、イザヤはごく自然に店内に視線を走らせる。今いるのは酒場の二階。ちょうど階下も見下ろせる位置だ。

店内を世話しなく駆け回るウェイトレスの中の一人、一際目立つ赤い髪の女性を見つめ、イザヤは机の上に置かれた拳を握る。

「……アベリア」

「ん、何か言ったか？」

ソレイユの声にイザヤははっとして顔を正面に戻す。罰が悪そうに首を振り、言葉を濁した。

「いや……なんでも、ない」

暫くの沈黙。不快な騒音だけが耳元でざらつき、僅かに痛む左目に苛立ちを覚えた。

直接的に自分に対して言われた嘘でなくとも、蒼眼は反応する。痛みは小さなものになるが、それでもこの人の数と言葉の嵐。塵も積もればなんとやら、だ。

左目を押さえ、イザヤが極力周りの雑音に耳を貸さないようにしている、と、

「――出るぞ。リオ」

急に手を引かれ、酒場から連れ出された。

そのまま足早に歩き出すソレイユに、イザヤは駆け足になりながらもついていく。

「おい、なんだいきなり――離せ！」

手に力を入れて振り払おうとするが、びくともしない。

成すすべなく引っ張られること数分。辿り着いたのは、南区域の端にある海岸だった。

港から離れた人気の少ない海岸で、ソレイユはようやくイザヤの手を離す。

「おまえ、どういう――」

「あんな、辛いなら辛いつて素直に言えよ！」

イザヤの言葉を遮ったソレイユは、珍しく少し怒っているように見えた。イザヤは戸惑いつつも、ソレイユに握られていた手首を掴みながら言い返す。

「別に辛くない。何を根拠にそんな勝手なこと……」

「自分の手見ろよ、馬鹿野郎」

ソレイユが怒りの感情を露にしている。本当に珍しいと思いつつ、イザヤは緩々と視線を掌へと落とし、目を瞬かせた。

「――またか」

そして、独り言のように呟き、血の滲んだ包帯を取り払った。詳しい出血箇所はわからないが、少なくとも左目から流れていることは確かだった。

「またって……あんたそれ、前からか？」

「ああいう場所だと否応なしにこの目は反応する。どうして血が流れるのかは、わからないがな」

手の甲で頬についた血の跡を拭い、イザヤは何事もなかったかのように目を閉じた。

この話はこれで終わり、と踵を返そうとしたイザヤだったが、前触れもなく手首を掴んできたソレイユの手が、それを許さなかった。

「なんで言わなかった」

「なんで……おまえなんかに言わなければならぬ」

「言ってくれなきゃわからないからだ。知っていれば、酒場なんかに行かせなかった」

「わからなくていいし、おまえに私の行動を制限される謂れなんてない。第一、おまえに理解されることこそ不快だ」

「不快なんじゃなくて、怖いんだろ？」

乱暴にソレイユの手を叩き落とす。苛立ちを隠せなかった。他人の心に土足で入るようなこの魔族が、鬱陶しくてどうしようもなかった。

優しさに慣れていない心は、ソレイユの行為に対して疑心と不安しか生まない。例えソレイユが、本心を述べていたとしてもだ。

「勝手に決め付けるな！ きさまには関係ないだろう！」

拒絶。

孤独な旅の中でイザヤが身に付けた、あまりにも悲しい身を守る行為。

他人の優しさに対し、無意識に拒絶してしまうようになったのは、何時の頃からか。素直になることに必要なものなんて、忘れてしまった。

言葉を溜め込んでいく器の中には、いつの間にか大きな穴が開いていた。知っていたはずの言葉は次々と零れ落ちて、残ったのは一人になる為に必要なもの。

「私に……干渉するな」

声を落とし、イザヤは外套を翻らせて立ち去った。

ソレイユはその後姿を見送ると、髪をくしゃくしゃと手で掻く。

「難しいな、リオ」

「そうですね。ですが、彼女の生い立ちは容易に想像できます。それを考えれば、あのように歪んでしまうのも無理はないのかもしれない。まあ、見ていて非常に腹立たしいですけどね、ああいった人間は」

他人の嘘を見抜く瞳。

その力に苦しめられ続けてきたばかりか、異端として命を狙われ続けてきた。

周りは敵ばかり。信じられるものなどいなかったことだろう。そのような孤独の中で、一体何年、イザヤは心を磨り減らしていったのだろうか。

ソレイユには知りえない。知ることなどできない。イザヤが話してくれない限りは、絶対に。

「あいつ、ずっと一人だったのか……？」

「わかりませんが、少なくともある程度成長するまでは誰かが傍にいたことは間違いないでしょう。両親にしろ、他人にしろ、その者がどんな目的で彼女を育てたのかは知りませんが」

さすがに赤子のうちから一人で生活していた、などということはあり得ない。

誰か、イザヤを育てた者がいるはずだ。

「あくまで私の推測ですけど、そこそこ愛情を持って育てられてきたのではないかと思います」

「わかるのか？」

「人は自分に与えられたものしか他人に与えることは出来ません。母の愛を、子供がまた自分の子へ与えるように。何も与えられなかった人は、誰にも何も与えることなど出来はしません」

一度言葉を切り、リオは呆れたように続けた。

「彼女、甘いでしょう？ あれは誰かから愛情をもらった人間です」「そうか。あいつ、ずっと一人ってわけじゃなかったのか」

ですが、とリオは言葉を引き締める。

「その者と最後まで愛情に溢れた関係でいた、とは言いきれません。むしろ彼女の性格と今一人で旅をしていることから、そちらの可能性の方が高いでしょう」

「なんでだ？ そいつが死んじまったただけかもしれないだろ？」

「そうだとしたら、尚のことあり得ないですよ」

リオの言っていることが理解できず、ソレイユはただ首を傾げる。リオはソレイユの肩に止まったまま潮風を全身に浴びて言葉を滑らせた。

「死とは、完全なものなのです。死んだ者から与えられた愛情。それは、決して褪せることなく、移りゆくこともない。完全な愛情です。それを受け取ったイザヤは、ただ一人から永遠に愛されている、ということになります。ですが、彼女の在り方からはそのような事は感じられません」

「じゃあ……イザヤを育てたやつは」

「最初こそ純粋な慈悲で彼女を育て、後々利用価値に気付いた。そんなところでしょうか。あくまで推測に過ぎませんが」

そう言ったきり、リオは言葉を閉ざした。

ソレイユは白い砂浜に腰を下ろすと、手で光る貝殻を砂ごと救いあげる。さらさらと指の隙間をぬって流れ落ちる白砂は、また砂浜の一部に戻った。

最後に残った水色の小さな二枚貝と少しばかりの砂を見つめ、ソレイユは軽く息を吐き出す。

「おまえはすごいな、リオ」

砂を落とし、貝殻だけを指先で摘んで太陽にかかげる。

「俺もおまえみたいに頭がよければ、イザヤを怒らせずにやっていけるんだろうな」

「――それは違いますよ、主様」

「え？」

「あなたがなさりたいのは、彼女を怒らせることなく、ただ潤滑に関係を築くことではないでしょう？」

耳元で囁かれた優しい声音。ソレイユが数瞬考えてから首を倒すと、リオは微笑んで言った。

「それなら、あなたはあなたのままでいい。私では彼女を理解することは出来ても、心を開くことは出来ないのですから」

「理解できるのか、おまえにはイザヤが」

「ええ、認めたくはありませんけど」

「ああ、そういうイザヤ、誰かに似てると思ったら昔の……」

ソレイユが最後まで言い終わるよりも早く、リオが尖った口ばしで耳を刺す。

声にならない声を上げてのた打ち回るソレイユを冷めた表情で見下ろし、リオは大きく溜息をついた。

「心外です。死んで下さい」

「お、おう……一瞬だが昇天しかけた」

血が滴る耳を押さえながら、ソレイユは落としてしまった貝殻を拾い上げた。

貝殻をポケットの中に滑り込ませ、軽い動作で立ち上がる。

「さて、と。そろそろ宿屋に戻るか。下手したらあいつ、先に出発しそうだからな」

外套についた砂を手で払い落とし、ソレイユは元来た道に戻り始めた。

騒がしい南の区域を抜け、西の平民が住む区域に足を踏み入れたところで、ソレイユは立ち止まった。

「あれ……どこだったっけ」

ここまでは覚えているのだが、いかんせん街にある建物の殆どが白いのだ。目印となるものも特にない。

唯一の便りであるリオは少し前に何処かへ飛び去ってしまった。

イザヤが迎えに来るかも、などという考えは一瞬たりとも浮かばなかった。

「まいったな、下手に人間に話しかけてボロ出たら今度こそイザヤに殺されそうだ」

どうしたものか、と考え込むが、結局のところ聞くしかないという結論に至り、ソレイユは辺りを見渡した。

出来るなら人の良さそうな人間を、と過ぎ行く人を眺めていた時、

「お！」

見知った顔を見つけ、ソレイユは思わずその小さな肩に手を置いていた。

「マギ！」

少年の名を呼ぶ。

「悪いけど道教えてくれ。昨日俺達がいた宿屋の場所、覚えてるか？」

「……」

「実は道に迷っちゃってさ。いや、偶然お前を見つけられて良かったぜ」

「……」

「マギ？」

まるで反応がないマギに、ソレイユは疑問を抱く。

正面に回ってみるが、マギは視線を落としていて表情が見えない。

「おい、マギ。どうしたんだ？」

両肩に手を置いて揺する。驚くほど力が入っていない体は、まるで壊れた人形のように前後に揺れるだけだった。

ソレイユはマギから手を離すと、手を引いて先ほどの海岸に戻る。なるべく人気のない場所を選び、マギを砂浜に座らせた。

「おまえ、どうしたんだよ？」

やはり反応はない。生気がまるで感じられなかった。

「ノエルは？　一緒じゃないのか？」

初めて、マギの体が動く。ゆっくりと上げられた顔は、屍のように血の気をなくしていた。

「ソレイユ……？」

ようやくソレイユの存在に気付いたのか、マギの目に僅かばかりの光が戻る。

ソレイユが頷いてやると、マギは途端に表情を歪め、頭を抱えた。

「俺、馬鹿だ。本当に、馬鹿だっ……」

その声は、泣き声に近かった。

「どうすればいいんだよ。どうして、ノエル……俺は……わっかんねえよ!」

「落ち着け、マギ。何があっただんだ?」

背中を摩ってやると、マギは荒くなった息を数回吐き出した後、掠れた声を零した。

「ソレイユ……助けてくれ」

何があったのか、詳しい内容まではわからなくとも、マギの言葉の意味はソレイユにも理解できる。

涙を流すマギの瞳を真っ直ぐに見つめ、ソレイユは口を開いた。

「――ノエルはどこにいる?」

1-07 侵入、奴隸の館

あの場で長時間話すのも憚られた為、ソレイユは幾分か落ち着きを取り戻したマギと共に宿屋へと戻った。幸いなことにイザヤはまだ出発しておらず、ソレイユが戻ってきてても声の一つかけずに剣の手入れを続けていた。

そして、ソレイユの後に続いて入ってきたマギを見、ようやく手を止めたのだ。

「どうしておまえたちが一緒に戻ってきている？」

「そいつはこれからマギが説明してくれるさ」

怪訝そうな顔を隠そうともせずに剣を鞘にしまい、イザヤはそれをベットのの上に置く。

ソレイユはマギを椅子に座らせると、壁に背を預けた。

「話してくれ、マギ。――何があった？」

「……俺が、馬鹿だったんだ」

膝の上で両手を強く握り締め、マギは体を震わせた。

「考えなかったわけじゃないんだ。でも、俺は絶対にそうならないって思ってた。今日と同じ明日が来るって、思ってたんだ」

「違ったのか。階級が」

直接的なイザヤの言葉に、マギは歯を食い縛る。

「そうなのか？」

ソレイユが問う。

マギは強く握りすぎて白くなった手を見下ろし、頷いた。

「俺は……〈風の神魂〉だった。でも、ノエルは〈氷の神魂〉だった」

「……」

「二級と十一級。貴族と……奴隷だ」

〈神魂〉の種類を言われても理解できないソレイユに、イザヤが説明してやる。

イザヤは渋い表情を浮かべるソレイユを冷めた目で見据え、それからマギに視線を移した。

「それで、だからなんだ？」

〈神魂〉によって身分が決まる。この世界に生きている人間なら誰しもが課せられる掟だ。おまえだって、理解してないわけじゃないはずだ」

その枷の外で生きている自分が言うのはいささか気が引けたが、今は関係ないと飲み込む。

マギは眉間に皺を寄せると、顔を上げてイザヤを睨みつけた。

「そんなのわかってる。俺の友達も奴隷になった。貴族になったやつもいる。そいつらとは、もう会ってない」

身分が違えば、交友関係を持つことは許されない。

もし階級の違うもの同士の接触があるとするならば、それは主人と奴隷の関係としてである。

唯一の例外は実力さえあれば入団出来る騎士団だが、彼らは言い換えれば教団の奴隷だ。教団の命令を実行し、世界に安定を齎すためのだけの存在。

つまりは、駒なのだ。人間ですらない。戦いとは無縁の人々の為にその身を危険の中に置く、人間の犠牲羊。

やはり騎士もまた、大きな柵の中からは逃れることは出来ないのかもしれない。

「決まりだ。俺たちだけが特別になてなれない」

「そうだ。おまえとおまえの幼馴染は住む世界が違った。それだけの話だ。だが、教団も鬼じゃない。階級に見合った生活は保障されるし、柵の中で飼われていれば見捨てられることもない。奴隷も、奴隷なりの労働と引き換えにきちんと糧をもらえるんだ」

「ああ……そうだよ」

「なら受け入れろ。人間はその大半が柵の中で生きる。それが最も楽な生き方だからだ」

「だけどな！」

イザヤの言葉を振り払い、マギは椅子から立ちあがった。

強く目を閉じれば、洗礼が終わり大聖堂で最後に見たノエルの姿が浮かんでくる。

予想外に貴族だったことに動揺していたが、もしノエルが平民でも彼女を雇えばいいだけのこと。二級の神魂を持つ自分なら、多少のわがままは通るはずだし、何より貴族なら侍女の一人や二人持つのが普通だ。

それに、もしかしたらノエルも貴族かもしれない。

淡い期待を抱きつつ、ノエルが洗礼から終わるのを待った。

だが、洗礼を終えたノエルは、マギの姿を見るなり体を震わせ、小さな声で結果を聞いてきた。

マギが素直に答えると、ノエルは、そう、と呟き、微笑んだ。

その微笑みをマギが勘違いし、顔を綻ばせるよりも早く、ノエルは残酷に真実を打ち明けた。

貴族と、奴隷。共にいることを許されない者同士。

今、こうして一緒にいるのさえ、本当は禁じられたことだった。
この僅かな時間は、教団の慈悲。

マギが言葉を失い立ち尽くしていると、ノエルは胸に手を当て、
今まで見たこともないほど綺麗に笑った。

——わたしなら大丈夫だよ。泣かないよ。

だって、これでもう、マギちゃんにめんどくさい思いさせなくて
いいから。

だから、今までありがとう、マギちゃん。

それが、ノエルの残した最後の言葉。

教団の司祭達に背を押されて大聖堂の奥へ消えるノエルの小さな
背中を、ただ霞んだ視界で見つめることしかできなかったのだ。

「あいつにあんなこと言わせたのは……仕方のないことなんかじゃ
ないはずだ！」

握った拳を壁に叩きつけ、マギは力の限り叫んだ。

「くそっ……くそお！」

何度も、何度も壁を打つ。

幼い手には、血が滲んでいた。

「止めろ、マギ」

ソレイユがマギの腕を掴んで止める。

マギは涙でぐしゃぐしゃになった顔をソレイユに向ける。

「ソレイユ……俺、どうすればいいんだ？」

「それはおまえが決めることだ」

驚くほどあっさりと、ソレイユはマギの助言を蹴った。
膝をつき、マギの目線に自分の目線を合わせてる。

「おまえは、どうしたい？」

「どう……って」

「簡単だ。ノエルをどうしたいかだ」

マギが言葉を詰まらせる。ソレイユは一度目を閉じると、ゆっくりと開いた。

「先に言っとくぞ、マギ。ノエルを無理矢理教団から取り戻すことは、ノエルを助けるとは言わない。なんですか、わかるかな？」

「……ああ」

低く、マギは答える。頭の良いマギのことだ。人間界の決まりごととにそれほど精通してないソレイユよりもよほど『先』のことは理解しているだろう。

教団に逆らった者を待つ、未来を。

「わかっているならもう一度聞く。おまえは、ノエルをどうしたいんだ？」

「俺は——」

言葉を切り、マギは血の滲んだ拳を手が白くなるほどに握り締めた。

そして、

「俺は、ノエルと離れたくない」

意を決した瞳で、そう告げた。

いいんだな？　これはおまえが嫌いなめんどくさいことだぞ？」

「俺は一度だって、ノエルのことに関して本気でめんどくさいなんて思ったことはねえよ」

「……嘘つけ」

ぼそり、とベットに腰掛けるイザヤが呟く。マギが視線を右往左往させた。

「……いや、確かに何度も何度も泣かれるとちよつとめんどくせーなとも思ったりなくもなかったけど……」

「ちよつと空気読んでくれないかな、イザヤ。ここ大事な男の見せ場！」

ソレイユがイザヤに詰め寄る。イザヤはさも面倒くさそうに顔を顰めると、手で虫を追い払うようにしてソレイユを遠ざけた。

渋々と引き下がったソレイユは、すっかり意気消沈したマギに振り向く。

「で、いいんだな？」

「いい。決めた」

「ノエルの意思はどうする？」

「俺は、生まれてからこれまであいつのいない世界を知らない。知りたくもない。ノエルには悪いけど、俺はノエルを離す気はない」

「よし、決まりだ。手を貸すぜ、マギ」

満足気に笑い、ソレイユは腰に手を当てる。そのままイザヤを振り向くが、

「私は関係ない。勝手にしろ」

返ってきたのは、酷く冷めた言葉だった。

ベッドの上に投げてあった剣を取り、再び手入れを始めるイザヤに、ソレイユは不満そうに声をあげる。

「手伝ってくれないのか？」

「……なぜ、私が？」

当たり前のように返され、ソレイユは押し黙る。

「なぜって……」

「おまえは勘違いしているようだから言うておく。私が許したのは同行のみだ。別に私はおまえの行動を縛るつもりなんてない。その子どもを助けたければ好きにするといい」

だが、とイザヤは鋭く輝く刀身を真っ直ぐに掲げる。

「私を巻き込むな。それは今だけを言っているんじゃない。今回のことでおまえがヘマをした後についても、だ」

もし、ソレイユがノエルを助けるのに失敗し、教団から追われる身となった場合、その被害は当然同行者であるイザヤにまで及ぶだろう。

「おまえが失敗した場合、私はおまえとの賭けを取り消す。見捨てると、という言葉はしっくりこないが、一人でこの街から離れる」

剣を鞘にしまい、イザヤは二本目の手入れに取り掛かる。

「おまえにも一つだけ言っておく」

刀身についた汚れを落としつつ、イザヤはマギに目を向ける。

「十分わかっていることと思うが、親から離された子どもを収容する各荘には常に騎士がいる。あの子どもを助け出すということは、やつらと戦うということだ。――絶対に、死ぬぞ」

「……そんなのやってみなきゃわかんねえだろ」

「騎士団を甘く見るな。あいつらは人間兵器だ。その馬鹿魔族もあの使徒の強さをみただろう？」

「ああ、見た」

エフライムの森で見た、緋色の衣を纏った〈使徒〉。

直接対峙したわけではないが、森の一部を焼き払うほどの力。確かに、人間兵器という名が相応しい。

「騎士は使徒よりは脅威ではないはずだ。だが、代わりに頭数がいる。実力だって決して弱いわけじゃない。中には使徒と肩を並べる騎士だっているかもしれん」

「……」

「そんな奴らを相手に、おまえたち二人でどうするっていうんだ？ 万が一にも、勝機などあり得ない。まして、おまえは神魂を封印されている」

イザヤの鋭い視線がマギを射抜く。

教団の元で洗礼を受けたというのなら、同時に〈神魂〉の封印も行われたはずだ。今頃は〈魂縛石〉が体内に浸透していることだろう。

〈神魂〉を封印された人間は、そうでないものと比べて遥かに身

体能力が劣る。子供でも知っている、周知の事実。

いくら魔族であるソレイユの加勢があるとはいえ、十人以上はいらるであろう騎士たちを相手にできるはずがない。騎士たちは対魔族用にも戦闘訓練を重ねてきているのだから。

「もう一度だけ言う。馬鹿なことは止せ。どんな結果にせよ——おまえは死ぬ」

「いい。いざとなったら、ソレイユだけにでも逃げてもらうさ。俺はノエルに酷いことを言ってきた。だから、たとえ死ぬことになっても、俺は——」

「ふざけるな」

静かに、だが強い怒りの感情が籠った声が、狭い室内に響き渡った。

剣を床に突き立てたイザヤは、マギを真っ直ぐに睨みつける。

「たとえ助けられなくても、命を懸けることで償うというのか、きさまは」

「それしか、出来ないだろ。俺には」

氷のように冷たい視線に身を竦ませながら、それでも目を逸らすことなくマギは言う。

イザヤはぎり、と歯を鳴らすと、口元をゆっくりと吊り上げた。

「そうか。ならせいぜい幸せな勘違いをしたまま死んでいけ」

「おい、イザヤ！」

ソレイユが嗜めるように呼びかけるが、イザヤはまるで聞く耳を持たない。

マギはただ黙ってイザヤを睨んでいたが、やがて耐え切れなくな

ったように言葉を零した。

「……なんだよ、あんたに何がわかるってんだよ。俺とノエルのことなんて、何も知らねえくせに」

胸の奥からとどまることなく溢れ出る何かが、マギの心を埋め尽くしていた。

ノエルの笑顔を思い出すたび、まるで焼け付くように痛む胸を強く掴む。

「俺にとってあいつがどんなに大切かあんたにわかるっていうのかよ!？」

「誰が理解したいと思うか。自己満足の塊のような男のことなど」

それが、決定打だった。

何かを言おうと口を二、三度開閉させたマギは、結局何も言わずに部屋から飛び出していった。

けたたましく鳴る扉もまるで気にせず、イザヤは剣の手入れに戻る。ソレイユはそんなイザヤを見下ろすと、表情を曇らせた。

「イザヤ、今のはあんたが言いすぎだ」

「……」

「マギを心配するにしても、もっと言い方があるだろ」

「心配？」

ふ、と鼻で笑い、イザヤが顔を上げる。そこには、確かな嘲りの色があった。

「勝手に解釈するな。私はただ腹が立ったただけだ」

マギが出て行ったまま、軋んだ音を立てて揺れる扉を見つめる。

「死ぬことが償いになると思っている……あの馬鹿に」

一瞬、ほんの一瞬、イザヤの瞳に映った悲しげな色をソレイユは見逃さなかった。

ただ、これ以上イザヤを責める気にはなれず、行き場のない感情を押しとどめる。

「わかった。あんたは巻き込まない」

「……なら賭けはここまでだ。おまえは絶対に失敗する」

「いや、賭けは継続だ。俺は失敗もしないし、諦めもしない」

相変わらず、自信たっぷりにソレイユは言い切る。イザヤはうんざりと溜息を吐き出した。

もう何も言う気になれない。そう物語っているイザヤの顔を見、ソレイユは視線を窓の外へと向ける。

「ここで俺がマギとノエルを見捨てたら、あんたはもう俺のことを絶対に信用しなくなるだろう？」

イザヤが顔をあげる。穏やかな瞳で見つめてくるソレイユと目が合い、喉まででかかった言葉が何であったのかを忘れた。

「……なに、言ってる？」

頭とは関係なく出てきたのは、情けないほどに切れ切れの言葉だった。

ソレイユはイザヤの前を通り過ぎて扉へと足を進める。

「なんとなく、だけどな。俺はまだあんたのことを知らなさ過ぎるから」

「知らなくていい。不愉快だ」

「そう言うなって。あ、そうだ」

ふと、何かを思い立ったようにソレイユはポケットの中に手を突っ込んだ。

そのままイザヤの前に足を進め、握り拳を差し出してくる。

訳がわからず眉を顰めるイザヤの手を取り、ソレイユは拳を開いた。ころん、と転がる小さな二枚貝。淡い水色の綺麗な貝殻に、イザヤはますます首を傾げた。

「何だ？ これ」

「貝殻」

「馬鹿にしてるのか。どうして私にこれを渡すのかと聞いているんだ」

「特に理由はないぞ。砂浜で見つけて綺麗だから持って帰ってきた。でも俺が持つてるのもなんだし、女の子の方が似合うだろう」

何気ないソレイユの一言に、イザヤはゆっくりと目を見開く。

ソレイユはそんなイザヤの表情の変化には気付かず、くるりと踵を返して手を振った。

「じゃあ、明日までには帰ってくる」

そう言い残し、ソレイユは風のように跡腐れなく部屋から去っていく。

一人残されたイザヤは、掌の上で夕日に照らされてか細く光る貝殻に目を落とし、呟くように言った。

「帰ってこれるはずないだろう、馬鹿魔族……」

※

長い間姿を見せなかったリオが帰ってきたのは、ソレイユが出て行ってから数時間後だった。外はもう暗く、双子月がぼんやりと浮かんでいる。

窓から大きな翼をたたんで入り込んできたリオは、イザヤの顔を見るなり呆れたように言った。

「窓の鍵を閉めておけばよかった……といった顔ですね」

凶星なのだが、素直に認めるのも癪に障るので無視する。

リオは気にする様子もなく部屋を見渡すと、もう口を開いた。

「イザヤ、主様は？」

「……知らないのか？ 従者のくせに」

「知らないから聞いているのです。イザヤ、主様はどこですか？」

「昨日の子どもを連れて教団に喧嘩を売りに行った。今何処にいるかまでは知らない」

初めて、リオの中に焦りという感情があるのを感じ取ることができた。それは微かなものだったが、些細な仕草や心の動きに敏感に反応するように出来た目は見逃さない。

リオは一瞬羽に目を落とし、それからイザヤへと向き直る。

「事情を説明してください。出来る限り手短に」

――面倒だ。

正直そう思ったが、リオの目からは決してイザヤが話すまで引かないだろうという頑なな決意が読み取れた。

イザヤは下ろされた髪を片手で搔くと、小さく息を吐き出し、リオの事の次第を簡潔に説明し始めた。

元々凝った話ではなく、イザヤも事細かには話さなかったからか、話は僅か数分で片付く。

「わかりました。それで主様とマギはノエルを助けに行った、というわけですね」

「ああ」

「何処へ向かったか、わかりますか？」

質問の意味が理解できなかった。

ノエルが奴隷だと判明したのなら、今頃は家族への通達を済ませ、奴隷荘へと収容されているはずだ。

ソレイユがその事情を知っているかはわからないが、少なくともマギは知っているだろう。

そうだとすれば、彼らが向かったのは奴隷荘。

素直に認めるのも癪だが、リオは博識だ。ソレイユと違い、この情報を知らないとは考えにくい。

ならば、なぜリオはわざわざイザヤに尋ねたのか。

答えは、一つしかない。

「奴隷荘にはいないのか？」

イザヤの問いに、リオは首を縦に傾けた。

「私もここに帰ってくる二時間ほど前に偶然知りました。大聖堂の裏手に三十人は収容できる荷馬車が一台。荷台を隠すかのように布

で幕が張られたものです。あの時は何とも思いませんでしたが、今思えばあれは……」

「今日なのか、奴隷荘の子どもが連れて行かれる日は」

リオは二度目の首肯をする。

通常、奴隷荘に収容された子供は数ヶ月に一度、纏めて首都へと送られる。そこで待っているのは競売。奴隷の子どもは事情がない限りは奴隷市で捌かれる。金さえ用意すれば、その奴隷の家族以外なら誰でも買うことができるのだ。

ごく少数だが、引き離されたわが子に未練を抱いて取り戻すとする親や、人身売買目的で奴隷の子どもを奪おうとする犯罪者もいる。そういった者たちにとって絶好の機会であるこの一斉送還は、日時は一切公開されることはなかった。

「運がなかったな。今頃あの馬鹿は奴隷荘に向かっているはずだ。奴隷荘と大聖堂は反対方向。間に合わない」

恐らく、ノエルが連れて行かれるのは今晚中。

広い街だ。今からリオがどんなに急いだところで、ソレイユに知らせノエルが連れて行かれる前に戻ってくるのは難しい。

「もつとも、おまえがああ魔族を見捨てるならわからないがな」

リオ単身で大聖堂へ乗り込み、ノエルを助けるならば時間的には可能だ。リオの實力は知る由もないが、この梟ならやりかねないという予感があった。

しかし、

「それはできません。私が一番に優先すべきは、主様です。正直主様一人で奴隷荘にいる騎士たちを相手に出来るとは思えません」

予想通りの返答に、イザヤはベットに転がった。

「じゃあさっさと助けに行けばいい。あの馬鹿が乗り込む前に止めないで面倒なことになる」

「それも出来ません。ここでノエルを見捨てることは、あの人が目指している信念を曲げることと同義。それも、出来ません」

暫くの沈黙。

この時ばかりは、自分の理解力の良さを呪った。

眉を潜め、イザヤは身を起こしてリオを見据える。

「私に何を期待している？」

「助力を」

リオの返答は、短かった。イザヤは鼻で笑って首を振る。

「おまえはあの馬鹿と違って頭は悪くないと思っていた」

「あら、それは申し訳ありませんでした。ですが、主様のような天性の馬鹿に従う者が頭の良い者なわけがないでしょう。身の振り方がわかっていない」

自分の主人をはっきりと馬鹿と言い切る従者に、呆れより清々しさを覚える。

リオはそこにいるのが梟とは思えないような妖艶な笑い声を漏らし、イザヤの前に降り立つ。

「まあ、いくら私でもあなたが無償で力を貸してくださるなんて思っ
てませんよ。私、馬鹿じゃありませんから」

言うことに一貫性がない。馬鹿かそうじゃないのかどっちだ、とイザヤは視線でリオに訴える。

「馬鹿ではありません。馬鹿なのは主様だけです」

「馬鹿の下につく従者は頭が悪いんじゃないのか？」

もう返すのも馬鹿馬鹿しくなってきた。馬鹿という単語が飛び交いすぎて、それそのものが陳腐にさえ思えてしまう。

今度から使うのを少し控えよう、と心の片隅に置いておく。

「そうですね。しかしそれは仕える主人が馬鹿だと知らずに仕える者のことです。私は違います。私は主様が馬鹿だと理解している」

つまり、何が言いたいのか。

脱線気味な話を元の線路の上へと戻すきっかけが掴めず、イザヤはただ話しに耳を傾けるだけだ。

「――そして、その先にあるものも見えています」

「先にある……もの？」

「はい。それには私には主様を守る理由がある。随分と長く話してしまいましたが、つまるところそれだけです」

結局リオが何を言いたいのか、イザヤにはわからなかった。

ただ一つ理解できるのは、何時の間にかリオの話に耳を傾けてしまっていたということ。一度聞く姿勢を作ってしまったら、今更聞かないフリをすることは難しい。

それを知ってか知らずか、リオはすかさず本題に話を戻した。

「さて、イザヤ。話を戻しますが、私は何の見返りもなくあなたに助力を求めようとしているわけではありません。あなたは表面上で

は実に合理的です。だから、私も相応の対価を支払いたしましょう」

いささか引っかかる言い方だが、言い返す必要もないので黙って先を促す。リオは一度満月に良く似た金色の瞳を閉じると、またゆっくりと開いた。

「一つ、あなたの言うことを聞きましょう。私に可能な限り、どんなことでも」

「不可能なことは？」

「主様に被害が及ぶこと。それと、私の命を絶つこと」

予想の範囲内の答えと、少し意外な答え。

リオは命を投げ出してでもソレイユを守るタイプだと思っていたからだ。

「従順な従者でも命は惜しいか。当然だな」

「……それで、返答は？」

微かに沈んだリオの声。イザヤは腕を組む。

「期限は？」

「そんなケチ臭い条件をつけるつもりありませんよ。強いて言うなら、あなたが死ぬまで、ですね」

「……」

「信用できないなら宣言しましょうか？ 『私はさきほどの条件さえ守ってくれるなら、あなたの望む事を一つ、なんでも叶えると誓います』」

嘘はない。少しのノイズも混じらない言葉に、イザヤは組んでいた腕をといて立ち上がる。

「いいだろう。わかりやすい交換条件だ」

「本当にいいのですね？ 私はあなたではありませんから、信用するしかないのですが」

「私は嘘は嫌いだ。先のことを考えて、おまえに貸しを作っておいたほうがいいと思った。それだけだ」

「感謝します」

正直な話、真っ直ぐなりオの交換条件が心地良かった。騙し、騙されの世界の中、久しぶりに見た正当な取引。

ソレイユとリオを出会ってから、少し人と話すのが楽しくなったと感じたのも事実。だから、少しだけ惜しいと思っているかもしれない。

それに、僅かに出来ていた胸の曇りも取り払うことができる。無視しても構わないほど些細なものだが、ノエルの涙はまだ残っている。

イザヤは下ろしていた髪を頭の上で強く縛ると、二振りの剣を壁から取り上げた。

「それで、私は何をすればいい？」

「簡単ですよ。あなたはただ奴隷荘に忍び込んでいる主様をぶん殴って安全な場所まで退避させて下さい」

簡単と言ってくれるが、奴隷荘にいる騎士達の目を掻い潜ることは容易なことではない。

「あいつが暴れていたらどうする？ 騎士の一人や二人ならなんとかならなくもないが、それ以上となると厳しいぞ」

「その心配はいりません。主様は必要以上に人間を傷つけることはしない。おそらく慎重に動いていると思います」

「わかった。大聖堂の方は、おまえがなんとかするんだな？」

イザヤを奴隷荘へと行かせるということは、大聖堂にいるノエルはリオが受け持つということだろう。

だが、それは少し厳しい話だ。首都への送還は秘密裏に行われる為護衛の数もそれほど多くはないだろうが、それでも五人以上、十人以下はいるはずだ。それを一人で相手にすることは、言葉にするよりもよほど困難である。

「ええ、私一人で問題ないでしょう」

よほど腕に自信があるのか、それとも御託と屁理屈の塊のような頭で策を練るのか、リオは不安の欠片もなく頷いた。

黄金の瞳を不気味に輝かせ、大きな羽を目一杯に広げる。

「では、行きましょうか」

※

「ソレイユを信用した俺が馬鹿だった。ソレイユを信用した俺が馬鹿だった。馬鹿を信用した俺が馬鹿だった。馬鹿を信用した馬鹿だった。ソレイユは馬鹿だった」

大貴族の館ほどの大きさを持つ奴隷荘、その厨房で先ほどから呪いのようにぼそぼそと呪詛を繰り返すマギに、ソレイユの肩がぶりと震えた。

「マギ怖い。てか途中からおかしくなってる。ただ俺が馬鹿なだけになってる」

「うるさいよ。何の策もなしに忍び込んでさ。ここに何時間いると思ってるんだよ」

「腹の減り具合から……二時間だな」

「真面目に答えんな。腹立つ」

真面目な答えではないのだが、マギも混乱しているのだろう。

日が沈んでから手際良く忍び込んだはいいものの、館内には騎士達が数人体勢で配備されており迂闊に動くことすら出来なかった。

ただ広い厨房ならなんとか隠れる場所があるだろうと一時しのぎで逃げ込んだのが二時間前。外を巡回する騎士の鎧の音を聞きたびに身を震わせること二時間。いい加減限界だった。

「てかソレイユ魔族だろ？ 騎士なんかぽんっと倒してくれよ」

「いいか、マギ。一つ言っておく。ぽぽん、なんて音、どんな倒し方したって出せない」

「ここぞとばかりに真顔になんな！」

「ば、ばかやろ。声がうるさい。見つかるぞ」

いきり立つマギの口を押さえ込み、ソレイユはそっと扉のほうへ目を向ける。幸いなことに気付かれてはいないらしく、騎士が入ってくる気配はなかった。

「ふう……」

厨房の厚い壁に感謝しつつソレイユが胸を撫で下ろしていると、マギがぼそりと呟いた。

「——おかしい」

「ん、何がだ？ 腹の調子か？ やめてくれよ、こんなときに」

「ソレイユこそこんなときにふざけんな。——じゃなくて、なんでこの部屋、誰も入ってこないんだ？」

「いや、入ってきたら死ぬだろ。俺たち」

「ならなんでこんなところに逃げ込んだんだよ」

青筋を浮かべるマギを宥め、ソレイユは先を促す。マギは大きく脈打つ心臓を落ち着かせると、真剣な顔でソレイユを見る。

「考えてみるよ。ここ、厨房だぞ。なんで夕食の時間がとくに過ぎてるってのに誰も来ないんだ？」

「腹が減ってないから……ってこたないんだろうな。そういや人の気配が少ない気はしてたんだ」

さすがのソレイユもフザける気にはなれず、やや引き攣った笑みを浮かべた。

「マギ、なんか思い当たることはないのか？」

「……ある。一つだけ。最悪な予想だ」

「聞きたくないけど、聞かないわけにはいかないんだろうな」

肩を落とし、ソレイユは苦笑する。マギは険しい表情のまま、眉間に刻まれた皺を深めた。

「年に四回くらい……各地域で収容された奴隷達を首都へ一斉送還される日がある。もしかしたら……今日が、それなのかも」

「マジかよ！？」

「わからない。わからない……でも、そうだとしたら」

首都へ送還されれば助け出す手立てはない。ここより更に嚴重な警備が敷かれ、救い出すのは困難。そして、何処の誰の下へ売り飛ばされるかもわからなくなるのだ。

二度と会えなくなる。

二度と、ノエルに会えなくなる。

「た、確かめないと……」

何かに突き動かされるように、ふらふらと扉へと向かっていくマギ。

「馬鹿、止まれ！」

ソレイユも慌ててマギの後を追うが、もう遅い。

マギは倒れこむようにして扉の取っ手を掴むと、それを勢い良く押した。

ばん、と音を立てて開かれる大きな二枚扉。

焦燥と恐怖に支配された瞳でマギが最初に見たのは、銀の甲冑だった。

ゆるゆると視線を上へと上げると、老年の髭を生やした騎士がこちらを見下ろしていた。

「あ……っ」

ようやく、マギは自分が取り返しのつかないことをしてしまったと後悔する。老騎士はやや前のめりになったまま呆然と見上げてくる少年を冷たい目で見下ろすと、手に持っていた槍を強く握った。

「ここにいた子どもは全て移動した。少年、君はここの者ではないな？」

「す、全て？ ノエルは？」

「ノエル？ ——ああ、リストにあった名前だ。ノエル・シュタイン。彼女も今頃は首都へ送還される馬車の中だろう」

マギの瞳孔が大きく見開かれる。そのままがつくりと膝を折り、赤い絨毯に両手をついた。

「そ、んな……」

「成程。彼女を奪いに来たというわけか。よくここまで忍び込んだ、とだけ褒めておこう」

しかし、と老騎士は声を低くする。齢六十を過ぎているであろう老体から発せられているとは信じられないほどの闘気が空気を奮わせる。

「残念だが、君はここで死んでもらう。侵入者は何人たりとも許すわけにはいかぬ。可哀想だが、これが決まりでな」

それは、既に意気消沈したマギへ向けられたものではない。マギの背後で、フライパンを片手に構えるソレイユへ向けられたものだ。

「特に魔族は、ここで完全に息の根を止めねければならん」

「見つかったちまったもんは仕方ねえ。悪いけど死んでくれよ、爺さん」

もう片方の手に包丁を持ち、ソレイユは赤い目を尖らせる。

「マギ、下がっつけ」

「あ、うん……」

這い蹲るようにマギは廊下の端へと逃げる。老騎士はマギのことは眼中に入らないのか、ただソレイユを見据えていた。

「爺さん、無理はしないほうがいいぞ。あんた一人で俺の相手はキツイんじゃないか？」

「確かに。だが、一人ではないからな」
「何？」

ソレイユが疑問の声を上げると同時に、廊下の奥からマギの悲鳴が聞こえる。

「マギ!？」

咄嗟に声の方へ目を向けると、一人の青年騎士がマギの前に立っていた。

「くそっ！」

ソレイユが駆け出す。が、

「お主の相手は、私だ」

行く手を阻むように突き出された槍に、ソレイユは足を止める。肩越しに振返れば、こちらにも新しく一人、騎士が増えていた。

「ち——マギ、走れ！」

繰り出される二本の槍を避けながらソレイユは叫ぶ。
だが、マギはその場から動かなかった。否、動けなかった。
小刻みに震える足。死、という現実が目のあることに、幼い

体は耐え切れなかった。

「あ……あ……」

「すまないな、少年。だが、君もこの世界に生きるなら、決まりを守るべきだった」

青年の言葉が重い。マギの頭は、もはや何も考えることは出来なかった。

ただ、漠然と死という言葉が頭の中でぐるぐると回り続けている。

「あの魔族にそそのかされたのかは知らないが、罪は罪。命で、償ってもらおう」

青年の鈍色に光る剣が振り上げられる。

見上げたマギの目から、涙が零れ落ちた。それは、恐怖心からではなく、ノエルを救うことができないまま死んでいくことに対する後悔。

こんな終わり方を、想像していなかったわけじゃない。

命を捨てる覚悟もあった。それでも、悔しくてたまらなかった。

「くそお……ごめん、ノエル……っ」

強く目を瞑った瞬間、剣が風を切り裂いて落ちてくる音を聞いた。

1-08 奪還、覚悟の風

「あれだけ大口を叩いておきながらこのザマか。だから死ぬと言っただんだ」

数秒後、マギに降りかかってきたのは体を貫かれる痛みでも、真つ二つに裂かれる痛みでもなく、澄んだアルトだった。

「な、誰だ……きさま！」

やや上擦った声は、青年騎士のものだろう。恐る恐る目を開けると、そこには黒い外套で全身を覆った人物が二本の剣で青年騎士の剣を真正面から受け止めていた。

銀色に輝く、細い刀身。柄の先に長い飾りがついたその剣は、見覚えがあった。

「おお！」

マギが言葉を発するよりも早く、ソレイユがその人物を見て感嘆の声を上げる。

「来てくれたのか、いざ——」

ソレイユが最後まで言い切るより早く、風を切る音が聞こえる。視線を向けてみると、ただでさえ蒼白い肌を更に蒼くさせたソレイユが頬から血を流しながら固まっていた。

背後の壁には、今までイザヤの手元にあった剣が刺さっている。何があったのかなど、聞くまでもない。

イザヤは青年騎士と刃を交えたままソレイユを睨みつけると、剣

を振って青年騎士を遠ざけた。

「黙れ馬鹿。こいつらの前で私の名前を口にするな」

「……わ、悪い」

「早くその剣を取れ」

言われるがまま、ソレイユはフライパンと包丁を床に置き、刺さった剣を引き抜いた。

ソレイユと刃を交えていた二人の騎士は、突然の介入者に一時距離を取って固まる。青年騎士も合流し、三人の騎士が並んだ。

「これは愉快な来客だ。人間の子どもに魔族。それに正体不明の黒ずくめとは」

白い顎鬚を撫で、老騎士は笑う。

剣を構えたまま騎士達を見据えるイザヤに、ソレイユは軽い足取りで近づく。

「どんな心境変化か知らないが、助かった。ありがとな」

「礼はいらない。これは梟との交換条件だ」

「リオとの交換条件？」

「にしても、どうしてこんなことになっている？ 真正面から騎士とやりあうなんて間抜けのすることだぞ」

ソレイユの質問を無視し、イザヤは溜息を吐く。

「それは……ああ、そうだ！ こんなことしてる場合じゃない！」

思い出したように頭を抱えるソレイユ。

「ノエル、ここにはいないみたいだ」

「知ってる」

「だからどうにか……って、え？」

目を瞬かせてイザヤを見つめ、ソレイユは首を傾げる。

イザヤは黙ってこちらを見つめる騎士達を正面から見返し、フードの中で嘲るような笑みを浮かべた。

「今頃は首都へ送還される馬車に乗り込んでいる頃、と言いたいのだろう。――梟が行った」

騎士達の表情が変わる。焦り。わかりやすい反応に、イザヤはまた笑みを零した。

「ほ、本当か！？　じゃあ、ノエルは助かるのか！？」

ようやく立ち上がったマギが、イザヤの外套にしがみ付く。イザヤは小さく頷いた。

「あの梟で護衛の騎士たちを倒せれば、だがな」

「なら問題ない。リオなら大丈夫だ」

ぱん、と手を打ち鳴らせ、ソレイユは吹っ切れたように剣を握った。

「よし、安心した。これであとはこの状況をなんとかするだけだな」
「それについてだが、梟からこれを預かってきた」

そう言い、イザヤは小指の先ほどの小さな白い鉱石をソレイユへと放る。

ソレイユはそれを受け取ると、口元を吊り上げた。

「それは何だ？ 万一騎士たちと真正面からぶつかることになった場合におまえに渡せ、と言われたんだが」

「魂白石だ。さっすがリオ、準備いいな」

だから、それは何だ。

そうイザヤが問うよりも早く、ソレイユは剣をイザヤに押し付けた。

「悪い。ちょっとここ受け持ってくれ！」

「は、はあ？」

「頼んだぞ！ マギ、来い！」

まるで一陣の風のように素早くマギの手を引いたソレイユはイザヤの横を擦り抜けて先ほどまで隠れていた厨房に舞い戻った。

呆然と閉まる扉を見つめるイザヤ。

神秘的な顔つきでイザヤたちの会話を聞いていた騎士達ですら動揺を隠せないでいる。

束の間の沈黙。

それを破ったのは、老騎士だった。

「不思議な奴らよ。人間と魔族が共にいるなど」

槍を構え、老騎士はイザヤを見据える。

「だが、目的はわかった。ノエル・シュタインの強奪。すまぬが、それを見逃すわけにはいかぬ」

「構わない。見逃してもらえるなどと、最初から思っていない」

「そうか。では、ここで死んでもらうでしょう。お主たちを全員始

末した後で、残りの仲間も冥土へと送ってやる」

そして、老騎士の槍が紅く変色する。

周りの気温が急激に上昇したような暑苦しさに、イザヤは不敵に笑って見せた。

「一つ訂正する。私とあいつらは仲間じゃない。それだけ覚えてから消えろ」

「後悔はしないな。マギ」

扉一枚を挟んで聞こえてくる音を聞きながら、ソレイユはマギの前に白い鉱石を差し出す。

マギはそれを受け取ると、落ち着いた顔で笑う。

「俺は生まれてから一度もノエルのいない世界を知らない。それで、知らないまま天寿全うして死ぬって決めてあるんだ」

「そりゃ随分贅沢な欲だな」

「ああ、そうだ。そのためなら、いくらだってめんどくさいことしてやるよ」

強く、強く掌の中の鉱石を握り締める。

「いくらだって、戦ってやるっ！」

そう腹の底から叫び、マギは鉱石を飲み込んだ。

広い廊下に金属がぶつかり合う音が響く。三本の刃を時にかわし、時に受けながらイザヤは圧倒的不利な状況を凌ぎ切っていた。

体が軽い。神魂を開放させる前と後では、まるで雲泥の差だ。全身についていた重りが消えたようにすら感じる。

「ほう、なかなかやりおる。だが、それでは勝てんぞ」

それはわかっている。攻撃をかわすだけなら問題ないが、攻めに転じるとなるとそれなりのリスクを背負うことになるのだ。

「ならこのまま凌ぎ切るだけだ。もうすぐ奴が戻ってくる。三人で私一人攻めきれないさきまらは終わりだ」

そう、焦っているのは向こうも同じ。

三人の内、誰か一人でもソレイユを追撃しないのは、二人ではイザヤを抑えきれないと感じ取っているからだ。

だが、イザヤはソレイユの加勢など微塵も期待してはいない。イザヤが狙うのは、彼らの焦りにより生まれる隙。

そして、何よりもこちらの味方をしている事実は、増援が来ないということだ。たった三人の警備。おそらく他の騎士は奴隷達を送還する馬車の護衛についているのだろう。無人のここを守るのに、厳重な警備は必要ないのだから。

つまり、この三人さえ倒してしまえば終わる。更には目撃者も消すことができるのだ。

「ふんっ！」

老騎士が繰り出す紅い槍。思考を巡らせていたイザヤは咄嗟の反応が僅かに遅れ、避けきれずに剣で受ける。

瞬間、槍を受けた場所から溶解する刀身。イザヤの口から悔しげな声が零れる。

ぼたり、とまるで溶岩のように溶け落ちた塊は、絨毯を焼き穴を開けた。

「油断した、の」

老騎士が笑う。別に油断したわけではない。ただ、かわしきれなかった。それだけのことだ。

イザヤは原型を留めなくなった剣を捨て、老騎士を見据える。

紅く染まった槍に触れた剣が、溶けた。燃やしたのではない。溶かしたのだ。『火』とは違う。

〈熱の神魂〉。おそらく老騎士の魂はこれで間違いないだろう。

神魂の使い方は所有者によって様々だが、もつとも多いのは自らの武器に付与する戦い方だ。

身一つでも戦える神魂解放者が、なぜわざわざ武器を持つのか。

——簡単なことだ。それが一番負担が少ないからである。

神魂は何も無限に使えるわけではない。使えば使うほど魂は磨り減り、休まずに連続して使用すればそれだけのリスクが返ってくる。だからこそ、

「——できるなら、使いたくはなかったが」

イザヤもこの力を使うことを控えていたのだ。

室内にある影という影から、まるで吸い込まれるようにイザヤの手に収束していく黒紫の光。それは瞬く間に二本の剣の形を成し、その圧倒的な威圧感で場を支配した。

「まさか、〈闇の神魂〉！？」

若い騎士が声を荒げる。驚くのも無理はないだろう。〈闇の神魂〉を持つ者は即刻処刑されるか、一生内も外も魂縛石に縛られ牢の中。普通に生きていれば、いや普通ではない騎士たちですら、その魂を見ることはないのだから。

「……っ」

こうして立っているだけで生気を吸い取られていくような感覚に、イザヤは顔を顰める。

確かに絶大な力を誇る〈闇の神魂〉。だが、それ相応のリスクもあるということだ。

剣を構える。立ち止まっている暇はない。すぐに片付けなければ倒れてしまうだろう。

足に力を入れ、駆ける。老騎士の頭上を飛び越え、一番後ろにいた中年の騎士に斬りかかる。

「まずは俺かい！？ 光栄だねえ！」

口調は軽いものの、男とて馬鹿ではない。未知数の魂を前に、神魂を出し惜しみしている余裕はないようだった。

男が大剣を掲げると、その刀身が黒く変色し、瞬く間に広がっていく。盾のように、鋼で出来たそれはイザヤの視界から男を隠した。

「どうかな？ 鉄壁の防御だ。これでおまえさんの手口を見極めさせてもらおう」

「そうか。じゃあ——見逃すなよ」

一閃。

斬る音さえしなかった。

まるで紙のようにすっぱりと割れる鋼の盾。

男が最後に見たのは、フードの下から覗く暗く翳った少女の顔だった。

「嘘だろっ!？」

肩から腹部にかけてを深く斬られ、血を噴出しながら倒れる男の前に、青年の顔から血の気が引く。

鋼の盾も、鎧も、イザヤの刃を防ぐものにはなり得ない。

「あの鋼の盾が斬られるなんて……」

そう、イザヤは斬ってはいない。ただ、触れただけ。触れた場所からその存在を消していく。それが、イザヤがこの数日で理解した黒紫の剣に秘められた〈闇の神魂〉の能力の一つ。

現に男も斬られているわけではない。ただあまりに鋭いイザヤの剣捌きが、斬られたように見せているだけだ。

黒紫の刀身についた血すら消していく剣。決して汚されることのない刃。

そのあまりにも禍々しく美しいそれに、老騎士は瞳を細めた。

「私も始めて見たが……成程」

無言で、イザヤは口元についた血を手で拭う。

「恐れられるのも無理はない力よ」

イザヤ自身も、そう思わなくもない。触れたものの全てを消し去る力。もしこの力が本当に全てを消し去ってしまう力ならば、恐れるものなど何もなくなるのかもしれない。そこまで考え、イザヤは思い止まる。

この世界に、都合のいいことなど存在しない。あるのは理不尽と絶望だけ。

刃を返し、イザヤが床を蹴る。

次に狙うのは、圧倒的な力の前に己を見失おうとしている青年。おそらくまだ騎士には成り立て、奴隷荘の護衛をしているようでは実戦経験も乏しいことだろう。

もし、イザヤがこの街にこなければ、彼は死ぬことはなかった。いつもと変わらない、穏やかな日々を過ごしていたはずだった。それでも、

「――があ……あああっ！」

容赦はしない。

もし、などという仮定は、意味がない。

目の前の現実を受け入れろ。命を奪ったものが空想の世界に逃げることは許されない。

「あ――があ……あ……っ」

口から血の泡を吹き出しながら、胸を貫かれた青年はのたうち回る。胸を押さえ、助からない命を必死に繋ぎとめようと転げまわる様はいつ見てもいいものではない。

最後に誰かの名前を囁きながら息絶えた青年には目もくれず、イザヤは老騎士に剣を向けた。

「きさまで、最後だ」

「大した娘よ。だが、濁っておる」

構えは崩さないまま、老騎士は憐れむような眼差しをイザヤへと向ける。

「〈闇の神魂〉は所有者の心を腐らせると聞く。娘、お主……」
「それ以上喋るな」

所詮は教団の飼い犬。上辺しか見えていない。

「きさまらと言葉をかわすつもりなどない。私はここできさまを殺す」

「……ならば、これ以上の会話は無用だ」

そう言った老騎士の瞳には、覚悟があった。

おそらく彼はわかつている。イザヤには勝てないと。三人がかりでも不可能だったのだ。今更状況を覆えるとは思っていないだろう。それでも、その瞳に諦めの色はない。死ぬとわかっていても、諦めてはいない。

——瞳の奥に宿る光は、どうしようもないほど目障りだった。

「参る！」

老体とは思えないほどの俊敏な動きで槍を突き出す老騎士。イザヤが正確に刃を合わせようとすると、瞬時に槍を引く。

どうやら、この剣の能力は薄々感付かれているようだった。

だが、感付かれたところでどうということはない。イザヤはただ、攻撃を続ければよいのだから。

右に。左に。縦に。横に剣を振るう。まるで重さを感じないほど軽やかに二本の剣を操りながら攻撃をしかけるイザヤに対し、老騎士はただ避け続けることしか出来なかった。

そして、それも終わりが近づく。

先にやられた二人が齎した、触れたら終わり、という恐怖。極度の緊張状態の中、そう長く戦い続けられるわけもない。

ついに、避けられない一撃が老騎士を襲う。

止むを得ず槍でこれを受ける。触れた場所の柄が消えうせ、槍は真っ二つに分解された。

「終わりだ」

武器を失った老騎士の前に、もう一本の剣を振りかざしたイザヤが立つ。

もはや打つ手なしと悟ったのだろう。老騎士も無様に逃げるような事はせず、ただ自分の人生の終わりを運んでくる死神を見つめた。だが、

「!？」

黒紫の剣が老騎士に届く寸前、まるで霧散するようにイザヤの手から剣が消えたのだ。勢いをつけた体勢は脳が発した制止も効かず、そのまま前のめりにバランスを崩す。

予期せぬ事態に一瞬頭がついていかず、イザヤに大きな隙ができた。

そして、それを見逃してくれるほど相手は甘くはない。

老騎士は体勢を崩すイザヤの背中に柄だけになった槍を叩きつける。ろくな受身も取れずに地面に倒れこんだイザヤの背中を足で踏みつけると、太腿に容赦なく槍を突き刺した。

「ぐ、う……!」

脳を刺すような痛み。イザヤが苦悶の声を零す。

大きな血管は外れていたようだが、傷口から血が溢れていくのがわかる。起き上がろうとしても、足を傷つけられ、背中を押さえられていては身動きすら出来なかった。

「どうやら……その力にも何かしらの欠陥があるようだな」

魂の限界が来たのかとも考えた。だが、それは違う。疲労感はあるけど、それはまだ微々たるものだ。それが原因とは考えにくい。

「くそっ……」

全身に力を入れる。だが、体は動かず、ただ傷口を広げる行為にしかならなかった。

「止めよ。これ以上抗うな」

血液の流出と共に、体の力が抜けていく。ほんの数日前も、似たような状況にあったことを思い出した。

つくづくついていない。笑みさえ零れてしまう。

だが、不思議と後悔はなかった。ここにこなければ良かった。そうは思わないのだ。

「お主は、ここで果てよ」

どくん、と大きく心臓が脈打つ。

死という現実を前にした途端、体が全力で拒むのだ。

「誰が……こんなところで」

力の入らない体に鞭を打つ。血を失った体。両腕の感覚はない。全身から汗が吹き出る。足に走る激痛も、ブレる視界も、関係ない。たとえこの足が千切れようとも、生き抜く。生きなければならぬ理由があるのだ。

「私はまだ……まだ死ぬことは出来ないっ！」

渾身の力を籠めて立ち上がる。気が狂いそうなほどの痛みが太腿を貫いたが、そんなことを気にしていられる余裕はない。

足に刺さったままの槍を引き抜く。槍を投げ捨て、腰から短刀を取り出す。

が、

「……っ」

すぐにまた倒れこむ。顔に当たる赤い水。その異臭に、顔を顰めた。

「侮れぬ娘よ」

血みどろになったイザヤの足を見下ろしながら、老騎士は畏怖の籠った声で呟く。動ける状態ではなかった。それでも、イザヤは立った。何か見えないものに、操られるかのように。

老騎士は腰に差した剣を抜き、うつ伏せのイザヤの背中に宛がう。ぴたりと、心臓に狙いを定める。

今度こそ、確実に止めを刺すために。

だが、それは叶わなかった。

止めを刺すよりも早く、老騎士を覆うように形成された風の層。この異変に気付き手を止めていなければ、今頃腕は消え去っていたかもしれない。

イザヤの心臓に狙いを定めた剣は握り手からわずか先のところで切断されている。そう、風の層はまるで老騎士の動きを封じるかのように身動きを取れないほど狭く形作られていた。

老騎士はもはや何の役にも立ちそうにない剣だったものを手放す。

そして、なんとか動かせる首だけを背後に向けた。

「よもや、お主に倒されるとは思わなかった。どうやって〈魂縛石〉の封印から解放されたかは知らぬが、それもどうでもいいこと」

「……は……っ……はぁ……」

苦しい息を吐きながら老騎士の視線を真っ直ぐに受け止めたのは、マギだった。

額からは滝のように汗が流れ落ちている。それは神魂を行使した反動か、それとも今から起きるであろう現実に対する恐怖か。

マギは手を正面に翳したまま、唾液を飲み込む。水に飢えた獣のように、喉を大きく鳴らせて。

「お、俺は……死ぬ覚悟が……あった。それくらいしか、出来ないって思ってた」

震える唇で、マギは切れ切れに言葉を吐き散らす。

「でも、いざ死ぬって思ったら……悔しくて、情けなくて……どうしようもないくらい……泣きたくなった」

マギの独白にも似た呟きを、老騎士は黙って聞いている。イザヤも、血溜まりに伏したまま耳だけを傾けていた。

「あんな思い、もうごめんだ……俺は、生きる。生きてノエルを守るんだっ！」

そして、

「うぉぁぁぁッ！」

強く、マギが掌を握り締めた。同時に収束していく風の層。

それは中にいる老騎士を細かに切り刻みながら、一点に集まり、消えた。

まるで雨のように降り注ぐ血。白い壁も、赤い絨毯も、据え置かれた調度品すら汚し、容赦なく飛び散る。

残されたのは、数秒前まで老騎士だったものと、鋭利な刃物で刻まれたような鎧。それだけだった。

赤い雨を全身に受けながらイザヤが目を見開いていると、不意に誰かに抱き起こされる。

「おい！ イザヤ！ しっかりしろ！」

聞こえてきた声に、痛みなど忘れて顔を顰める。

触るな、と言えば、返ってきたのは暖かい笑顔。

「なんだ。元気そうじゃないか」

イザヤを抱き起こしたソレイユは、自分の服を破ると一枚の長い布状にし、それを傷口に巻いてく。

「悪かったな。思った以上にマギが落ち着くまで時間がかかった」

「……きさまが、やったのか」

どこか沈んだイザヤの言葉にソレイユは小さく首肯する。

「ああ。あいつが望んだ。あいつが決めた。これからノエルを守っていくために、自分自身で選んだんだ」

「そうか……」

そう、息を吐くようにイザヤは呟いた。顔をソレイユから逸らすと、青い髪さえも赤く染め上げたマギが、自分の腕を強く握っているのが見えた。

小刻みに震える腕。何かを押しとどめるように、強くマギは腕を抑えている。唇は一文字に結ばれ、今にも溢れ出しそうな弱い心を飲み込んでいるようだった。

思わず喉まででかかった意味のない言葉を、イザヤは飲み込んだ。言うべきではない。気休めは救いにならない。これは、自分自身で乗り越えるしかないのだ。

それから暫く、三人の間には沈黙が広がった。

※

月明かりが優しく照らす海沿いの街道。

昼は人々が通るそこは今、日常とはかけ離れた世界になっていた。一面の赤。

日常を非日常へと変える異臭。

そこかしこに咲き乱れる赤い花。夜の闇の中では黒ずんだ色にか見えないが、それは確かに血だった。

赤い花畑の中、一人の若い騎士が馬車を背に剣を構えている。その手は大きく震え、今にも剣を手放してもおかしくないほどだ。

彼の前に立つ、血に濡れた一人の女性。

長い漆黒の髪を肩下で緩く縛った女性は、思わず息を呑んでしまいそうなほど美しい顔で微笑んだ。

「く——く、来るなっ！」

青年が剣を振る。騎士としての尊厳や誇りなどは彼の上司の首が

いとも容易く吹き飛ばされたときに消え失せた。

女性は満月のような金色の瞳を細めると、腰に手を当てた。

「わかりました。では、私は動きません。あなたが来て下さい」

す、と手を差し出す女性。

これが、日常の一コマであつたなら、彼女が人間であつたなら、青年は迷わず女性の手を取っていたかもしれない。

女性の黒髪から覗く尖った耳。そして、蒼白い肌。

「く、くそ……なんで、なんで……っ」

その特徴は、魔族のそれと一致する。

騎士である以上、魔族との戦闘は当然任務のうちに入っていた。

しかし、ここ数十年、魔族の侵略が衰えている。実際に魔族と刃を交えるのは一部の騎士だけだった。

女性は何時までたっても動く気配のない青年を見、困ったように肩を竦める。

「埒があきません。私から行かせていただきますよ」

一歩、女性が踏み出す。青年の体が大きく震えた。

「……っ!？」

「逃げてても構いません。命乞いをしてても構いません。ですが、それは無駄な事だと先に言っておきましょう」

——私、人間が大嫌いなんですよ。

女性が発した酷く冷たい声を耳にした瞬間、青年は剣を抜いて走りかかっていた。

大声を上げて、がむしゃらに剣を振り回して、青年は女性に斬りかかる。義務と恐怖の間で押し潰された心が、壊れた瞬間だった。

女性は笑みを崩さないまま腰に差した刀の鞘に手をかける。
そして、

「立ち向かってくる勇気だけは、買いましょう」

青年が女性の横を通り過ぎる。

僅かに鞘から出ていた刃を納めると同時に、青年の体は物言わぬ肉塊と化した。

「ですが、利口ではありませんね」

背後で倒れる青年や足元を汚す人間だったものなどまるでないかのように、女性は真っ直ぐに馬車へと足を進める。

目の前まで来ると、中から子供が声を押し殺して泣く声が聞こえた。どうやら、一連の流れを見られてしまったようだ。隠す気などなかったが。

女性は再び刀を抜き、荷馬車を覆う幕を切り裂く。

そこにいたのは、恐怖で身動き一つとれずに泣きじゃくる少年少女が十数人ほど。中には気を失っている子供もいた。

女性は自分を見て更に怯える子供をまるで気にせず、一人一人顔を確認していく。

「ああ、見つけました」

目当ての少女を見つめ、目を細めた。

金色の視線を真正面から受けた少女は、涙の溜まった翡翠色の瞳

を大きく見開かせる。あまりの恐怖に声が出ないのか、少女はただただ身を震わせるだけ。

女性はそんな少女を冷めた瞳で見下ろすと、静かに言葉を滑らせた。

「降りなさい、ノエル」

「……や、なん……で」

「いいから降りなさい。少し、あなたに聞きたいことがあります」

有無を言わさない強い口調に、ノエルは震えながらも腰を上げ、ゆっくりと荷馬車を降りた。

女性はノエルが降りたのを確認すると、荷馬車の中で喚く子供達を見つめながら言う。

「場所、変えましょうか。これ以上その子たちを怯えさせておくのも憚りありません」

こちらに、と女性はノエルを荷馬車より少しばかり離れた海岸まで連れて行く。

一度、黒く光る海を懐かしそうに眺めながら、女性はノエルに振り向く。目を見開いて涙を零すノエルに、女性は軽く息を吐き出す。

「そう怖がらないで下さい。私はあなたを殺すためにきたものではありません」

「え……」

「マギ、彼があなたを助け出そうとしています。私はその手伝いをしているだけ」

マギ。その名前にノエルの恐怖が薄らいでいく。ようやく、ノエルは女性をまともに見ることが出来た。

「マギ、ちゃんが……私を？」

「そうです。あなたを助けるために、今頃は騎士と戦っているかもしれないですね」

「そ、そんなの駄目！ 止めて……マギちゃんを止めて下さい！」

もはやノエルの頭に恐怖はなかった。女性の服にしがみ付き、叫ぶ。

「何故です？ 嬉しくはないのですか？」

「だって……なんで、私なんかのために。マギちゃん、貴族になれたのに……幸せに、なれるのにつ」

「……」

「なんでそんなことするの……私はこれでいいのに——もうマギちゃんに嫌な思いさせたくなかったのにつ！」

女性の形のいい眉が眉間に寄る。

片手で前髪を押さえ、苛立ちを含んだ溜息を吐く。

「ノエル。一つ訂正します。私はあなたを助けに来た。それは間違いではありません」

ですが、と女性の刀が瞬きの間に抜刀される。一点の曇りもない名刀が、月明かりで煌いた。

「私は生きる意志のないものを助けるつもりはない。私は人間以上に、卑屈な死にたがりが嫌いですから」

ピタリと眉間に突きつけられた刀に、ノエルは言葉さえも失う。当然だ。これまで平民の子どもとしてごく普通の生活を送ってい

ただ。どうしてこんな状況になっているのかすらわからないはずだ。

だが、女性の言葉は緩まない。

「ですから、死にたいのならここで一思いに殺してさしあげます。本当ならそんなこともごめんですけど、あなたみたいな子どもに自ら命を絶てというのも酷な話でしょうしね」

そう言い、女性は微笑む。その美しい微笑みも、今の状況では恐怖しか与えない。

目を見開いたまま唾液を飲み込むノエルに、女性は追い討ちをかけるように言葉を続けた。

「どうぞ決めて下さい。いえ、この場合示して下さい、の方が正しいかもしれません」

刀は動かさないまま、女性はノエルを穏やかな金で見下ろす。

「マギ以外の全てを捨てて生きるか。マギを捨てて奴隷の道を歩むか。それとも、両方捨てるか」

「……」

「あなたの意思を聞かせて下さい、ノエル」

ノエルの大きな翡翠から次々と溢れ出る涙。頭は酷く混乱している。自分が今何処にたっているかすら分からず、ノエルはただ女性を見上げることしか出来ない。

女性は微かに首を倒すと、刀を引く。

「難しいですか。そうですね。そうかもしれません」

刀を鞘に納め、顎に手を当てる。そして、何か思い当たったように顔を上げると、膝を折ってノエルと目線を合わせた。

「なら、私から一つ助言をしましょう」

しっかりと金の瞳にノエルを映し、女性は穏やかな口調で言う。

「ノエル、あなたはマギの為なら死ぬ覚悟もありますか？」

小さく、ノエルが頷く。女性も、結構です、と首肯する。

「死ぬ覚悟。それも立派な覚悟です」

ですが、と女性は緩やかに吹く風に靡く髪を片手で押さえながら続けた。

「死に逃げる前に、出来ることはあるでしょう」

「え……？」

「考えようですよ。死は多くの生命にとっての避けられない宿命ですが、言い換えれば多くの生命が持っている最後の逃げ道です。たった一度だけ使える、全てから解放されるための道」

「逃げ、道……？」

「そうです。だからノエル、よく考えなさい。逃げることは意思さえあればいつでも出来る。ただ、それは一度だけ。そして、逃げたらそこで終わりです」

目線を合わせ、ゆっくりと語る女性の雰囲気にもノエルの緊張も幾分か和らぐ。そのせいか先ほどよりもきちんと女性の言葉が耳に入るようになった。

女性もノエルの様子に口元を綻ばせると、最後の締めとばかりに

言葉を滑らせる。

「あなたの終わりは、あなたが決めなさい」

海の香りと血の異臭が混ざり合った風が吹き抜ける。ノエルはその風を大きく吸い込むと、女性を両目に映した。

「私、ずっとマジちゃんに迷惑かけてばかりだったから……奴隷になっても、マジちゃんと離れ離れになってもいいって……死んでもいいって……思ってた。私が奴隷になったのは、マジちゃんの迷惑をかけた続けた罰で、運命なんだろうって思ってた」

懺悔にも似たそれを、女性はただ黙って聞く。

「本当は怖いよ。逃げたい、逃げたいよ。でも……逃げるのは、もう一度マジちゃんに会ってからでも、遅くないのかな」

涙を湛えたまま、ノエルは強く服の裾を掴む。

「はい」

女性が満足気に頷く。

「私、マジちゃんに会っても……いいのかな」

「はい」

「迷惑かけても、一緒にいたいって思っていていい、のかな……っ?」
「はい」

女性が答えると同時に、細い腕が首に回った。
ノエルに抱きつかれた。鼓膜を揺する小さな嗚咽とに紛れて聞こ

えた、「生きたい」という意思に、女性は瞳を閉じてノエルを抱き上げる。

「それでいいのです。あなたはまだ自分の心に嘘をつく必要などありません。願うことも求めるものことも、罪ではない」

刀を片手にノエルを抱え、女性は月明かりで照らされた砂浜を歩き始める。しっかりと首に回された手を困ったような笑みで見つめ、女性は軽く息を吐き出した。

「あなたの道は実現可能で……でも、とても難しいものですね」

そう口の中で呟き、女性は空に浮かぶ満月を見上げる。

「それでもあなたは彼女の意味を継いでこの道を選んでくれた。私を選べなかった道を、あなたは選んでくれた。この道の果てを、私に見せてくれようとしている」

懐かしそうに目を細め、女性はこの上なく綺麗に表情を和らげる。

「だから私はあなたについていくのです、主様」

1-09 旅立ち、繋がれた手

「おい、ちゃんと掴まれよ。落ちるぞ」

カルディアの街から首都方面へと続く街道の少し外れた場所を歩
きながら、ソレイユは背中では頂面を浮かべるイザヤに声をかけた。

「きさまにしがみ付きたくなんかない」

返ってきた不機嫌な声に、ソレイユは苦笑して、よっこいせ、と
年寄り染みた掛け声と共に落ちかけたイザヤの体をまた持ち上げた。

「それにしてもあんた軽いな。ちゃんと飯食べてんのか？」

「うるさい」

「毎日毎日生野菜とか調理不要なものばかり食って、肉食え肉」
「早く歩け」

まったく話が噛み合わない。

こんなにも不機嫌になりながらなぜイザヤがソレイユに背負われ
ているのかと問えば、簡単なことだ。老騎士に刺された傷である。
出血はそれほどでもなかった。だが、太腿を深く刺されたのだ。

当然歩くのにも支障が出る。

かと言ってゆっくりと移動している暇はない。イザヤが眉を顰め
ながらも黙って背負われているのはそれが理由だ。

「もっとしっかり掴まってくれたほうが俺としても楽なんだが……
なあ、マギ」

「照れてんだろ。イザヤ姉さんもやっぱり女だな」

頭の後ろで両手を組んで笑うマギに、イザヤは僅かに目を細める。あれから二時間。最初こそ動揺を隠せずに叫んでいたものの、マギはようやく普段の落ち着きを取り戻していた。

子供ながらにその精神力の強さは賞賛すべきものがあるが、あくまで表面上のこと。予想するまでもなく、その胸の内は穏やかなものではないだろう。

彼にとって、初めての人殺し。命を握り潰したのだ。ショックは計り知れない。

大切な人を守るために殺した。――そんな綺麗ごとと言えるわけがない。

マギがやったことはただの人殺し。たとえどんなに苦しみ抜いた末の決断だったとしても、それはマギ自身のものにしかない。万人から見れば、決められたルールに不満を持った羊の反抗だ。そして、事実その通りなのだ。自分の我侭のために罪のない騎士を殺した。

その許されざる行為は、一生マギを苦しめることだろう。

だが、それでもマギはこうして立っている。前に進んでいる。大きな罪をその小さな背に担ぎながら。

「どうしたんだよ？」

そんなことを考えていると、急に現実へ引き戻される。

いつの間にかソレイユの真横に並んでいたマギが、イザヤを見上げていた。

「なんでもない」

「ふうん。まあ、いいけどな」

「それよりも」

ふと、あの騒動の中では問いただせなかったことを思い出し、イ

ザヤはソレイユに顔を近づけた。

「なんだよ？」

月明かりの下で見るイザヤの顔が普段とは違って見え、ソレイユの頬が僅かに紅潮する。イザヤは一度マギに視線を送り、口を開いた。

「どうやって〈魂縛石〉の封印を解いた？」

人間の体内に取り込むことで細かく分解され、体のどこかにある神魂の中心ともいえる核の力を押さえ込む鉱石。一度体内に取り入れてしまえば、それを除去する方法はアルヴィア教団の大司教クラスでなければ知りえないのだ。

当然、魔族が知る由もないはずである。

ソレイユは前を向いたまま、ああ、と頷く。

「あんたがりオから預かってきた鉱石あっただろ。あれ、〈魂白石〉っていうんだけど、〈魂縛石〉の効果を消すもんなんだよ」

「そんなもの聞いたことがない」

あればそれこそ一大事だ。人々が〈神魂〉の自由を取り戻す。教団の支配体制など瞬く間に崩れ去ることだろう。

「そりゃそうだろ。〈魂縛石〉が人間界でしか取れない鉱石で作られているように、魔界でしか取れない鉱石を元に作ってあるんだからな」

「……〈魂縛石〉が人間界でしか取れない鉱石で出来ている？」

「ん、知らなかったのか？ 〈魂縛石〉は人間界、実質教団が所有している物質から作られてんだぜ」

当たり前のようにソレイユは言っただけのけるが、イザヤにとっては初めて聞くことばかり。マギも口を挟みこそしないが、興味深そうに耳を傾けている。

「聞いたこともない」

「生成方法どころか原材料すら隠してんのか。徹底してるな」

感心したように口笛を吹くソレイユ。

「つてかよ、魔族はなんで魂白石なんか作ったんだよ？ 魔界じゃ〈魂縛石〉を作れないんだったら意味ないんじゃないのか？」

マギの言うことも最もだった。〈神魂〉を封印する〈魂縛石〉の効能を打ち消す〈魂白石〉。単体で使える〈魂縛石〉と違い、〈魂白石〉は魂縛石なしでは使えないものもない。

これではまるで、〈魂縛石〉に対抗するためだけに作られたようなものだ。

「ああ、昔の話だけどな、魔界に侵入してきた半魔族に〈魂縛石〉を使って散々やかされてさ。そんな時先代魔王が〈魂縛石〉飲まされちまって、そいつをなんとかする為に作られたんだ」

「随分と間抜けな魔王だな」

まず突っ込まずにはいらなかった。

半魔族が魔界に侵入したのはいい。半分は人間、半分は魔族。どちらに味方してもおかしくはない。

〈魂縛石〉を使って魔界を乱したのもいい。自分より格が上の相手を何人も相手にしなければならぬ状況でこれ以上の手はないだろう。

だが、魔界の頂点ともあろう魔王がそう易々と侵入者に一服盛られたというのはいかがなものだろうか。

ソレイユもそれは重々承知しているのか一度口籠り、

「まあ、なんつーか……どこか変わった人だったからな、先代は」

苦笑しながら頬を掻いた。

「とにかくそういうわけだ。あまり魔界じゃ使い道はないけど、こっちじゃ色々仕えて便利なんだよ」

戦力確保という目的ならば〈神魂〉を封印されている人間では話にならない。

しかし、〈神魂〉を解放されている騎士や使徒は魔族の敵だ。かといってそうではない大多数の人間は〈神魂〉を封印されている。それならば確かに、〈魂縛石〉の効能を打ち消す〈魂白石〉は有効だろう。

一先ず納得したところで、ソレイユが足を止める。

月明かりだけが照らす街道。そのわき道にある巨大な石に腰掛ける二つの人影に、ソレイユが手を振る。

「待たせたな！」

静まり返った街道に響く声に、人影はゆっくりと腰を上げた。

遠目からは夜の暗さでよく見えなかったが、お互いに近づくことでその姿は鮮明になる。

「ご無事で何よりです。お怪我はありませんか？」

月明かりによって露になった女性の顔に、イザヤは首を傾げる。

女性はイザヤが訝しげな表情を浮かべているのを見ると、一瞬目を瞬かせたが、すぐに納得したように微笑んだ。

そして上品に口元に手を当てて笑う。

「あら、随分と可愛らしい格好ですね。兄に背負われる妹みたいですよ、イザヤ」

「……陰険梟か。小石に躓いて頭打て」

イザヤの視線が氷点下にまで下がる。

理解した。この的確に人の触れて欲しくない所に触れてくる口の腐った物言いはリオしかない。

肩下で緩く結った長い黒髪と満月色の金眼。首に巻かれた細長いリボンと同じ黒の服装。同姓から見ても見惚れるほど整った顔立ち。その外見に戸惑いこそしたものの、一度リオだとわかってしまえばその美しい容姿などまるで意味がなくなった。むしろ憎たらしいことこの上ない。

「あなたの方がよっぽど陰険ですよ」

「そっちがおまえの素顔か」

「ええ」と、リオは嘆息する。「あまり好きではないんですけどね」

どうやら本当に気に入ってはいないようだ。

リオはイザヤの視線に気付くと、小さく首を傾げさせて微笑んでみせる。

「見惚れました？」

「塞ぐぞ、そのしょうもない口」

「冗談の通じない人ですね」

あからさまな敵意を剥き出しにしているイザヤを一先ず置いてお

き、リオは背後に視線を向ける。

「ほら、いつまで隠れているのですか？」

だが、服を掴んだまま一向に動こうとしないノエルに、リオは横目で固唾を吞んで固まるマギを見た。

「マギもです。こういう時は男から手を差し伸べるのが紳士のすることだと思いますが？」

「え、あ……ああ」

視線を足元に落としながら、マギはぎこちない足取りでノエルに近づいていく。

いつの間にかリオは傍から離れ、ノエルはマギと真正面から向き合う形になる。

淡い月光が降り注ぐだけの海の見える街道。お互いが手を伸ばせば届く程度の距離まで近づき、ようやく顔を確認することができた。随分と久しぶりに見る気がするノエルの顔に、マギは喉の渴きを潤すように唾を飲み込む。

そして、ノエルにもう少し近づこうと足を進め、不意に視界の端に入った自分の手に足を止めた。

汗の滲んだ手を一度開き、また強く握る。

マギは眉を顰めたままノエルを正面から見つめると、重たい口を開いた。

「ノエル、俺——人を殺した」

ゆつくりと、ノエルが顔を上げる。その目が、マギの服を汚す浅黒い染みに縫い付けられる。

「マギ、ちゃん？」

「奴隷荘の、騎士を一人殺したんだ。俺の手で」

歪んだマギの顔に、ノエルはさつと青ざめる。小さく震えだす肩。翡翠色の両の目からは、ぽろぽろと大粒の涙が溢れ出る。

「……わたし、のため……マギちゃん、私のために？」

「違う。俺のためだよ。俺がおまえと離れたくないからやった」

大きく首を振り、マギは続ける。

「俺は、自分で決めた。おまえと一緒にいるためなんだってやってやるって決めた。だから……俺は後悔してない」

でも、とノエルを見つめるマギの顔は不安で悲しく彩られている。崩れそうな涙腺を必死で繋ぎ止めているように、歯はしっかりと食い縛られていた。

「こんな……人を殺した俺と……ノエルは一緒にいちゃいけないんじゃないかって……」

「マギちゃ……」

「だってノエルも嫌だろ？ おまえ言ってたじゃん。人殺しは怖いって。嫌だって……言ってただろ？」

「そう、だけど……でも、マギちゃん」

「でも、ああしなきゃ、戦わなきゃノエルを守れっこないって思っ
て、それで、俺」

「マギちゃん」

「先のことなんて考えもしないで、おまえことも考えないで……結局、俺は——」

「マギちゃん！」

どん、と強い衝撃と同時にノエルがマギに抱きつく。両腕を首に回し、しっかりとマギを抱きしめた。

「の、ノエル!？」

突然のことにうろたえるマギに、ノエルは涙を流しながら叫ぶ。

「ばっ! マギちゃんのばっ! どうしてそうやっていつもいつも私の話を聞いてくれないの!？」

「え……?」

「嫌だよ——誰かを傷つける人は怖いよ。でも、でも……っ」

込み上げる嗚咽を堪えながら、ノエルはマギを至近距離から見つめた。赤くなった目から、また一筋の雫が落ちる。重力に従ったそれはノエルの頬に跡を残し、地面にぶつかり弾けた。

「もっと怖いのは……マギちゃんがいなくなることだよ。もっと嫌なのは、マギちゃんにそんなことさせちゃった私、なんだから……」

「ノエル……」

「どこにも、行かないでよ……ずっと傍に……いて……そんな、いなくなっちゃうみたいなこと……言わないでよお……」

何度も何度も咳き込みながら言い切り、ノエルはついに堰を切ったように泣き出した。

その場に崩れ落ちて大声で泣くノエルを戸惑いながらも優しく抱きしめるマギの瞳にもまた、透明な雫が浮かんでいた。

ノエルが落ち着くまで二人にして欲しいというマギの頼みに、イザヤ達は海岸沿いへと移動した。それでももし何かあればすぐに駆けつけることの出来るように、二人の姿がしっかりと視界に入る距離を保っている。

リオは束の間マギとノエルを見つめていたが、一つ息を吐くと膝を折って座り込むイザヤの前にしゃがみ込んだ。

「痛むのですか？」

イザヤの手は先ほどからずっと太腿の傷口に当てられている。

「これぐらい、なんともない」

罰が悪そうに顔を逸らし、イザヤは太腿から手を離す。リオがやれやれと肩を竦めた。

「別に隠す必要もないでしょう。ほら、見せて下さい。そんな不衛生な布をいつまでも巻いていたら腐り落ちますよ」

「不衛生言うな。腐るとか止めてくれ、傷つく」

まるで子供のようにじたんだを踏み出すソレイユ。

「どこでもかまわず横になる方を不衛生と言わずになんと言いますか」

嫌味なほど爽やかに微笑むリオに、ソレイユはぐうの音も出ずに黙り込む。

「さあ、手をどけて下さい」

「いい、放っておけば治る」

リオの手から逃れるようにイザヤは身を引く。

「私に触るな」

「ええ、私も人間になど触りたくもありませんが、あなたが怪我をしたのは私にも責があります。そのまま見てみぬ振りというのは私の気持ちが悪いのです」

「……」

「傷口を清潔にして包帯を巻くだけです。我慢なさい、子どもじゃないんですから」

「こっ……なんでそうなる！」

よほど聞き捨てならなかったのか、イザヤが怒鳴る。リオは手提げ袋の中から消毒液と清潔な布と包帯を取り出しながら言う。

「自分の体より見得を優先しているうちは子どもです。大人しくしていてくださいね。暴れたら手足縛ってでも大人しくさせます」

イザヤが急に大人しくなる。

こいつなら本気でやりかねないという予感があったのだ。

「結構です」

満足そうに頷き、リオは手際良くイザヤの傷口に適切な処置を施していく。ものの数分で終わった手当てに、イザヤはただ呆然とその様子を眺めているだけだった。

「はい、いいですよ」

最後に包帯の端をしつかりと留め、リオは立ち上がった。

イザヤは暫く綺麗に包帯の巻かれた足に目を落としていたが、躊躇いがちに顔を上げる。眉を潜め、視線を右往左往させながら何度か口を開閉させるイザヤに、ソレイユが腰に手てて顔を近づける。

「どうした？ 便所我慢してんのか？」

「……死ね」

容赦ない左ストレート。綺麗なアーチを描いてソレイユが地面に倒れこむ。

荒く呼吸を繰り返しながら肩を上下させるイザヤを見下ろし、リオは肩を竦めた。

「礼は不要ですよ。言ったでしょう、これは私が自分を納得させるためのものだ」と

「べ、別に私は……」

「それに、私も人間に礼など言われたくありませんし」

さらに、と言われた言葉にイザヤは一瞬目を丸くさせ、

「ああ、そうか。ならさっさと離れろ。こっちも魔族なんかに近寄られたくない」

鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「ええ、言われずとも」

まるで風のように、リオは颯爽とイザヤから離れていく。そのまま波打ち際にまで移動したリオは、靡く黒髪を押さえて海を眺めている。

その様子を横目で見ていたイザヤだったが、不意に傍に感じた気

配に勢いよく振り向く。

「悪いな。リオ、人間嫌いなんだ」

そこにいたのはいつの間にか起き上がっていたソレイユで、イザヤの横に胡坐をかいて座っている。

本気で殴ったはずなのにどういう体の作りをしているんだ、とイザヤが訝しげに見ていると、ソレイユはその視線に気付いたのか笑って左頬を指差した。

「いや、結構痛かったぜ。あんた意外と力強いのかな」

「……おまえは人間が嫌いじゃないのか？」

「どうした急に？」

イザヤが話の流れを無視するのは今に始まったことではないが、突然のことにソレイユは暫し首を捻らせる。イザヤは両足を抱えるようにして座ると、ソレイユを見ずに小さな声で言う。

「普通、魔族は人間を嫌うものだろう？ あの梟みたいに」

「ああ、そういうことか」

納得したように、ソレイユは正面に視線を移す。目の前には、黒い海が広がっていた。

「俺は嫌いじゃない。種族とか、そういうの気にしないことにしてるんだ」

「……」

「大事なのは種族じゃないだろ。個人だ。魔族だって嫌な奴はいるし、人間だって良い奴はいる。それに例え善人でも悪人でも、信じる価値はあると思ってる」

「わからない。おまえの言っていること」

膝に口元を埋め、イザヤはソレイユから目を逸らす。

「信じるに値しないものがほとんどだ、こんな世界」

「あんたとはずっと平行線だな」

声を上げてソレイユが笑う。

「いつかあんたにもくるさ。転機ってやつがな」

そんなもの来るものか。

そうイザヤが言い返そうとした時、強烈な光が目眩ませる。

あまりの眩しさにイザヤが目細めしていると、隣にいたソレイユが嬉々とした声をあげた。

「見ろよ、イザヤ。夜明けだ」

朝焼けの海の方こうにある水平線から覗く太陽。闇を切り裂くような光は、長い夜の終わりを告げたのだった。

※

「さて、問題はこれからお前たちがどうするか、だな」

街道からだいぶ外れた草原の岩陰で、ソレイユはマギとノエルに向かって声をかけた。

しっかりと話し合い、もはや彼らの中から迷いは消え去ったのだ

ろう。マギとノエルの目は、覚悟を決めたものだった。

「ソレイユ。頼みがある」

ノエルの手をしっかりと握り、マギはソレイユを見上げた。

「おう、言ってみろ」

「ソレイユ言ってたよな。魔界で起きてる争いを止めるために人間界から戦力を集めてるって」

「ああ、その通りだ」

「俺たちを使ってくれ」

驚いたのはイザヤだった。腰を浮かせ、マギの顔を凝視する。

「おまえ、自分の言っていることの意味がわかってるのか!？」

「わかってるさ。でも、もうここに俺とノエルの居場所はないんだ」

「そ——それは……」

言い返せなかった。

事実、その通りなのだ。マギが行った行為は立派な教団への反逆。決められた運命に逆らい、騎士達の命を奪った。

教団に逆らった者には容赦ない粛清が待っている。子供二人で教団の追っ手から逃れ続けることなど不可能に近い。

「イザヤ姉さんの言いたいこともわかるよ。魔界に行って戦う。楽じゃない。だけど、このままずっと怯えながら逃げ続ける日々は嫌なんだ」

マギの言葉が、重くイザヤに押し掛かる。逃げ続ける日々。その辛さはイザヤもよくわかっている。

安心して寝る事すら出来ない。誰も信用できない。いつ死ぬかもわからない恐怖が、常に付き纏っているのだ。

「だったら、俺たちは戦うことになってもこっちの道を選ぶ」

それに、とマギは続ける。

「悪いことばかりじゃないぜ。俺なんかにつき合ってくれたソレイユにも恩返しができる」

「ソレイユさんが魔王になってくれれば、人間界に侵略してくる魔族も減ると思います。私、パパやママたちには、幸せに暮らして欲しいから」

「ま、そういうわけだ。ソレイユやリオ姉さん見て、魔族も教団に言われたような極悪非道な奴ばっかじゃないってわかったしな」

この鼻を見てそう思えるか。

全力でツツコミたいところをイザヤはなんとか堪える。

「だからさ、もう決めたんだ」

一度ノエルと視線を合わせたマギは、再びソレイユを見る。

「俺たちじゃ頼りないかもしれない。でも頼む、ソレイユ」

「頼りなくて結構。おまえたちなら大歓迎だ」

歯を見せて笑い、ソレイユはマギとノエルの頭を撫でる。

そして、納得のいかなそうな表情を浮かべているイザヤを見て、苦笑しながら声をかけた。

「イザヤも安心しろよ。何もすぐにこいつらを戦わそうってわけじ

やない。ちゃんと自分の身くらい自分で守れるようになってからだ。折角の戦力をすぐに駄目にしちゃったら勿体ないだろ？」

「……私には関係のないことだ。勝手にすればいい」

「素直じゃねえなあ、姉さん」

呆れ顔で笑うマギ。イザヤが聞こえない振りを決め込んでいると、突然手に暖かいものが触れた。

ハッとして顔を上げると、そっとイザヤの手に触れるノエルの姿が目映る。

「なんだ？」

流石に無造作に手を振り払うのには気が引け、イザヤはノエルを見返す。

ノエルは口を一文字に結んで視線を右往左往させていたが、大きく息を吸い込んでイザヤを真っ直ぐに見つめた。

「ありがとう」

「え……？」

「ありがとう……助けてくれて。イザヤさんがいなかったら、私こうしてマギちゃんと一緒にいられなかった」

「……助けたくて助けたわけじゃない。礼なんて言わなくていい」

澄んだ翡翠が眩しくて、イザヤは思わず顔を逸らした。手の温もりは、まだ消えない。

「はい……ありがとう」

「だから礼はいらないと――」

顔をノエルに向けたイザヤの表情が固まる。

「本当に……ありがとうございます……」

大粒の涙を流しながらイザヤの手を握るノエルにかける言葉など、持ち合わせていなかった。

ただ、何度も何度も繰り返される謝礼の言葉に嘘はなく、それはイザヤの心に戸惑いを生んだ。

「俺からも改めて礼を言うよ、イザヤ姉さん。ありがとう」

「……礼ならその魔族二人に言え。私に言うのは筋違いだ」

自分はただリオとの交換条件に乗っただけ。良心で助けるつもりなどなかった。だから礼を言われる理由もない。

そう自分に言い聞かせる。そうしなければ、胸の奥から込み上げてくる何かを抑えることが出来なかった。この名前も知らない感情を、受け入れることが怖かった。

マギとノエルはイザヤに深く頭を下げると、またソレイユの元へ戻っていく。

遠ざかっていく足音を聞きながら、イザヤは右手に目を落とす。

「馬鹿馬鹿しい……」

その手にまだ小さな温もりが残っているような気がして、イザヤは強く拳を握り締めて地面に押し付けたのだった。

※

「確かに預かったぞ」

その日の夜。イザヤたちの前に現れた巨漢の魔族は、ノエルとマギを小脇に抱えながら白い歯を見せた。ノエルとマギは男に抱えられたまま動けないでいる。まるで狩人と獲物のようだ。

ソレイユは豪快に笑う男の肩を軽く叩く。

「頼んだぜ、おっさん。まだ〈神魂〉解放して間もないんだ。そいつらの面倒、きちんと見てくれよ」

「任せときな、坊主。この俺が一人前の男に育ててやろうじゃあねえか」

「ノエルは女です。いくら常識が欠けていてもそこはきちんと弁えて下さい」

仲間内でも容赦なく毒を吐くりオ。

「がはははは！ 相変わらずだなあ、リオ！ 小僧のお目付け役、しっかりな！」

「ええ、わかっていますよ。心配無用です」

「おう、なら問題ねえ。ところで……」

男の目がイザヤに向く。

「こっちのお嬢ちゃんは、違うのか？」

「そいつはまだOK貰ってないんだ」

「おうおう、おまえも相変わらずめんどくせえやり方してんなあ」

「うるせ。俺の勝手だろ」

口調こそ喧嘩腰だが、表情は明るい。まるで父と子のような二人

に、イザヤは視線を伏せた。

「おう、譲ちゃん」

不意に呼ばれ、イザヤが顔を上げる。いつの間にか男の横には人一人入れるほどの黒い扉が現れていた。

「こっちで、待ってるぜ」

「私は行かない。さっさとこの馬鹿を連れて帰れ」
「そいつぁ無理だ」

大声で笑いながら首を振り、男は扉を蹴飛ばす。扉の向こうに見えたのは、黒い世界。紫のオーロラが空から降りそそぐ夜の平原。

「じゃあな、小僧、リオ。それとあんたも」

そう言った男の背から、純白の翼が生える。抱えられたまま呆然と白い翼を見つめていたマギとノエルを、男は激しく揺さぶった。

「ほら、おめえたちも挨拶はいいのか？」

「ありがとう。俺、強くなるから」

「あ……え、と……私も、頑張ります」

「いい根性だ。それじゃ、行くとするかね」

男が扉をくぐる。

夜の平原に踏み込んだ男は、最後に一度振り返って手を振ると両翼を羽ばたかせて舞い上がった。同時に、扉がゆっくりと閉じ、空気に溶けるように消えた。

「――相変わらず騒がしいおっさんだな」

「全くです。少しは落ち着きというものを覚えて欲しいところなんですけれど」

この時、イザヤの耳にはソレイユとリオの会話は一切入ってくることはなかった。

最後に見たマギとノエル顔が頭の中を駆け巡る。

戦場に赴こうとする彼らの瞳に恐怖はなく、ただただ希望に溢れたものだった。

「……どうして……あんな顔が……」

「そりゃ、一人じゃないからな」

独り言を返され、イザヤは眉を顰める。

ソレイユはそんなイザヤを柔らかな真紅で見下ろすと、今はもうない扉の向こうで夜の空を駆けているであろう少年と少女を思い描き、顔を綻ばせたのだった。

1-10 埋もれる、死の都

人間界は大きく分類して二つつの大陸がある。

一つは東方にあるアインノン大陸。

一つは西方にあるハマ大陸。

その一方、アインノン大陸の三分の一を領土とする東の大国、聖クレストラウム王国。その首都デバイラに聳える王城の中庭で、リスとバラクは目を閉じて立っていた。

いつもの祭服ではない、麻で出来た服を着た彼らの手には、各々の能力によって生み出された一振りの剣が握られている。雷を凝縮させた蒼白の剣と、土を固めた剣だ。

それを正眼の構え、何をするでもなくただ立ち尽くす。

リスとバラク以外は人の影すら見えない広い中庭は、彼らが立つ傍にある噴水を中心に波紋のように整備された花壇が広がっている。

風が吹きぬけるたびに舞う花卉。息を吸い込めば、胸いっぱい広がる香りは強すぎることなく、心を穏やかにさせる。そろそろ花を愛でる季節も終わりに近づくというのに、まるでその気配を見せずに咲き誇っていた。

そよぐ風が葉を揺らす音しかしなかった静寂を苦しげな声が乱す。声の主であるバラクは、歯を食いしばりながら剣を強く握り締める。最初はしかめっ面程度だった表情の歪みも、数分経つ頃には般若のようなになっていた。顔を真っ赤に充血させ、額からは脂汗が流れ落ち、彼の足元にぼたぼたと落ちていく。

そして、

「ぶはあ！」

大きく息を吐き出し、バラクは石畳に背中から倒れこんだ。バラ

クの手に握られていた剣が途端に形を崩し、ただの砂くれとなる。
何度も咳き込みながら苦しげに肩を上下させるバラクに、リリスは目を開いて剣を消した。

「バラク……限界まで耐える必要はないんですよ」

リリスは呆れ顔だ。バラクは汗で張り付いた髪を手でかき上げながらリリスをじと目で睨みあげた。

「ほっとけ。てめえよか先にバテるなんて納得いかなかったんだよ」
「ですから、これは精神統一です。リハビリです。競う必要がどこにあるというのですか」

「うるっせえな！ 涼しい顔しやがって！ おまえの器は化けもんかっつての」

自らの〈神魂〉のみで生み出した物体を維持することは容易なことではなく、相応の集中力が必要だ。そして、その持続時間が長ければ長いほど神魂は体内から流れ出ていく。当然、底を尽きれば今のバラクのように立っていることすらまもなくなくなる。

「……それは私に言われてもどうしようもありません」

〈神魂〉とは、いわば水のようなものである。神が治める万物の力を生命に与える、魂の雫。

その力は同じ種類の〈神魂〉を持ったものは皆等しいが、受け入れる人間によって差が生まれてしまうのだ。

〈神魂〉解放者の強さには、二つの要素がある。

許容量と、技術。

簡単に言えば、水を溜めるタンクと、その水を外へと吐き出す蛇口だ。

タンクが大きければ大きいほど、蛇口の調節の幅が広ければ広いほど、〈神魂〉解放者としての力は高いものとなる。

蛇口の役割となる技術は、訓練次第で高めることは出来る。しかし、〈神魂〉を溜めるタンクはそうもいかない。これは先天的なもので、生まれたときよりその許容量は決まっているのだ。

だからこそ、許容量の少ない者は技術を高めるしかない。

いくらタンクが大きろうと、それを外へと放出する蛇口の調節が上手く出来なければその膨大な〈神魂〉は意味を成さず、許容量の少ない者に劣ることも在り得るのである。

「は——どうせ俺はおまえと比べりゃ凡人だよ」

「私はそういうつもりで言ったわけじゃありません」

肘を片手で押さえて顔を逸らすリリース。バラクが面白そうに口元を上げる。

「ほお。それじゃあどういいうつもりで言ったん——」

「いい加減にしないか、バラク。それ以上リリース様にちょっかい出すようなら自分も黙ってないよ」

突然聞こえた第三者の声に、バラクはつまらなそうに舌打ちを鳴らす。やれやれと肩を竦め、仰向けに倒れていた体を横にして来訪者に背を向けるように寝転がった。

「ちょっとからかったただけだったの」

「それをちょっかいを出すをいうんだ。リリース様がその手の冗談を真に受ける方だというのは君だってそろそろ理解しているだろう。今後は慎んでくれ」

「セト、いいですよ。私も私なんですから」

すっかり説教モードに入ったセトを宥めるようにリリスが笑う。
セトは眉を吊り上げて首を振った。

「何を仰るのですか。リリス様に非はありません」

「いいえ、面倒な性格をしていると自覚しています。すみません、バラク。あなたも私のような者の下では退屈でしょう」

「……だ、だからそういうところがだな……」

顔を引き攣らせながらバラクがぼやく。

リリスはもう一度困ったように笑って、すみません、と繰り返す。
バラクは大袈裟な溜息を吐き出すと、リリスとセトに背中を向けたまま口を開く。

「で、これからどうすんだ？」

「決まっています。イザヤを追う、それ以外ありません」

「勝てんのかよ？　〈神魂〉を目覚めさせたあいつに一撃でやられた使徒さんよ」

「君はそうでもない彼女にやられたじゃないか」

セトが額に手を当てながら呆れ顔で言った。

聞き捨てならないとばかりに起き上がってセトに詰め寄るバラクと、ただ溜息を吐くセトを穏やかな笑みで見つめ、リリスは瞳を閉じた。

「確かに、〈闇の神魂〉は恐ろしい力でした。私の力など、到底及ばぬほどに」

ですが、とりリスは薄く瞳を開く。澄んだ翡翠に、諦めの色はなかった。

「この世界に完全な力など存在しません。必ずどこかに欠点はあるはずです」

「かもしれないけどよ、それを探らせてくれるほど抜けた相手でもねえぜ。下手すれば次こそ全員殺られる」

「自分もバラクに同意します。何かしらの対策を立てていくべきです」

バラクとセトの言葉に、リリスはもちろんです、と頷く。

「一つの仮説があります。失敗すれば命の保障はありません。しかし、もし当たっていれば……」

白い手が、肩に当てられる。じわり、と疼く傷にリリスの胸中を得も言えぬ感情が満たしていく。

「私なら、彼女の力を凌ぎ切ることが出来るかもしれません」

強く言い切ったりリスに、バラクとセトの表情に笑みが浮かぶ。

「ほお、そいつは楽しみだ」

「早速動きましょう。おそらくまだ、クレストラウム領内にいるはずですよ」

セトは中庭から城内に入り、バラクもその後が続いて姿を消した。一人残されたリリスは、肩に宛がっていた手を離すと目の前で舞い上がった花卉を追うように空を振り仰ぐ。

「……ああ、今日も曇りなんですね」

桜色の花卉が、青の中で踊っていた。

※

イザヤが目を覚ましたのは、正午を過ぎた頃だった。

ひどくぼんやりと霞む頭を押さえながら起き上がると、隣のベットで大の字の手足を伸ばして眠っているソレイユが目に入った。

その幸せそうな寝顔に、イザヤは蹴り落としてやろうかと考えるが、すぐに止める。疲れるだけだ、と自分に言い聞かせ、寝癖のついた長い髪をかきあげた。

ベットから降り、窓にかかったぶ厚い幕を片手で押しのけながら外を見下ろす。朝早くに起き出し、日が沈むと同時に仕事を終える習慣を持つ人間にしては珍しく、街には人の姿が少なかった。

イザヤは窓から離れると、もう一度ベットの上に沈んだ。

日の甲を額にあて、くすんだ天井を見上げて、呟く。

「……そうか。コランに、来たんだった」

湾岸都市カルディアからデバイラへと向かう街道を途中で東に大きく逸れた場所にある都市コラン。

人口五千と、一都市の人口が平均三千であるクレストラウム領の中では大都市として数えられる街だった。

しかし、四方を森で囲われていることから交通の便は悪く、カルディアほどの活気は感じられず、表向きは森の都と呼ばれているが影では死の都、と卑下されているほどだ。

コランの周囲には深い堀があり、中へと入るには石で出来た巨大な橋を渡らなければならない。さらに堀の内側には街を囲うように

高い外壁で覆われている。

この防衛策は、森に棲む魔物を警戒してのことである。

魔物とは高度な知識と技術を持った魔族の僕のような存在であり、人間に近い姿を持っている魔族と違い、そのほとんどが人とはかけ離れた異形の形をしている。

本来魔物も魔族と同じように魔界に棲息する生物なのだが、昔から続く人間界侵攻の際に連れてこられた魔物の生き残りが人間界に居付き、その数を増やしてしまったのだ。

アルヴィア教団が定期的に騎士団を派遣し駆除を行っている為、爆発的に増えるということはない。だが、完全に撲滅することも出来ずにいるのが現状である。

人間界全体の秩序を守るために教団の手足となって動かねばならない彼らは、その総力を魔物だけに当てるわけにはいかない。結果、人間界全体に蔓延る魔物対し、数が絶対的に足りなくなっているのだ。

その現状を打開するため、教団は一般市民にも協力を募っている。討伐した魔物に見合った金銭を与える、という単純なものだ。

無論、一般市民は神魂を封印されている。当然騎士達のような強大な力はないが、魔物の力は魔族ほどではなく、腕の立つものならば倒すことは不可能ではない。それでも、棍棒一本で熊を倒すぐらいの力量がなければ無理な話ではあるのだが。

貴族階級の中でこういった魔物討伐を行うものはほぼ皆無だ。そのようなことをせずとも、暮らしては十分に豊かなものだ。

与えられた仕事をこなしている限り、よほどの失態でも犯さなければ何事もなく一生を暮らしていけるだけの生活を保障されているのが、貴族階級なのだから。

だから、魔物討伐で報奨金を稼ぐのは、主に平民階級と奴隷階級も者達である。

平民階級の者は更に豊かな生活を求めて、奴隷階級の者は主人の命令で、魔物を狩に行く。奴隷の人権が認められているこの世界で

は禁じられている行為だが、違反するものも少なくはない。

しかし、それでも魔物の数が減ることはなく、年々少しずつではあるが増加の一途を辿っている。

四方を森に囲まれたコランでは特に魔物の被害が多く、毎年犠牲者が絶えることはなかった。

故に、街に活気が感じられないのは当然のことだった。常に魔物の影に怯え、ろくに街の外へ出ることもすらまならない生活を送らされている彼らに、活気という二文字は天上の言葉にさえ思えるだろう。

「相変わらず、クレストラウムの視野の狭さには呆れ返りますね」

宿屋の窓から街の様子を見下ろしたりリオは、たたんだ羽を僅かに上下させて呟いた。真昼間だというのに、街中には子どもはしゃぐ声すらしない。

ベットに腰掛けながら窓から入り込んできた猫をじゃれていたソレイユが首を傾げる。

「どういう意味だ？」

「言葉通りの意味ですよ。クレストラウムは他国との国交に関しては積極的な政策を取り入れています、国内に関してはまるでずぼらです。現状利用価値のない東地域はまるで手付かず。目先の利益だけで、国内を見ていない」

そこまで言い、リオは思い出したように付け加えた。

「そういえば、現クレストラウム国王はアルヴィア教団の教皇でもありますか。これは視野が狭いのではなく、広すぎた故の結果かもしれませんね。どのみち、王としては失格ですが」

「おまえ昔からクレストラウムには厳しいよな。なんか恨みでもあるのか？」

「……ええ、それはもう」

いつもと変わらぬ調子でリオは答えた。その平然さが逆に不気味に思え、ソレイユと反対側のベットに腰を下ろしていたイザヤは目を細めた。

ソレイユはリオから視線を外すと、イザヤに目を向けた。

「イザヤ、ちょっといいか？」

「なんだ？」

旅を共にし始めてそろそろ一ヶ月は経とうとしている。仲間意識などは微塵もないが、こうして一緒にいることが普通に感じられるようになっていたイザヤは、特に気にすることなく返した。

ソレイユは猫の脇に手を入れて体を持ち上げ、胡坐をかけた足の上に座らせる。

「〈エデン〉についての情報、あんたが知っている範囲でいいから教えてくれ」

カルディアを出てから一週間。イザヤがしたことと言えば、ただ当てもなく森の中を歩いただけだ。時折大樹に手を当てては、すぐにまた歩き出す。その繰り返し。

〈エデン〉に関して全く知識のないソレイユは口を挟むわけにもいかず黙ってイザヤの後をついていくだけだったのだが、まるで成果の見られない行動にただ従っていくのは少しばかり退屈なものがあつた。

だからせめて、行動の意味だけでも教えてもらおうとしたのだ。

「初めてあんたに会ったときも森の中にいたよな。〈エデン〉は森の中にあるものなのか？」

「あれはただ使徒から逃げていただけだ」

「あ……そう」

不機嫌そうに肩を怒らせるイザヤに、ソレイユは地雷を踏んだかな、と苦笑する。

「〈エデン〉については、確かな事は何一つわからない。場所も、形も……本当に、実在するのかさえ」

しかし、それ以上怒りを膨らませることなく、イザヤは窓から空を見上げた。青い空に、細長い雲が棚引いている。

「まあ、幻の園って言われているぐらいだからそりゃ当然なのかもしれないけど、じゃあなんで森の中を探してるんだ？」

「私が探しているのはエルフの里だ」

「エルフの――里？ エルフ界じゃなくてか？」

「おまえ、本当に何も知らないんだな」

片眉を上げ、イザヤが呆れたように言う。ソレイユは猫の喉を指先で撫でながら、笑った。

「魔界以外に目を向けるようになってからまだ日が浅くてさ。知識不足は勘弁してくれよ」

「……エルフの里はエルフ界と他の世界を繋ぐ中継地点にある場所だ」

溜息をつきながらも、イザヤは話し出す。

「エルフが他種族との関わりを頑なに絶っているのは知っているだろう」

他種族との接触を極端に嫌うエルフは、その大半がエルフ界から他の世界へと出ることなく、三種族の中で最も永い人生を終えるのだ。

「昔、エルフ狩、というものが人間界で流行した時期があった。希少価値が高く、見た目も美しいエルフは高く売れる。金に目が眩んだ連中が、エルフ界への侵入していったんだ」

「そりゃ迷惑な話だ」

「エルフは争いを嫌う温和な種族だ。しかし、仲間が攫われていくのを見てみぬ振りなどできなかったんだろう。彼らは、人間界と魔界とエルフ界を繋ぐ道の間に、砦を作った」

「砦？」

「容易に余所者を侵入させないための処置だ。そこに兵を配置し、入ってくる人間や魔族に警告した。砦までなら許す。しかし、そこを越えようとすれば排除する、と」

「無理矢理押し通ることも出来たんじゃないのか？」

「エルフは三種族の中で最も神魂の力を強く持つ種族だ。争いを好まないというわけで戦えないわけじゃない。教団はエルフ界への侵入を禁止している。つまり騎士や使徒は手を出せない。神魂を封印された一般人に勝てるはずもないし、魔族でさえ容易に突破するとは出来ないだろう」

ソレイユが目を瞬かせる。

「そいつはすごいな」

「魔族は元々エルフ界には消極的だった。結果、だんだんとエルフに手を出す者はいなくなり、砦は意味を為さなくなった」

「で、その名残がエルフの里ってわけか」

納得したように手を叩くソレイユ。

「つまり、あんたはエルフと接触したいってことか？」

イザヤが頷いた。

「エルフは別名『記憶する人』^{メモリス}と呼ばれている。その名の通り、世界の出来事を記憶し、伝える種族なのだ。エルフが人間や魔族を避けながらも度々現れるのは、世界を記憶する為だと聞いている」
「なるほどな。そのエルフなら、〈エデン〉に関して何か知っているかもしれないってわけだ」

「そうだ。人間界に訪れる観察者は巧妙に姿を隠している。彼らを見つけるよりも、直接エルフの里を探したほうが早い」

「納得した。そのエルフの里への入り口が、森の中にあるんだな？」

「正確には、古い大樹だ」

もっとも、とイザヤは腕を組んで視線をソレイユから逸らす。

「古い大樹なんて腐るほどある。エルフの里への入り口の一箇所ではないらしいが、それでも私が探し始めて二年。手応えはない」

「他の世界と行き来するには何か特別な条件があるんじゃないのか？ アルパドの門みたいにな」

「いや、特にそういった情報は聞かない。そもそも、その門だってどこでも開けただろう」

イザヤの目に疑心の色が浮かぶ。

「でも、あれだって誰でもほいほい開けるものじゃないんだぜ？」

俺は無理」

「それでもアルパドの門を使わずに魔族が人間界に来れるなど聞いたことがなかった」

人間界と魔界を繋ぐ唯一の道、アルパドの門。アルパドの門なしでは魔族は人間界へ入ることは出来ず、その門を使うにはいくつかの条件をクリアする必要がある。

これは人間界において周知の事実であり、だからこそ教会騎士団もその門がある場所に警備を固めていたのだ。

だが、あの日。マギとノエルを魔界へと送り出した時、彼らを迎えに来た魔族はその場で門を開いてみせた。アルパドの門とは比べくもなく小さな門だったが、それは確かに魔界へと通じていた。

「公にはされていませんからね。ですが、教団は知っていたと思いますよ」

リオが口を挟む。イザヤの表情が強張った。

「教団は知っていた……？」

「ええ、だっておかしいでしょう。騎士団はアルパドの門を常に監視しているというのに、魔族に易々と侵攻を許している。アルパドの門は開いている時間も時期も限られています。押し切られた、というだけでは話が通らないと思いませんか？」

確かに、とイザヤは黙る。リオは羽に嘴を通しながら、金色の目を細めた。

「教団がこの事実を隠蔽した理由の一つ。混乱を避けるため。いつでもどこからでも魔族が入り込めると人々が知ったらどうなるか。考えるまでもないことでしょう」

「だけどな、人間にこの事実を知らせなかったのはある意味正解だ」
ソレイユがリオの言葉を継ぐ。

「あの門は誰でも開けるってわけじゃない。高位の魔族じゃなきゃまず無理だ。通れる人数も繋ぐ場所も限られている。この程度なら、知らせて余計な混乱を招くよりも知らせないほうがいいってもんだからな」

淡々と語るソレイユに、イザヤは眉をひそめる。

「……おまえたち、そんなこと私に漏らしていいのか？ 教団にバレたらまずい情報だろう、それは」

教団はこの事実を知らないはずだ。イザヤがこのことを教団に漏らせば、魔族にとって不利とはまではいかずともプラスにはならない。

ソレイユは軽く目を瞬かせていたが、すぐに笑顔になる。

「いいさ。だってイザヤは言わないだろ？」

朗らかな笑顔に、束の間言葉を忘れて固まる。だが、すぐに氣を取り直すと、顔を俯かせて言った。

「……教団に協力する義理なんてないからな」

そう言っただけで黙り込んだイザヤに、ソレイユとリオは顔を見合わせて肩と羽を竦めた。

そのまま暫く沈黙が続いたが、それはリオが発した一言によって破られる。

「ああ、そうそう。監視者にしても、里の住人にしても、エルフと無闇に接触するのはいかなものかと思いますよ」

「どうということだ？」

イザヤが片眉を上げる。リオは三日月色の瞳を楽しげに細めると、純白の羽をふわりと広げた。

「過去、人間や魔族に捕まったエルフは自害しています。一人の例外なく」

※

コランを囲う森の木々は背高く、葉を多くつける。場所によっては真昼間でも太陽の光が全く届かない場所すらあり、地面は常に湿気でぬかるんでいた。

細い幹の木々がでこぼことした地面に立ち並ぶコランの更に東に広がる森は人の手がまるで加えられていない地帯で、街の者ですら足を踏み入れることを憚るほどに危険な場所である。

そのような場所に、一つの人影があった。

白い衣で全身を覆った、小柄な少女。端正だったであろう顔は血と泥で汚れ、表情に生氣はない。

少女は今にも倒れそうな足取りで、なんとか木々を支えに足を進めている。

そして、今まで苦しげな吐息しか零さなかった口から、初めて言葉が滑り落とした。

「また――私はっ……」

その声は懺悔のようでもあり、苦しげな喘ぎ声のようでもあった。白い手を小刻みに震えさせながら、少女は唇を強く噛む。傷ついた唇から零れだした血が口端を汚した。

「……どうして、放っておいてくれないの……」

薄い唇を歪め、少女は地面に膝をつく。泥と土が、彼女の纏う服を汚した。

地面から生える深緑の草を握り締めながら、少女は肩を震わせる。

「く——うああああああっ!!」

悲痛な叫びは森の闇に吸い込まれ、消えていく。

膝を折って両腕で地面を叩く。何度も、何度も。その度に泥は跳ね、草や苔が飛び散る。

大気が、地面が、木々が震える。少女の周囲にあった幼木が、見えない何かに切り裂かれたようにばらばらと崩れ落ちる。足元にあった拳大の石が宙に舞い上がり、弾けた。

大きな両の目から溢れる涙を手で拭い、少女は嗚咽を押し殺す。

泥塗れの手で目を触ったせいで、瞳は赤く染まり、顔はさらに汚れた。

瞳から零れ落ちた涙が泥と混ざり合いながら顎を伝い、地面に染み込む。ようやく嗚咽をとめた少女は覚束なく立ち上がると、またおもむろに歩き出した。

途中、何度もぬかるみに足を取られて転びながら、少女はコランのある方へと進む。

最後、一度だけ今来た道を振り返り、少女は激しい嫌悪の色でその顔を染め上げた。

しかし、それも一瞬。すぐに前を向くと、木を支えにしながら森

の中に姿を消した。

少女が通った道の背後に、森は存在しなかった。

1-11 惑う、幻想の歌姫

高い石造りの建物が立ち並ぶコランの表通りを、イザヤは一人で歩いていた。

コランの人々にとって、ランプに使う油は高価なものらしく、民家から零れる明かりは蠟燭の細々とした光だけだった。

暗い路地にぼんやりと浮かぶ橙色。家の中からは時折和やかな談笑が聞こえてくる。イザヤの足は、自然と速まった。

灰色の石畳を歩きながら、イザヤは絶えず視線を不自然にならない程度に左右に巡らせる。

四方を森に囲まれ、教団の動きが活発でないこの街は、イザヤにとって絶好の隠れ蓑だった。閉鎖的な街の為情報は期待できないが、逆を言えば情報が漏れる心配も少ない。存分にエルフの里を探せるというものだ。

時折擦れ違う人々に注意を払いながら、イザヤは足を進める。

今日の目的はコランの街の概要を知ること。数時間ほどかけて全体の三分の一程度は把握出来た。

最も重要なのが聖堂の位置。動きが少ないとはいえ、下手に近づくことは避けたかった。そして、酒場や宿屋など、最低限必要な店も見つけられた。

あとは、脱出経路の確保である。万が一教団に襲われた場合、いくつかの脱出ルートを考えておかなければならない。特にコランは外壁が高く、入り口も正門一箇所しかない。街の周囲には深い堀が巡らされているのだ。念入りに、安全かつ速やかに教団の騎士達に正門を塞がれる前に逃げる必要がある。

周囲の堀はよじ登れなくもないが、次に構えている深く幅のある堀に手間取っている間に追いつかれるのが関の山だろう。

いざとなれば、潜伏するのも一つの手かもしれない、とイザヤは思う。

これほど大規模な都市ならば、市民全員を調べるには相応の時間と人手がかかる。コランの小規模な聖堂では苦勞もひとしおだ。

その混乱に乗じれば、二人と一匹くらいこっそりと抜け出すことは出来なくもない。

そこまで考え、イザヤは不意に足を止めた。

心臓が一度大きく脈打ち、早鐘のように五月蠅く脳を叩く。額に手を当て、口元に引き攣った笑みを浮かべる。

(……二人と一匹?)

無意識のうちにあの魔族二人のことを考えてしまっていたことに、一抹の不安を覚えた。

頭を振る。――あの二人は仲間などではない。単に行動を一緒にしているだけであって、心を許せる相手でもなんでもないではないか。

よくない傾向だ、と自分を叱責する。

信用してはならない。頼ってはならない。

どんなに善良な心の持ち主でも、人は変わる。目の前に欲の塊をぶら下げられれば、いとも簡単に、堕ちてしまう。

だから、信じてはならない。誰かを信じた先、最後に待つのは、裏切りなのだ。

だんだんと治まっていく動悸に、イザヤは息をつく。

そのまま視線を空へと持ち上げ、

「――出て来い」

鋭い声を、喉から押し出した。

踵を返す。緩やかにカーブする大通りに並ぶ家々。密接するように立ち並んだ建物の影を凝視し、イザヤはもう一度繰り返す。

「聞こえなかったか。私は出て来い、と言った」

命令以外の何者でもない、強い口調。

窓から零れる蠟燭の明かりによって作られた闇の中でも一層濃い影。

そこから音もなく現れた男は、まるで見慣れた相手に挨拶を交わすように片手を上げ、

「いや、まいったね。意外と鋭いじゃないか、お譲ちゃん」

そんな言葉を、口にした。

「どうして気付いた？」

金色の髪に、金色の瞳。三十代前後といった風貌の男は、ゆったりとした上着とズボンという、どこにでもある平民の格好をしていた。

しかし、それは見た目だけの話。この男が普通の男でないことは、その雰囲気からも、そして何よりイザヤをつけて来たという事実から明らかだ。

人につけられることに心当たりは多すぎて、今更驚く気にもなれない。

顔が思ったよりも広まっていないうことと、大通りでは逆に目立つということでフードを取っていた自分を叱責しながら、イザヤは男を見据えた。

「ずさんだ」

ただ一言。

「それなら仕方ない。ミスじゃなく単に俺の実力不足なら、どうしようもないな」

「きさまの質問には答えた。次は私の番だ。目的を言え」

目的など大方の予想はつくが、外れている可能性もある。

なら、敢えて自分が〈蒼眼のイザヤ〉だと教えてやる必要はない。イザヤは男の言葉を待った。男は、そうだな、と顎に手を当てて考え込むと、ゆっくりと口元を上げた。

「俺は、情報屋だ」

暫し、間を空ける。男は、イザヤの顔色を伺いながら続けた。

「悪いが、君たちの話を立ち聞きさせてもらった。すまないな、こういう職業なんでね、つい興味深い話だと耳が反応しちゃうのさ」

一言一言、男はまるで探るように言葉を紡いでいく。

「それで、ちよいと君たちに興味を持った。そりゃそうだろう？ 人間と魔族が一緒にいるなんて、そうそうあることじゃない」

イザヤはただ、黙っていた。

「そんな折、たまたま君が一人で出歩くものだからな。後をつけた。それだけだ」

「それで、どうする？ 私たちを教団に告発するか？」

外套の中で、イザヤの右手が剣の鞘を握る。左手は、柄に添えて。

男はピリピリと肌を刺激する少女の空気を肌で感じながら、首を横に振った。

「確かに教団に君たちを告発すれば金はもらえるだろう。情報屋としてはいい商売だ。だが、俺は教団が嫌いだね。いくら金を積まれても、やつらの為になることなんかしてやるつもりはない」

瞬間、張り詰めていた空気が綻んでいく様子に、男はやれやれと肩を竦める。

「ついでに言えば、そこらのアホどもにこの情報をくれてやる気もない。俺は道楽家だね。君たちに興味を持った」

「……気楽なことだ」

男の言葉に嘘はない。本当に、ただの情報屋なのだ。害意がないことはわかった。なら、もうイザヤにとってはどうでもいいこと。不穏分子は潰すに限るが、無闇やたらと潰す理由もない。

柄から手を離し、イザヤは踵を返した。

肩越しに男を振り返り、睨む。

「好きにすれば良い。あの魔族どもは単についてきているだけだ。その気なら煮るなり焼くなり好きにしろ。だが、きさまが私の害になるようなことがあれば、すぐに殺す」

それだけ言い残して立ち去ろうとしたイザヤの足を止めたのは、男が放った一言が真実だったから。

「酒場へ行きな。損にはならないはずだ」
「酒場？」

「ああ、そのまま真っ直ぐ進んで行けば見える酒場だ。今の時間、運が良ければ探し人に会えるかもしれないぞ」

眉を潜めるイザヤに、男は背を向けて手を振った。

「俺にとって君は情報源でもあり、教団関係者でもない以上客でもある。だからこれはサービス。次からは有料だぞ、お嬢ちゃん」

そう言い残し、金髪の情報屋は現れたときと同じように闇の中へと消えていく。

イザヤは束の間その場に立ち尽くしていたが、やがてフードを深く被り歩き出した。

男が言った、酒場へと赴くために。

※

黒外套の少女と別れた後、軽い足取りで路地裏を歩いていた男の耳に、からから、と滑車が回る音が響く。

男は足を止め、音が近づくまで待った。

ものの数秒も経っていない。木製の車椅子に乗った長髪の男と、その車椅子を押す凜とした顔立ちの少女が暗がかりから男の前に現れた。

「どうだった？ ラケル」

車椅子に乗った男が問う。顔つきは若いが、落ち着きがある佇まいだった。

ラケルと呼ばれた情報屋は、軽く肩を竦めて見せた。

「あの年の割りになかなかの強かさだったがな、やっぱりまだ子どもだ。嘘でない情報をすぐに飲み込み、疑う素振りすらしない。まして情報屋なんてあやふやな職業を名乗られているのに、だ。――あれは、おかしい。」

「なるほどな。ってことは、あの少女が〈蒼眼のイザヤ〉で間違いないというわけか」

「ま、そうだろうな」

ラケルは凝りをほぐすように肩に手を当てながら回す。その様子に今まで沈黙を通していた少女が口を開く。

「なにか、気になることでもあったのですか？」

高く、だが、起伏のない声。感情がないわけではないが、その声は湖に張った氷のように冷たく、乱れのない声だった。

ラケルは上目遣いで見上げてくる少女を見つめ、困ったように笑う。

「バレたか。いや、ちょっとな」

「ちょっと、ではわかりません。曖昧な表現は嫌いです」

まるで氷柱でざくざくと刺すような少女の言葉に、ラケルは両手を上げて、わかったわかったと繰り返した。

二人の掛け合いに肩を震わせながら笑っている男を睨むように一瞥し、口を開く。

「まだ確信はないが、イザヤはひよつとすると俺達が思っていた意味とは別の切り札となるかもしれない」

「ほう、そいつは面白いじゃねえか」

「俺もまだ自信はない。つーわけで、本格的に調べることにするから、暫く仕事は回さないでくれ」

「了解した。そういうことなら任せておけ」

「悪いな。それと、もう一つ。おまえに頼みたいことがある」

手を上げて車椅子の男に答えながら、ラケルは少女に視線を移した。

「わかっています」

溜息をつくように、少女は言う。

「イザヤがこの街にすることを教団に悟られないように手を回せばいいんですよね？」

「まだこの街まで届いていないが、イザヤを捕縛しろっていう命が教団から下されている。今あのお譲ちゃんに捕まってもらうわけにはいかないんでね。できるか？」

「問題ありません。情報を操作して徐々にイザヤをこの国から北のリンツィアフィールへ移動しているように偽装します」

「おまえのことは信頼しているが、念入りに頼む。噂じゃリリースが積極的に動いているという話だ」

「使徒が？」

今まで淡々と返してきた少女が顔を上げ、表情を曇らせた。

「いくら蒼眼とはいえ、使徒が動く？ それに、リリースですか？

彼女はそういった賞金首の任務につくことはほとんどなかったはずですが」

「……リリースだからだ」

「え？」

ラケルの眩きが聞き取れずに少女は聞き返そうとしたが、それよりも早くラケルが言葉を被せてくる。

「とにかく、だ。くれぐれもへましないでくれよ？」

「しませんよ。ラケルこそ、無理して大怪我しても知りませんから」

少女の言葉に、ラケルは大きく頷いて小さな頭を撫でた。あからさまに顔を顰める少女とその反応を楽しむラケルをよそに、車椅子の男はいたく真剣な顔で眩く。

「ところで、ラケル」

「なんだ？」

急に変わった会話の空気に、ラケルばかりか少女までもが目を瞬かせる。

車椅子に乗った男は細い眉を上げると、真剣な声で言った。

「一目惚れした」

次の瞬間、左右から飛んできた拳に両のこめかみを強打され、男はそのまま意識を失った。

「死んどけ」

「馬鹿です」

※

悪寒を感じ、イザヤは一度小さく身震いをした。今まで歩いてきた道を振り返り、何もないのを確認してまた前に向き直る。

夜風のせいかな、と外套の襟元を掴み、目的地である酒場へと急ぐ。運が良ければ探し人に会えるかもしれない、と男は言った。

男はイザヤ達の会話を聞いていた。会話とはおそらく、今日の昼過ぎ、宿屋で交わしたことを言っていたのだろう。

そこから考え付くイザヤの探し人など、一つしかない。

エルフの里の入り口を知るもの、もしくは、エルフ自身。どちらにせよ、里を発見するための情報源だ。

男の言葉に嘘はなかった。行ってみる価値はある。

「――あれか」

同じような建物が並ぶ中、一際明るく光を漏らす建物。この時間帯、それほど光を放つ建物は貴族の屋敷でもそうはない。

入り口に掲げられた、葡萄の蔓が描かれた木の看板を見上げ、イザヤはフードを被って扉を押した。

カラン、と景気の良い音が響く。

扉一枚を挟み、そこは外とは打って変わって賑やかだった。まるで、ここだけが別世界のようにすら感じる。

多少の薄暗さなどは感じさせない、人々の活気。二階建ての建物は宿屋も兼ねているらしく、一階が酒場、二階が寝泊りできる部屋になっているようだった。

酒場にいるのはカウンターにいる店主を含め、二十人強。三、四人のグループで机を囲い、肴を摘みながら酒を煽っている。

店に入っても、客はほとんど興味すら示さず、自分達の話に夢中だった。ただ、店主だけが一度こちらに視線を投げかけ、軽く会釈の仕草を見せる。

イザヤが極力人の輪から外れた机に腰掛けると、店の中を忙しくなく動き回っていた女性が注文を尋ねてきた。葡萄酒を、とだけ告

げると、女性は笑顔で返事をして立ち去った。

数分も経たないうちに、鉄製の容器に入った葡萄酒がイザヤの前に置かれた。女性は注文があったらどうぞ、と言いつ残し、また活気の渦の中へと戻っていく。

容器を持ち上げ、一口飲み、顔を顰めた。

どうにも、酒は好きになれなかった。だが、酒場で情報を集める以上酒を飲まないわけにもいかない。不味い蒸留酒や麦酒よりもマシ、という理由で、イザヤは酒場では決まって葡萄酒を頼んでいた。半分ほど飲み干したところで、イザヤは注文が落ち着いたのか、店主と話し込んでいる女性を呼びつけた。

女性はすぐに駆け寄ってくると、酒場の女らしい勝気な笑顔に向けてくる。

「ご注文かい？」

「林檎パイを一つ。それと――」

言葉を切り、イザヤが女性を見上げる。

「この店に、変わった人物はいるか？ 例えば、物知りの老人とか」

予想外の質問だったのか、女性は目を瞬かせ、それから顎に手を当てて唸った。

「そうさねえ。物知りの爺さんは聞いたことないけど、そこらの酒場にはいない子はあるねえ」

「そこらの酒場にはいない？」

「ああ、当店自慢の歌姫。もう少し待ってなよ、すぐ来ると思うからさ」

カウンターの横に置かれた円形の木の台を指差し、女性を茶目つ

気たっぷりに笑った。

三十分ほど経った頃だろうか、頬杖をついてもそもそと好きでもない林檎パイを口にしていたイザヤの耳が、ざわめきを捉えた。

同時に暗くなる店内。顔を上げると客達の視線は全て同じ方向を向いている。その視線を追っていくと、先ほど女性が指差した木の台だけが蝋燭やランプの光で照らされており、その上に一人の少女が立っていた。

顔以外を隠すように、ベールのついた被り物を身に付け、全身は白と緑を織り交ぜた衣で覆っている。

薄暗い照明でわかりにくいのが、顔立ちはまだ幼く、イザヤよりも数歳年下に見えた。

少女はベールから零れ落ちる翠の髪を細い指で払うと、綺麗に微笑んだ。その様はまるで妖精を思わせるほど現実離れた美しさを持っている。

酒場とは思えないほどに静まり返ったステージの上で、少女は息を大きく吸い込む。

そして、

「――あ」

その歌声に、圧倒される。

閉鎖された空間になど相応しくない、伸びやかな声。あの細い喉から出ているとは思えないほど落ち着いた高音が、胸を掴んだ。

どこまでも広がる草原を思い起こさせる。

風が吹きぬける感覚。緑と青の境界で歌っている少女の姿が、鮮明に脳裏に映った。

緩やかな風が少女の髪を靡かせ、彼女は微笑みながら歌い続けるのだ。

たった一人で。

少女の歌は、人に聴かせる歌ではない。

人という小さな存在には、とても壮大すぎるほどの歌声。
もし、この声が誰かの為にあるというのなら、それは世界の為なのだろう。

空の、草の、大地の、水の、鳥の、人の、魔族の、エルフの、全ての為の歌。世界に捧げる歌声こそ、彼女を表現するに相応しい。
そんな突拍子もないことを考えながら、イザヤはここへ来た目的も忘れて少女の歌を聞き続けたのだった。

※

「気持ち悪い」

宿屋のベッドの上でうつ伏せに寝転がりながら、イザヤはさきほどから容赦なく襲ってくる眩暈と頭痛を堪えていた。

結局あの少女が十曲ほどを歌い終えるまでの一時間弱、イザヤはずっとあの酒場にいた。

不思議と不味いと思っていた酒も進み、気付けば立っているのも危ういまでに酔ってしまったほどだ。

そして、ここへ辿り着いたのがほんの数分前。ほろ酔い気分の心地良さも味わえないイザヤにとって、酒はただ苦痛を齎すものではない。

「……静かだな」

ソレイユとリオの姿はない。

どこかへ出かけているのだろうが、彼らが何かへまを仕出かすという不安はなかった。

彼らは実に人に溶け込むことになっていた。まるで共にあるのが

当然のように、自然と人の波の中に入り込むのだ。

普通の魔族ならこんなことはありえない。

人と魔族との間にある目に見えない確執。種族の違い。相手に対する無意識の敵意。それはいくら隠そうとしても出てきてしまうものだ。

「変な奴ら」

枕に顔を埋めながら、ぼそりと呟く。

体を転がし、仰向けに横になった。手の甲を額に当て、揺らぐ視界を閉じる。

そうして瞼の裏に映るのは、やはりあの少女で。鼓膜に残るのは、あの歌声。

ただ一度聞いただけで、しっかりとメロディーもフレーズも覚えている。

「……ひとは五本の指を手に入れるために、誰かをすくう手を失うことを選んだのでしょうか……」

「随分と詩的なことを言うんですね、あなたは」

飛び起きる。

目を見開いて顔を上げれば、珍しく魔族本来の姿をしたリオが口元を楽しげに歪ませてイザヤを見下ろしていた。

「お、おまえ、いつの間に……」

イザヤの質問に答えることなく、リオは長い黒髪を翻して窓枠へ歩いていく。

眩暈も頭痛も忘れてイザヤがリオを睨んでいると、ふいに目の前に瑞々しい赤い果実が突き出された。

「いない」

ぽん、と手でそれを払う。差し出した本人であるソレイユは、林檎を指の先に乗せながらイザヤのいるベッドに腰を下ろした。

「そう言うなって。酔い覚ましにはこれが一番だ」

「その間違った知識どこで仕入れた？ 林檎にそんな効能はない」

疑心たつぷりに言い返してやると、ソレイユは目を丸くさせ、笑った。

「あれ？ そうなのか。俺は効いたんだけどな」

そう、ソレイユはいつもこうだ。

嘘は言わない。代わりに嘘か本当かわからないことを言うてくる。ソレイユ本人が間違いだと思っていない以上イザヤには判別のしようがなく、いつも対処に困るのだ。

「ま、いいか。とにかく食えって」

ぽん、と膝の上に林檎を乗せられる。

仕方なく、イザヤは林檎に齧りついた。水分が欲しかったからだ。そんな言い訳を、心の中で付け加えて。

「それより、なんか面白い情報でもあったか？」

「変な男に会った」

簡潔に、イザヤは男との会話をソレイユに伝える。男が情報屋を名乗ったこと、そして、酒場へ行けば探し人へ会えるかもしれない

と言ったこと。

「なるほど。それで飲んだのか。で、会えたの？」

立ち聞きされていたことにはなんの反応も示さず、ソレイユは先を促す。

「いや、歌人の少女がいたくらいで、他には何も」

「その少女がエルフの可能性はないのか？」

確かに、顔以外を隠されていたのだから人かエルフか見分ける術はない。

肌の色が異なる魔族と違い、エルフと人の差は耳だけだ。人の丸い耳に対し、エルフは横に伸びた細長い耳を持つ。他にも体重が恐ろしいほど軽いか神魂の力が強いなどという特徴はあるが、外見的特徴と言えばこれくらいだ。

だが、

「それはない。前にも言ったが、エルフは他族との接触を嫌う。あんなに堂々と人前に姿を現すわけがない。それに、まだ幼かった。エルフの里を知る知識人、という可能性も低いな」

「へえ、ってことはそのおっさんに攫まされたのかもな」

「私が？」

語尾を強めて言い返すと、ソレイユは林檎を咀嚼しながら頷く。

「だって、あんたのその目、そんなに万能ってわけでもないだろう？」

「何が言いたい？」

「そうだな。例えばそのおっさん、情報屋って言ってたな。もし、おっさんの職業がそうじゃなかったら？」

ソレイユの言っている意味がわからず、イザヤは眉を顰める。

「あの男は情報屋だ。間違いはない」

あの時、目は痛まなかった。それはつまり、男が嘘を言っているわけではないということになる。

ソレイユは食いかけの林檎を宙に放ると、手のひらを天井に向けてそれを受け止めた。

「そうだ。男は多分情報屋なんだろうな」

「だから、何が言いたいんだ、おまえは」

はつきりしない物言いに、イザヤは苛立つ。組んだ足の上に頬杖をつきながら、視線だけをソレイユに鋭く投げつけた。

「簡単なことだ。男は情報屋だ。でも、情報屋だけじゃなくもう一つの顔も持っているとしたらどうだ？」

イザヤの目がゆっくりと見開かれる。ソレイユは構わずに続けた。

「答えが二つあったら、あんたの目はどう判断する？ 情報屋とも一つ。仮にもう一つが本当の顔だとしても、あんたにはそれがわからない。情報屋っていうのもそのおっさんの顔である以上、あんたの目はそれを嘘だとは認識できない。その目は、優先順位なんて決められないんだからな」

言い返すことは、出来なかった。

長い間、この目は絶対なのだと思ってきた。

この目で見抜けないことなど、存在しないのだと。

だって、世界は白と黒しかないと思っていたから。
嘘でなければ真実。真実でなければ嘘。真実は見えなくとも、その片方が見えれば、答えはわかると勘違いをしていたのかもしれない。

「……この目は」

真実で隠された真実に、気付くことはできない。

嘘という皮は剥がせても、真実という骨は砕けない。その奥にあるものに、辿り着くことは出来ない。

「万能じゃ、ない……?」

何かが、崩れる音が聞こえたような気がした。

ずっと、自分の足場を支えてきたものが、揺らいでしまう感覚。
襲い掛かってくる不安。

そして、理解してしまった。

否定しなかったもの。認めたくなかったもの。それは違うのだと言いつづけてきたこと。

「ああ、そうか。私は依存していた。縋っていたんだ」

一文字に結ばれた唇が薄く開き、乾いた笑みが零れ落ちる。

手で目元を覆い隠し、イザヤは笑った。

「本当に……こんな目なんか、大っ嫌いだ……」

1-12 出会い、記憶する人

翌朝、窓から差し込む光で目を覚ましたソレイユは、寝ぼけ眼で窓際に置かれた椅子に腰掛けるリオを見つけた。朝が弱いリオは、梟に姿を変えることすら億劫なのか、本来の姿に戻っていた。

柔らかそうな黒髪を流し、いかにも眠たげな顔でぼんやりと外を眺めている。

ソレイユはベッドから起き上がると、リオの傍まで近寄った。

「眠いなら寝てればいいじゃないか」

「朝方からやかましく出て行く人がいたものですから」

「イザヤか。そういえば見ないな。あいつ、どこか街に入るたびにこうして朝早く出かけていくけど、なにしてるんだかな」

こうして旅をするようになってから、イザヤは街に入ると度々早朝に何も言わずに姿を消すことがあった。

逐一、どこへ行ってくる、などと言いかう間柄ではないが、彼女が外出するのはほとんどが酒場が活発に動き、かつ人目につかない夜だ。このように朝から、というのはイザヤの好むところではなかった。

そして、こうして朝から出て行ったイザヤは夕方頃に帰ってくる。どこか、薄汚れた格好になって。

まるで何かと争ってきたかのように、怪我をしていたり、衣服が破れていたりするのだ。

「リオ、おまえ何か知らないか？」

ただ出かけるならまだしも、怪我をして帰ってこられるのではソレイユとしては気になる。イザヤに聞いたとしても、関係ない、の

一言で切られてしまう。

ソレイユの納得いかなさそうな顔に、リオはしばらく黙り込んでいたが、やがて小さな溜息を吐いて、鬱陶しそうに前髪を手のひらでかきあげた。

「イザヤは、あなたに知られたくないと思っていますよ。おそらく」

眠たげな金色の瞳が、ソレイユを見つめる。

ソレイユは目を瞬かせた。

「知ってるのか？」

「ええ。一度、後をつけてみましたから」

何事もないように、リオは言う。

「俺に知られたくないって、どういうことだ？」

「あの娘はやはり甘い、ということです」

ますます首を傾げるソレイユに、リオは椅子の背もたれに寄りかかりながら続けた。

「少しお考えになればわかることです、主様。旅をするのに、必要不可欠なものは何ですか？」

「……金か？」

「そうです、こうして宿に泊まるのにも、食料を買うのにも、酒場に入るのにも、金銭は必要になってきます。大半の人は与えられた仕事をこなして金銭を手に入れますが、仕事につけない、ましてや彼女のようなお尋ね者がそれを手に入れる手段は、そう多くはないでしょう」

リオははつきりと明言しなかったが、ここまで言われてわからないほどソレイユも馬鹿ではない。

「――そういうことか」

おもむろに立ち上がると、壁にかけてあった外套を身に纏って部屋から飛び出した。

急に静かになった部屋で、リオはゆっくりと目を閉じた。

「……」

出て行く間際に見えたソレイユの微かに怒った横顔が、瞼の裏に映る。

「よくない、傾向ですね」

顰められる眉とは裏腹に、リオの唇には薄っすらとした笑みが浮かんでいた。

「早く手を打たないと、後々面倒になりそうです」

絹のような黒髪の間隙から覗いた満月。リオは窓から差し込む陽光につられるように空を見上げた。

「わかっているんです。あなたの言いつけを守るのも、そろそろ限界だということも……このままでは、深みに嵌って、もっと辛くなることも」

なのに、とリオは呟くように言う。

「踏み切れない。私は、あなたみたいに甘くはないと思っていたのですけど」

※

目の前に立ちはだかる巨大な熊を目の前にして、イザヤは浅く息を吸い込んだ。

熊、というのは正確ではない。一見すれば確かに熊と似通っているが、その全長はイザヤの倍以上あり、褐色の体毛は針鼠のように尖っている。大きな口からは鋭い牙が見え、口の端からは唾液が滴り落ちていた。およそ、イザヤの知る熊とはかけ離れた存在だ。

「こいつ、か」

頭の中に叩き込まれた情報と一致する。

討伐依頼にあった、最近コラン近辺の森に現れるようになった魔物で間違いはないだろう。

しかし、とイザヤは魔物を見上げて顔を顰める。

「……剣、通るのか？」

鋼のように尖った体毛は、剣など容易く弾いてしまいそうだ。

そうこう考えている間にも、魔物は容赦なく丸太のような腕を振り下ろしてくる。腕の先についた爪がイザヤの顔前を通り、地面に大きな傷跡をつけた。

大きく抉られた地面を見下ろし、イザヤの額に汗が滲む。これをまともに受ければ、一撃で命を落としかねない。

唾液を撒き散らしながら次々と腕を振り回して襲ってくる魔物の

攻撃を避ける。

こうもめちゃくちやに暴れられては手を出す隙さえ掴めない。

「くそ——狂犬か」

舌打ちをし、イザヤは木の陰に隠れて身を屈める。魔物の爪が、木の幹を三分の二ほど持っていく。

ずずん、と大きな音を立てて崩れ落ちる木から逃げるようにイザヤは走った。大地を揺らしながら、魔物もあの巨体では信じられない速さで迫ってくる。

足場も見通しも悪い木々の間を掻い潜るように駆け抜けながら、イザヤは手に持った剣に目を落とした。

確実に仕留める方法は、ある。

簡単なことだ。神魂の力を使えばいい。あの力なら、いくら相手が鋼の針を纏っていても関係なく断ち切れる。

だが、カルディアの奴隷荘での一件が、イザヤを躊躇わせた。

あの時、突然、何の前触れもなく神魂が使えなくなった。神魂は使えば使うほど消耗する。限度があることはわかっていた。しかし、あの時イザヤにはまだ余裕があった。なのに、消えた。

もし、それが今起こったら。助けてくれる人など、誰もいないのだ。

一瞬頭を過ぎった顔を振り払うように、イザヤは足を止めた。

「こんな力、なくなっちゃったって」

そうだ、と剣を握り締める。

ほんの一ヶ月ほど前まで、こんな力なんてなかった。自分の力だけで乗り切ってきた。

いつの間にか、頼ってしまっていたのかもしれない。力に。

「……やってやるさ、あんな獣一匹」

背後から聞こえる獣の唸り声。その雄叫び目掛け、イザヤは振り向きざまに剣を振った。

金属がぶつかり合うような高い音が響く。

イザヤの剣は一本は魔物の爪を払い、一本は胸を捉えた。
しかし、

「くっ！」

悲鳴を上げたのは、イザヤの手のほうだった。

一瞬でも気を抜いていれば剣を落としていたほどの痺れ。やはり、ただの体毛ではないようだ。

まともに斬りつけることは不可能だと判断し、イザヤは剣を一本だけしまった。空いた手を腰袋の中に突っ込み、そこから手榴弾を取り出すが、

「駄目か」

出てきたそれを見、眉を顰めた。

ピンを外すだけで勝手に内部の作りが火をつけてくれる型は作るのに時間も材料もかかる。使徒と戦ってから、新たに作るのをすっかり忘れていたようだ。

仕方ない、とイザヤはもう一本の剣も収め、また魔物に背を向けて走り出した。

ある程度距離を取れたところで立ち止まり、発火石と金属を取り出し、魔物が近づいてくるのを待つ。

十秒と経たず、魔物の咆哮が耳を貫いた。

イザヤは素早く石と金属を打ち鳴らせる。飛び散った火花が拳大の炎を作り出すやイザヤは手榴弾の導火線に火をつけた。

一呼吸置き、投げる。

手榴弾は真っ直ぐに大きく開けられた魔物に口に投げ込まれ、爆発した。

激しい音をたてながら炸裂する金属片を柔らかな口内に受けた魔物は、苦悶の叫びをあげて仰向けに倒れる。

白目を剥いて動かなくなった魔物を見下ろし、イザヤは頬から流れる血を拭った。

手榴弾を投げ込む寸前、魔物の爪が掠ってしまったのだ。

幸いにも傷は浅く、毒の類もないようだった。

大きく息を吐き出し、イザヤは傍の木の幹に凭れ掛かるようにして座り込んだ。目の前に転がる、魔物だったモノ。

ずん、と胸に押し掛かってくる何かに、イザヤは顔を顰めずにはいられなかった。殺しの後は、いつもそうだ。人でも魔物でも。殺した後は、酷い嫌悪感に苛まれる。

柵の中で生きていれば、こうして殺しの罪悪感に苛まれることはなかったのかもしれない、と思う。

自分の為に他を犠牲にする。

ヒトは、誰しもその業を背負って生きている。そのあまりにも日常に溶け込んだ殺しを、感じていないだけで、常に何かを殺して生きている。

イザヤの行為も、生きるという目的において違いはない。

ただ、それが人よりも、明確に現れてしまうだけだ。

深い、重い溜息が零れ落ちる。この魔物の首を取って依頼主に手渡さなければならないのに、動く気になれなかった。

そのまま、しばらくイザヤが魔物の死体と向かい合っていると、魔物の死体の向こう側にある茂みが揺れた。反射的に剣の柄に手をやる。膝を立て、すぐにでも動ける姿勢を保ちつつ、イザヤは揺れる茂みを見据えた。

そして、

「……」

現れたものに、言葉を詰まらせる。

人間の子供ほどの大きさの小熊のような魔物が、そこにいた。魔物は仰向けに倒れる死体に歩み寄ると、まるで子が母に縋りつくように顔を寄せる。鼻で母の体を押す。反応など、返ってくるはずがない。それはもう死んでいるのだから。

それでも諦めようとしない魔物に、イザヤの顔が歪んでいく。込み上げる何かを抑えるように、口元を覆った。

「親子なんて……くだらない」

吐き捨てるように言う。

それでも、イザヤは剣を抜こうとはせず、小さな魔物の姿を見つめていたが、やがて強く瞼を閉じて背を向けた。

直後、乾いた銃声が一発。たて続けに、もう一発。すぐそばで聞こえたその音に、イザヤは目を見開いて振返る。

血の匂いが、鼻を掠めた。

すぐ傍に転がる、小さな魔物。母と同じように空を仰いで倒れる魔物の右目には、黒々とした穴が開いていた。

「なにやってんだ、あんたらしくない」

聞きなれた声だったはずなのに、うまく反応できなかった。

何が起こったのか頭で考えられなくて、機械仕掛けの人形のように声のする方へと顔を向ける。

「おまえ」

そこにいたのは、何か黒い塊を片手に構えたソレイユだった。

ソレイユは掲げていた腕を下ろすと、早足で駆け寄ってくる。魔物の死体の横を通り過ぎ、イザヤの傍で膝をついた。

「生きている魔物に背を向けるなんて、何考えてるんだ。魔物だって知性がないわけじゃない。騙しだってやるんだぞ」

その言葉で、イザヤは理解した。

なぜ、先ほどまで母に縋りついてた魔物がすぐ後ろで倒れているのか。どうということはない。イザヤが背を向けたのを見計らって、殺しにかかってきたのだ。

「そうか。わからなかった」

呟くように言い、イザヤは何事もなかったかのように立ち上がった。

沈黙が流れる。

手に持っていたものをポケットに突っ込んだソレイユは、何かを言おうと口を開き、

「なぜ？」

唐突な質問。ソレイユは黙って次の言葉を待つ。

イザヤは視線を足元の魔物の死体に落とすと、吐き捨てるように言った。

「なんできたんだ……馬鹿」

その言葉にソレイユは眉を顰めてイザヤを見ると、血のついた頬を自分の袖で乱暴に拭った。

「な、さ、触るな!」

ばしん、とソレイユの腕が払われる。ソレイユは頬に手を当てて睨んでくるイザヤを見返すと、捲くし立てるように言った。

「あんたこそ俺らに気を使って無理するなよ、馬鹿」

びくり、とイザヤの体が震える。眉を吊り上げているソレイユの顔を横目で見、すぐに罰が悪そうに目を逸らした。

「……なに言ってるんだ、おまえ」

「わかってるくせによく言うな。けど、言ってやる。あんたは俺達に魔物を殺す仕事を手伝わせたくなかった。見せたくなかった。そうだろ?」

魔物と魔族は違う種族だが、近い存在であることに変わりはない。特に人間からしてみれば、同族と思われていても仕方ないだろう。

イザヤはソレイユやリオに同族殺しにつき合わせたくなかった。しかし、金を稼ぐ手段と言えばこれしかない。

だから、いつも何も言わずに一人で行っていたのだ。

「そりゃ、俺だって気持ちのいいものじゃない。できるなら、やりたくはないさ」

「……そんなの、わかってる。わかってるから、私だけでいい。こんな魔物程度、一人で――」

「だけど、こうやってあんた一人に重荷を背負わせているほうがよっぽど気分悪い」

イザヤの言葉を遮り、ソレイユは続けた。

「少しは頼れよ、イザヤ。悪いことじゃない。誰かに頼るのは、悪いことじゃないんだ」

「……いい。前に言っただろう。私は一人以上になるつもりはない。だから、おまえの助けなんかいらない」

そう言ってソレイユに背を向けたまま黙り込んでしまったイザヤに、ソレイユは頭を抱える。

イザヤとソレイユが出会ってから一ヶ月は経つ。しかし、イザヤの態度は一向に変わらず、心を許すどころか警戒を解こうとすらしなかった。

それでも、ソレイユはイザヤから離れる気はなかった。

〈闇の神魂〉所有者。それだけでなく剣士としても卓越しているイザヤを引き込めば戦力となることは間違いない。

だが、そんなことはソレイユにとってはどうでも良かった。彼はイザヤの能力に惹かれたわけではなく、ただ孤独であろうとする彼女を放って置けなくなったただけなのだから。

イザヤが冷たい人間でないことなど、少し一緒にいればすぐにわかる。

本当は普通の優しい少女なのだ。それが、『蒼眼』という異能力のせいで変わってしまった。

地面に足をついて垂直に佇む真っ直ぐな背中と後姿。雪原に立つ、冬の木を思い起こさせる。自らを守る葉がなくなっても、冷たい風に晒されても、決してその細い幹を揺らすことなくそこにあり続けるその姿から感じるのは、逞しさよりも寂しさの方がより近い。

雪という自然を相手にする冬の木にとって、枝についてやった雪を払うとか、幹に藁でも巻いてやるなどの行為は意味のないものなのかもしれない。

もっと、大きなこと。例えば灰色の空を切り裂くような太陽を浮かべて、雪を溶かしてやるほどのことがなければ、木が心を許すこ

とはないだろう。

イザヤも同じだ。

蒼眼によって彼女の周りに積もり続ける雪。もうイザヤ自身にはどうにも出来ない深みを作ってしまったていることだろう。

誰かが、溶かしてやらなければならない。

「……難しいよな」

ぽつり、とソレイユが口の中で呟く。

イザヤを覆う雪は、とても深く冷たい。手を伸ばすだけでは、凍傷にでもなって終わりだ。

何かきっかけがあれば、とソレイユは思う。雲間から差し込む一筋の光のような何かがあれば、そこから太陽を引きずり出してやるのに、と。

だが、待てども待てどもそんな都合のいいことが起こるはずもなく、ソレイユは彼女の孤独な後ろ姿を見続けるしかないのだ。

イザヤは暫くの間ソレイユに背を向けたまま立っていたが、やがて小さな溜息を吐いて振返る。

向けられた顔は普段と変わらない表情で、ソレイユが声をかけるよりも早くイザヤは早足でソレイユの横を通り過ぎていった。

倒した魔物の傍まで行き、腰から剣を引き抜くと、一太刀で太い首を落とす。あれほど固かった毛は、魔物の死と同時にその硬度失っていたようだ。

ごろり、と転がる首を麻袋に入れたイザヤは、剣を収めてから袋を肩に担いだ。魔物の首が入った袋は、小柄なイザヤが持つにはとても大きく見え、ソレイユは無意識に彼女の手から袋を奪っていた。

「なんだ？」

意外にも、イザヤの反応は普通だった。ソレイユは袋を片手で持

つと、コランの方角を指出す。

「持つよ。とりあえず街まで運べばいいのか？」

「別にいい。返せ」

「あんたのちっさい体でこれ持っていると転んじまいそうで見てられないんだよ」

何気ないソレイユの言葉に、イザヤがぴくりと反応する。

イザヤが顔を俯かせ、すぐに上げる。

一瞬の出来事だった。

ソレイユがイザヤの紫の瞳に宿った鋭い光を見たと同時に、彼の体は背中から地面に倒れていた。

「お？」

じんじんと痛む背中。何が起きたのかわからず呆然と地面の固さを感じながら、ソレイユは腰に手を当てて見下ろしてくるイザヤに視線を向けた。

「体が小さいから何だ？　小さければ力がないとでも？」

決め付けるな、と吐き捨てるイザヤ。

ソレイユはしばらく目を瞬かせたまま地面に寝転がっていたが、小さく吹き出して体を起こした。

「そいつは悪かった。そうだな、確かにあんたは馬鹿力だ」

肩に触れながらソレイユは笑う。あの一瞬、イザヤはソレイユの肩に手をかけ、そのまま力だけで地面に倒したのだ。

馬鹿力と言われたのが気に食わないのか、イザヤは眉を顰めるが、

何も言っではこなかった。

「俺の言い方が悪かったよ。別にあんたを非力な女扱いしたわけじゃない。ただ、重そうに見えたから手伝いたかっただけだ。深い意味なんてないんだ」

「……」

「それが気に障ったってんなら謝るさ。悪かったな」

他意のないソレイユの言葉に、イザヤは返す言葉もなく口を噤んだ。

「そうだな。あんたはこれまで一人で頑張ってきたんだ。他人からの気遣いは、あんたのプライドを傷つけるだけか」

「……そこまでわかっていて、おまえはまだ私に付き纏うのか」

喉の奥から押し出されたような声に、ソレイユは頷く。

「イザヤが俺たちからの行為を素直に受け止められるようになるまでな」

「なんなんだあいつは！ 馬鹿じゃないのか……っ」

太い一本の大樹の根元に蹲りながら、イザヤは足元の草を千切っては投げ捨てた。

ソレイユの姿はない。

イザヤはあの場合から逃げるように立ち去ったのだ。呼び止める声も聞かず、狩った魔物のあのままに放置して。

耐え切れなかった。

いくら粗暴な態度をしても嫌な顔すらしない。嘘を言わず、イザヤを恐れず、非難せず、罵倒しないあの青年に、彼女は不安しか感じなかった。

やけに大きく響く心音に、イザヤを目を瞑って堪える。

（あいつのせいだ）

自分が自分でいられなくなるような気がした。
崩されていく。

イザヤという存在を構築する要素は、拒絶だ。
他者を拒絶し、拒絶される。そうすることで、イザヤはこれまで生きてこれたのだ。一人で生きていくために必要なことは、信頼ではなく拒絶だから。

対してソレイユには拒絶がない。だから、不安に感じる。イザヤにとつて、ソレイユの在り方は到底理解できるものではなく、また、理解してはならないものだった。

理解してしまえば、受け入れてしまえば、そこで何かが終わる。
そう思えてならなかったのだ。

これ以上一緒にいるべきではない。

イザヤもそれはわかってはいるが、ソレイユは決して引き下がらないだろう。それに、賭けの約束もある。約束を反故にすることは、嘘を吐くと同じこと。イザヤには、それができなかった。

ソレイユと一緒にはいられない。いられないが、いるしかない。

まるで答えのない謎かけを解いている気分だった。

考えれば考えるほど頭は混乱する。

髪を無造作にかき乱し、イザヤは乱暴に木の幹に背中を押し付けた。

空を仰げば、青々と生い茂る葉の隙間から零れ落ちる陽の光が降り注いでくる。イザヤは小さく息を吐き出し、ようやく落ち着いたように目を閉じた。

「悩む必要なんて、いままでなかったのに」

思えば、悩むことは少なかった。悩まずとも、答えは勝手に蒼眼が運んできてくれた。

それは悩むことがなかった、というよりも悩むことが出来なかった、のほうが正しい表現なのかもしれない。

今までは、それで良かった。そんなことはイザヤにとってごく当たり前のことだったのだ。

だが、ソレイユと出会って、彼の考え方に触れて、イザヤの中で少しずつ何かが変わり始めていた。

自分が信じたいと思うものを信じる。

騙されているとわかっていても、信じ抜いた先にはきっと何かがある。

それはイザヤにとって酷く愚かしい考えで、酷く、眩しいものだった。

「……無駄なんだ。信じたって、裏切られるだけだ。信じる意味なんてない。あいつは、馬鹿なだけだ」

目を閉じたまま、まるで念仏のようにイザヤは呟く。

「私は知っている。知っているだろう」

私には子供がいらないから面倒を見てあげるよ。そう言って優しく笑った老婆は数日後に教会騎士に通報した。たくさんの報奨金をその手に持って。

蒼眼、望むところじゃないか。そう言った道楽貴族はイザヤをまるで物のように扱った後に捨てた。人の心を見透かす少女に恐れを抱いて。

おまえは使えそうだから使ってやる。そう言った悪党はイザヤを見捨てた。結局、体の良い駒としか思っていなかったのだ。

友達になろう。そう言って手を差し出した少女はイザヤの目を見るなり悲鳴を上げて逃げ出した。彼女の悲鳴と恐怖に染まった目を、イザヤは今でも覚えている。

数えればきりが無い。

人と関わらなければあんな目に遭うことなどなかった。

それでも、生きていくためにはああするしかなかった。今のうちに、一人で生きる術を知らなかったあの頃は、裏切られるとわかっていてもそれを利用していくしかなかったのだ。

そして、その過程でイザヤは理解した。

ヒトは信じるに値しない生き物だと。

ヒトは平気で嘘をつき、ヒトを騙し傷つける生き物だと。

世界は、ヒトの吐き出した嘘の泡で塗れているのだ。

だから、イザヤはヒトを信じることをやめた。

目の前に浮かび続ける無数の濁った泡沫に嫌気が差して、目を背けた。

「早く、誰か私を殺してくれればいい」

視線を伏せ、イザヤは膝を抱えた。

「でも、死ねない。あいつを殺すまで、私は死ねない」

膝を抱える手は、白くなるまで力が籠められている。

濁りきった紫の瞳を細め、イザヤは片手を真横に伸ばした。

「絶対に、殺してやる。この力で」

木々や石が作り出す陰から、闇の欠片がイザヤの手に集まる。

作り出した黒紫の剣を強く握り、それを横に薙いだ。剣に触れた木の幹が消滅する。

イザヤはゆっくりと立ち上がると、剣を振り続けた。時に空を、時に木を、時に草を切る。

それらは全て空気を切るように手ごたえなく二つに分かれた。だが、

「……っ」

そのままの勢いで大きな岩石に剣を振り下ろしたイザヤは、予想だになかった衝撃に思わず顔を顰めた。

じいん、と痺れる腕。

僅かに掠り傷がついただけの岩に、イザヤは眉を顰めた。

「斬れない？」

傍にあった木に剣を刺す。なんなく突き通る。

同じように岩石に剣を突き立てるが、やはり剣は通らない。

「どういうことだ」

奴隷荘で起きた突然の力の消滅といい、この能力はイザヤの思っているものよりも単純ではないのかもしれない。

色々と検証を試してみる必要があるそうだとイザヤが剣を消す。

まさにその瞬間だった。

「うあ!？」

突然の暴風がイザヤを襲う。
足が浮く。

イザヤは咄嗟に傍にあった木の幹を掴んだ。

「な、なんだこれは」

木々の隙間を擦り抜けて吹き付ける風はあきらかに異常だった。一方、イザヤの正面から流れてくるそれは、森の木の葉を巻き込みイザヤの体を叩く。

空を見上げる。先ほどと変わらない。微かな陽光が葉の隙間から零れ落ちている。空はとても穏やかだ。

だというのに、この風はなんなのか。

まるで嵐のような暴風。目を開けていることさえ難しい。

片手でしっかりと木の幹を握り、イザヤは空いた手で風除けをしながら風が吹いてくる方向に目を凝らした。

だが、木々が生い茂るこの森では先はよく見えない。

「……声？」

ふと、イザヤの耳に届いた微かな声。

風の轟音の中で確かに聞こえた、泣き声にも似た叫び声。

その声が、どこか聞き覚えのあるような声がして、イザヤは確かめられずにはいられなかった。

危険だと知りつつも、イザヤは台風の中心へ向かって足を進めようとし、

「おい、待て！」

誰かに、手を掴まれた。

周囲への気配りが疎かになっていたイザヤは突然のことに身を竦ませ、思わず体の力を抜いてしまう。

手が幹から離れ、イザヤの体が浮く。

しまった、と思うと同時に、強い力で腕を引かれ、そのまましっかりと抱きしめられた。

「馬鹿、何やってるんだよ、あんたは」

「え……あ」

イザヤが顔を上げる。そこにあったのは、呆れ顔のソレイユ。

「おまえ、どうしてここに……いや、それよりも！」

「わかってる。離す、離すよ。けどその前にどこかに掴まれよ」

溜息混じりに言われ、イザヤは眉間に皺を寄せながら木の幹に掴まった。ソレイユが体を離し、イザヤの傍による。

「どうしてここに、って言ったっけ。そりゃこんな異常があれば行ってみるのは当然だろ。あんたが巻き込まれていないとも限らないしな」

風の音に負けないよう、ソレイユは少し声を荒げて言った。

「戻るぞ、イザヤ」

「え？」

真剣な顔で言われ、イザヤは目を瞬かせる。ソレイユは風を中心に地に目を向け、口を開いた。

「おまえもわかってると思うが、こいつは明らかに人為的なもの、つまりは神魂の力だ。それもリオの話じゃ相当強い。近づくのは得策じゃないとさ」

「……おまえ一人で戻れ」

「そうか、じゃあ一緒に行こう。俺の後ろにいろよ」

そう言うと、ソレイユはイザヤの手を引いてゆっくりと進んでいく。

一歩、一歩。吹き飛ばされないように細心の注意を払いながら進んでいくソレイユの背中を見つめながら、イザヤは呆然と足を進めていた。

しっかりと握られた手のひら。それは冷たいはずなのに、なぜが暖かく感じた。

「……どうして、おまえは私を見捨てない」

口の中だけで呟かれた言葉はソレイユの耳に届かなかったのか、ソレイユは目だけをイザヤに向けた。

「何か言ったか？」

「なんでもない！ それより手を離せ！ 一人で進める！」

「あんたじゃ無理だよ。これがなんなのか確かめたいんだろ。それなら、俺を風除けにしてろって」

そう言うと、ソレイユはまた前を向いて歩き出した。イザヤもこの場でこれ以上駄々をこねる気にもならず、黙って地面を踏みしめた時、

「お？」

「風が……」

ぴたり、と風が止んだ。

あれだけ吹き荒れていた風が余韻も残さずに消え去った。

散乱した葉や折れた枝さえなければ、あの風がまるで夢の出来事

だったのではないかとさえ思えるような静けさ。

「どうということだ？」

「私が知るわけないだろう」

途端に静まり返った森を見渡しながら首を傾げるソレイユに、イザヤも眉を顰めながら答えた。

「とにかく、これで確かめられる」

さっきまで風が吹いていた方向へ向け、イザヤは足を踏み出す。唸るような暴風の中で一瞬間こえた声。あれは、ごく最近耳にしたものだ。

ソレイユもイザヤを止める気はないらしく、黙って後についていく。

時間にすれば一分も歩いていないだろう。

今まで木々が密集していた森の中で、急に拓けた場所に出て、イザヤは足を止めた。

「これは……」

辺りを見渡し、イザヤは息を呑む。

この平坦な空間は、自然に出来たものではない。そこにあったはずの木や草が、根こそぎ吹き飛ばされた跡だ。

木が根っこごと掘り返された痕跡を見ながら、イザヤは半径十数メートルに及ぶ空間に目を巡らせ、ある一点で動きを止める。

「おい、誰かいるぞ」

ソレイユも同じ物をみつけたようで、イザヤと同じ場所を見てい

る。

木を観衆にするかのように作られた空間の中央に、人が倒れていた。

天を覆う木がなくなった場所で、余すことなく降り注ぐ光を受けているその少女を、イザヤは知っていた。

「あいつは、酒場の」

眩きながら少女に駆け寄ったイザヤは、まるで眠るように気を失っている少女を見下ろし、目を見開いた。

「え……？」

その少女は確かに昨晚イザヤが行った酒場で歌っていた歌人の少女だった。

彼女がなぜこんな森の奥深くで倒れているのか。そんなことは、イザヤにとって些細な出来事だ。

もっとも驚くべきは、彼女の美しい翠の髪の毛の隙間から覗くもの。

「まさか、こいつが」

魔族の短く尖ったそれとは違う、真横に長く伸びた耳。

それは、噂に聞くエルフの特徴である。

1-13 薄らぐ、楽園への道

「本当にこいつがエルフ……？」

大きな紫のリングが付けられた長い耳を見つめながら、イザヤは呟くように言った。

エルフは存在こそ証明されているが、その他族との接触を嫌い性格から人前に姿を現さない。それゆえ、一生エルフを見ることないという者がほとんどなのだ。

それはイザヤも同じことで、人づての噂や文献などでエルフの特徴は知っているものの、こうしていざ目の前にすると、どうしても現実感を覚えない。

見た目はほとんど人と変わらない。酒場の暗がかりではわからなかったが、明るい場所で改めて見ると、少女は一段と幼く見えた。寝顔ということもあるが、人間で言えば、年は14、5歳程度にか見えない。

長い翡翠色の髪は肩の辺りで編みこまれ、ゆったりと流されている。あの暴風の中心にいたはずなのに、綺麗なままだった。

服装は程よい装飾の施されたローブで、白と翠の衣が彼女の持つ神聖な外見によく似合っていた。

そして、何よりもイザヤがこの少女に現実感を覚えない理由は、その雰囲気だ。

人や魔族には決していない、清らかな空気。陽の光を浴びて薄っすらと光る髪や服は、一層神秘さを際立たせた。

触れてはならない。

穢してはならない。

そう思ってしまうような存在。まるで芸術品を見ているような気分だった。

「へえ、この子がエルフか。初めて見た」

空気がぶち壊される。

イザヤが固唾を呑んで立ち尽くす横で、ソレイユはなんの躊躇いもなく少女の髪をぽんぽんと撫でていた。

「お、おまえな！」

「ん？　なんだ？」

悪びれもなく振返るソレイユに、イザヤは言葉を詰まらせて項垂れた。

「いや、別にいい」

「変な奴だな。ところでこいつはどうするんだ？」

「どうするって……」

急に言われても答えられるわけがない。イザヤ自身、まさかこんな形でエルフと接触できるとは思ってもみなかったのだ。

「……とにかく、こいつが目を覚まさないことには……」

「いいのですか？　自害されても」

「……っ！」

突然背後から聞こえた声に、イザヤの肩が大きく震える。

ゆっくりと振り返ると、そこには両手で肘を抱えるようにして腕を組むリオの姿。その目は眠たげで、小さな欠伸をかみ殺している。

リオは目を見開いたまま固まるイザヤを見つめ、首を傾げる。

「どうしました？　随分と間拔けな顔ですが」

「……なんでもない」

「そうですか。びっくりしてしまいましたか。それは申し訳ありませんでした」

「こ、の……性悪梟」

「まあまあ、落ち着けよ。リオだって悪気があったわけじゃない——」
「いえ、わざとです。いまなんとか笑いを堪えているところですが」
「わけじゃないようだが、落ち着いてくれ」

額に青筋を浮かべるイザヤを、ソレイユが自信なさ気に宥める。
イザヤはしばらく眉を吊り上げてリオを睨みあげていたが、やがて大きな溜息を吐くと彼女から視線を逸らした。

「もういい。それより問題は……」

「このエルフの娘をどうするか、だな。確かに、下手に捕まえようとなんかしたら自害されかねないな」

過去、人や魔族に捕まったエルフは一人の例外なく自害している。これはあくまでリオの言葉だが、それに嘘はなく、またエルフの生態がいまだ不確かな部分が多いという事実からも信憑性のあるものだ。

だからこそ、ここは慎重にならなければならない。

いくらこのエルフの少女が人前に姿を現していたとはいえ、それはあくまでエルフであるという事実を周囲に悟られないようにしてのことだ。

あの顔意外を隠すように被られたローブ。今思えば、エルフ特有の長い耳を隠すためだったと考えれば納得がいく。

しかし、この状況はどうだろうか。

自身がエルフであるということを知られてしまった。そうなった時、少女がどのような行動に出るかは全く予想できないのである。

「そうですね。手っ取り早いのは縛って口に布でも噛ませておくこ

とです。あくまで、自害されなかったための手段ですが」

「そこまで出来るか。私は話が聞きたいだけだ」

語調を強くしてイザヤが言い返すと、リオはさも言うと思っていた、と言わんばかりに肩を竦めて口を閉ざした。

「でもなあ、イザヤ。もしこいつが目覚ましてすぐに自害しそうになったらどうする？　せつかくの情報源はなくなっちまううえに後味悪い死体が転がる羽目になるぞ」

「それは、そうだが」

「出来ないのなら、今すぐここから立ち去るしかない。俺たちは何も見なかった。それなら、こいつが死ぬ理由はないんだからな」

ソレイユの言葉に、イザヤは口を嚙む。

わかっていた。非情になりきれないのなら、身を引くしかない。これまではそうしてきた。自分の中で非情になりきれない部分があることに、イザヤは気付いていた。身を守るための暴力は出来ても、自分の都合で振るう暴力にはまだ抵抗があったのだ。

だから、いつもならばイザヤは逃げていただろう。なんの罪もないこの少女に危害を加え、まして命を奪うかもしれないことになるなど、望むところではないのだから。

しかし、今回ばかりはイザヤも迷っていた。

長い間探し続けていたエルフ。これを逃せば、もう二度と会えなくなるかもしれない。

奥歯を噛んで思考を巡らせていたイザヤの意識を現実につれ戻したのは、小さな呻き声。

はっとして少女を見下ろすと、少女の長い睫が揺れ、ゆっくりと瞼が開く。

「うわっ、目を覚ましちまったぞ！」

ソレイユが一步後ろに下がる。リオは動かず、ただ小さな欠伸をしているだけだ。

少女はまだ事態を把握できていないのか、ぼんやりとした眼で空を見上っている。

「あれ……ここは――わたしは」

太陽の眩しさに澄んだ紫の瞳を細め、小さく笑った。

「そ、う……わたしは、またやってしまったのですね」

その笑みは、酷く自嘲めいたものだった。

少女の様子にイザヤが身を固くさせて立っていると、少女はようやく人の気配に気付いたのか、首を倒してイザヤたちを瞳に映した。

「あなたたちは……」

紫の瞳がゆっくりと見開かれていく。

同時に口を開きかけた少女に、イザヤは咄嗟に、

「は、はやまるな！」

そんな言葉を叫び、少女の肩を掴んだ。

途端、しん、と空気が静まり返る。

ソレイユもリオも動かない。ただ、ぽかん、とした表情のままイザヤに視線を向けるだけ。

当のエルフの少女は大きな瞳を何度も瞬かせてイザヤを見上げ、やや上擦った声で言った。

「はい？」

※

「……っ、ぶ……くくっ……」

「ふーは、早まるなって……っ」

宿屋の一室に、噛み殺した笑いが響く。

ベッドに蹲ってシーツをどんどんと叩きながら腹を抱えるソレイユと、壁際で口を押さえるリオの笑い声だ。

「わ、悪い……イザヤ。あんたが必死だったのはわかるんだが……まさか……っはははは！」

「は、早まらないで欲しいのはあなたですよ……」
「……」

イザヤは何も喋らない。椅子を壁に向け、ソレイユ達に背を向けて座っている。

こんな状態が続いてかれこれ十分ほど過ぎた頃、ソレイユが転がるベッドの対面にあるベッドに腰掛けていた少女が口を開いた。

「あの、そろそろ止めて差し上げた方が……イザヤ様はわたしの為に言ってくださったのですから」

「そ、そうは言ってもなあ、ルカ。はやまるな！だぞ。まさかそんな台詞をイザヤの口から聞くななんて思いもしなかったぜ、はやまるな」

「ええ、本当に。なかなか言う機会なんてないですよ。はやまるな」

「まったくだな、はやまるな」

「……もう言いたいだけですよね」

笑いを抑えようとすらしめないソレイユとリオに、エルフの少女は苦笑した。

ルカ・スマラクト。

森の奥深くで出会った少女は、自らをそう名乗った。

イザヤは当初ルカに名前を告げるのを躊躇っていたが、リオがそれとなく彼女が教団関係者でないことや、賞金首狩りでないことを聞き出してくれたため、素直に名前を教えた。

その時のルカの反応も、綺麗な名前ですね、といったって普通の反応で、ひとまずイザヤは安心したのだ。

「まあ、そうですね。いい加減この話題も飽きました。本題に移りましょう」

散々笑っておいて何を、とイザヤの恨めしげな瞳が語る。

リオはそんなイザヤの視線を流すと、ルカへと向き直った。

「いくつかお尋ねしたいことがあるのですが、よろしいですか、ルカ？」

「ええ、構いません。ただ、答えられない、答えたくないものに関しては誤魔化させていただきますが」

笑顔で、ルカは言う。

リオもどこか楽しげに頷いた。

「はい、それは当然です。そうですね、答えたくないものに関しては『黙っていたほうがいい』でしょう」

ほんの一瞬、リオとイザヤの視線が合う。イザヤはすぐに視線を

逸らしたが、ルカはそのことに目ざとく気付いたようだ。くすり、と笑みを零し、くつきりとした紫の瞳をリオに向けた。

「なるほど。理由がおありのようですね。わかりました。答えたくないものに関しては、黙秘させていただきましょう」

見た目に似合わないしつかりとした物言いで、ルカはイザヤ達に視線を巡らせる。

「さあ、どうぞ。イザヤ様もソレイユ様も聞いて下さって構いませんよ。わたし程度の知識がお役に立てるのなら、喜ばしいことですから」

「おまえは、監視者か？」

最初に口を開いたのはイザヤだ。

——監視者。

世界の歴史を記憶するエルフが、人間界や魔界へと送り出す使者。三界で起こる様々な出来事を記録し、それをエルフ界へと持ち帰る者。

記録者、とも呼ばれるエルフ達は特別な訓練を受け、その類稀な知識を生かし、巧みに姿を隠して周りに溶け込んでいるのだとイザヤは聞いていた。

ルカの在り様は、監視者のそれに当てはまる。巧妙に正体を隠しつつ、人々の輪の中に溶け込んだ。エルフが人前に姿を現すはずがない。そういった思い込みを利用した方法で。

もし、ルカがその監視者ならば、イザヤにとって嬉しい誤算だ。

監視者なら、世界の歴史は大抵網羅しているはずであり、エデンについての情報を知っている可能性も高い。むしろ、監視者ほどの知識を持ち合わせたものでなければ、いかなエルフといえどエデンの情報を知っているかは危ういのだ。

だが、

「わたしは監視者ではありません」

ルカの口は、イザヤの仮説をいとも容易く否定した。

「わたしが人間界にいるのは、とある理由からです。その理由はお教えすることは出来ませんが」

「なぜ、この街に？」

リオが新たな質問を投げかける。

ルカは少し戸惑ったように眉を下げた。

「なぜ、ですか。特に理由はないんです。わたしは旅の根無し草です。一ヶ月前、たまたま立ち寄ったこの街で歌っていたところをあ
の酒場の店主様に声をかけられました……」

「コランに滞在する間、あの酒場で働くことになった、と」

リオの言葉に、ルカは頷いた。

「はい。わたしとしても旅の資金は必要でしたから、お言葉に甘えさせていただきました」

「なるほど。それで、歌っていた、とは？」

「わたしは本来、各地に伝わる伝承や説話、あるいはその時に起こった出来事から歌を作り、人々の前で歌うことを生活の生業としています。吟遊詩人、というのはいささか恥ずかしいのですが、わかりやすく言うのなら、そうなります。あの日も、コランの中央広場で『ノアの物語』を歌っていたところでした」

「ノアの物語？」

聞きなれない言葉だったのか、ソレイユが首を傾げる。

「なんだよ、それ」

「知らないのか？」

これはイザヤの言葉だ。素直に頷くソレイユを見、イザヤは肩を竦めた。

「本当に無知だな、おまえ」

「悪かったな。てか、知ってるなら教えてくれよ」

「断る」

一刀両断。

ソレイユが無言でリオに視線を向けると、やれやれといった仕草が返ってくる。しかし、リオは文句一つ言わず、饒舌に語り始めた。

「〈ノアの物語〉とは、主に人間界で語られる御伽噺の一種です。内容は、そうですね。かいつまんで話しますが、昔、世界は聖霊によって治められ、楽園と呼ばれる豊かな大地を広げていました。ですが、二人の男女が聖霊と交わした約束を破ってしまうのです。結果、楽園は崩壊。世界は闇に飲まれました」

一度言葉を切り、リオは続ける。

「そこへ現れたのが、ノアという一人の少女です。彼女は三人の間と十の王の助力を得て、闇を退治することに成功します。楽園には平和が戻り、ノアは後に聖女と呼ばれるようになりました。……という話です」

ふう、と息を吐き、リオは窓枠に腰をかけた。

「この話は有名でしてね、私を知るだけでも十は同じタイトルの本が出版されています。内容はどれも基本は同じです。つまりは、約束を破ってはいけませんよ、という教訓を子供に説くためのものがほとんどですね」

「へえ、そんなに有名なのか。それならイザヤが御伽噺を知ってるっていうのも納得できるな」

頭の上に手を回し、ソレイユは肩を揺らせて笑う。

「どういう意味だ？」

「言葉のまんま。あんた、御伽噺なんて柄じゃあないからな」

「そうでもないですよ、主様」

ソレイユの笑いを遮ったのは、リオ。口元を微かに上げ、リオはイザヤを見つめた。

「だってそうでしょう？ 彼女が探している〈エデン〉とは、他ならない〈ノアの物語〉に出てくる楽園のことなのですから」

「え？」

思わず、ソレイユはイザヤに視線を投げる。イザヤは何も言わず、ただ口を一字に結んでいた。

「お、おいおい。〈ノアの物語〉っていうのは単なる作り話なんだろう？ じゃああるわけじゃないじゃないか」

「……御伽噺とは、大抵何かしらの元となる説話から成り立ちます。だから、〈エデン〉の存在を認める声も上がった。前に言いましたよね。〈エデン〉は御伽噺だと。幻の楽園説は、〈ノアの物語〉から生まれた。御伽噺の中から生まれた御伽噺。——それが、幻の地〈エデン〉です」

確かに、〈エデン〉は御伽噺だと聞いていた。しかし、それはあくまでも現実に見つからないものがいつしか伝説化していったとソレイユは考えていたのだ。

まさか、御伽噺の中から生まれたものだとは、ソレイユも思ってもみなかった。

「イザヤ、あんたは本当に〈エデン〉を信じているのか？」

ソレイユが問う。イザヤは腕を組んだまま、真っ直ぐにソレイユを見返した。

「私も言ったはずだ。信じる信じないじゃない。私はエデンを探す。この道から外れるつもりはない、と」

それは、ソレイユとイザヤが出会った森で、彼女がリオの問いかけに対して言った言葉。

イザヤの目に揺らぎの色はない。一片の曇りもない声で、イザヤは再び言い切った。

「イザヤ様は、〈エデン〉を探しておられるのですか？」

気まずい沈黙が広がりそうになったところにタイミングよく話を割り込ませたのはルカだ。

その目には、気まずそうな驚きが見え隠れしていた。

ルカの動揺にイザヤは気付いていたが、あえて触れないで首を縦に振る。

「そうだ。そのために、私はエルフの里を探していた。エルフと接触するために」

「なるほど。たしかに、そのような伝説を探すのでしたら、エルフ

に聞くのが一番手っ取り早いのでしょね」

納得したように、ルカは頷いた。

「それで、イザヤ様がお知りになりたいのは〈エデン〉の場所、ということでしょうか？」

「ああ、別に具体的な場所じゃなくても構わない。何か知っていることがあればそれだけで……」

「残念ですが」

静かに、だが強く、ルカはイザヤの言葉を遮った。

ルカの薄い紫と、イザヤの深い紫の瞳がぶつかる。

突然訪れた静けさにイザヤが眉を顰めるよりも早く、ルカは言葉を滑らせた。

「〈エデン〉は、ありません」

「え？」

思わず、イザヤの口から零れ落ちた声。ルカは細い眉をハの字に下げると、もう一度繰り返した。

「〈エデン〉は、おそらくもうこの世には存在しません」

「なぜ——言い切れる？」

イザヤの表情が歪む。

無理もない。頼りにしていたエルフに正面きってエデンの存在を否定されたのだから。

ルカはそんなイザヤは、ただ悲しそうな目で見つめる。

「……イザヤ様、あなたも、そしてリオ様も、〈ノアの物語〉は御

伽嘶だとお考えなのでしょう?」

イザヤが、リオが頷く。ルカは首を振った。

「違うのです。〈ノアの物語〉は御伽嘶などではありません。あれは、創世記の終わりに実際に起こった事実なのです」

「はっ?」

「……なるほど」

「ん?」

信じられない、と立ち上がるイザヤと、面白そうに目を細めるリオ、そして、何も理解してないソレイユ。

イザヤは作られた握り拳を小さく震わせると、ルカを見下ろす。ルカが嘘を言っているか、真実を言っているかなど、イザヤには確かめずともわかる。

痛まない左目。つまり、真。

だが、ルカが間違った情報を仕入れているという可能性もある。

「おまえ、それはどこで?」

「人間界、魔界では知られていないことかもしれませんが、エルフ界では歴史の記録に携わる仕事についている者なら周知の事実です。嘘ではありません。エルフ界メモリアの首都ベレルシーズにある史界図書館に、ノアの旅路に関する記録は、確かに残されています」

その可能性も、消えた。

エルフは歴史の民。

彼らの記録した歴史を疑うということは、歴史そのものを疑うということだ。

「それじゃあ、私はっ……」

内側から押し寄せる激情を押し殺したような声でそう呟き、イザヤは部屋から飛び出した。

「イザヤ！」

その後をソレイユが追う。

間髪入れずにリオによって投げられた二人分の外套を後ろ手に受け取り、ソレイユは部屋から姿を消した。

騒がしく階段を下る音は開けっ放しの扉からリオとルカの耳にも届き、二人は顔を見合わせて苦笑する。

リオは扉を閉めながら、ルカに顔を向けた。

「すみません、ルカ。話の途中で」

「あ、いえ、わたしの方こそ申し訳ありません。イザヤ様を傷つけるつもりでは、なかったのですが」

「ルカは何も悪くありませんよ。聞いたのはイザヤです。それに、あなたは彼女に本当のことを言ってくれた。下手な嘘は、きつとイザヤを傷つけただけでしょう」

絹のような黒髪を揺らし、リオは首を振った。

「それより、再三の確認で申し訳ないのですが、〈ヘノアの物語〉が事実というのは本当なのですね？」

「はい、それは、間違いありません。わたしはこの目で、彼女の記録を見たのですから」

ルカの目は真剣で、イザヤでなくとも、彼女が嘘を言っていないことは見て取れた。

リオは視線を斜め下に向けると、口元だけに緩やかな弧を描いて

笑った。

「なるほど。そうするとやはり、〈エデン〉は存在しないことになりますね」

「いざ——あ、ええっと、これはマズイだったか」

イザヤを追って宿屋の外へ飛び出したソレイユは、思わず叫びうになった名前を慌てて引っ込めた。こんな大通りで名前を呼ぼうものなら本気で殺されかねない。

その間にも、イザヤはずんずんと進んでいく。大声で叫ぶわけにもいかず、ソレイユは控えめに声をかけながら追いかけるしかなかった。

大通りから横道に入り、小道を通って路地裏へと進む。

ただでさえ出歩く人が少ないコランダ。裏路地に入れば人の気配は一層少なくなる。

それでも、誰がどこで聞き耳を立てているかわからない。ソレイユはぐっと我慢してイザヤの後を追いつけた。

ようやくイザヤに追いついたのは、宿屋を出てから数十分ほど追いかけてこをした後だった。

行き止まりに行き当たったイザヤが、やっと足を止めたのだ。

「やっと止まった」

「なんでついてくる？」

「特に理由はない」

きっぱりとした答えに、イザヤは怒りを通り越して呆れた。頭を抱え、溜息を吐く。

「ただの馬鹿か……」

イザヤはそこに廃棄された木箱や石材の上に腰を下ろすと、肩膝を抱えるようにして蹲った。

そのまま顔を俯かせて黙り込んでしまったイザヤに、ソレイユは少し近づく。

「イザヤ、どうしたっていうんだ？　〈ヘノアの物語〉が事実だってことと、〈エデン〉がないってこと、どんな関係があるんだよ？」
「……おまえ、話聞いてなかったのか？」

驚くほど、イザヤの声には覇気がなかった。まるで独り言のように小さな声を、ソレイユは聞き逃すまいと耳を澄ませる。

「梟も、言っていただろう。私の探しているエデンは、〈ヘノアの物語〉に出てくる楽園だと」

「ああ、覚えてる」

頷くソレイユに、イザヤは深い溜息を吐いた。

「どうしてここまで言ってわからない？　〈ヘノアの物語〉で楽園はどうなった？」

「どうって……確か、闇だかに滅ぼされ……あ」

ぽん、と手を叩く。

「そうか。〈ヘノアの物語〉が事実なら、楽園は——」
「とつくに滅んでいる」

楽園の崩壊。それは数ある〈ノアの物語〉のどれを見ても描かれている、人々を絶望に陥れる一節だ。もし、〈ノアの物語〉が真実だというのは、楽園が滅びたということもまた、事実なのだ。

「梟はエデンは〈ノアの物語〉から生まれた御伽噺と言っていたが、私は逆だと考えていた。幻の楽園と呼ばれた〈エデン〉から生まれたのが、〈ノアの物語〉だ。……でも、そうじゃなかった」

〈ノアの物語〉は過去に起きた実際の出来事だった。

そして恐らく、ルカの口振りから楽園が崩壊したというのも物語の脚色ではなく本当に起きたこと。

「……〈エデン〉は、ないんだ」

人気の無い裏路地を冷たい風が通り抜ける。

膝に顔を埋めたまま小さく震えるイザヤは、とても小さく見えた。ソレイユは一步イザヤに近づくと、口を開く。

「イザヤ、あんたはどうして〈エデン〉を探している？」

それは、もう何度もソレイユが彼女に問い続けてきた問い。

あの夜の森で、生を望みながらも絶望しか感じていなかった少女の望みを、ソレイユは知リたかった。

イザヤの考えていることを、もっと知りたい。その思いだけが、胸中で渦巻く。

「教えてくれ」

いつになく真剣な声。イザヤはゆっくりと顔を上げると、真っ直ぐな瞳で見上げてくるソレイユを見据えた。

そして、横一文字に結ばれていた唇が、微かに開く。

「生きなきゃ、いけないから」

本当に、小さな声だった。集中していけなければ決して聞き取れないほどの、まるで蚊の鳴くような声。

「生きて、償わなきゃいけない。でも、命は、長すぎて……潰れてしまいそうになるんだ」

風が、流れる。

強い風に、イザヤの左目を覆っていた包帯が徐々に剥がれ落ちていく。

「それに……都合が、良かった。〈エデン〉という存在は、きっと私の救いだ。だから、罰にもなると思った」

ふわりと舞い上がった長い前髪。

蒼が、歪んでいた。

「――イザヤ」

ソレイユが、イザヤの名を呼ぶ。

イザヤはハッとして顔を背けると、目元を手で覆った。

「……は、何を言っているんだ、私は。こんな魔族なんかに言っても、何も変わらないのに」

とんだ失態だ、とイザヤは奥歯を噛んだ。

いくら気持ちが悪くても、ソレイユに弱みを見せてし

まったことは、イザヤにとって恥すべきことだった。

「もういい。少し、一人にしてくれ」

このままソレイユといれば、何を喋ってしまうかわからなかった。長い前髪で押し付けるように蒼眼を隠し、イザヤはソレイユから顔を逸らす。

だが、ソレイユはその場から立ち去ることはせず、あろうことか悠々とした足取りでイザヤに近づくと、彼女が据わっていた瓦礫の横に腰を下ろした。

驚くイザヤが何かを言い出す前に、ソレイユは前を向いたまま言う。

「魔界に行こう」

「はっ？」

あまりにも唐突な発現に、イザヤは今にも泣きそうだったことも忘れてソレイユを見上げる。

ソレイユは相変わらずの飄々とした笑顔を浮かべながら、赤い目をイザヤに向けた。

「だから、魔界。へエデンへはないんだから、あんたがこっちにいる意味はないだろ？ 行こうぜ」

「ふ、ふざ……けるな。嫌だ」

「おお、随分と大人しい反発だな。調子狂う」

ソレイユは大袈裟に肩を竦めてみせる。

イザヤはそんなふざけた態度をとるソレイユに苛立ったように目を吊り上げた。

「行かない。魔界に逃げることなんて、絶対にしない」

「逃げるって何からだ？ 教団からか？」

「違う。私の運命からだ」

真っ直ぐに、イザヤはソレイユの目を見据えて言った。

「魔界には行かない。私はここで、死ぬまで生きるんだ」

その言葉には、何の迷いも感じなかった。

「だから、もう諦めろ。時間の無駄だ。おまえはさっさと魔界に帰れ」

言って、イザヤはソレイユから顔を逸らした。

ソレイユはそんなイザヤの横顔を見ると、困ったように笑った。

「そいつは無理だ。あんたにも譲れないものがあるように、俺にだって譲れないものがある」

「そんなもの私には関係ない。おまえの譲れないものは、他人の迷惑などお構いなしに押し通すほど価値のあるものか？」

「痛いところつくな」

頭に手をあて、ソレイユはくしゃくしゃと髪をかく。

「正直、わかんないさ。わかんないから、探してるんだ。まだ、見つかってないけどな」

でも、とソレイユは続ける。

「あんたといれば、見つかる気がする。そんな目を持ったあんただ

からこそ、きっと見つかるんだ」

そう言って笑うソレイユに、イザヤは言葉を失った。

馬鹿馬鹿しい。

そう吐き捨てることすら出来ず、ソレイユから顔を逸らしたまま、
眩くように言った。

「……ほんと……信じられない馬鹿」

1-14 紡ぐ、細い道標

「もう一つ、いいですか？」

イザヤを傷つけたことにショックを受けているのか、俯いたまま浮かない表情をしているルカに、リオは尋ねた。

「あ、はい。なんででしょう？」

律儀に顔を上げるルカ。

リオは数瞬思考を巡らせるように目を閉じると、薄く金の瞳を開いた。

「本当に、〈エデン〉は存在しないのですか？」

「……どういう意味でしょう？」

ルカの目が、リオを捉える。リオは微かな笑みを浮かべたまま、細い腕を組んだ。

「あなたは言いましたね。〈エデン〉は“おそらく”もうこの世に存在しない、と。〈ノアの物語〉が真実ならば、〈エデン〉はもう存在しないことは明白。それなのになぜ、あなたは曖昧な言葉で濁したのですか？」

「それは……」

言いよどむルカに、リオは追い討ちをかけるよう言った。

「ルカ、あなたは〈エデン〉の存在を信じている。そうではないですか？」

弾かれるように顔をあげるルカ。驚いたように見開かれた目に、リオは、やはり、と笑った。

「あるのですね？ あなたが〈エデン〉の存在を信じられるだけの根拠が」

「参りましたね」

溜息をつくように、ルカは言った。

そして、幼い顔立ちに似合わないような真剣な眼差しをリオに向け、口を開いた。

「わかりました。お話します。ただ、これをイザヤ様に話すかどうかを決めるため、わたしからもお聞きしたいことが一つだけ……いえ、あなたの考えを聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

手を差し出し、リオはルカを促す。

ルカは小さく頷くと、凜としたソプラノを震わせた。

「イザヤ様が〈エデン〉を探す理由。リオ様はどうお考えですか？」

「どう、とは？」

「わたしにはイザヤ様がエデンを探す理由が、わかりません。出会ったばかりのわたしが言うのも差し出がましいですが、あえて言わせていただくなら、あの方はエデンにて罪を浄化してもらうことを望みとしているようにはとても思えないのです」

驚いたように、リオは目を丸くさせた。

それから、口元に手を当てて微笑む。

「あなたの観察眼はなかなかのものです。あの短時間で、イザヤという人間をそこまで理解しましたか」

「人の動向を探りながらでないと、ここで生きてはいけませんでした。観察眼などには程遠い、死に物狂いで身に付けた付け焼刃です」
「経緯などとは関係ありませんよ。大切なのは身に付けた技術をどう使うか。……まあ、そんな話はどうでもいいことです」

そう言っ、リオは窓の外、イザヤとソレイユが消えていった路地裏へと続く道を見据えた。

「結論から言いましょう。私もあなたと同意見です、ルカ」

ぴくり、とルカの手が動いたのを横目で捉えながら、リオは続ける。

「以前、私は彼女に、〈エデン〉を探す理由は赦されたい罪があるからか、と問いました。答えは否。誰かに赦され癒されるほどの罪は背負っていない……イザヤは、そう言った」

「それでは、やはり」

「ええ。イザヤの目的はおそらく〈エデン〉そのものではなく、〈エデン〉を探すこと、でしょう。……そこにどういった意味があるのかは、わかりかねますけど」

「そうですか。ですが、それだけ聞ければ十分です」

納得したように頷き、ルカは立ち上がった。

衣についたフードを被り、部屋の扉に向かって歩いていく。

「行きましょう、リオ様。イザヤ様に伝えなくてはなりません」

その声に、リオは自らの姿を梟へと変え、ルカの肩にとまった。

※

「イザヤ様」

気分も幾分か落ち着き、いい加減宿屋に戻ろうとしていたところに、ルカはきた。

イザヤはルカの姿を見るなり気まずそうに顔を逸らす。

ルカはそんなイザヤを困ったような笑みを浮かべて見つめると、ゆっくりと近づいた。

「イザヤ様、少しよろしいですか？」

足元まで来られてはイザヤとしても無視出来ようはずがない。見下ろしているのも気分が悪く、イザヤは瓦礫の上から降りた。

それでも正面を向こうとしないイザヤの手を、ルカはそつと拾い上げるように握った。

驚いて思わず跳ね除けようとするイザヤだったが、なんとか寸でのところで堪える。ルカに目をやり、握られた手に力を込めた。

「な、なんだ？」

「あ、やっと見てくれましたね。駄目ですよ、人と話をするときはしっかりと目を見て話すものです」

にっこりと微笑み、ルカはイザヤの手を放した。

すぐさま手を隠すように後ろへやるイザヤ。

また目を逸らしてしまったイザヤに、ルカは眉をハの字下げるが、それ以上は何も言わずに宿屋の方角を指差した。

「立ち話もなんです。まずは部屋に戻りましょう。〈エデン〉のことについて、話があります」

イザヤの目が微かに見開かれる。

ルカは一つ頷くと、さあ、とイザヤ達を促しながら歩き出した。

「〈エデン〉が、ある？」

宿屋に戻るなり、〈エデン〉の存在を肯定したルカに、イザヤは目を白黒させた。

ルカはイザヤの言葉に頷くと、翠の髪を揺らす。

「はい。ですが、それはあくまでも可能性がある、ということです」
「でも、ルカはあると思ってる」

ソレイユがベッドの上に横になりながら言う。

「というよりは、〈エデン〉消滅の根拠があまりにもあやふやなものなのです。ですからわたしは、〈エデン〉の存在を完全に否定出来ない、そう考えています」

ですが、とルカは視線を手元に落とす。

「正直に申し上げれば、〈エデン〉は既に消滅しているという可能性のほうが遥かに高いことは事実です。さきほどは下手な希望を持たせないためにも、一般論を述べさせていただきました」

「それは、わかったが……なぜいまになって話す気になったんだ？」

どこにも座らず、部屋の隅で壁に身を凭れ掛からせるイザヤが首を傾げる。

ルカは窓辺で毛づくろいをするリオに視線を向け、またすぐにイザヤに顔を向けた。

「イザヤ様の目的が〈エデン〉に救いを求めるというものなら、お話はしませんでした。もし〈エデン〉がやはりなかった場合、イザヤ様は救われないままになってしまうでしょう。わたしにはその責任を負うだけの覚悟がありませんでしたから」

「別に、なかったっておまえに責任はないだろう」

「わたしの気持ちの問題です。でも、ありがとうございます。優しいんですね、イザヤ様は」

柔らかに微笑むルカに、イザヤはさっと顔を逸らす。

「……続きを話せ」

小さな声でそう言うイザヤに、ルカは笑みを崩さないまま、はい、と答えた。

「ですが、イザヤ様の目的が〈エデン〉による救済ではなく、エデンを見つけることにあるのなら、話は別です」

「なんでそれを……」

言いかけて、イザヤは窓辺にいるリオに目を向け、眉を顰めた。

「おまえの入れ知恵か」

「ええ。でもルカは気付いていましたよ。わかりやすいんですよ、あなたは」

飄々と返され、イザヤは押し黙る。

ルカは二人のやりとを見て、納得したように目を閉じた。

「やはり、そうなのですね」

「そうなのか、イザヤ？」

ソレイユがベッドから身を起き上がらせる。

「〈ヘエデン〉を探すことが目的って、どういうことだよ？」

「どうもこうも、そのままの意味だ。〈ヘエデン〉を探す。これが私の目的だと最初から言っていただろう」

確かに、イザヤはこれまで一度として〈ヘエデン〉で救われたい、などと言ったことはない。

だが、〈ヘエデン〉を探すことそれ自体が目的だとは、いくらなんでも思わないだろう。

それに、さきほど〈ヘエデン〉を探す理由を問うたソレイユにイザヤが言った、生きなければならぬ、という言葉の意味。これもまだ、ソレイユの中で答えは出ていなかった。

「なぜ、〈ヘエデン〉を探すことを目的としているのか。わたしはそれを問いたですつもりはありません。誰にだって、聞かれたくないことはありますから」

しかし、ルカに先にこう言われては掘り返せるはずもなく、ソレイユは大人しく口を噤んだ。

「では、話を戻しましょうか。イザヤ様の目的が〈ヘエデン〉を探すことにあるというのなら、わたしは可能性を提示してもいいと考え

ました。ただ、これは先ほども言いましたが、明確な根拠があるわけではない、ということは理解して頂いた上での話を聞いていただくことになりますが、構いませんか？」

「ああ、それは問題ない。可能性があるだけで、私には十分だ」

その言葉に嘘はないようで、イザヤの表情にはさっきまであった落胆の色は見えなかった。

ルカは、一つ咳払いをすると、自分の荷物の中から一枚の地図を取り出した。地図とはいっても、世界全土を描いたものではなく、このアインノン大陸に的を絞ったものだ。

突然地図を広げ始めたルカに、イザヤとソレイユばかりかりオまで微妙な表情を浮かべている。

ルカはそんなイザヤ達の視線をまるで気にせず、ペンを取り出して地図の一箇所を円で囲い、それをイザヤに手渡した。

イザヤは首を傾げつつ、促されるままに地図を受け取る。

「これは？」

「それがわたしがあなたに与えられる可能性です」

笑顔で、ルカは言った。

イザヤは眉を顰めながら地図を凝視するが、いくら見ても地図は地図だ。ルカが書き込んだ円以外、とくに何かが書き込まれているわけでもない。

「……言っている意味がよく……わからない」

イザヤにしては、ソフトな言葉を選んだほうだろう。

もしこれがソレイユならば、言葉ではなく拳が飛んできてもおかしくはないのだから。

地図とルカを交互に見るイザヤに、ルカは笑みを崩さずに言う。

「そこは、〈エデン〉の所在について研究を重ねているエルフがいる、エルフの里の入り口を示したものです。その人ならきつと、〈エデン〉についての手がかりを持っていることでしょう」

「え？」

「すみません。実はわたしは〈エデン〉についてはよく知らないんです。わたしが〈エデン〉の存在を信じているのは、その人の影響なんですよ」

「ではつまり、私たちにそのエルフに会いに行け、と？」

リオが補足するように付け加える。

「そうなりますね。思わせぶりなことを言ってしまったようで申し訳ないのですが、わたしに出来るのはこれぐらいです」

「でも、エルフは人間や魔族を嫌ってるんだろ？ 下手に近づいたら自害されるんじゃないのか？」

「自害？」

ルカが目を丸くさせる。

イザヤが人間界や魔界でエルフが捕まると自害することを話すと、ルカは困惑したような表情を浮かべた。

「そうなんですか。知りませんでした」

「そうなのか？ じゃあ、迷信なのかもな、それ」

頭の後ろで手を組んだソレイユがなんでもないように言う。

だが、ルカは浮かない顔のまま、視線を彷徨わせる。

「いえ、わたしが知らないだけかもしれませんから」

「命に関わることだ。知らないはずないだろう。特におまえみたい

に人間や魔族と接触する機会の多いやつなら」

これはイザヤだ。

「え、ええ……そうですね。でも、万が一ということもあります。あの人なら大丈夫とは思いますが、あまり無理なことをしないよう、お願いできますか？」

小さく声を震わせるルカに、イザヤは眉を顰めつつ首肯した。

「ああ、それはわかってる」

「その言葉を聞けて安心しました。では、わたしはそろそろ失礼します」

「もう行くのか？」

荷物を持って出て行こうとするルカに、ソレイユが声をかける。

「一緒にそのエルフの里に行こうぜ。ルカがいたほうが、あっちも受け入れやすいだろうしな」

「主様にしては至極全うなお考えですね。ルカ、私もそう思うのですが」

だが、

「いいえ、多分、逆にご迷惑になります」

一瞬悲しそうに瞳を伏せ、ルカは首を振った。

「わたしの名前は、出さないで下さい。大丈夫ですよ。きっとあの人は、話してくれると思いますから」

無理矢理作ったような笑顔。
ルカは、では、と頭を下げると、足早に宿屋を後にした。

※

湾岸都市カルディアの大聖堂で、リリースとセト、そしてバラクは一人の司祭の話を神妙な面持ちで聞いていた。

内容は一週間ほど前に起きたカルディア奴隷荘の襲撃事件。奴隷荘の警備をしていた騎士三人が殺害され、首都へ送還中だった馬車を護送していた騎士七人も全滅。また、送還中の奴隷階級の一人、ノエル・シュタインの脱走という、あまり前例を見ない事件だっただけに、偶然イザヤを追ってカルディアまで足を運んでいたリリースの目についたのだ。

「これまた、随分と大胆なことをするものがいたものですね」

一通りの話を聞き終え、司祭を下がらせた後にセトは苦笑混じりに言った。

「ええ、これはとても忌々しき事態です」

リリースが唸る。口元に手を当てて思案顔になるリリースに、バラクは肩を竦めてみせた。

「はあ？ たかだがガキ一人が逃げただけだろ。そんなに気にするようなことか？」

「違いますよ、バラク。問題なのは、騎士十人を倒せる實力を持っ

た者がいるということです。そして明確な敵対意識とはまでは行かずとも、騎士を殺害している時点で我々の味方ではありません」

「一人、とは考えにくいと自分は思います。奴隷荘と護送組、少なくとも二人はいると考えた方が自然ではないでしょうか」

リリスの言葉をセトが継ぐ。

「問題は誰が、ということですね。疑わしいのはノエル・シュタインですが、彼女はそれほど強い力を有していなかったそうですし、何より魂縛石で神魂は封じられているはずです。彼女の可能性は低いと思われます」

セトの真つ当な意見に、リリスは頷く。

そして、静かに考えを巡らせた。

護送中だった他の奴隷階級の子供が全員無事だったことから考えて、襲撃犯の狙いはノエル・シュタインで間違いないことは事実だろう。だとすれば、容疑者は格段に見極めやすくなる。

奴隷に堕ちるノエル助ける理由があるのは、彼女の親族、または友人だ。

カルディア聖堂を任されている司祭も馬鹿ではない。事件から一週間経つのに、ただ手をこまねいていたわけもなく、彼らは真つ先にノエルの両親を洗ったが、結果はシロだった。

となれば、次に疑わしきはノエルの友人だ。

「マギ・グレイス。彼が襲撃犯かどうかはさておき、彼が絡んでいるのはまず間違いないでしょう」

ノエルと最も親しかった友人であるマギの行方が、事件の日からわからなくなっているという事実を、リリスはどう受け止めたものか悩んでいた。

マギにはノエルを助ける理由がある。しかし、ノエル同様神魂を封じられた彼に、果たして騎士十人を倒しうるだけの力があつたのかと問えば、首を横に振るしかない。それは万が一にもマギが神魂を封じられていなかった場合でも言える。十歳の子供に倒されるほど、騎士は弱くはない。

となれば、可能性は自然と二つに絞られる。

マギが騎士を倒しうる力を持った“何者か”を雇い入れ、ノエルを攫ったという可能性。

もう一つは、マギは単身ノエルを助けに行き、そこで何らかの理由でノエルを攫おうとしていた“何者か”の手にかかったという可能性。

どちらが正しいのかを判断するには情報が少なすぎる。この二つ以外の可能性も否定はできない。だが、どのような場合にせよ、その“何者か”の介入があり、その者達が騎士達を殺害したことに間違いはないだろうとリリスは確信している。

リリスは閉じていた目を開くと、再び先ほどの司祭を呼び出した。

「殺害された騎士たちの遺体はどうなっていますか？」

「はい。氷の神魂解放者の手で腐敗させずに保存しております。何分奇妙な事件だったため、手がかりになるかと。彼らには申し訳ないことをしていると思っておりますが」

「いいえ、良い判断です。では、すぐにでもその遺体を見せていたいただきたいのですが」

そうリリスが口になると、司祭は恭しく頭を下げ、リリスを聖堂の奥へと案内した。セトは黙ってリリスの後に続き、バラクは興味がないと聖堂の椅子に寝そべる。

案内されるままに一つの部屋へと招きいれられたリリスは、そこに置かれた三体の氷の彫像の前に胸の前で十字を切り、瞳を伏せて黙す。が、それも一時。再び翡翠の双眸を開いたリリスは、よどみ

ない声で言った。

「殺害された騎士は十人と聞いていましたが？」

奴隷荘で三人、そして護送組で七人の計十人。司祭から被害者の数をそう聞いていたリリスは、目の前にある三体の遺体を見下ろしながらそう尋ねる。

「護送の騎士達は全て同様の手口で殺されておりました。刀剣の類の刃物で、四肢を切断。おそらくこちらは全て同一人物による犯行と見て間違いなく、また遺体も全く同じ状態だったため、その内の一人をこちらへ保管いたしました。そちらの、一番左の遺体です」

司祭もその疑問は予想していたのだろう。すぐに答えを返してきた。

リリスが膝を追って司祭が示した遺体に近づくと、それを覆っていた氷が一瞬にして消える。これまで氷の中にいたというのに、騎士の遺体には水滴一つなく、綺麗な鮮度のままの状態だった。ただし、話どおり若い騎士の四肢は綺麗に五等分されていたのだが。

臆することなく遺体に触れ、切断面を見たリリスは、そこに特筆すべきものがないと判断するやすぐに視線を残りの遺体へと移す。

「こちらの二人は奴隷荘の騎士ですね。残りの一人は？」

いまだ氷に覆われたままの遺体を見据えながらリリスが問うと、司祭はしばし逡巡し、沈鬱な声で言った。

「回収しきれませんでした。奴隷荘の警備責任者であったアルド・オルフォーは、おそらく何かしらの〈神魂〉の力で細切れになっておりましたので」

「……そうですか。それは、致し方ないですね」

言ってから、リリスはまたも一瞬にして氷の保護から解放された遺体を改めてじっくりと観察する。

護送組の騎士たちの殺害法と手口こそ異なるものの、こちらもやはり刀傷だった。一人は胸から腹部にかけて深く斬られ、一人は胸を一突き。容赦なく心臓を貫いたであろう一撃によってあけられた穴を見つめていたリリスの目がゆっくりと見開かれていく。

傷口に接する衣服を凝視し、そこを傷つけないように切り取ったリリスは、騎士二人の傷口と衣服を見比べ、息を飲んだ。

「どうかなされましたか、リリス様」

これまで一度として口を開かなかったセトが、上官の異変に気付いて声をかける。リリスはすぐには答えず、眉根を寄せて切り取った衣服を騎士の胸の上へと置く。そのまま静かに立ち上がると、視線はまだ騎士達へ向けたまま、搾り出すような声で言った。

「――イザヤです」

「そうですか。確かに彼女ならやり遂げられるでしょう」

なぜ、と若い使徒候補は聞かなかった。彼はリリスに対し、全幅の信頼を置いていたからだ。

「となれば、護送の騎士を殺したのはあの魔族のどちらかということになりますね。一体どういった経緯で彼女がノエル・シュタインを攫う理由を得たのかはわかりかねますが、とにかくここへ来たことは我々にとっても僥倖だったということですね」

続けて言うセトに、リリスは神妙な面持ちで頷いた。

奴隷荘の騎士二人を殺したのはイザヤ。そのことをリリスは確信していたし、イザヤなら問題なく遂行できるということもまた納得していた。

しかし、セトの言うとおり、理由が全く思い当たらないのだ。これまでのイザヤの行動から推測する限り、彼女は極力人と関わることを避け、常に人目のつかない闇の中を行動している。その異常なほどの慎重さこそが、これまで教団に補足されることなく逃げおかせてくれた理由と言ってもいい。

それが今回の件はどうだろうか。わざわざ教団に自分の存在を示すような行為をやったのけている。およそこれまでのイザヤの行動からは度し難い行為だ。

ノエルとイザヤの間に何かしらの関係があったということを完全否定することはできないが、その可能性は限りなく低い。長年教団に迫られる身であったイザヤが、ただの平民階級の子供にすぎないノエルと接触する機会など早々あるはずもないのだ。そして、それはマジに関しても言える。彼の頼みを聞いて動くにしても、納得がいかない。

偶然出会った子どもをイザヤが攫った。

もしそうだとしたら、彼女を動かした理由はそうすることで彼女に何かしらの利益がある場合だが、リリスの考えが及ぶ範囲でノエルとマジがイザヤに教団に捕まるかもしれないほどのリスクを背負うだけの有益をもたらすとは考えにくい。

考えても考えても、リリスの中で答えは出ない。

ならば、とそこでリリスは思考を止めた。答えが出ないのなら、新しいヒントを得るか、答えを聞けばいい。それにはどのみち、イザヤを追うしか道はないのだ。

リリスは最後に一度だけ騎士たちへ祈りを捧げ、司祭に向き直った。

「ありがとうございます。この件は私が請負ます。彼らを丁重に

葬ってあげて下さい」

凜然と放たれた、自分より二回り以上幼い少女の言葉に、司祭は恭しく頭を垂れる。

リリスは司祭にそれ以上言葉をかけることなく部屋から退出すると、罰当たりにもアルヴィア神の彫像の前でいびきをかいて眠りかけていたバラクを起こしてカルディア大聖堂を後にした。

「あくまでも不確定情報ですが、イザヤらしき人物をシピティオで見かけたという情報が入っています。イザヤはリンツィアフィールに向かっていているのかもしれませんがね」

アインノン大陸の南半分を占めるクレストラウム王国。北を占めるリンツィアフィール王国。両国の国境沿いにあるのが、国境の街シピティオだ。

リリス達の予想ではイザヤはクレストラウム王国の首都デバイラへ向かう為に、カルディアを通過したと推測していたのだが、シピティオではデバイラを過ぎてしまっている。となれば、イザヤの目的地はシピティオを更に北上した、雪国リンツィアフィールと考えるのが妥当だろう。

しかし、

「偽情報でしょう」

その可能性をリリスは迷いなく斬り捨てた。

「これまでほとんど足取りを掴まなかった彼女がここへきていきなり補足されるというのにはいささか不自然な点があります。もちろん教団の発令、我々が手に入れた外見的特長が漏れたこともありませんが、それでもこれまでのイザヤの周到さからそう簡単に自らの

居場所を突き止められるのはおかしいです」

そこで一度言葉を切り、リリースは続ける。

「それに、もし私がイザヤならば、カルディアであのような一件を起こしたならば、一時身を潜めます。いきなり観光地でもあるシピティオに行こうとはまず思いません」

「なるほど。しかし、だとすればこの情報を流したのは一体誰でしょう。か。これほど自然に民衆を使って情報操作を施すことはイザヤには不可能です」

単身でここまでの情報操作はまず不可能。それは、後ろ盾が存在しないイザヤにもできないということだ。だからこそセトもこの噂の可能性の一つとして捉えた。

「いる、んだろうな。俺たちから、イザヤを隠そうと動いている組織が」

すっかり目を覚ましたバラクが、紫の双眸を妖しく光らせる。くつきりと歪んだ口角はいかにも楽しげで、彼の心情を余すところなく露にしていた。

「どうすんだ、リリース？ おまえは身を潜めるのが定石と言ったが、小さな村も含めれば、かなりの数がそれに当てはまるぜ？」

およそ上官への態度ではないバラクの態度は今更気にすべきことでもない。

「そうですね。正直なところ、彼女の行き先に確信があるわけではありません。ですから、全て探しましょう」

「は？」

まるでなんでもないようにリリスが言ったのけた一言に、バラクが目瞬かせ、セトが苦笑する。リリスは月光を思わせる柔らかな金糸を靡かせながら踵を返すと、瞳を細めて微笑んだ。

「イザヤが潜伏する可能性のある場所は全て洗います。たとえその間に彼女が場所を変えようと、それを上回る速さで私たちが動けば良いだけの話です」

言うが早い、リリスは大聖堂の脇に繋いでおいた馬の背に軽やかに跨る。

バラクは束の間馬上で次の行き先を考えているリリスの凜とした横顔を眺めていたが、やがて肩の力を抜くと馬の手綱を引いた。

「は、わかりやすくていいな。乗ったぜ」

「ありがとうございます。それでは、行きましょう。今は一刻一秒が惜しい。まずはリンドウ村へ、そしてコランへ向かいます」

その声に呼応するかのように、緋色の衣を纏った使徒を乗せた馬は空を仰いで嘶いた。

1-15 見透かす、全の回廊

ルカが地図に印をつけた場所はコランの正門から出て、南東に向かつてしばらく歩いた場所にある、一本の大樹を示していた。

樹齢数千年は下らないだろう。幹は大人十人が手を繋いでようやく囲えるほど太く、高さは地上からでは窺い知れない。大きく広がる枝の先々には青々とした葉が天を隠すように所狭しと生い茂っている。

ただそこにあるだけで、己の小ささを思い知らされる。それほど圧倒的な威圧感を前に、イザヤは言葉もなく大樹を見上げていた。

エルフの里へと繋がるのは、古い大樹。

なるほどこれなら確かにその条件に当てはまるだろう、とイザヤは緩やかな風で奏でられた葉が揺らめきを聴きながら思う。

「それで、ここが入り口っていうのはわかったが、どうすればいいんだ？」

何の感慨もなさそうなソレイユの飄々とした声に、イザヤは溜息を一つ吐く。しかし、ソレイユに感傷という言葉の意味を説き伏せても意味がないことなど十二分に承知していたし、何よりも面倒くさかった。

イザヤは木の幹に近づくと、地表にまで這い出している木の根の上に乗った。

「簡単だ。ただ、エルフの里に行きたいという明確な意思を持って触れればいい。それで道は開かれる」

「そうなのか。そいつはアルパドの門と違って随分と簡単だな」

時間指定、空間指定のあった魔界と人間界を繋ぐ門とは打って変

わった容易さに、ソレイユは口笛を鳴らす。

「それは当然です、主様。これはあくまでも人間界とエルフの里を繋ぐもので、エルフたちの手によって作られた人工の扉。エルフ界へと繋がる扉は、おそらくアルパドの門と同じくそう簡単に入れない造りになっていますよ」

ソレイユの肩にとまっていたリオが言う。

「ただ、防衛の為かそうでないのかはわかりかねますが、大樹から里へ向かう間に通る〈全の回廊〉と呼ばれる場所では通った者の最も忌まわしき過去と対面するそうです。精神の脆い者は、過去に捉われ一生抜け出せなくなるのか。あくまで噂ですが」

「ハハ、そいつはおっかない話だ」

「そんなもの所詮幻だ。目を向けなければいい」

頭の後ろで手を組んで笑うソレイユに、イザヤは殊更厳しい口調で言い放つ。その語調の強さに啞然とするソレイユはイザヤに目を向けるが、彼女は眉を吊り上げたまま視線を合わせようとはしなかった。

「俺、何かあいつの気に触るようなこと言ったのか？」

僅かな困惑を露にしてリオに問いかけるソレイユに、金目の梟は首を振って言った。

「さあ、どうでしょうか。私にはあれは自分自身に言い聞かせているように聞こえましたけど」

おそらくわざと、滞りなくイザヤに届く声量でそう言ってのける

リオに、しかしイザヤは言い返さずことはせず、額に手を当てて嘆息する。

「もういい、とにかく入るぞ。〈全の回廊〉はおそらくそれぞれ違う道を通ることになる。いいか、目的を、道を見失ったら終わりだ」

そう言い、イザヤは大樹の幹に手を当てる。

するり、と音もなく飲み込まれていく体。

違和感はなかった。気付けば洞窟の中に立っていて、背後を振り返ってもソレイユとリオの姿はなく、自分が一本道の途中にいるのだと理解する。

改めて辺りを見渡したイザヤは、今いるこの洞窟と納得した場所が、普通の洞窟とは一線を画すものであるということを容易に見て取ることができた。

まず何よりも暗くない。火を持たなければ進むことすら覚束ない自然の洞窟ではありえないことだ。だというのに、この洞窟にはその心配がない。火があるわけでも、光が差し込んでいるわけでもない。だが確かにここを明るいと感ずるのは、四方を覆う壁や地面の材質のせいだろう。

一面の水晶。

光さえ放っているのではないかと思うほどの美しい水晶で作られたこの洞窟は、四面にイザヤの姿を余すところ映し出していた。

それがまるで監視されているようにも感じ、イザヤは不快感を露にして足を進める。こんな不気味な場所は一刻も早く通過するべきだ。

しかし、次の瞬間。イザヤは半ば自身の意思とは無関係に足を止めることとなる。

どこからともなく聞こえる複数の声。その声が誰のものであるかを理解したイザヤは、数分前のリオの言葉を思い出し、皮肉めいた笑みを浮かべて視線を上げる。

「これを意図的に作ったのだとしたら――ハ、エルフというのは相当な悪趣味の種族だ」

先ほどまでイザヤの姿を映していたはずの水晶。しかし、今それに映るのはイザヤではなく、花咲き乱れる庭園から逃げ去る少女の姿。その顔は涙と絶望に塗れ、け躓きながら森を走り抜ける様はなんと醜く情けないものだ。イザヤは嘲笑する。

頭上から視線を外して左右へと向ければ、そこにもどこかで見た光景が映し出されていた。

そのどれもが、楽しい笑い声が伴っている。

見れば見るほど、聞けば聞くほど確かな重みとなって胸に押し掛かってくるその記憶から逃げるように、イザヤは今度こそ足を止めることなく歩き出した。

同時刻、イザヤが通った回廊とは別の回廊で、魔族の姿に戻っていたリオは、足元の水晶を粉々に踏み碎いていた。

端正な顔立ちにいつもの笑みはなく、息を乱し、侮蔑を含んだ表情で破片となった水晶を見下ろす顔は美しさとは何の由縁も感じられないほど歪んだそれへと変貌している。

「なるほどやはり、ここは私には少々居心地が悪い」

前髪をかきあげて乾いた笑みを漏らし、リオは水晶の壁に映るエルフの顔に刀を突き立てた。

そのまま刀を片手で捻り、エルフの顔を抉る。エルフの顔が映っていた水晶の破片が地に落ちていく様を見届けながら、リオは一つ息を吐き出して刀を鞘へとしまおうとするが、小刻みに震えた手が

それを阻む。

空いた手で手首を押さえつけ、リオは目の前の壁に映し出された光景に口角を上げる。

「ああ——本当に、吐き気がします」

掠れた囁きを聴くものはおらず、ただ四方から襲い掛かる忌まわしき記憶の残滓だけが一本の回廊に響き渡った。

※

「どうした二人とも、そんな仏頂面で」

ソレイユよりやや遅れて回廊を抜け出してきたイザヤとリオに、ソレイユは開口一番そんな言葉をかけていた。

それも当然と言えば当然だ。二人の顔は、不機嫌です、と顔に書いてあると錯覚させられるほど内心の憤りをありありと曝け出していたのだから。

「きさまには関係ない。埋めるぞ」

「つまらないことを聞かないで下さい、主様。削ぎますよ」

「どこに？ どこを！？」

顔を引き攣らせながら問いただすソレイユに、イザヤは頭を押さえながら言う。

「おまえ、よくそんな気楽でいられるな」

イザヤからすれば、おそらく自分と同様に不愉快極まりないものを見せられたリオの反応こそ正常で、ソレイユの悠然とした態度は理解しがたいものだった。

ソレイユはイザヤの呆れ返った視線に頬をかいて首を捻る。

「いや、俺はなにも見なかったから」

「――は？」

素っ頓狂な声がイザヤの口から零れ落ちると、ソレイユは苦笑しながら続ける。

「なにもなかったんだ。忌まわしい過去、だったか。俺にはないからな、そんなものは」

そう断言するソレイユに、イザヤはかける言葉を見つけれなかった。

忌まわしい過去がない。忌むべき記憶がない。それは未練や執着、憎しみといった負の感情に一片たりとも捉われたことがないということだ。そんな人生を送ってこれる者などいるはずがない。そう思いながらも、イザヤにはソレイユの言葉を否定することはできなかった。もしソレイユが見栄や強がりででまかせを言っているなら、それはすぐにわかるからだ。

「それが、主様の在り方です。彼は常に自身の正義に則って行動しています。そして、その結果を全て受け入れる。だからこそ後悔や未練がない。もちろん、結果すべてを受け入れるということは容易なことではありませんが、彼にはそうできるだけの器があります」

信じるしかないことを理解しつつも、やはり信じきれないイザヤにそう語り聞かせたのはリオだった。

ソレイユには聞こえないようイザヤの横に並び、リオは肩を竦める。

「信じられませんか？　そうでしょうね。選択という意味を手放してしまったあなたには、そこから生じる結果を受け入れることも、否定することもできないのですから」

言って、リオはイザヤの反応も待たずにふたたび梟の姿へと化けると、ソレイユの肩へと飛び乗った。

反射的にリオを目で追ったイザヤの視線は、自然とソレイユの背中へ向くことになる。彼の真っ直ぐに伸びた背筋を目に映した時、イザヤは何か重いものが胸の上に押し掛かってくるような息苦しさを覚えた。

例えようなない圧迫感。リオの言葉が頭の中で何度も何度も繰り返される。

選択という意思を手放した。

違う、とイザヤは歯を食い縛った。

手放したわけではない。手放さざるを得なかったのだ。

結果が視えてしまっているのだから、選ぼうがない。イザヤは選んでなどいない。だから、次々と降りかかってくる残酷な結果は全てどうしようもないことで、せめてもの足掻きとして目の前に立ちあがる現実には爪を突き立てることぐらいしかできなかった。

受け入れることも否定することもできないのは当然だ。人は自分の意思で、それこそ何千、何万という選択を繰り返しながら生きている。

そして、その選択によって作られた道こそが結果だ。自身の意思によって作られた道ならば、受け入れ否定することもできる。

しかしイザヤの場合は違う。彼女は自身が選択という意味を持っているとは思っていない。だからこそ、目の前に続く道は彼女にとって受け入れることも否定することもできない、ただそこに在り続

ける現実でしかないのだ。

「――イザヤ」

強く、手が白くなるほどに強く握られた拳に視線を落としながらその場に立ち尽くしてイザヤは、ふいにかけられた声に反射的に顔をあげた。目の前にはソレイユの姿があつて、イザヤは大きく跳ねる心臓の震えを必死に隠す為にすぐに視線を逸らす。

ソレイユはそんなイザヤの様子に首を傾げつつも特に追求してくることはせず、周囲をぐるりと見渡ししながら言う。

「ここ、本当にエルフの里なのか？ 俺たちがさっきまでいたコランの森と何も変わらないように見えるんだが」

そう言われてから初めて、イザヤは自分が今いる場所が、森の中であることを知った。

気持ちを切り替えて、改めて双眸を左右に巡らせる。辺りを埋めつくすのは木という木。背の高い木々が、起伏のある地面から真っ直ぐに空へ向かって伸びている。背後には巨木。イザヤたちが出てきた、人間界と繋がる扉となる大樹だ。

こうして見れば確かにソレイユの言うとおり、さきほどまでいたコランの森とまるで遜色がないように見える。

しかし、イザヤはここがエルフの里であるということを疑ってはいなかった。

「空気、という言葉が適切かどうかはわかりかねますが、明らかにコランの森とは感じるものが違いますね。ここは、清浄すぎる」

心の内をそのまま代弁してくれたようなりオの言葉に、イザヤは無言で首肯した。

リオは金の瞳を伏せて首を振ると、肩を休めるように羽の力を抜く。

「なんとも居心地が悪い。イザヤ、できるのなら用事は手短に頼みます」

「……おまえ、心根から濁ってるんだな」

心底気だるそうに溜息を漏らすリオをイザヤは据わった目で見つ、しかし遅れて襲ってきた頭の上から降り注いでくる薄ら寒くなるような感覚に、背筋がずっと冷たくなるのを感じた。

澄み切った空気。軽く息を吸い込んだだけで、腹の底がゆっくりと温度を失っていくようだった。

「なんだか、寒いな」

ソレイユが腕を摩りながら零した呟きに、イザヤは無意識のうちに頷いていた。

気温の低下による寒さではない。全身から血の気が失せ、同時に体の内から冷たくなっていくような、死を感じさせる清浄さがここにはある。

この空間は不浄なものの穢れを清めるのではなく、その存在そのものを消し去ろうとしているようにさえ思えた。イザヤは片腕を抱きながら、目を細めて森の奥を凝視しているリオに声をかける。

「梟、おまえはどう思う？」

ずいぶんと言葉足らずだが、十分に伝わったのだろう。リオはすぐに答えを返してきた。

「異常、でしょうね。私もエルフの里に来るのは初めてですし、こ

の地についてさほど詳しいわけではありません。しかし、これはさすがに生物の住める土地ではないでしょう。――まるで酸素を奪われているようですよ。よく平気な顔をしていられますね、主様もイザヤも」

「……多分、そこまで酷く感じているのはおまえだけだと思うぞ」

イザヤには梟の表情の変化を見極める目などないが、その声音からおそらく真顔で言っているであろうことは容易に想像できた。

大きく息を吸って、本当に息苦しそうに呼吸する自らの従者に、ソレイユは細い眉を下げると、肩に乗っているリオを両手でそっと抱える。

「主様？」

「辛いのならこっちのほうがいい。ていうか、元に戻れよ。その姿になるのだって、そこそこ気を使わなきゃならないんだろ？ おぶってやるから、もうちょい我慢してくれ」

真紅の双眸を和らげてそう声をかけるソレイユにリオはやんわりと首をふり、彼の両手を擦り抜けて地面に降り立つと、魔族の姿へと戻った。そうして見えたリオの表情は思っていたほどではなくともやはり苦渋に歪んでいて、額に手を当てて眉を顰めている。どうやらソレイユの言うとおり、変化に使う力すら惜しむほど消耗しているようだ。

イザヤはそんなリオから顔を背けると、外套のフードをかぶって一歩踏み出した。

「ここからは私一人で行く。おまえたちは先に戻っている」

「それは駄目だ。俺が一度リオを人間界に帰してからもう一度戻ってくる。だからそれまで――」

「それには及びませんよ」

ソレイユの言葉を、リオの細い声が遮った。

軽く息を吸い込み、汗の滲んだ額についた前髪を手の甲で払った
リオは口角をかすかに上げて笑ってみせる。

「もう問題ありません。行きましょう」

それが強がりであるかなど、イザヤもソレイユもわかっていた。
しかし、リオがこう言った手前、意地でも引き下がることはないこ
ともまた理解している二人は、結局のところ少しでも早くこの地を
去れるよう、リオの様子を気遣いつつ先に進むしかないのだった。

里というからには、いくつかの集落が寄席集まった村であり、な
らばそれなりの平地が必要だというソレイユの意見は、イザヤによ
って即座に一蹴された。

いわく、エルフの里が本来意味するものは、他族の侵攻を防衛す
るために作られた砦であり、一般的な里の定義には当てはまらない
ということ。また、里がいくつかの集落の集合体であるという考え
自体が人間や魔族のものである。エルフの中で里が必ずしも同じ意
味を持つとは限らない。

そもそも、エルフはこれまで一切他族との関わりを避けてきた種
族。彼らの文化や生活様式について、そのほとんどが謎に包まれて
いるとあっていい。

もし、森の中にひっそりと隠れ住むように、巧妙に隠された作り
になっているとすれば、見つけるのは相当の労力を強いられること
になるだろう。

しかし、そんなイザヤの不安はすぐに杞憂へと変わった。――正
確には、別の不安で塗り潰されたのだ。

森の開けた場所に出たイザヤたちは、目の前に広がる光景に思わず足を止めた。

「まるで嵐のあと、だな」

言葉を失うイザヤの横で、ソレイユが静かな声で言った。リオもまた、傍にある木に手をつきながら、この事実をどう受け止めたものか悩んでいるように金の双眸で周囲を見渡している。

彼らが辿り着いた場所は、確かにエルフの里と呼ばれた場所だった。少なくとも、ここが、イザヤの知る里の形態をとっていたことだけはかろうじて見て取ることができた。

この――瓦礫の山と化した空虚な場所からも。

「これは、どういうことだ」

ソレイユの言った、嵐のあと、という表現はまさにその通りだ。

木を象って作られた家々は無残になぎ倒れ、地面にはその破片と、家財や本などといった生活用品が散乱している。

形を保っている家は、半壊を含めても十戸程度。しかし、そのどれを見ても、人が住んでいるとは思えないほど老朽化していた。

「何があったのかは知りませんが、少なくともこうなってからかなりの年月が経過していることは確かなようです。――よく見てください、あれらの家々を」

足元に転がっていた、表紙が剥げ、さらには苔まで生えている本を手を取ったリオがささやく。

そして、リオに促されるまま全壊、または半壊した家屋に目を向けたイザヤは、瓦礫になったはずの木材から顔を覗かせる新芽を見つけた。

「……本当にいるのか？ ルカの言っていたへエデン」に詳しいやつっていうのは」

寂れた里に目を向けながら、ソレイユは腰に手をあてる。

イザヤも眉根を寄せて右に左にと視線を巡らせるが、体に馴染まない空気が集中力を削いでしまい、うまく気配を探れないでいた。

「だが、エルフは嘘をついていなかった。この惨状が最近のものなら知らないまま私たちに知らせたのも納得できるが、そうでない以上、あいつはこうなっていることを知っていて知らせたんだ。なら、きつというはずだ」

「まあそれもそうだな。とにかく探してみるか——って、おいリオ。生きてるか？」

「愚問ですよ、主様」

木の幹に全身を預けることでなんとか立っている姿勢をたもっていたリオは、前髪の間隙から覗く瞳に映る光を揺らめかせてソレイユを見すえた。

ソレイユは一瞬言葉を詰まらせ、それから頭をかいて視線を伏せる。

「悪い」

「いいえ。——それよりも、申し訳ありませんがここから二人で行ってください。私は、しばらく休んでから、追いつきますから」

言って、リオは幹に背を預けたまま力なく座り込むと、ゆっくりと目を閉じた。

イザヤは、軽く返事をしてそのまま歩きだそうとしているソレイユの背中に声をかける。

「いいのか。あんな場所で休ませるくらいなら、まだ壊れていても適当な家の中のほうが……」

「いいんだよ。あいつは、弱っているところを見られたくない意地っ張りなやつなんだ」

「……めんどくさいやつだな」

「ああ、だれかさんにそっくりだ」

肩を揺らして笑うソレイユに、しかしイザヤは彼が何を言っているのかわからず、首を傾げる。

「何を言っている？」

「いや、なんでもない。なんでもないさ」

笑いを噛み殺しながらそう答えるソレイユ。

それがなぜか面白くなく、イザヤはしばらくは顔をしかめてソレイユの背中を追っていたが、やがて溜息を一つ吐き出して辺りの様子に気を配り始めた。

森の中に作られた里のわりには、規模はそれなりに大きい。これだけの面積を作り出すには、相当の木々を伐採する必要があっただろう。

しかし、コラン同様起伏の多い土地はどうにもならなかったようだ。なるべく平坦な場所を、という意図は汲み取れるが、それでも平地にはほど遠い地面の起伏がいくつかの場所に見受けられた。

そんな土地に立地する倒木のような壊れた家々を覗きながら、イザヤとソレイユは奥へ奥へと進んだ。

当然ながら会話は少なく、それもソレイユが一方的につまらないことを喋っては相槌一つ返さないイザヤの反応に口を閉ざし、また時間を置いて話を切り出すというものだ。

そのような調子が十分ほど続き、さしものソレイユも話題が尽き

かけていたまさにその時だった。

いつの間にかソレイユを追い越して先頭を歩いていたイザヤの足が急に止まり、唸りながら次に振る話を捻り出していたソレイユはあやうく小さな背中正面からぶつかりそうになる。

「どっ、どうしたいいきなり立ち止まって？」

「誰かいる」

そう短く告げたイザヤの視線の先には、数少ない綺麗な形を保ったままの家。

太い幹のような壁にぽっかりと空いた穴はおそらく窓だろう。そこから伺える室内に見えた人影に、ソレイユはかすかに目を見開いた。

「エルフか？」

「会ってみればわかることだ」

言うが早い、イザヤは円形の壁に沿うようにつけられた階段を昇り、扉を軽く叩くと、迷いなくそれを押し開ける。

その一部始終を呆然と見つめていたソレイユは、半開きになった口から乾いた笑みを零してイザヤの後を追って階段を昇った。

「たまに大胆だよな、イザヤ」

独り言同然の呟きを溜息と同時にもらしたソレイユは、戸口を入ってすぐの場所にいたイザヤの背後に立つ。同時に彼女の視線の先にいた、椅子に腰をかけている一人の老人の存在に気付いた。

「やっぱり、エルフだったな」

年のわりにしっかりと生え揃った髪の毛の隙間から真横に伸びる長い耳はエルフの特徴だ。

そして、エルフは例外なく美しい容姿をしているというのは、どうやら老人にも当てはまるらしい。しっかりと皺の刻まれた顔は、しかし凜然とした瞳を持ち、若かりし頃は相当な美貌の持ち主であったことをうかがわせている。

老エルフはイザヤからゆっくりと視線を外すと、ソレイユを見すえて口を開いた。

「運が良いな、魔の子。おぬしが女なら、わしはおぬしを殺すか、叶わぬのなら自ら死かの二択を選ばねばならなかった」

しゃがれてはいるが、よく通る声だった。老エルフは長い顎ひげを撫でながら口元に笑みを浮かべる。

「もっとも、このような老体にそんな心配は無為なものだがの」

「どういふことだ、爺さん。あんた、死ぬほど女嫌いなのか？」

「……おぬしに語る意味はあるまい。――それよりも、わざわざこんな場所まで足を運んだわけを聞こうではないか、人の子よ」

とても好意的には見えない目を向けられても、イザヤは物怖じすることなく、正面から老エルフを見返した。

「回りくどいのは好まない。用件だけを言う」

はっきりと言い切り、イザヤは包帯の下に隠れた蒼眼を鋭く細める。

「ヘノアの物語」に語り継がれる幻の楽園について。私が知りたいのは、その所在ただそれだけだ」

老エルフの目がゆっくりと見開かれ、その口元がゆっくりと弧を描いた。

1-16 集まる、エルフの里

「これは、ふむ。――なるほど幻の楽園とは」

わずかばかりの沈黙のあと、老エルフは感慨気に頷きながら深く背もたれに身体を預けた。

「わしも老いたものよ。昔は目を見れば大抵のものの考えていることが読めたというのに。しかし、そうさな。わざわざこんな場所を選んで入ってきたという時点で、おぬしたちの目的はエルフ界ではないということとはわかりきっていたことか」

「意味がわからないな。どうしてここを選んだらエルフ界が目的じゃないと言えるんだ？」

老エルフの物言いに違和感を覚えたソレイユが口を挟む。

イザヤもそれは引っかけかかっていた。だから特に言及せず、視線だけを老エルフへと向けると、皺が深く刻み込まれた口元から、ほう、と意外そうな呟きが零れ落ちた。

「この里が、もはや“道”として機能しておらぬことは知らず、ここを選んだか。つまり、おぬしたちはわしがこの場所にいるということだけを知って来た、ということか」

“道”として機能していない？ それは、この里がエルフ界と繋がっていないということか」

「然り」

頷く老エルフ。

「おぬしたちも気付いていたのではないか？ この里の異常にな。」

ここは、エルフ界より切り離された。じき、崩壊するだろう。里を覆う異常は、その前触れにすぎぬ」

「この里の有様も、その崩壊の影響か？」

ソレイユの問いに、老エルフは首を振った。

「逆だ。この里の有様こそが、崩壊の原因。里としての役目を果たせなくなったこの地は、もはやエルフ界にとって意味をなさないものとなった。故の、現状だ」

つまり、何かしらの原因で里を襲った惨劇が要因となり、エルフの里は機能を失ってしまった。利用価値のないこの里をエルフ界が放棄したことにより、元々作られた場所である里はその形を保てなくなった、ということだろう。

生命に死を感じさせるほどの澄み切った空気も、命の気配がしない森も、その結果でしかなかったのだ。

「爺さん、他にエルフはいないのか？」

「見ての通りだ。もう、何年も前からわししか残ってはおらんよ。道が閉ざされる前に、エルフ界へと帰っていった」

生活感が感じられない部屋を見渡し、老エルフは深く息をついた。

「あなたは、帰ろうとは思わなかったのか？」

夕立のような静けさで、イザヤは老エルフに尋ねた。

老エルフはまだ幼さの残る人間の少女の顔を薄れつつある視界に納め、寂しげな笑みを浮かべる。

「わしの帰る場所は、ここ以外にありはせぬ。家族も、友も、すべ

「ここで眠っておるのだからな」

彼の言葉が意味するものを汲み取れないほど、イザヤは疎くはない。そうか、と一言告げると、視線を足元に落とし、しばし黙してから顔をあげた。

「老人、私はあるエルフを探してここへ来た。幻の楽園について、研究を重ねているもの。そのものが、この地にいると聞いて――あなたがそのエルフで相違ないか？」

「いかにも。確かにわしは、〈ヘノアの物語〉について研究を重ねていた」

ここへきてようやく得られた確かな手ごたえに、イザヤは胸の奥がくすぶるのを感じた。

長い間、くもの糸のような細い糸を掴んでは切りを繰り返してきた中で、ようやくしっかりと掴める糸を手に入れたのだ。

果たしてその糸の先には何が待ち構えているのか。

楽園か地獄か。光か闇か。真か偽か。

しかし、そんなことはイザヤにとってどうでもいいことだった。

彼女はただ、目指すべき、歩くべき道を求めているだけなのだから。

「教えてほしい。楽園は本当に消失してしまったのか？ もしそう

でないのなら、どこにある？ 人間界か、魔界か、それとも――」

「急くな、人の子。先に言うておくが、わしも楽園の確かな場所は知らぬ。楽園の有無も定かではない。だが、わしは楽園はあると思っ
ておる」

老エルフの落ち着いた口調と態度に、イザヤは自分が焦っていたのだと自覚する。乗り出しかけていた身を元に戻し、唇を結んだ。

「――すまない」

「事情があるようだな。まあ、おぬしに悪意がないことはこの老いた目でもわかる。無理に追求はせぬよ」

イザヤと老エルフの会話を、一步引いた場所で聞いていたソレイユは、イザヤの意外な一面を見たような気がしていた。

ソレイユやリオといるときは不遜、とまではいかずとも、それなりに不躰な態度で接するイザヤだが、この老エルフに対しては、はつきりとした年上への敬意がある。

言葉遣いこそ普段の彼女とさして遜色はない。しかし、会話の中で所々顔を出す真摯な答えは、ただ幼い頃から教団に追われ続けて生きてきたのでは決して身につくことのない礼儀をソレイユに感じさせた。

（本当に、読めないやつだな）

友と呼ぶには短く、他人と割り切るには長すぎる期間をともに過ごしてきたのだが、まだイザヤという人間について理解できていることがあまりにも少なかった。

唯一わかることと言えば、イザヤの目的が“エデンを探すこと”だということ。――そして、彼女の本質は優しい人柄である、ということだ。

それは、これまでの時間を考えればあまりにも少ない情報。しかし、ソレイユには、イザヤが信じるに値する、信じたいと思える人柄であるということがわかれば、それだけで十分だった。

己が信じると決めたものを信じ抜く。

ソレイユが掲げたこの信念を貫き、またその先にあるものを探し

出す旅路にイザヤほど適任な連れ添いは他にいない、とソレイユは確信していた。

そして、何よりもソレイユ自身が無意識のうちにイザヤに惹かれていたのだ。

ヒトの性に絶望し、嘘の汚濁にまみれながらも、それでも己を保っている、一人の少女の強い姿に、ソレイユは月を見た。

宵闇の中でも光を失わず、凜然とした輝きをもって空に在り続ける月。

しかし、月は自身の力では輝かない。何かが、月を照らし、光を放たせているのだ。

だとすれば、イザヤにもまたあるはずだ。彼女を闇の中でも迷わすことなく導く、道しるべとなっている光。信じることをやめたイザヤがただ一つ、今も信じているものが。

その光源は、果たしてどこにあるのだろうか？

それもまた、ソレイユの中でくすぶる疑問の一つだった。

（あんたはいつたい、何を信じてそこにいるんだ？）

小さい背中を見つめながら、ソレイユはぼんやりとそんなことを思っていた。

※

里の入り口にて体を休めていたリオは一向に改善へと向かう様子のない頭痛に顔をしかめ、どうせ辛いのなら、と鉛のように重い体を背もたれにしていた木を使いながらなんとか持ち上げた。

（これは、この土地のせいだけではない）

この清浄な空間は確かに魔族であるリオにとっては毒だ。だが、ソレイユが少しの不調を訴えたときり平然としているところを見ると、おそらくこの頭痛の原因は別にあるのだろう。

（――あの、記憶のせいかな）

〈全の回廊〉で見た記憶が、脳裏を掠める。

同時に鋭い痛みを伴う頭を抑え、リオは強く目を瞑って振り払おうとするが、それは金属にこびりついた錆びのようにしつこく、剥がれることはなかった。

思考が痛みによって妨げられる。立って歩かなければ、という意思はまるで紙を引き裂かれるように散り散りに消え去っていく。

そのような精神状態だったからこそ、リオは気付かなかった。平常ならば決して気付かぬはずはないほどの距離まで、足音が迫っていることに。

「リオ様……？」

だからこそ、声をかけられたことでようやく気付いた自身の情けなさに、リオはかすかに表情を曇らせた。

そして、不安気な顔で見つめてくる少女に顔を向けるため、リオは少しでも首をあげた。

「ルカ、ですか。これは情けない姿を……見せてしまいましたね」「そんなこと――」

言いかけて、ルカは両手でリオの身体を支えると、ゆっくりと木にもたれかからせた。

「いったいどうしたのですか、リオ様。イザヤ様とソレイユ様はどこに？」

こんな状態のリオを放ってどこかへ行くような二人ではないことなど、ルカとて十二分に承知していたが、現実には彼らはいない。

ルカの整った眉が曇ったのを敏感に感じ取ったリオは、首をふってから微笑む。

「違いますよ。二人に先に行ってもらったのは私です。あなたも気付いていると思いますが……どうもここの空気は、私には合わない。ですから――」

「わかりました。わかりましたから、無理に喋らないでください」

早口でリオの言葉を遮ったルカは、持っていた荷物の中から薄緑色の液体が入った小瓶を取り出した。

「気休め程度にしかありませんが、鎮静水です」

そして、栓を抜いてリオの口に近づけると、薄く開いた唇の隙間から零れないように流し込んだ。

無味無臭のそれは水と変わりなかったが、ひんやりとした液体が喉を通る感覚と共に、痛みがすっと和らいでいくの感じ、リオは軽く目を見張った。完全に治ったわけではないが、それでも劇的な効果だ。

リオの反応を見て、効果のほどを理解したのだろう。ルカは胸を撫でおろして柔らかな笑みを見せた。

「思ったよりも効いたみたいですね。良かった」

「ええ。礼を言います、ルカ。――しかし、なぜここに？」

リオとしては、無意識のうちに口をついて出た純粹な疑問だった。宿屋での態度からして、ルカはこの場所へ来ることを拒んでいたように思えたからだ。

しかし、その何気ない疑問は、ルカから表情を奪った。色を失くしたルカの顔に、リオは木に預けていた背を離す。

「どうしました？」

「あ、いえ……なんでも、なんでもありません。わたしはその、あなた方が気になって様子を見に来たのです。その時、入り口となる大樹の異変に気付いて……」

言いながら、ルカは荒れ果てた里に目を向ける。その瞳は覚束なげに揺れ動き、おびえているように見えた。

「まさか……あのまま、変わっていなかったなんて……」

「ルカ？」

リオの呼びかけにルカは弾かれたように視線を戻す。

「す、すみません。どうやら、無駄足をさせてしまったようですね。この里は既に廃棄されているようです。ここにはもう、誰もいないでしょう」

「……いえ、それにしては二人の帰りが遅すぎます。おそらく、誰かを見つけたのではないかと思います」

ルカの変にうろたえている態度に内心で不信を抱きつつ、リオはとりあえず思ったままのことを口にする。

すると、ルカは大きく目を見開き、突然小さく震え始めたのだ。そのあまりの驚きように、さすがのリオも声をかけずにはいられなかった。

「ルカ、どうしたのですか？」

「……そんなはずない——でも、他に誰が……」

ルカの瞳には、もうリオは映っていないかった。小声でなにか一言二言呟いたかと思うと、リオが止める間もなく地面を蹴って里の中へと走り出したのだ。

リオは数瞬の間呆然と目を瞬かせていたが、

「なんだというんですか、いったい」

小さな溜息を吐き出し、鈍痛を訴える頭を無視してルカの後を追った。

思ったよりも速いルカに遅れをとらないように走っていたリオは、無残な姿となった里の様子を横目で見ているうち、軽く目を見開いて足をとめた。

そして、すぐに視線を正面に戻してルカの走り去った方向を確かめると、それ以上追うことはせず、その場でゆっくりと回り、里を見渡す。

（この光景は……どこかで、見たことがある）

この、嵐が過ぎ去ったような傷跡。その既視観にリオは眉をひそめる。

そうしてさらに視線を巡らせた彼女は、ふいに見上げた空に信じられない光景を見た。

「太陽が——ない」

晴天の空には、しかし本来あるべきはずの太陽が存在しなかった

のだ。

これもまた、この空間を襲う変調の兆しかとも思われた。しかし、もっと説明がいく仮説が既にリオの中で組み立てられつつあった。

（この空間はあくまでも作られたもの。だとすれば、太陽など最初からなかったのでは……？）

太陽を作るなどということは、ヒトの手には余る行為。それは、世界を作るようなものだ。それこそ神でなければなせぬ技だろう。だとすれば、最初から太陽など存在しなかったと考える方が遥かに納得がいく。

太陽のない空を見上げ、リオは、なら、と口の中で呟く。

（当然、天候の変化など存在しないはず）

この場所は、あくまでもただの空間。言い換えれば、外を模した広大な部屋だ。何もない場所に土を盛り、自然を作り上げただけの箱。

そんなものに、太陽はおろか、天候などあるはずがないのだ。

しかし、この里は、まるで巨大な嵐に通り抜けられたような痕跡を残している。自然災害などあるはずがない、この空間で。

リオはもう一度頭の中で嵐、という単語を繰り返すと、直後、弾かれたようにふたたび里を見渡した。

そして、地面に転がる根こそぎ引き抜かれたような倒木をその目に捉えたリオは、小さな笑みを零す。

「なるほど、どうりで見覚えがあるはず。それに、嵐。——あなたの言葉は間違いではなかったようですよ、主様」

あくまでも仮説の域を出ない推論。しかし、嵐の爪痕、ルカ之行

動の節々に現れる違和感、それら全てはリオの中で行き着いた推論を後押しする材料となり、彼女に確信を与えつつあった。

その真実を確かめるため、リオは今度こそルカが去っていった方向へ向けて走り出した。

※

木製の扉が壊れんばかりの勢いで開かれたのは、これから本題に入ろうという、まさにその時だった。

肩で息をして戸口に立っているエルフの少女に、イザヤもソレイユもすぐに反応できなかった。

それは突然のことだったからという理由もあるが、それ以上に少女の切羽詰った表情が、彼らの知るエルフの少女からは想像できないものであった方が理由としては大きい。

けたたましい音が狭い室内に響き渡ってから数秒、静まり返っていた場に音を戻したのは、イザヤだった。

「エルフ？」

半ば疑問系であったのは、仕方がないといえよう。

その呼びかけにルカは横目でイザヤとソレイユを捉えはしたが、すぐに逸らしてしまった。そして、その両の目は、真っ直ぐに、椅子に腰掛ける老エルフへと向いている。

「どうして、ですか……お爺様」

予想だにしない一言に、イザヤもソレイユも目を剥く。しかしルカの視界には、もはや老エルフしか入っていないようだった。

「お爺様、ここは崩壊——いえ、既に消滅へと向かい始めてます。それなのになぜ……」

「なぜ？ それはこちらの質問だ。なぜ、戻ってきた、ルカよ。よくもおめおめとわしの前に顔を出せたものだな！」

あまりの剣幕にルカは大きく肩を竦ませたが、それでも負けじと声を張らせた。

「それは、わかっています！ ですが、お爺様、このままここにいてはあなたは——」

「黙れ！ きさまのような疫病神にその名で呼ばれたくなどない！
「っ」

今度こそ、ルカは大きく目を見開かせて口を閉ざした。

「お、おい、爺さん。そんなに怒鳴るなよ。ルカも怯えているし、身体に障るぞ」

小刻みに震える肩を横目で見たソレイユが宥めるように言うが、

「黙っておれ小僧！」

「……ああ、スマン」

すぐに引き下がった。

「おい……」

「……いや、わかってる。自分で一番よくわかってるから、それ以上言うな」

追い討ちをかけるように向けられたイザヤの白い目に、ソレイユは涙目になった目元を覆いながら情けない言い訳を口にする。

イザヤは額を押さえて溜息を吐くと、無言のままルカを睨み据える老エルフの前に立った。

「話も聞かず、疫病神扱いか。何があったかなど私は知らないが、一方的過ぎるだろう」

誰かを庇い立てするなど、らしくない。

そう思いながらも、イザヤにはこの状況を見過ごすことはできなかった。

今のルカの姿は、幼き日の自分の姿によく似ていた。誰も、イザヤの話など聞いてはくれなかった。蒼眼というだけで、イザヤには対話する機会さえ、与えてくれはしなかったのだ。

「……イザヤ……さま……」

背中から聞こえたルカのか細い声に、イザヤは眉間に寄せた皺をより一層深くした。

「おぬし、ルカを知っておるのか。なるほど、得心がいった！ おぬしたちにこの場所を教えたのは誰なのか！ 何を企んでいる、ルカ！」

「た、企みなど……わたしは、ただ大樹の異変に気付いて、イザヤ様たちを連れ戻しに、きた……だけです」

「嘘をつくな！ どうせまた自由に暴れまわれる場所を探していたのだろう！？ この棄てられた地で、次なる生贄としてこやつらを選んだというわけか！」

細い喉を軋ませ、なおも老エルフは怒鳴った。

その目は血走り、直接向き合っているわけではないイザヤですら、彼の視線から鮮烈な殺意を感じ取ることができる。

先ほどまで、穏やかに、また長い年月を生きてきたであろう貫禄をもってイザヤと言葉を交わしていた年老いたエルフの姿は、今はどこにもなかった。

「待て！ そのエルフにエデンの場所について聞いたのは私だ。そいつは嘘などついていない！」

これだけは確信をもって言える一言だった。
だが、

「信じられるものか！ ルカはこの里を壊滅させ、このような惨状にした張本人なのだからな！」

「――え？」

老エルフの叫びは、イザヤの思考を停止させるには十分過ぎた。
嵐の前触れのような静けさが、あるはずのない重みをまもってイザヤの頭上から降り注ぐ。イザヤの手は、無意識に左目に宛がわれていた。

「それは……本当なのか、ルカ」

呆然と立ち尽くしていたソレイユが、喉の奥から搾り出したような声で問う。

ルカは俯いたまま唇を噛み締めていたが、手を自分の胸元へと持っていくと、服の上から胸を強く握り締めて頷いた。

「……はい」

彼女の言葉が真実であることは、イザヤの左目が一番よくわかっていた。

1-17 流れる、嘘の涙

イザヤとルカの視線が交わる。だが、それは一瞬のことで、ルカはすぐに顔を俯かせてしまった。

「これで理解したであろう。ルカは、生まれ育った里を襲い、罪なき数多の同胞の命を奪ったのだ！」

老エルフの憤怒が、空気を震わせる。彼が握っていた木製の椅子の肘掛にひびが入る音が、イザヤの耳にはっきりと届いた。

いったいこの老体のどこにそんな力があるのかと老エルフの手元を見たイザヤは、長いローブの袖から覗く手に目を細める。

（鉄——か）

肘掛を握り潰していたその手は、しかし手と呼ぶにはいささか無骨すぎた。

まるで鉄の塊のように黒く硬質化し光沢を放つ塊は、まぎれもない神魂の力。その正体はおそらく、“鉄の神魂”。無意識に能力を発現させてしまうほど興奮状態にある彼は危険だ。イザヤは警戒を強めた。

老エルフがいる部屋の中央からルカのいる戸口までの距離は大腿で歩けば五歩とない。神魂の潜在能力に関しては三種族随一と言われるエルフ。いくら老体といえど、この狭い部屋でかかってこられると厳しいものがある。

ソレイユもまた場を覆う張り詰めた空気と、イザヤの心配に感付いたのだろう。静かに後ろに下がり、ルカの傍に移動した。

「大罪人としてエルフ界から追放されたきさまが、こうしてこの地

に足を踏み入れることは許されぬはずだ！ 何度罪を重ねれば気が済む！？」

吊り上げられた眉の下で、老エルフの目がぎょろりとルカを睨む。

「も、申し訳……ありません……」

「謝罪など聞きたくもない！」

ルカの言葉を老エルフが頑として聞き入れようとはせず、ただ怒りに身を任せて叫び続けている。

この惨状を引き起こしたのはルカであることは、まず間違いないのだろう。

しかし、どこか釈然としない気持ちがイザヤの心中で渦巻いていた。

短い、たった一日程度の付き合いだったが、それでもルカが何の理由もなしに里一つ滅ぼすなどということは考えられなかった。そもそも、たった一人のエルフに、それこそ何百といったはずのエルフたちが揃って殺されるというのもおかしい話だ。同じ里の同胞ということもあり油断があったと仮定しても、相手は一人で、しかもまだ幼い少女なのだ。

「爺さん、ルカの言い分は聞いたのか。俺にはルカが理由もなくそんなことをするとは思えないけどな」

唐突に、ソレイユが老エルフに問い詰める。

イザヤは場を弁えないソレイユの発言に啞然としつつも、同じ疑問を抱いていただけに耳を傾けずにはいられなかった。

老エルフはソレイユの顔を見て鼻を鳴らすと、ルカを高圧的に見下しつつ口を開く。

「言い分などあるはずもない。ルカは、秘められた力に魅せられ、飲み込まれた。自ら狂人となって里を滅ぼしたのだ」

「秘められた、力？」

遠まわしな表現に、イザヤは眉根を寄せる。その後ろで、ルカの身体が震えた。

怯えた表情を見せる孫娘に、しかし老エルフは毅然とした口調で続ける。

「〈嵐の神魂〉。数ある神魂の中でも、光や闇について少ない魂だ。若いおぬしたちには聞き覚えが……」

「嵐？ 爺さん、今、嵐って言ったのか？」

老エルフの話を遮ったのは、真紅の双眸を何度も瞬かせたソレイユだった。

ソレイユは真っ直ぐに老エルフを見すえていたが、彼が頷くやいなや、とたんに眉をつりあげた。

「そいつはおかしいな、爺さん。確かにルカに責任がないとは言わないさ。けどよ、ルカの神魂が嵐だというのなら、全ての責任がルカにあるとは言わせるわけにはいかないな。それとも、あんたほど長生きしているエルフが、まさか嵐の神魂の特徴を知らなかったのか？」

「そんなはずはない。知っているに、決まっているだろう」

「だったら、どうして――」

「待て、どうということだ？」

完全に取り残されていたイザヤが振り返ってソレイユを見る。
ソレイユは珍しく憤りの感情を見せつつ、口を開いた。

「あんたも知っているだろ。〈神魂〉は生命が持つもう一つの魂、つまり聖霊の魂で、そいつはふだん俺たちの中で眠っているんだってこと」

「あ、ああ。それは、知っている」

いったいそれがこの話と何の関係があるのか推測できないまま、イザヤは頷く。

「私たちは、その聖霊の魂を行使し、それぞれの能力を発現させているんだろう？」

「そうだ。眠っている聖霊から自分の意思で力を引き摺り出して力を使っている。あんたも例外じゃない。けど、〈嵐の神魂〉は違う。――嵐の聖霊は、眠らないんだ」

それがどういふことかわかるか？
言葉を切ったソレイユは、目で、イザヤにそんなことを尋ねてきた。

東の間考え込んだ後、イザヤが首を振る。ソレイユは頷いた。

「本来、強力な力をもった聖霊を身体の中に入れていること自体が、無理のある話なんだ。それがなんとかできているのは、聖霊が眠っているからなんだとさ。だが、聖霊が覚醒している状態は常に力が溢れ続ける。閉まらない蛇口と同じだ。そして、溜まった力が身体の許容量を超えたとき、暴走が起きる。自分自身の意思とは無関係にな」

空気が、急に薄くなっていくような錯覚がイザヤを襲った。とたんに、心臓が大きく脈打ち、ひどく耳障りな音が鼓膜に叩きつけられる。

「じゃあ、エルフが里を襲ったのは……」

ふたたび視線を老エルフへと戻したソレイユは、腰に手をあてて言った。

「その暴走が原因だろ、爺さん？」

老エルフが頷いた瞬間――イザヤの中で何かが切れた。

「ふざけるな」

腹の底から急速に湧き出した怒りはそのまま喉を昇って舌を滑り、口から罵声となって放たれた。

「そんなの……どうしようもないことだろう？ おまえはこのエルフが好きでそんな力を持って生まれてきたと思っているのか！？」

理不尽。

イザヤの胸の内を埋め尽くすのはその一言と、あとは言葉にできないほど混ざり合った感情だった。

信じられない、とイザヤは怒りに顔を歪める。

どんな理由があつたにせよ、ルカが自身の意思で里を滅ぼしたのなら責められても仕方がないのかもしれない。しかし、これは、ルカの意味とはまるで無関係だ。

彼女は生まれただけだ。他のエルフと同じように、この世に生を受けた、それだけのこと。

ただ、その時、どんな因果か嵐の神魂を宿してしまった。望んでなどいない。選んでなどいない。

ルカは、与えられたただけだ。

「何が罪を重ねるだ！　もしあいつのしたことが罪ならば、生まれてきたことそれ自体が罪だと言っているようなものだろう！？」

イザヤは今や、完全に、ルカと自身を重ね合わせていた。

生まれ持った力のせいで、自分ではどうしようもないもののせいで、人生を狂わせられる。そんな理不尽が許されていいはずがないのだと、イザヤは逃げ隠れ住む日々の中で思い続けていた。

憤りを露にするイザヤとは裏腹に、老エルフは落ち着きを取り戻した面持ちで言った。

「あのようなことが起きぬよう、ルカには魂縛石を使った装飾品による封印が何重にも施されていた。そうすることで、聖霊を限りなく眠りに近い状態にし、暴走を未然に防いでいたのだ。だが……」

顔を上げた老エルフの目には、冷たい光が宿っていた。

「あの日、ルカは魂縛石の封印すら破る力を御しきれずに暴走した。わずかな時だ。わしがエルフ界に所要を済ませに行き、帰るまで――たった数刻の間に、ルカは里に住む同胞ごと、里を壊滅させたのだ」

「だからそれは――」

「同胞殺しは重罪だ。万一の時は、自害するよう、わしは幼い頃からルカに言ってきかせていたというのに」

老エルフの放ったその一言に、イザヤは目を見開く。

この老人は、いったい何を言っているのだろうか？

この祖父は、孫娘に、何を言ってきかせたと言ったのだろうか？

「わしと交わした唯一の約束さえ、そやつは守れなかった。自分が生かされているということを、まったくもってわかつてはおらんか

った」

イザヤの耳に、老エルフの声はひどく遠くに聞こえ、背中から聞こえるルカの必死に嗚咽を押し殺している音だけが、鼓膜の奥でざらつくように反芻している。

たった一つ交わした約束が、自害の約束。ふざけた話だ、とイザヤは声なく笑った。

「人の子よ、おぬしは言ったな。生まれたことが罪だというのか、と。――否定すまい、罪だ。本人の意思など関係ない。ルカが持った力は罪であり、現実には災いをもたらしたのだ！」

ルカが何か言おうと口を開いたが、零れたのは掠れた息だけだった。目尻に溜まった涙を流すまいと歯を食い縛るルカの瞳には、幼い日に多くの話を語って聞かせてくれた祖父の姿はぼやけて見えた。

「ルカよ」

刹那、老エルフの鉄の腕が目に見えぬ速さで伸び、瞬きの間にルカの首を鷲づかみにした。その拍子に髪留めが外れ、長い翡翠色の髪が舞う。

「ふ――く……」

小柄な身体が持ち上げられ、ルカの唇から苦しい呻き声が喉の奥から押し出される。

「きさまっ！」

「やめろ、爺さん！」

イザヤとソレイユがすぐさま駆け寄ってルカを解放しようとするが、ルカの細い首筋を締め上げる鉄の腕はどうにもならない。

苦悶を滲ませながら、それでもルカは抵抗一つしなかった。

老エルフはそんなルカを冷めた目で見すえ、静かな、深い憎しみの念を籠めて言った。

「わしは、後悔しておる。やはり、おまえは――」

「聞くなっ！」

咄嗟に叫んだイザヤが、一呼吸の間に作り出した黒紫の剣で鉄の腕を斬り落とす。瞬間、ルカの首に巻きついていた手は、黒砂となって床に落ちた。

同時に聞こえる発砲音。

叫びと、切断音と、銃声と。

狭い部屋を轟かすそれらの音は、しかし本当に消し去りたい音を掻き消すことはできなかった。

「生まれてくるべきではなかった。掟を破ってでも――殺しておくべきだったのだ」

頭に血が昇る。激しく煮え滾る衝動は、イザヤに残った欠片ほどの理性ではどうしようもなかった。握られている剣が、まるで彼女の感情に呼応するかのように揺れ動いている。

本能の赴くまま、頬を掠めた銃弾によって刻まれた傷口から流れる血を手の甲で拭う老エルフに斬りかかろうとしたイザヤを踏みとどませたのは、か細い、蚊の鳴くような声。

「イザヤ様……どうか、どうかおやめください」
「ルカ……」

怒りのあまり言葉すら出ないイザヤに代わり、ルカに声をかけたのはソレイユだった。

ルカは短く息を吸い込むと、ソレイユを、そしてイザヤを見上げて微笑んだ。

「わたしなどのために、あなたがそのようなことをする必要は……ありません。それに、おじ——里長の言うことも、もっともなことです」

「……おまえっ」

言い返そうとするイザヤに、ルカはなおも宥めるように首を振る。

「だって、私がいなければ失わずに済む命があった。それは、どんなに目を逸らそうとも消えない、どんなに祈ろうとも変えようのない……事実なのですから」

「そこまでわかっていているのなら、これ以上言うことはない。おぬしの判決は九年前に出ている。早々に立ち去り、異なる時間を生きる人の世で朽ちるがよい」

「はい。——ただ、最後に一つだけ。このお二方は〈エデン〉を探しております。あなたに会いに来たのも、それだけの理由です。どうか、それだけは」

両の指を揃えて深々と頭を垂れ、ルカは埃だらけになった服を払うこともせず立ち去った。

やけに大きく響いた、扉を閉める音。その余韻が消えた頃、老エルフは疲れきった声で言った。

「……聞く気があるなら——」

彼の言葉を最後まで聞くことなく、イザヤは老エルフを鋭い目で

睨みつけてから狭い家を飛び出した。

残ったソレイユは手に持ったままだった銃をしまい、振り返った。

「邪魔をしたな、爺さん」

「忠告しておこう。ルカに関わるな。暴走したあやつのそばに居れば、まず間違いないで死ぬ」

「それを決めるのはあんたじゃない。俺たちだ。ルカのそばに居るも居ないも、生きるも死ぬもな」

言って外へ出たソレイユは、扉を閉める間際に聞こえた老エルフの低い声に、片眉をあげた。

（……俺が、ルカに近づくな？　なんだそれ、さっきと言ってることと同じだろ）

肩を竦めたソレイユは、階段下の物陰に向かって声をかける。

「もう体調はいいのか、リオ？」

「はい。こちらの環境にも身体が慣れてきました」

物陰から姿を現したりオは、ソレイユを見つめて微笑んだ。

「そいつは良かったな。それで、イザヤとルカはどっちに行ったんだ？」

ソレイユが尋ねると、リオは黙って来た道を指差した。一つ頷き、ソレイユは駆け出す。そのあとをしっかりとついてくるリオに、ソレイユは事も無げに言った。

「ルカは〈嵐の神魂〉だった」

「そうですか。やはり——彼女と同じだったのですね」

既に答えに辿り着いていた従者は、金の双眸を細めた。ソレイユは意外そうに目を瞬かせた。

「気付いていたのか？」

「ええ。ルカを発見したときのことを思い出して、確信しました。そして、彼女が何をしてしまったかも、おおよそは」

言われて、ソレイユは森の中で荒れ狂う暴風を受けたことを思い出した。晴天の空の下で、一方から吹き荒れる風が、森の木々を脅かしていたときのことを。

そして、風が治まったとき、中心地にいたはずなのに、なぜが髪の毛すら乱れずに気を失っていたルカの姿を。

そればかりではなく、ルカが人間界にいた理由も、一緒にエルフの里へ来たがらなかった理由も、今思えば、全て説明がつくことばかりだ。

そこまで考え込んでいたソレイユは、ふいに大気が震えたように感じた。刹那、地面が鳴動する。そこかしこから聞こえる、何かが崩れる音にやれやれと肩を竦めた。

「リオ。これは一仕事あるぞ」

「……わかっています。こうなるような気は、していました」

心底呆れたように溜息を吐くリオ。ソレイユはそんな彼女の肩を軽く叩く。

それが合図であるかのように、二人は里の中心から渦を巻いて空へと立ち昇る風の渦めがけて疾走した。

※

ルカを追って辿り着いた先は広場のような場所だった。壊れた噴水を中心に円形に広がる敷地は荒れ果て、今は見る影もないが、おそらく以前はエルフたちの交友の場として使われていたことだろう。イザヤは噴水のそばでようやく足を止めたルカの背中を見つめながら、かけるべき言葉を見つけれずに立つ尽くしていた。

さっきまで燃え上がるように暴れまわっていた憤りの感情は冷えた空気に晒されて静まり、残ったのは胸を締め付けられるのような寂寥感。

何か言おうと口を開いては閉じるを繰り返すイザヤに、ルカはふり返らないまま言った。

「申し訳ありません、イザヤ様。無駄足どころか……不快な思いをさせてしまったようです」

何も感じない、空っぽな声だった。

「別に、おまえが気にすることじゃ——」

言いかけて、イザヤは何か不気味な音を聞いた。びしり、と。それは、地面に亀裂が入るような、そんな音。

眉をひそめてあたりを見渡したイザヤは、最後にルカへと視線を戻し、考えるよりも早く地面を蹴っていた。

一瞬でルカのそばまでたどり着くと、手首を掴んですぐにその場から離れる。直後、ルカの足元に入っていた亀裂は大きく口を開け、広場を二つに切り裂いた。噴水が形を崩しながら亀裂に飲み込まれ、消えていった。あと少しイザヤが動くのが遅ければ、ルカも同じように亀裂に落下していたことだろう。

イザヤは他にも亀裂が入っていないかを確認すると、ルカの手を離す。

「……これは、おまえの言っていた“消滅”と何か関係があるのか？」

「はい。ここはもう、エルフ界から棄てられた地です。おそらく九年前に、すでに決定は下されていたのでしょう」

遠くで、家屋が沈むのが見えた。それを皮切りに、地鳴りの音が里中に鳴り響く。

「棄てられた里は、ゆっくりと崩壊を始め、いずれ消滅します。わたしたちは今、この里の最後の瞬間に立ち会っているのです」

いったい、彼女はどんな気持ちでこの光景を見ているのだろう、とイザヤはエルフの少女を見つめる。

故意ではなかったとはいえ、里をこのようにしてしまった原因を作ってしまった自分を、おそらくルカは責め続けている。

イザヤはルカに全責任があるとは思っていない。むしろ、彼女は被害者だ。

しかし、いくらイザヤがそう言ったとしても、無駄なことだろう。他人からの慰めは時に心を楽にはしてくれるが、解放はしてくれない。

まして、イザヤには、心を楽にしてやれる慰めの言葉すらわからなかった。これまでの人生で、そんなものを必要としたことがなかったからだ。

それでも、何か言わなければ。

そう思ったイザヤが、

「大丈夫か？」

そんな、気の利かない、わかりきったような問いをしてしまうのも、仕方がないと言えば仕方がないことだった。

ルカは崩れゆく里に向けていた視線をイザヤに戻してから、頷いた。

「はい、もちろん平気です」

蒼眼と、胸が軋むように痛む。

イザヤはさらに続けた。

「辛くはなかったのか？」

「いいえ。むしろ、罰を受けていることに、救われていました」

また、痛みが走った。

「寂しいと感じなかったのか？」

「いいえ。そばに居て欲しいと思える人は、いませんでしたから」

蒼眼から受ける痛みよりも、もっと痛々しい笑顔を浮かべるルカに、イザヤは最後の質問をする。

「助けて欲しいとは、思わなかったのか？」

ルカはゆっくりと首肯した。

「まさか。わたしは罪人です。――救われたいという気持ちなど、わたしには……」

イザヤは瞳を閉じる。包帯に隠れた左目から、涙ではない何か

溢れ出たのを、確かに感じた。

（ああ……こんなに、わかりやすい嘘もあるんだな）

包帯の上から左目を押さえつける。じわり、と手のひらから伝わる布を濡らす感触。

「それよりも、イザヤ様。ここはもう危険です。手遅れとなる前に、ソレイユ様とリオ様を連れて人間界へお戻りください」

ルカは、急に黙り込んだイザヤに首をかしげつつ、里の出口を指差す。

徐々に広がっていく、広場を二つに裂いた地割れに視線を落とし、イザヤは一向に動く気配のないルカに声をかけた。

「おまえは？」

「里長を残してはいけません。心配なさらずとも大丈夫です。わたしたちもすぐに脱出しますから」

柔らかに微笑むルカに、イザヤの柳眉が曇る。

「どうして、おまえは――」

言いかけて、イザヤは突然背筋を這うように走った悪寒に、半ば強制的に口を閉ざされた。

痛みさえ感じるほどに張り詰めた空気に、イザヤは原因を探ろうと意識を研ぎ澄ませ、その正体がすぐそばにあることに気付いた。

「い、ざや……さま」

背を仰け反らせ、瞳孔を開いたルカは、喉の奥から押し出したような声で言った。その尋常ならざる様子に、イザヤはルカの肩を掴もうとする。

しかし、

「逃げて——くださいっ！」

切迫した叫びを耳にしたと同時に、イザヤは強い突風に巻き込まれたように宙を舞った。

何が起こったかなどわからない。ただ気付けば、イザヤは広場から吹き飛ばされて地面に倒れ、全身には細い線のような切り傷が刻まれていた。

無意識に剣を抜いて起き上がったイザヤは、広場へと顔を向け、奥歯を噛んだ。

「くそ……これが、そうか」

イザヤの視線の先には、渦を巻いて空へと昇る風の中で、まるで心が空になってしまったかのような虚ろな表情のルカがいた。

1-18 暴走、渦巻く嵐

(来る――！)

野生の獣じみたイザヤの防衛本能は、頭で考えるよりも早く彼女の身体を動かしていた。

身を屈めた直後、背後にあった木が大きな音を轟かせて地面に落ちる。木の幹を真つ二つに断つたその切り口は、まるで鋭利な刃物で一刀両断されたようだった。

頬から、血と汗が交じり合ったものが滴る。逃げろ、と叫ぶ本能を理性で押さえ、イザヤは奥歯を噛み締めて前を見すえた。

竜巻の中心にいるルカの目に光はない。ただ、空虚な抜け殻のような目で、しかし殺意だけはしっかりとイザヤへ向けている。おそらくこれが、老エルフやソレイユの言っていた“暴走”なのだろう。風の渦に巻き込まれた瓦礫や家屋、倒木が宙を舞い、騒音をたてて地面に落下する。それらの破片から身を守りながら、イザヤは胸の中がずっと温度を失ったのを感じた。これほどの力、この里一つ潰すくらい、わけがないと思ってしまったからだ。

冷徹な殺気が身体を貫き、イザヤは地面を削りながら襲ってくる衝撃波から逃げるように飛び上がった。が、すぐにその判断が失敗であることに気付いた。

瞬きの間にイザヤの眼前にまで迫ってきていたルカは、白い鉄扇を横一文字に風ぐ。

イザヤは咄嗟に足でルカを蹴り、なんとか喉を切断しようとしたそれをかわしたが、無理な姿勢で落下したため、地面に強く背を打ち付ける羽目となった。しかし、痛みに喘いでいる暇など与えてくる相手ではない。鉄扇を立て、イザヤ目掛けて落下してくるルカをイザヤは地面を転がることでかわした。

転がりながら身を起こしたイザヤは、ルカの身体を中心に収束す

る風に危うく巻き込まれそうになるが、剣を地面に刺して堪える。ぎちぎち、と剣が軋む。ルカの周囲に集まった風は見えるほどの流れを作り、渦巻く巨大な円を作り上げた。

例えるなら、それは風の防護壁。ルカを中心とした半径一メートルほどの風の渦は、巻き込んだ倒木を一瞬にして木屑へと変えた。収束する風の流れは止まり、巻き込まれる心配はなくなった。しかし、それはあくまでもルカが動かなければ、という前提でだ。

もし、あのまま突進され、身体に触れようものなら、まず間違はなくさきほどの倒木の二の舞となるだろう。

どうしたものか、とイザヤは顔をしかめるが、ルカは考える時間さえ与えてくれる気はないらしい。

軽く手を振ると、風の球体ごとイザヤに向かって突進してくる。

予測をはるかに超えた速さ。イザヤは避けることを諦め、腰からもう一振り剣を引き抜くと、それをクロスに重ね合わせて構えた。

そして、ルカと衝突したと同時に、剣で風の球体を上へ押し上げるように傾けて軌道をそらすと、そのまま地面に倒れてやり過ぎた。

痺れるような痛みを訴える手に、イザヤは小さな呻き声をあげて剣を落とす。受け流しただけだというのに、この衝撃。真正面から受け止めていれば、剣ごと弾き飛ばされていた。

小さな痙攣を繰り返す手を無理矢理握り締め、イザヤは半壊した家屋に突っ込み、そこに風穴を開けたルカを睨み据えた。

風の渦を纏ったルカは、闇のような瞳でイザヤを見返す。そして、ゆっくりと浮き上がり、イザヤが空を見上げる高さにまで辿り着くと、両手を真横に伸ばした。

その瞬間、冷水を浴びせられたような寒気がイザヤを襲う。ぞわり、と身の毛がよだつ感覚に、しかしイザヤは動くことができずにいた。

逃走へと走る身体を押さえ込む。イザヤの本能は、危険を叫んでいる。

だが、

（逃げるな——逃げるな！）

その衝動を、必死に押し殺す。相反する二つの意思が、今や完全にイザヤの動きを制止させていた。

足が鉛に変わってしまったかのように動かない。いや、動くことを彼女自身が拒んでいた。避けるだけ、そう思って動いてしまえば、この足は自身の意思とは無関係に動き、この場から逃げるだろう。それだけは、決してしてはならないと、イザヤは歯を食い縛って踏みとどまった。

真っ直ぐな視線を向けてくるイザヤに、ルカの瞳がわずかに揺らぎ、光が差し込む。

ルカは、苦しげな表情で身体を震わせ、涙を滲ませ、喉の奥から押し出したような声で言った。

「に、げ……っ」

「逃げない」

迷いなく、イザヤは言い切った。

その言葉に、ルカの瞳に溜まった涙が零れる。
そして、

「——いやああああああああああっ！」

空を裂かんばかりの絶叫と共に、ルカの周囲を覆っていた風の渦が弾けた。——そうイザヤが認識してから、一秒となかった。ルカを中心に生まれた凄まじい暴風は一瞬にしてイザヤを飲み込む。

右も左も、上も下もわからない。嵐の海に飲み込まれたように、イザヤは今、目を開けることも、呼吸をすることすらできず、風の

荒波の中で全身をきざまれながら振り回されていた。

だが、イザヤには全身に走る痛みより、この轟音の中でも確かに聞こえる少女の叫びの方が苦痛だった。

遠のく意識の中で、イザヤは左手に全神経を集中させた。

暴風の外。影という影から、闇が集まる。それらは黒い泡となつて暴風の中へと滑り込み、イザヤの左手に収束した。

それが、しっかりと剣の形となったのを、見えずともわかった。強く、強く剣を握り、イザヤはそれを振った。

するとどうだろう。これまで荒波のように押し寄せていた風に、一つの切れ目が生まれたのだ。

（斬れる——！）

そう確信したと同時に、イザヤはさらに剣を振るい、自分の真下を斬った。

穴から落ちるように、イザヤの身体は重力に従って落下する。

いつの間にか空高く持ち上げられていた体は、そのままの勢いで地面に叩きつけられそうになるが、

「あんたはちょっと目を離すといつもぼろぼろになるな」

細く、しかし力強い両腕にしっかりと抱きとめられた。

目を開けて、真っ先に見えた真紅の双眸に、イザヤは視線を逸らしながら言った。

「うるさい。私の勝手だ」

「あら、傷つくのが好きなのですか。それはそれは、とんだ嗜好の持ち主で——」

「そんなわけあるかっ！」

反射的に声のする方へ叫んだイザヤは、直後に襲ってきた激しい痛みに、声にならない叫びをあげて身体を縮める。見れば、羽織っていた外套はぼろきれ同然になり、破れた服の隙間から肌をざっくりと裂く切り傷がのぞいている。

その様子に、イザヤを抱きかかえていたソレイユは肩を竦めると、背後で薄い笑みを浮かべているリオを苦笑しながら見た。

「リオ、こういうときくらいはやめてやれ」

「すみません。つい」

まったく反省の色なく謝罪するリオ。

イザヤはそんなリオを恨みのこもった眼差しで一瞥すると、空を見上げ、眉をひそめた。

宙を隔てる風の断層が、そこにはあった。空間を裂くように横長に広がったそれは、轟々と唸りをあげて暴れまわる風を凝縮しているようだった。

あれに飲み込まれていたかと思うと、今更ながら背筋が凍る。

「それにしても、空恐ろしいですね、〈覚醒者〉の力というのは」

同じように首を少し傾け、空に浮かんだ断層を見上げていたリオが言った。

「〈覚醒者〉？」

「言ったら？ 神魂は眠っている状態にいるのが普通だって。でも、稀に聖霊が起きた状態の場合もある。そういう奴らを、〈覚醒者〉っていうんだ。嵐の神魂の場合、所有者は必ず〈覚醒者〉になるが、他の神魂だって、そういう奴はいるんだぜ」

首を傾げるイザヤに、ソレイユが早口に言う。

「〈覚醒者〉は我々がふだん無意識下に押さええている力を余すところなく扱えます。しかし、大多数の“覚醒者”の末路は……」

リオの話の続きは、彼女の視線が物語っていた。

「このような“暴走”を繰り返すことで、いずれ心までもが喰われ、自我が崩壊し、理性を失った化け物となるでしょう」

あえて言葉にしたリオは、イザヤを品定めするような目で見下ろしてくる。

——あなたはどうするのか？

無言でそう告げてくるリオに、イザヤはソレイユの胸を押して地面に降り立つと、転がっていた剣を持ち上げた。

そして、一步前へ踏み出したイザヤは、徐々に薄れゆく風の断層を見すえたまま、言った。

「梟、おまえはさっき、大多数と言ったな。——なら、化け物にならないやつもいたということだろう？」

「否定はしません。ですが、本当に一握りの者です。それに、万一可能性があったとしても、それは当人次第。あなたには何もできませんよ」

「……それだけ聞けばいい」

そう囁くように呟いて駆け出そうとしたイザヤの肩をソレイユが掴む。

「待てよ。その傷じゃまともに動けないだろ。“暴走”はそう長く続かない。下手に手を出してルカを殺さないとも限らないんだ。今は引いたほうがいい」

「私も同意見です。何もいま危険を犯す必要はありません。幸いにも、里の完全消滅までにはまだ時間がかかるでしょうから」

イザヤは、真剣な顔で諭してくる二人を見返し、低い声で言った。

「私が助けを求めたとき、だれも、助けてくれはしなかった」

まるで独白のようなイザヤの言葉を、ソレイユとリオは黙って聞く。イザヤは薄れた断層の向こうに見えるルカに一度目をやり、強く手を握った。

「おまえたちは知らないだろう。幸せだった日々から落ちる絶望の痛みを。死を望まれる辛さを。孤独の中で、救いを求めるときの不安を」

あまりに強く握った拳から、赤い雫が滴り落ちる。

「私は知っている。――あいつは嘘をついた。助けて欲しいなどと思っていないと、嘘をついた。あのエルフは助けてほしいと思っている。私はそれに、気付くことができるんだ！」

気付けば、イザヤは叫んでいた。

「だから私は……」

黙ったまま見つめてくるソレイユとリオを一瞥し、イザヤは踵を返して走り出す。

「見てみぬふりなど絶対にしない！ あんなやつらなんかと同じにはならない！ 命を守ることと救うことは、同義じゃないんだ！！」

そうして、完全に消えた断層から姿を現したルカに一直線に突き進んでいくイザヤに、リオは大きな溜息を吐き出す。

「大人ぶってはいても、やはりまだ子どもですね。幼いですよ。感情に捉われ、最善の手が見えていない。あれではいずれ、命を落とすことになるでしょうね」

「でも、それがイザヤのいいところなんだ。あいつは、あのままでもいいんだよ」

どうしたらルカを止められるのか。それすらわからないまま、それでも逃げずに立ち向かっていくイザヤの背中を見つめ、ソレイユは目を細めた。

「リオ。あのままのイザヤが生き残るには、何が必要だ？」

リオに向けられた双眸は、彼女に絶対の信頼を置いているかのように、期待に満ちた光を放っていた。

その目に、リオは口元を綻ばせて、束の間、目を閉じた。

「そうですね」

ゆっくりと目を開いたリオは、肩にかかった髪を払いのけて足を踏み出した。

「彼女のわがままに付き合える者、でしょうか」
「どれくらいいいればいい？」

従者は不敵な笑みを浮かべたまま、主人を見つめた。

「――私と主様がいれば、事足りるか。あくまでも現時点では、ですが」

「それならなんの問題もないな。行くぞ、リオ」

満足気に笑い、ソレイユは拳を手のひらにたたきつけて走り出した。

「……ルカ」

イザヤたちが集まっている広場から少し離れた家屋の影から、老エルフは自我を失いつつある孫娘を見ていた。

老エルフは、しかし、里の仇でもあるルカの姿に、憤りではない別のものを感じていた。

光を失った瞳に、かつて自分の話を喜んで聞いていた孫娘の面影はない。

ふいに蘇ってきたルカとも思い出が、静かに彼の脳裏を掠めては、痛みを残して消えていった。

そして、ルカと真正面から向き合っている人間の少女の姿が、老エルフに残された孫娘を想う気持ちを苛んでいく。

決して、あの少女とルカの関係は深くないだろう。人と関わることを、ルカがするはずがないのだ。ルカは自身の犯した罪を、力を誰よりも自覚している。そんな、いつ暴発するかもわからない爆弾を抱えた彼女が、人と関わることはない。

だというのに、あの少女はルカのために、傷だらけになろうとも逃げずにいる。

一度逃げてしまえば、もう二度と救えないかもしれないということ、彼女はよくわかっているのだろう。

裁きの場へ引き摺りだされるルカに目を向けることさえしなかつ

た自分の姿が、今も、目の前で立ち尽くしている。

「わしは……ルカ、おまえを……」

老エルフの懺悔の声は、一帯に轟く風の唸りに掻き消された。

全身から流れ出る血が地面を汚していく。剣を地面に突き立て、それを支えに立ち上がろうするが、足に力が入らない。

荒い呼吸を繰り返しながら、イザヤは足元に広がっていく血だまりを見つめていた。

（……止血くらい、するべきだったか）

しかし、そう思う一方で、そんな余裕がなかったこともわかっていた。

ふたたびまみえたルカは、やはりまた光を失った目で、容赦なくイザヤに襲い掛かってきた。

ルカから与えられた傷は、どれも致命傷にいたるようなものではない。が、それでも確実に流れ落ちる血はイザヤから体力を奪っていく。

だが、それでも、イザヤの心に迷いはなかった。いつもなら、面倒ごとに関わってしまったと吐く溜息さえない。

ルカを助ける方法などまるでわからないというのに、自分がなさねばならないことはわかる。

逃げないこと。目を背けないこと。思う存分、真正面からルカと向き合うことが、為すべきことだ。

「来い」

イザヤは立った。目に入りそうになった血を払いながら、剣を構え、正面に立つルカにかすかな笑みを向けた。

ルカが鉄扇を広げて顔の前に翳す。そこから音もなく放たれた無数の風の刃が、空気を裂きながらイザヤに迫りかかる。一つ一つが鋭い剣閃のようなそれを最小限の動きでかわしていくが、片目を塞いでいるせいで死角が多いイザヤは、四方からの攻撃に弱かった。

左方から迫る風刃。白い光のようなそれを、イザヤは咄嗟に剣で受けようとするが、いくら神魂の能力とはいえ風は風。剣をすり抜け、こめかみを切り裂いて後方に流れた。

風が裂いた包帯がイザヤの目から剥がれ落ち、風に流され飛んでいく。

赤く染まった蒼眼を細めながら、イザヤはなんとか残りの攻撃を凌ぎきった。

それが、限界だった。地面に膝をつき、そのままうつ伏せに倒れる。霞む視界で、目の前に転がる剣を拾おうと手を伸ばすイザヤはふいに身体が宙に浮くような感覚に目を瞬かせた。

「本当に強情ですね、あなたは。いつも通り逃げれば、こんなことに巻き込まれずに済んだものを」

リオに抱き上げられた、そう理解したとたん、イザヤはすぐに抜け出そうともがくが、力がまったく入らなかった。

決して屈強な体つきではないというのに、リオは笑みさえ浮かべてイザヤを抱えている。

「イザヤ、ルカが自分の力を制御できるようになるには、ルカがなんとかするしかない。だから、俺たちにできることは、あいつの気が済むまで、付き合っただけだ」

リオの横に立ち、イザヤの顔をのぞきこんでくるソレイユ。

「だから、とことんやり合ってやろうぜ。その後のことは、そのと
きに考えればいいさ。――俺たちが手伝ってやる。一人よりも三人
のほうがいいだろう？」

「ああ、さきほどは私たち二人と言いましたけど、主様の役目は私
とイザヤの間で緩衝材になることですから。戦力としては要りませ
ん」

「えええ……」

満面の笑みを浮かべて戦力外通告をするリオに、高まっていたソ
レイユの士気は水をかけられた焚き火のように消沈する。

イザヤは、そんな彼らを複雑な表情で見つめ、溜息を吐いてリオ
の腕から地面に下りる。やはりふらついたが、倒れることはしなか
った。

「あのエルフを殺さないと約束できるなら、好きにすればいい」

「安心しろよ。そんなことは百も承知だ」

「ええ、私も心得ていますよ。――ところで、さきほどからルカに
動きが……」

言って視線をあげたリオの表情が強張る。

「なるほど。これからが、本領発揮というわけですね」

ずっと声を低めたりオに、イザヤとソレイユもルカがいたほうへ
顔を向ける。

「風は嵐の一端に過ぎないということか」

「やるなあ。全部片付いたらルカも魔界に誘ってみるか」

軽口を叩くソレイユに影がかかっていく。――ソレイユだけではない。ルカの頭上から次々に生み出された暗雲が、空を覆いつくし、エルフの里全体に暗い影を落とそうとしていた。

天に向かって手を掲げていたルカは、里の大部分を暗雲が覆いつくしたのを見ると、ゆっくりと手を下げた。

どこからか吹く、木の葉を巻き込んだ風が容赦なくイザヤの頬に当たる。稲光とともに降り出した雨が、イザヤを、ソレイユを、リオを、そして里を濡らしていった。

天候すら作りだす能力。それはもう、イザヤの知る神魂の力を遥かに超えている。

冷たい雨に打たれながら、イザヤはソレイユから受け取った剣を左手に持ってルカに差し向かう。

「さっさと目を覚ませ、馬鹿」

空を埋め尽くす暗雲のような瞳が、小首を傾げたルカの前髪から覗いた。

1-19 断ち切れ、死を望む手

イザヤ、ソレイユ、リオの三人が立ち代りルカと攻防を繰り返している最中、ルカの意識はその様子を透明な水晶の中から彼女の体の目を通して眺めていた。

広さは宿屋の一人部屋ほど、高さはその倍はある立方体の形をした水晶は、半分を薄青い水が埋めている。水の上で膝を抱えるルカは、しかし沈むことはなく、服が濡れることもなかった。

ここがどこであるのか、ルカは知らない。

ただ、不意に気付けばここにいて、また外へ出たときには、荒れた風景が広がっているということだけははっきりとしていた。

いつも、いつも、いつもそうだった。覚えなんてまるでないのに、目を覚ませばそこは地獄だ。

何度も失敗を繰り返しながら、“暴走”の前兆を予期できるようになってからはまだ良かったが、それより以前は、酷いものだった。怯え、震え、隠れ。人と関わらないよう、誰も傷つけないよう、炉端に打ち棄てられたゴミのように生きてきた。――それでも、奪ってしまった命は、もう両の手のひらでは数え切れない。

普段なら決して視えない外の様子を辛そうに顔を歪めて見つめながら、ルカは強く膝を抱えた。

どういう仕組みか、いつも濁っているはずの水晶が、徐々に透き通りはじめ、今では一片の曇りさえないほどになっていたのだ。

しかし、それは余計にルカを苦しめた。

（どうして……どうして逃げてくれないんですか）

倒れても、傷ついても、何度でも立ち上がるイザヤに、ルカは顔を両手で覆った。

どうして、この人は自分などのためにここまで頑張れるのだろう

……？

ルカの胸中を支配するその疑問は、しかし答えに辿り着くことはなかった。

自分の手が、力が、無関係なイザヤたちを傷つけていく。このままでは、いずれ、この手は彼らを殺してしまうだろう。

（そんなこと……）

唇を噛む。何もできない自分が、何もしない自分が憎くてどうしようもなかった。

そうしているうちに、激しい水音が聞こえ、ルカは弾かれたように顔を上げた。

イザヤが、豪雨によってできた水溜りの中で倒れている。すぐさまソレイユが駆け寄ってイザヤを抱き起こすが、気を失っているのかぴくりとも動かない。

そんな状態のイザヤに、止めを刺しに行こうとしている自分がいる。

「やめて——やめなさい！」

ルカは叫んでいた。立ち上がり、水晶の壁に手をつく。だが、身体はルカの意味などまるで無関係に動く。

幸いにも割り込んできたリオによって進行は阻まれたが、ルカは水晶の壁に額をつけて身を震わせた。

どうすれば、こんなことを終わらせられるのだろう。強く瞳を瞑りながら考えていたルカは、ふいに思い立った答えに、微笑んだ。

「ああ……かந்தんな、こと」

目尻に溜まった涙が、頬を流れ落ちて足元の水面に波紋を描いた。

そのとき、ルカの背後で、びしり、と何かが割れる音が響いた。ふり返れば、背面にあった壁に小さな亀裂が入っている。亀裂は徐々に広がっていき、ちょうどルカの背丈と同じくらいの高さまで伸びたとき、音を立てて崩れた。

“暴走”の終わりだ。いつも通りにここを出れば、元に戻る。しかし、それは繰り返しをも意味する。“暴走”して、壊して、元に戻って、またいずれ“暴走”してしまう。

（そんなことは、もう嫌だから）

だから、終わりにしよう。

これ以上、誰も傷つけなくてもすむように。これ以上、誰も悲しませることのないように。

俯いて、水面に映った自分の姿を一瞥し、ルカは顔を上げた。

亀裂の外は何も見えない。ただ、光だけが差し込むそこへ、ルカは迷いなく足を踏み入れた。

目を開けたイザヤは、自分が意識を失っていたことに気付くと、勢いよく身体を起き上がらせた。

まるで電流のように痛みが全身を駆け抜けるが、奥歯を噛んで耐える。

「大丈夫か？」

「……当然だ」

そっと背を支えてくれたソレイユを一瞥し、イザヤは正面に目を向ける。そこにはリオの背中があって、その向こうにルカの姿が見

える。しかし、まったく動く気配のない彼女にイザヤは眉根を寄せた。

「どうしたんだ？」

攻撃をやめてくれたことはありがたいのだが、突然静かになられると、それはそれで不気味だった。

雨音と雷鳴だけが鳴り響く。まるで嵐の前の静けさともいうべき状況に、リオも刀を持った構えを崩さずに言った。

「わかりません。さきほど、急に動きを止めたのですが――」

「イザヤ様」

ひどく落ち着いたその声に、イザヤは目を見開く。

リオが警戒しつつもゆっくりと横に移動し、ルカとイザヤは正面から向き合う形となった。

「おまえ、正氣に戻ったのか？」

「はい」

雨に濡れた前髪と、暗さが邪魔をして、イザヤからではルカの表情は見えない。が、ルカが正氣に戻っているということだけは事実で、イザヤは身体の力を抜いた。

「そう、か……」

安堵したようなその声に、ルカは、口元だけにかすかな笑みを見せる。

そして、ゆっくりと右手を掲げると、

「申し訳ありません、イザヤ様。——どうか、お許し下さい」

静かに、振り下ろした。

瞬間、ルカの周囲を風の渦が取り囲む。いち早く反応したりオは、しかし異変に気付いて動きをとめる。

そして、何かを感じ取ったように目を伏せた。

「ルカ……あなたは」

最初こそ突然のことに戸惑っていたイザヤとソレイユも、すぐに状況を飲み込む。

ルカが発生させた風の渦は、外に対してまったく効果を発揮していなかった。——あれは、内側に向けて牙を剥いている。

目を凝らして視れば、渦の中心にいるルカの身体が赤く染まっていく様子がはっきりと見えた。

「馬鹿なことを！」

イザヤが地面を蹴る。そのままの勢いで渦に手を伸ばすが、強い力で弾かれてしまった。

「く——何をしている！ 早くこれを止めろ！」

「わたしの犯した罪は……命をもって、償います」

じわじわと身体を刻まれながら、ルカは言った。

「もっと……はやく——気付くべき、でした……」

激痛に苛まれながら、ルカはぼんやりと見えるイザヤの顔を見つめていた。

愚かなことをしているとは、わかっていた。この行為が今までのイザヤの頑張りをすべて無駄にってしまうことも、わかっていた。

（でも、それでも……）

彼女を死なせていけないと思った。

もしこの場を上手く切り抜けられたとしても、イザヤはきつとルカを見捨てることはしない。そうなれば、いずれ命を落とすのは目に見えていた。

どう転んでもイザヤを縛る禍根を断つには、ルカがこの世から消えることがもっとも望ましいのだ。

その結論に至ったとき、ルカは、ずっと胸の内が軽くなっていくのを感じた。

（やっと、わたしは、逝くことができる……）

これまで、幾度となく死を望み、そのたびにルカの幸福を願って死んでいった少女の笑顔が邪魔をした。

ただ辛いからという理由で死ぬことは、彼女の願いを踏みにじることに繋がると考えた。

だが、今は違う。イザヤを、ソレイユを、リオをこれ以上傷つけないために死ぬのだ。これ以上の理由が必要だろうか。

（わたしは、きっと……これを探していた）

ようやく見つけられた答えは、痛みさえ心地良く感じさせる。ルカは満たされたように微笑んで目を閉じた。

目を閉じて微笑むルカに、イザヤは肩を怒らせると、無造作に左手を渦へと伸ばした。激しい反発を受けたが、空いた手で支えながら、ゆっくりと突き進めていく。

「ぐっ……」

渦の中に食い込んだ手を、容赦ない風の刃が切り裂いていく。

イザヤが零した苦悶の声に、ルカは目を開け、息を飲んだ。

「い、イザヤ様……何を!？」

「――逃げるな」

「え……」

低く唸るような声に、ルカは背中を裂かれる痛みにかめながら、イザヤを見つめる。

イザヤはゆっくりと腕を押し進めていくが、なかなか前に進まない。

「死ぬことは、償いになんかならない。死は、逃げだ……」

ルカが目を見開く。

イザヤは真っ直ぐにルカを見すえたまま、続けた。

「おまえが死んでも、何も変わらない。ただ、おまえが楽になるだけだ」

「……っ、では、他にどうしろと……言うのですかっ」

「そんなの、私は知ら、ない……生きて、それから考えろ」

そう言ったイザヤの手が渦の外にはじき出される。そのまま仰向

けに倒れそうになったイザヤの背を、二本の腕が支えた。

「あんたは無茶ばかり言うな」

「ですが、死が逃げることだというのは同意見です」

両側からイザヤを支えるように立ったソレイユとリオは、血まみれの手を包むように握ると、渦の中に突き入れた。

ソレイユは冷や汗を浮かべながらイザヤを横目で見ると、口の端をつり上げて笑いかけた。

「いいか、イザヤ。俺たちが手を離れたら、斬るんだ。――できるだろ、あんたなら」

「外側から斬ったとしても、すぐに風は流れ込むでしょう。斬るならば、内側から元を断たねばなりません。見えますね、発生場所が」

ルカの両手に視線を向けながら、リオは目を細める。

彼らは何を言っているのかすぐに理解したイザヤは、一つ頷くと、意識を左手に集中させた。二人の手に守ってもらっている分、痛みは少なく、集中力がそがれずに済んだ。

イザヤの手に吸い込まれるように闇が集まり出し、それが剣の形を成した瞬間、ソレイユとリオは素早く手を引き抜く。

黒紫の剣が唸りをあげる。

鋭く振り下ろされた剣は、瞬きの間にルカの手のひらに集まっている風の流れを断ち切った。流れを止められた風は、すぐに薄れ、消えていった。

支えを失ったルカの身体が傾く。剣を消したイザヤは、倒れこんでくるルカを両腕で抱きとめるが、力が入らず、その場に腰をついてしまう。

その衝撃で体中の傷が悲鳴をあげ、鋭利な痛みによりザヤが顔を歪ませていると、

「……わかって、いました……」

雨音に掻き消されてしまいそうなほどか細い声が響く。

イザヤの服を握り締め、肩に顔を押し当てながら、ルカは震えていた。

「わたしはただ……理由が欲しかった。死ぬ理由……それが、ずっと欲しかったんです」

「……」

「そのために、あなたたちを言い訳にしました……わたしは、なんて、汚い……」

懺悔にも似た独白をイザヤは、ただ黙って聞いていた。

ルカは大粒の涙を流し、むせ返りながら言った。

「おし、えてください……わたしは、どうすればいいのですか……」

「言っただろう。私は知らない」

無慈悲に言い放ったイザヤに、ルカの肩が大きく震える。イザヤは前を見つめたまま、溜息をつくように言った。

「ただ、おまえに生きろと言った責任はとる」

「せき、にん？」

涙に濡れた顔をあげたルカと視線を合わせ、イザヤははっきりとした声音で告げた。

「私が生きている限り、おまえが暴れたらとめる。それと、私はお

まえに殺されない」

「……っ」

「この二つの約束は守る。だが、それ以外については、おまえが自分でなんとかするしかない」

ぽたり、と、血の混じった涙が大きな瞳から零れ落ちる。傷ついた顔を歪め、ルカは傷だらけになったイザヤの手を取った。

「わたしは、きっとあなたを傷つけますよ……この力がある限り、ずっと」

「それはかまわないが、できるなら人気の少ないところで暴れてくれ。街中はさすがに色々とめんどうだ」

「……絶対に、死なないと約束、してくれませんか……？」

「死なない。いざとなったら手荒なまねをしてでも大人しくさせるが文句は――」

言い終わる前に、胸に軽い重みがかかった。

「……はい……はいっ……」

イザヤに縋りつくように抱きついたルカは、何度も頷くと、堰を切ったように声をあげて泣いた。

「う、あ……ああああああっ……」

赤子のように泣きじゃくるルカ。その小さな背中に、イザヤはためらいながら手を回し、軽くたたいてやる。

そうしているうちに、イザヤはいつの間にかしきりに降り注いでいた雨が止んでいることに気付いた。見えない糸に手繰り寄せられるように空を見上げたイザヤは、薄らいでゆく雲間から覗く青空に

目を細める。

「晴れたな」

雨と血で汚れた顔を拭いながら、ソレイユが笑った。

その笑顔は、まるで太陽のないこの里に生まれた太陽のように、イザヤに明るい光を届けた。

「ルカは眠りましたか。あれほどの力を使ったのです。無理もないでしょうね」

いつの間にかイザヤの腕の中で小さな寝息をたてて眠ってしまったルカを見て、リオが肩を竦めた。

イザヤはルカを起こさないよう注意しながら、彼女の傷を調べた。傷の数こそ多いが、大量出血をするような傷はなく、イザヤは一先ず胸を撫で下ろす。

が、次の瞬間大地を鳴動させた地響きに、リオが目を細める。

「――思ったよりも、早いですね。早く脱出したほうが良さそうです」

そこで、イザヤはこの里が“消滅”しかけていたということを出した。

「そうだな。もし扉が地割れに飲み込まれたら戻れなくなる。リオとイザヤは先に行ってくれ。俺は爺さんを」

「その必要はない」

ソレイユの言葉を遮ったのは、杖をつきながら歩み寄ってくる老エルフだった。

老エルフは、束の間黙し、無造作に一冊の古ぼけた本をソレイユに投げた。

「なんだ、これ」

「わしが今日まで調べてきた〈エデン〉に関する資料だ。持っていない方がいい」

「大事な物だろ。いいのか？」

「もう必要ない。ただ、一つだけ頼みがある」

年老いたエルフの目が、イザヤと、その腕の中で眠るルカに向けられる。イザヤは複雑な表情で老エルフを見返していたが、その目に宿った穏やかな光を捉え、瞬きをした。

「ルカをここから逃がしてやってくれ」

その言葉に、イザヤは涙の痕を頬に残したまま寝息を立てるルカに視線を落とし、すぐに顔をあげた。

「私は、おまえのようなやつが大嫌いだ。だから、頼みを聞いてやるつもりはない」

だが、とイザヤは毅然とした声で言った。

「このエルフを死なせるつもりもない」

老エルフから顔を背け、イザヤはふらつきながら立ち上がると、ルカを背負って歩き出した。

一度としてふり返ることなく、後ろ髪を引かれる様子もないイザ

ヤの姿に、老エルフは小さく笑みをもらす。その顔を見ていたソレイユが、低い声で言った。

「爺さん、ここで死ぬつもりか？」

「……言ったであろう。わしの家族も、友人も、すべてここに眠っている。わしの帰る場所は、ここしかない」

「それがあんたの決めた生き様なら、仕方ないな。じゃあな、爺さん。これはありがたく貰っておく」

言って踵を返したソレイユの耳に、老エルフのしゃがれた声が届く。

「魔族の子よ。最後にもう一度忠告しておく。おぬしは、ルカに近づくでない」

返事は返さず、ソレイユは軽く手だけを振ってイザヤの後を追った。

それまで沈黙を通していたリオは、肩越しにふり返って、薄い笑みを浮かべた。

「良かったですね、ルカが眠っていて」

最後にそう言い残したりオもまた、すぐに里の中に消えていく。一人残った老エルフは、その場に腰を下ろし、崩れ行く里を眺めて笑った。

「……違うない」

1-20 敵影、忍び寄る足音

〈全の回廊〉を通り抜けて人間界へと戻り、無事にコランの宿屋へと辿り着いたイザヤは、血を拭い、簡単な傷の手当をすませるなり深い眠りに落ちた。

こんこんと眠り続けたイザヤが目を覚ましたのは夕暮れ時で、窓から差し込む橙色の光をひどく眩しく感じた。

イザヤは起き上がろうとして、焼きつくような痛みで顔をしかめる。身体に力が入らない。やや熱もあるようで、頭がぼんやりとしていた。

力の入らない左手をどうにか持ち上げて目の前にかざしたイザヤは、ぎっしりと巻かれた包帯に、ようやく今の状況に至っている経緯を理解した。

異常な喉の渴きを覚えながら、目だけを動かして人気のない室内を見渡す。

（私は……どれくらい眠っていたんだ……）

記憶が確かなら、エルフの里からコランへ帰ったときも、夕日が地平線に沈もうとしていた。

だとすれば、少なくとも丸一日は寝ていたということだ。それは喉も渇くだろう、と、イザヤは痛みをこらえながら、ゆっくりと、まるで錆びた鉄門のように軋む上半身を持ち上げた。と、額から湿った布がシーツの上に落ちる。

布を手にとったイザヤは、まだ冷たいそれに、少し前までここに誰かがいたことを悟る。

誰が、などと考えるのは億劫に思え、熱をもった額にイザヤが布を押し当てていると、扉がゆっくりと開いた。

そこから姿を見せた、鉄製の桶をもって現れたルカは、イザヤを

見るなり嬉しそうに顔を綻ばせて微笑んだ。顔以外を隠すように彼女の頭にしっかりと巻かれた薄い布が、開け放たれた窓から流れ込む風でふわりと揺れた。

「良かった。目が覚めたんですね」

「ああ。私は……」

「その前に、お礼をさせてください。――ありがとうございます、イザヤ様」

床に膝をつき、指を絡めた両手を額につけたルカは、薄っすらと涙を浮かべていた。

「わたしなどのためにお力を尽くしてくださったご恩、一生忘れはしません」

真摯なルカの態度に、イザヤは居心地が悪そうに顔を逸らす。感謝されることに慣れていないイザヤにとって、こういった状況は苦手だった。

「私は……私が嫌いなやつらと同じことをしたくなかっただけだ。だから、おまえが感謝する必要はない」

「それは違います。イザヤ様がどう思われていようと、わたしはあなたに救われた。あなたが、生から目を背け、死に手を伸ばして、わたしを否定してくださった。わたしの罪が許されたわけでも、わたし自身が受け入れられたわけでもありません。それでも、わたしはやっと向き合うことができました。それはすべて、あなたとソレイユ様、リオ様のおかげなのです」

「……私は、おまえの祖父を見捨てたぞ」

余計なことを言っていることなど、イザヤにもわかっていた。し

かし、ルカの気持ちの応えられない心は、勝手に口を動かす。

「命を守ることだってできた。だが、私はそうしなかった」

ルカは、そんなイザヤを見て柔らかな笑みを浮かべると、首をふった。

「命を守ることと救うをことは、同義ではない。――あなたの言葉です、イザヤ様」

「おまえ……どうして」

「見えていました。聞こえていました。あなたがわたしのために傷ついた一部始終を、ずっと」

まさか、暴走状態のルカに意識があったなどとは思わずもなく、イザヤは口を噤んだ。

「イザヤ様、あなたが気になさる必要はありません。お爺様が里と共に死を選ぶことなど、あの人が里が滅びつつもなお、あの場所に留まっていたと知ってから、わかっていたことです」

言葉とは裏腹に、その声はかすかに震えていた。床に座り込んでいるルカの膝に置かれた手が、強く服の裾を握り締めている。

「お爺様が好きでした。わたしが危険な存在だと知りつつも、お爺様だけはわたしを恐れず、多くの話を聞かせてくれました。だから、お爺様がわたしに自ら命を絶てと言ったときも、悲しいと思い気持ちこそあれ、あの人を恨みなどはしませんでした」

ぽつりぽつり、と語られる話に、イザヤは口を閉ざして耳を傾けた。

「でも、わたしはできなかった。九年前のあの日、目が覚めたら封印具が壊れていて、すぐに襲い掛かってきた衝動に抗えませんでした。——いいえ、わたしは直前で、死を恐れたのです。喉を一突きする時間がありました。なのに、わたしは……」

そこから先は、言葉になっていなかった。

長い間溜め込んできたものを吐露するかのように、ルカは静かに涙を流した。

イザヤは何も言わず、ただ、決して癒えることのない傷口をようやく曝け出せたエルフの少女を見つめていた。

夜になり、ソレイユとリオが戻ってくるそのときまで、ルカの瞳が乾くことはなかったのだった。

※

「お爺様の研究成果を纏めた手記ですが、読み解くにはそれなりに時間がかかりそうです」

ソレイユとリオが戻り、次にとるべき行動を決めるため、現段階で唯一の手がかりである老エルフから受け取った本に目を通したルカは、開口一番そんな言葉を口にした。

夜半過ぎ、蝋燭の明かりが灯る室内で、ルカの声はよく響いた。

ルカいわく、その本に纏められた内容は確かに〈ヘノアの物語〉に登場する楽園について書かれているそうなのだが、古代語で書かれており、容易には読み取れないとのことだった。古代語は創世記の時代に使われていた言語だと伝えられているが、現在では廃れ、古代語を理解できるのは歴史研究に携わる一部のエルフのみだという。

「なんでまた爺さんはそんな難解な言語で書いたんだ？」

古代語などさっぱり理解できるはずがないソレイユが、記号にしか見えない字を眺める。

「おそらく、人間や魔族に読み解かれないようにするためでしょうね。古代語は今もうエルフにしか伝わっていないものですから。これを読解するのは、なかなか難儀ですよ」

さすがのリオでも古代語にまでは精通していないようで、肩を竦めて首をふるだけだった。

ルカはソレイユから受け取った本を両手で大事そうに抱えると、古ぼけた表紙に触れながら言った。

「やります。いくら昔の言語とはいえ、元を正せば現在わたしたちが使っている言語の元です。法則性はきっとありますし、ここに書かれている内容が〈ヘエデン〉についてのことなら、わたしの知識も生かれます。ですから、時間をください。必ず読み解いてみせます」

イザヤとしては自分の目的のことなのに、無関係なルカに丸投げしているようで落ち着かなかった。が、かといってイザヤに古代語など読み解けるはずもなく、結局はルカに任せる他ないのだった。

「頼めるか？」

「はい、お任せください」

当のルカは面倒ごとを押し付けられた、と落胆するでもなく、それどころか満面の笑みさえ浮かべて頷いた。

「嬉しいですよ。わたしが誰かの役に立てるなんて。……あ、まだ役に立ってはいませんが、きっと解説してみせます！」

「頼りにしてるぜ、ルカ。俺はそういうのはさっぱりだからな」

「となれば、次の目的地が明確にするためには時間が必要というところです。——どうしますか、イザヤ。このままコランに居座るのは、少々危険だと思いますが」

「どういうことだ？」

窓枠で汚れ一つない羽にくちばしを通していたリオの含みのある言い方に、イザヤはいまだ熱を帯びている額に冷水にひたした布を当てながら問う。

リオは一度ソレイユと目配せをすると、よどみない声で言った。

「ここ三日ほど、主様と周辺の情報収集をしていたときに耳にした話なのですが——」

「ちょ、ちょっと待て。おまえ、いま三日と言ったのか？」

額に押し当てていた布が落ちる。目を瞬かせて狼狽しているイザヤに、ソレイユが頷いた。

「ああ、そうだ。あんたが眠ってた三日間。何もしないわけにはいかないだろう？」

平然と肯定され、イザヤはしばし呆然とし、深い溜息をともにうなだれた。

「……私は、三日も眠っていたのか」

「当たり前です。ええと、わたしが言うのも、なんですが……イザヤ様の怪我は、とても酷かったのですよ」

少々言いづらそうに、ルカは落ちた布を桶に入っている冷水ですすいでイザヤの額に当てた。

「いまだって熱が下がっていないではないですか。最低でも、明日までは安静にしていただかないと」

この熱は傷が原因か、と納得しつつ、イザヤはリオに目をむけた。

「梟、危険とはどういうことだ？」

「アルヴィア教団から、あなたを捕縛する任が各地の騎士へ出されたそうです。賞金額も跳ね上がっています。どうやら彼らは本気であなたを獲りにかかっているようですよ」

教団、という言葉に、イザヤの表情が険しくなる。

おそらく〈使徒〉から〈闇の神魂〉を目覚めさせたことがもれたのだろう。下手に力をつける前に叩いてしまいたい、というのが教団の本音かもしれない。

そうして、イザヤが考えをめぐらせている間、リオは三日間で収集できただけの情報を話した。

まず、もっとも身近な危険である、コラン大聖堂の動きは特に目立ったものではなく、布告が出ているにもかかわらず、街を巡回する騎士はごく僅かだということ。また、巡回している騎士たちもイザヤを探している、というよりは平時通りの行動をしているように見えた、というのがリオの見解だ。

ならば、新たにコランへ足を踏み入れてくる騎士が来たのかといえ、そうでもないらしい。なんでも、どこから流れ出た噂か、イザヤが北のリンツィアフィール王国へ向かっているとの情報が民衆の間で囁かれているようで、おそらく多くの騎士たちはその情報を信じて動いているのだろう。

そこまでリオが話し終えたところで、ルカが首を傾げて口を挟ん

だ。

「あの、イザヤ様が追われている、ということについては追々説明いただければと思いますが、偽情報が出回っていて、それがわたしたちと関係ない場所、というのなら、むしろここへ滞在していたほうが自然ではありませんか？」

「……違う。偽情報が出回ったというのなら、流したやつがいるということだ。しかも、そいつは私がカルディアからコランへは寄らず、北上したように見せかけている。ほぼ間違いない、流したやつは私がここにいることを知っているんだ」

言いながら、イザヤは温くなった布を桶の中に放る。

「つまり、その者がどのような思惑をもってそんな噂を流したかわからない以上、留まるのは危険、ということだ」

「そういうことだ。出るなら早めの方がいい。その判断は、あんたに任せるぜ」

イザヤの言葉を継いだリオに同意しながら、ソレイユは壁に預けていた背を離す。

イザヤは、しばし考え込むように目を伏せると、すぐに顔をあげてソレイユたちを見渡した。そして、彼らの顔に薄っすらと浮かんだ疲労の色を見とめると、視線を逸らして口を開いた。

「明日の昼、ここを出る」

「明日？ それも昼間か？」

今すぐにでも出発する、と言い出すとばかり思っていたソレイユが目を瞬かせる。

イザヤはそんなソレイユを横目で見ると、口調を強めて言った。

「どうせこの三日、情報収集や私の看病でろくに休んでいないんだろう。それに、コラン周辺を夜中に歩くのは危険だ。どうせ騎士たちは少ないのなら、昼も夜も大差ない。安全なほうを選ぶ」

「ああ、それはそうだな。あんたがそう言うなら、俺は文句はない」
頬をかきながら、ソレイユは首肯する。リオもソレイユが納得したなら、と口を閉ざした。

「そうですね。イザヤ様にも今日一日は安静にさせていただきたいですし、わたしも賛成です」

微笑みを浮かべるルカに、イザヤは軽く息を吐く。

「行き先は明日までに考えておく。買い付けも明日の出発前でもいいだろう」

そう言ってベッドに横になったイザヤに、ソレイユたちは頷いて部屋を出て行った。

彼らの姿が扉の向こうに消えるのを見届けたイザヤは、しばらくは蝋燭の揺れる明かりを見つめていたが、やがて静かに眠りに落ちた。

「少し変わったな、イザヤ」

しっかりと閉じられた扉の外で、ソレイユは顎に手を当てつつ呟いた。

「ええ、以前なら私たちのことなど案じなかったでしょうし、昼間出歩くのを嫌っていましたからね」

リオも同意するように頷く。

「まあ、悪い方向に転んでいるわけじゃないし、気にすることじゃないか。——ところで、ルカ」

「はい、なんででしょう？」

黙ってイザヤがいる部屋の扉を見つめていたルカは、不意にかけられた声にふりかえった。

ソレイユは階段を上がってくる音に素早く外套のフードをかぶると、欠伸をしながら階段を昇ってきた男が通り過ぎ、宿の一室に消えてから、声をひそめて言った。

「あんた、本当に俺たちについてきていいんだな？ 多分、面倒ごととも結構かかえることになると思うぞ？」

「それなら、わたしの方が申し訳ないです。わたしという厄介な面倒ごとを、さらにあなたたちに押し付けてしまうことになるのですから」

苦笑しながら、ルカは続ける。

「ですから、わたしの力でソレイユ様たちの抱える問題を少しでも軽くできるのなら、なんでもします」

「ほんとか？ それなら俺たちの一族に加わってほしいんだけど——」

「ごめんなさい。ソレイユ様は、その、ごめんなさい」

「いや、俺こそこんな男でごめんな——いや、そういう意味じゃないぞ。そういう意味じゃないんだが……なんだこの虚しさ」

胸を押さえ、魂の抜けたような目で天井を仰ぐソレイユに、ルカは「冗談です」と指先を口に当てて可愛らしく微笑む。

「ソレイユ様には、すでに可愛らしいお相手が二人もいらっしやいますから、わたしの入る余地はないでしょう」

楽しそうなルカの声に、ソレイユは首をかしげ、すぐに思い立ったように手をたたいた。

「ああ、リオとイザヤのことか。まあ可愛らしいかどうかは置いておいて、いい奴ではあるな」

「あら、私のどこが可愛げがないと?」

「いま、まさに、この瞬間、だ」

さっくりとソレイユのこめかみにくちばしを突き刺すリオに、ソレイユは据わった目で言った。

リオのくちばしを引っ抜き、傷口を手のひらで押さえながら文句を言うソレイユと知らぬ顔で佇むリオを見て、ルカは顔を綻ばせた。そして、ふと気になっていたことを思い出したルカは、清潔な布をソレイユに手渡しながら口を開く。

「そういえば、ソレイユ様とリオ様が一緒にいるのはわかるのですが、お二人とイザヤ様はどうしてお知り合いに?」

「ん、ルカには言ってなかったか?」

その布を受け取りながら、ソレイユは意外そうに聞き返す。ルカが小さく頷く。

「そっか、じゃあ話すよ。とは言っても、そんなに長い話じゃない

けどな。まあ、とりあえず部屋に入ってからな」

さすがにこれ以上廊下で立ち話をしていると怪しまれるとまではいかずとも、宿屋の主人や宿泊客に注目されてしまう危険性がある。イザヤがいる部屋の向かい側にある三人部屋の扉を開きながら中に入るよう促すソレイユに、ルカも頷いて部屋に入った。

ソレイユたちが部屋の中へと消えたと同時に、二階の一番奥にある部屋の扉が開く。そこから顔を出した三十前後に見える長身の男は、音をたてずに部屋から抜け出すと、ソレイユたちが入っていた部屋の隣にある空き部屋に身を滑り込ませた。

暗い部屋に入った男は、息を殺して壁に身をつけると、神経を耳に集中させた。

かすかに聞こえてくる話声を聞きながら、男の口元に笑みが広がっていく。

（なるほどねえ。そんなことがあったわけか）

そのまましばらく男が隣の部屋の会話に集中していると、部屋の扉がゆっくりと開かれ、そこから一人の少女が顔を出した。

少女は冬の湖畔に貼った氷のような表情を崩さないまま扉を閉めてから、男に向かって手招きをする。男は頷いて少女に歩み寄り、顔を近づけなければ聞こえないほどの声で囁いた。

「どうした？」

「情報操作はおおむね成功しました。ですが、一番食いついて欲しかった獲物には、逃げられたようです」

そう囁き返してきた少女に男の顔が真剣なそれへと変わる。

「――さすが、ってところだな。それで、奴は今どこに？」

男の問いに、少女はしばし間を置いてから、抑揚のない声で言った。

「すでに、この街に」

予想しうる限りの最悪の返答に、男は前髪をかきあげると、窓から見える空に浮かんだ星の中、一際異彩な輝きを放つ赤い星を見上げて肩を落とした。

「まいったね、こりゃどうも」

1-21 再来、緋の使徒

翌日の正午過ぎ、唯一心配事なく外を出歩けるルカと梟に扮したリオに次の目的地までに必要な物資の調達を済ませてもらうと、イザヤたちは宿屋を後にした。

真昼間だったが、やはりコランに人の気配は少なく、活気はここへ来たとき同様微塵も感じる事ができなかった。それでも用心するに越したことはなく、イザヤたちは宿屋から街の出口まで二手に分かれて目立たないように出て行くことにした。

最初に門へ辿り着いたイザヤとルカは、そこにいた門番に偽造の身分証明書を見せる。門番はイザヤとルカの証書をろくに確かめもせず、すんなりと二人を通した。ルカはともかく、イザヤなどはフールドですっぱりと顔を隠していたというのに、怪しむ素振りすらない。

門を出て、石橋を渡っている途中、こっそりと後ろをふり返ったルカは、いかにも沈鬱な表情で佇む門番を見て苦笑する。

「これなら、二手に分かれるまでもなかった気がします」

「……来たときもそうだった。この奴らは、人よりも魔物に恐怖を持っているからな。人には甘い」

「そうですね。何も変わりません。この数日間の間にあったことは、わたしにとっても大きなことでも、彼らにとっては無にも等しいということですね」

「当たり前だ。知らないんだからな、何も」

「彼らが知らないように、わたしも彼らが何をしていたのか知りません。——なんだか、遠いですね。同じ世界で生きているのに、どうしてこうもわたしたちの距離は遠いのでしょうか」

困ったように微笑みながら、ルカは足元に視線を落とす。イザヤ

は答えず、二人の間には沈黙が広がった。しかし、ルカはその空気をさして気にするでもなく、ときおり橋の上から堀の中を見下ろしたり、目の前に広がる森に目を向けながら歩き続けた。

イザヤとルカは無言のまま橋を渡り終わると、そのまま森の中へと入った。そして、イザヤたちから見ても、コランの外壁が見えなくなる頃まで真っ直ぐに歩くと、そこで一度足を止める。

この辺りの場所で、ソレイユたちと落ち合う手はずになっていた。

「遅いですね」

しかし、イザヤたちが足を止めてから既に三十分が経過しようとしているというのに、ソレイユとリオが合流する気配はない。

ルカが不安そうに表情を曇らせる中、イザヤの耳は草を踏み分ける足音を聞いた。その音が、遅れてルカにも聞こえたのだろう。口元を綻ばせて迎えに出ようとする彼女を、イザヤは黙ったまま片手で制した。

「イザヤ様？」

「違う。あいつじゃない」

ソレイユの足音など、これまで飽きるほど聞いてきたのだ。土の上で、石の上で、砂の上で、そして、草の上で。そうして今ではすっかり彼の足音を覚えてしまった耳が告げる。これは、ソレイユではないと。

大半を梟の姿で過ごすリオの足音まではイザヤもまだ正確には把握していない。そのため、これがリオの足音だということは否定できないが、聞こえる足音は一つ。もしもリオが魔族の姿に戻っているのなら、足音は二つ聞こえなければおかしいし、何より出発のときは梟の姿だった彼女がわざわざ魔族の姿に戻っている理由が思い当たらない。

それだけのことを一瞬で考えたイザヤは、右手をルカの前に、左手は剣の柄に添え、じっと音のするほうを睨んだ。

足音は音を殺すことなく、大胆に、着実に近づいてくる。

そして、木々の間から、彼女は来た。

緋色の衣を纏い、端然として優雅に、楚々たる風情で歩を進める少女の金砂のように細やかな髪が肩下で揺れる。翡翠の双眸はどこまでも穏やかで、透き通っていた。

胸に金の十字架を下げ、腰に細身の剣を帯刀した少女は、硬直するイザヤとルカの正面に立つと、しなやかに一礼する。

「お久しぶりです、イザヤ。――そちらの方は初めてお目にかかりますね。リリス・シン・リンツィアフィールと申します」

ルカに向けてやんわりと笑みを向けるリリスは、傍から見ればあどけない少女そのものだった。しかし、彼女が見た目どりの人物でないことは、イザヤも身に沁みてわかっていたし、ルカもリオの話からリリスのことは聞いていた。

とはいえ、相手が礼を尽くしているのに返さないというのは、ルカにとっては居心地の悪いものらしく、警戒は解かずに頭を下げた。

「はじめまして、ルカ・スマラクトです。せっかくお会いできたのに残念ですが、すぐにお別れしなくてはなりませんね」

言いながら顔をあげたルカは、リリスを正面から見つめて微笑んだ。

リリスはそんなルカの様子にまた笑みを返すと、イザヤに視線を戻す。

「私の用件はご存知かと思います。ですがその前に、一つ、あなたに確認したいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

頭の中で必死にこの場から逃げる算段をたてていたイザヤは、一部の隙もないリリスに、眉をひそめて頷いた。とにかく、状況を把握する時間が欲しかったのだ。

リリスは、フードに覆われていないイザヤの口元が真一文字に結ばれているのを見つめながら言った。

「カルディアで、騎士たちを殺害したのはあなたですか？」

まったく予想してなかった所からの一手に、イザヤは軽く目を見開く。リリスの口調はかろうじて問いかけるように聞こえたが、確信をもっていても聞こえた。

斜め後ろにいるルカが動揺した気配を身体で感じながら、イザヤは首を倒す。

「そうだ。私が殺した」

正確にはリオやマギも加害者側に入るのだが、細かいことを一々説明する気はなかった。

リリスはイザヤの答えに眉一つ動かさず、むしろわかっていた回答を聞くような様子で口を開いた。

「ノエル・シュタイン、マギ・グレイス。この両名を、あなたは知っていますね？」

「ああ」

「あなたは彼女たちのために、あのようなことをしたのですか？彼女たちは今、どこにいますか？」

「すべてに答えるつもりはない」

本当なら、殺した、と答えるのがノエルたちにとっては都合がい

いのだということはわかっていた。

もし、ノエルやマギがカルディアの事件に加害者という形で関わっていると思われれば、彼らの両親は処罰を受けることはなくとも、周囲からの視線は厳しいものになるかもしれない。それは、両親を愛していたノエルにとって決して望むことではないだろう。

ならば、ノエルとマギは事件に巻き込まれて殺された、と名目を打ってしまったほうが、哀れな被害者として片付けられる。どのみち、彼らは魔界へと行き、戻ってくることはおそらくもう、ない。
こっち人間界で暮らすものとして、それは死んだことと同じになるはずだ。しかし、彼らが加害者としてこの事件に関わっていたのは事実であり、また死んでもいない以上、嘘をつくわけにはいかなかった。
リリスはイザヤの返答に、しばし目を閉じ、ゆっくりと開いた。

「なるほど。わからないことは多いですが、これ以上は答えてくれそうもないですね」

「私も、一つ聞きたい」

イザヤが言うと、リリスは顔をあげて頷いた。

「どうぞ。私で答えられることでしたら、なんでも」

「――残りの二人はどうした？」

抜き身の刃のよう鋭利な声が、静まり返った森に響く。

リリスはすっと背後を指差した。

「ここから少し離れた場所で、お連れの方達と一緒にいます」

やはり、とイザヤは溜息を吐く。

「いつから私たちがここにしていると気付いていた？」

この手際の良さが行き当たりばったりであるはずがない。少なくとも半日以上前から、イザヤたちの行動を見られていたと考えるのが自然だ。

そして、イザヤの推測は間違っていないようで、リリスは腕を下げてから微笑んだ。

「昨日の昼ですね。コランへは二日ほど前から来ていたのですけど、こうも広い街です。昨日、偶然あの梟の魔族を見かけなかったら、見過ごしていたかもしれません」

一瞬、小憎らしいリオの顔を思い浮かべて舌打ちをしそうになったが、リリスがこの街に来ていることなどイザヤも想像していなかった。リオを責めるのは筋違いだと、頭に浮かんだ顔を掻き消す。

「他には何か？」

「いや、いい」

「そうですか。――ああ、そういえば、あと一つ。イザヤ、あなたの後ろに誰がいるのですか？」

「……何を言っている？」

ルカがいるが、そんなことをわざわざ聞いてくるリリスの意図を読み取れず、イザヤは訝しげに眉をひそめる。

そんなイザヤの反応に、リリスは顎に指先を当てて考え込むと、静かに首を横にふった。

「いいえ、なんでもありません。急くつもりはないのですが、そろそろ始めましょうか」

言ってから、リリスが一本の剣を引き抜く。その時、彼女の腰に

二本の剣が帯刀されていることにイザヤは気付いたが、さして気にすることでもない。剣から手を離れた。

そして、両手を地面に向かって広げる。

木々の陰影から集まる闇の欠片がイザヤの手に収束している様子を眺めながら、リリースの頬を冷たい汗が滑り落ちた。

「この感じ——始まるみたいだね」

木々の隙間を通り抜けてくる、肌を刺すような力の流れに、穏やかな面持ちをした細身の青年が目を細めた。

「ちっ、やっぱり納得いかねえな。俺がやりたかったのによ」

青年の隣で、長槍で肩を叩く長身の青年が大袈裟な溜息を吐く。癖の強い灰銀の髪を片手で掻き、青年はおもむろに槍を動かした。それは、彼らの様子をじっと観察していたソレイユの眼前に振り下ろされ、ソレイユの顔を隠していたフードを割った。

「仕方ねえ。たまには上官の命令を聞いてやるさ。俺はバラク、そっちはセト。まあ、この戦いの間くらい覚えとけよ」

「ああ、いいぜ。俺はソレイユ。それで、リオだ」

肩に止まっているリオを指差しながら、ソレイユは悠然とした笑みを浮かべる。鼻先寸前に槍の穂先を突きつけられてもまったく動じる気配を見せないソレイユに、バラクは愉しげに口元を歪ませて槍を下ろした。

「いいな、おまえ。おいセト、邪魔をするなよ。俺はこいつと遊ぶ」

ことにした」

「それはかまわないが、何もしないで立っている、というのは少し気が引けるよ」

「それなら私がお相手しましょう」

次の瞬間、梟の姿から魔族の姿へと戻ったリオに、セトとバラクは軽く目を見開いた。

「残念、魔族じゃなけりやな」

漆黒の髪の間から覗く金の双眸を見、バラクは口端をあげた。
リオは、しかしバラクに声をかけることなく、探るような目で見つめてくるセトに視線を向けた。

「どうやらあなたの方が、彼よりも厄介そうですから」

「褒め言葉として受け取っておきます。では、少し場所を変えましょうか。彼は周囲なんてお構いなしに暴れまわるので」

「いいでしょう。――主様、無理に決着をつけようとなさらないでください。すぐに戻りますので、それまで半死でも生きてくださいれば結構です」

「おう、傷一つなく生き残ってやるわ」

拳を震わせるソレイユに、リオは笑みを浮かべて頷いてからセトと右方へと消えていった。

「傷一つなく、か。言ってくれるじゃねえの」

喉を鳴らせて、バラクは笑った。

「ところでよ、俺の役目はリリスがイザヤを大人しくさせるための

時間稼ぎなわけだが、当然魔族のおまえを生かしておくつもりはねえ。さっきの女もだ」

「俺がおまえに何かしたか？」

ソレイユの問いに、バラクは肩を竦める。

「いや、何も。だが、そんなことは関係ねえだろ。おまえが魔族で、俺が人間。殺し合うには十分過ぎる理由がある」

「わからないな。なんでおまえたちは種族に拘るんだ？ おまえはおまえで、俺は俺だ」

「ハ、俺からすればわからねえのはてめえらだ。どうしてさつさとイザヤを魔界へ連れて行くなり、蒼眼を奪うなりしない？ どうして“仲間ごっこ”なんてのをやってんだ？」

瞬間、鋭く細まった目がソレイユを射抜く。

「目的はあいつの眼なんだろう？」

バラクの言葉を聞き終えたソレイユは、束の間口を閉ざすと、肩の力を抜きながら小さく笑った。バラクが訝しげにソレイユを睨み据える。

「何がおかしい？」

「いや、イザヤがあんなに捻くれちゃう理由がわかった気がしただけだ。——そうだよな、そりゃ嫌にもなるな」

イザヤの顔を思い出しながら、ソレイユは眉を下げる。ソレイユの記憶にある彼女の表情は、いつも、影を抱えたものばかりだ。

しかし、それも今ならわからなくもない。こうして第三者からイザヤのことを聞くと、彼女が周囲にどう思われていたかがはつきり

と見えてくる。

（蒼眼、蒼眼、蒼眼。そればかりだ。誰も、イザヤを見てないんだ）

たった一つ、周囲と違うものがあるだけで、ヒトはそれだけしか見なくなる。イザヤの考えも、行動も、苦悩も、理想も、希望も。すべては蒼眼という異常の前には無意味なものとなる。

ほんの少し距離を置いて視野を広げれば気付くことができるものが数多くあるというのに、ヒトは異端を嫌い、拒絶し、目を逸らす。そして、じっと誰かが消し去ってくれるのを待つのだ。

大きな流れの中で、それに逆らってまでイザヤを救おうとするものはいなかったのだろう。誰もがイザヤから目を逸らし、彼女が堕ちていくさまを隠れて見続けていたに違いない。

（だったら、俺だけでもイザヤから目を逸らさなければいい）

そうすれば、いつかイザヤも気付いてくれるかもしれない。ヒトは、弱いだけで、彼女が思っているほど醜くはないのだということに。

そして、何よりも、ヒトは変われる。この世に不変のものが存在しないように、ヒトの心もまた、変わりゆくものだということに。

先にある結果は、いつも彼女に優しいとは限らない。けれど、可能性はあるのだ。

蒼眼と生きるうちに、イザヤは先が視えると勘違いをしている。今、この瞬間に視たものが全てだと思っ込んでいる。変化という可能性を、イザヤは見限ってしまったているのだ。

（まあ、それはゆっくり時間をかけてわかってもらえばいいさ。そのためにも今、俺がこの場でやらなきゃいけないことは――）

赤い双眸を真っ直ぐに向けてくるソレイユに、バラクは瞳孔を開く。

「やるか？ いいぜ。言葉を交わすより、こいつのほうが手っ取り早いもんなあ」

「よくそんな目見開いていられるな。乾燥するぞ」

「心配には及ばねえよ！ すぐにてめえの血で濡れるんだからな！」

地面を強く蹴り、飛ぶようにして襲い掛かってきたバラクの長槍をかわしながら、ソレイユは歯を見せて笑う。

「そいつは困るな。傷一つなくって宣言した手前、血を流すわけにはいかないんだよ。よだれでいいか？」

「かけたら殺す」

べっ、と唾を吐き出すソレイユに、バラクのこめかみが引き攣る。ソレイユは腰から回転式拳銃を取り出すと、撃鉄を指で引き起こした。両手でしっかりと支え、銃口をバラクへと向ける。

そして、

「とにかくおまえはイザヤの敵だ。あいつを傷つける気なら、おまえに恨みはないが無事に帰すわけにはいかないな」

引き金を引いた。

1-22 衝突、魂と魂

純粹な剣術ではリリスに適わないと判断したイザヤは、迷いなく闇の神魂＞による二振りの剣を作り出した。

リリスと剣を交えたのは、彼女と初めて出会ったエフィラムの森で一度だけだが、やはりこの若さで〈使徒〉を名乗るだけあり、その実力は計り知れない。下手に踏み込めば、一太刀で斬り捨てられかねなかった。

しかし、どういった理由かは知る由もないが、リリスたちにはイザヤを殺せない、という制約がある。この情報をどうにか利用してこの場を切り抜けなければならぬのだが、そこで気がかりとなるのがルカの存在だ。仮にイザヤが上手く逃げられても、逃げられなくとも、ルカの安否がどうなるのかがわからない。

イザヤはリリスを正面から見すえたまま口を開く。

「使徒、おまえの目的は私だけだな？」

「はい、そうです。ですから、そちらの方が邪魔をしないのであれば、私は危害を加えるつもりも、あなたの協力者として捕らえるつもりもありません」

さもわかっている、とばかりにリリスは核心を聞く前に答えた。

ルカを見つめ、リリスは口元を緩やかに上げる。

「エルフを巻き込むというのも、なんだか気が引けてしまいますから」

「気付いていたのですか」

かすかに目を見開いて、ルカが頭を覆っていた布を取り払う。翡翠色の髪から真横に伸びる長い耳に目を向け、リリスは頷いた。

「ええ。昨日、あなたと魔族の会話を耳にしていましたし、何より、あなたが持つ清廉な存在感は人間や魔族にはないものです」

清廉、という言葉にルカは口を噤ませた。

どこか辛そうに眉を下げるルカを横目で見つ、イザヤは言った。

「それだけ聞ければ十分だ。このエルフには手を出させない。だから、おまえはこの先こいつには手を出すな」

「イザヤ様！」

ルカが叫ぶ。イザヤは、しかしルカの声には耳を傾けず、リリスの言葉を待った。

リリスはそんなイザヤとルカの様子を見つめ、口に手を当てて小さく笑った。そして、柔らかな双眸を細める。

「私の気のせいかもしれませんが、少し雰囲気が変わりましたね、イザヤ」

「返答は？」

短く聞き返すイザヤに、リリスは首肯する。

「約束しましょう。彼女が手を出さない限り、私たちは彼女に干渉である、と」

嘘のない言葉。これで、少なくともルカの安全は確保された。

ルカはイザヤに恩義を感じていると言っていたが、〈使徒〉に狙われ続けるのでは割に合わない。そもそも、イザヤはルカに恩義を感じて欲しくて助けたわけでもなければ、自分のことに他人を巻き込むことも嫌いだった。

ただ一つ、心残りがあるとすれば、それは彼女との約束を違えてしまうかもしれないということ。

ルカが暴走したら止める、とイザヤは言った。だが、その約束を守るためにルカを死なせては意味がないのだ。

（こいつ相手に、無事に逃げられる可能性は少ない……）

こうして改めてリリスと対峙するとよくわかる。彼女からは何も感じない。喜びも、悲しみも、怒りも、憎しみも、恐れも感じない。教団にとって厄介者であるイザヤを前にしても、目の色一つ変えない少女。

つまりは、空っぽなのだ。以前、絶対的な死を前にしたときも、リリスの瞳は静かだった。あの瞳の色は、あのような少女が死を前にして出せるものではない。リリスは、自分の死すら遠いものに感じている、そうイザヤには思えた。

イザヤの経験上、そういった手合いは非常に厄介だ。

乾いた喉に唾液を流しつつ、イザヤはふりかえった。敵を前に背を向けることには抵抗があったが、リリスは背後を襲うような真似はしないという確信もあった。

「聞いたとおりだ。おまえは早く――」

そして、ルカにこの場を立ち去るように言おうとしたイザヤは、

「ご容赦下さい、イザヤ様！」

思い切り殴られた。それも、頭を、拳で。

あまりにも唐突で、予想外のことに、イザヤは言葉一つ口に出せず、くらくらと揺れる頭を押さえた。

ルカは細い肩を震わせていたかと思うと、顔をあげてイザヤの胸

に指を突きつける。その顔は普段の彼女からは想像もつかないほど
険悪で、イザヤは思わず身を仰け反らせるが、ルカはお構いなしに
声を荒げて言った。

「イザヤ様、正直に申しましょう。わたしは、怒っています」

「や、約束を守れないかもしれないことは、謝る。だが、この場は
こうする他――」

「お黙りください。そんなことを怒っているわけではありません」

にっこりと、それはもう満面の笑顔でルカは喉から低音をひねり
出している。あまりの変貌ぶりに、イザヤは完全に硬直していた。
騎士を前にしても緊張こそあれ恐怖などはしないイザヤが、久方ぶ
りに感じた恐れだった。

「あなたはまたわたしに逃げろというのですか。そんなのは嫌です。
わたしはもう、大切な人たちを殺したくはないのです」

「なにを言っている？ 別に、私はおまえにそんなこと……」

「見殺しにすることは、殺すことも同然です。そのような道を選ぶ
くらいなら、わたしはここで戦って死にます」

そう、ルカが啖呵を切ったと同時に、

「――それは困りますね」

リリスの涼やかな声と共に、ルカの周囲を青光りする光が覆った。
それは、まるで鉄格子のようにルカをすっぽりと囲み、絶えず火花
を散らせている。

イザヤがリリスを見れば、青白い光を帯びた彼女の腕が真っ直ぐ
にルカへと向けられていた。リリスは穏やかな表情を崩さずに腕を
下げると、地面に刺してあった剣を取った。

「必要以上の犠牲は出たくありません。少しの間、そこで大人しくしてはいただけませんか？」

言い聞かせるようなリリスに、ルカは、しかし首をふって微笑んだ。

「お断りします」

一閃。

振り切られたルカの腕が横一文字を描く。白い一線が雷の檻を横に裂き、直後に発生した暴風により、それは朝日に散らされた靄のように虚空に消えた。

ルカは手に持った鉄扇をリリスへと向け、毅然とした口調で言い放った。

「みくびらないでください。確かにあなたの實力はわたしを上回っているでしょう。しかし、だからといって逃げ出すつもりなど毛頭ありません」

「ええ、認識を改めましょう。あなたは、斃すべき敵です」

イザヤが制止に入る間もなく、リリスは瞬時にルカの眼前にまで迫る。まるで見えなかった。ただ気付けば緋色の衣がルカの前ではためいていて、銀の刃が咄嗟に出された彼女の腕を裂いていた。

鮮血が飛ぶ。だが、リリスは止まらない。斬り上げた剣をさらに振り下ろす。それはルカの首を狙っていた。イザヤ同様、リリスの速さについていけなかったルカは、しかし、次の動作を止めることはなかった。

たたらを踏んで倒れながら、ルカは鉄扇をふるう。飛翔する風の刃がリリスを襲った。

はつきりとした形はない、ただ空気を揺らめかせるだけのそれを、リリスは小柄な身体をたくみに動かして、後退しながら避ける。

掠り傷一つ負うことなく、すべてを避けきったリリスは、血が滴る腕を押さえるルカを、そして横で〈闇の神魂〉によって作り出した剣を構えるイザヤを見すえた。

静かな双眸でふたたび剣を構えるリリスに、ルカは腕の傷がさほど深いものではないことを確認しながら言った。

「ずいぶんと、ためらいがありませんね」

ルカが冷たい汗が伝う首を手で触る。リリスは片手をゆっくりと自分の胸に当てた。

「この緋色の装束は、使徒が負う二つの覚悟の現われです。一つは言うまでもなく、いかなるときでも枢機卿のため、己の血でこの身染める覚悟。もう一つは、命令とあらば、誰の血であろうとも浴びる覚悟。私たちの服は、死に装束であり、罪の証でもあるのです」

ルカの血を浴びた剣を下げながら、リリスは儚げに微笑んだ。

「この服を纏ったときから、私は教団の傀儡です。これまで、数え切れないほどの人を斬ってきました。人も、魔族も、魔物も。そんな他者の血でまみれた私が、どうしていまさらこの道を外れられましょう」

「あなたが望めば、違った道もあるかもしれないというのに？」

「私は望みません。私が望んだたった一つの道は、もう行き止まりを迎えてしまったから」

そのとき、一瞬だけリリスの瞳に浮かんだ悲壮に満ちた光を、イザヤは見た。――いや、見たというよりも、見ざるをえなかった。

なぜなら、リリスの視線は言葉を交わしているはずのルカではなく、イザヤに向けられていたのだから。

リリスは、剣を構えなおした。

「——おしゃべりが過ぎましたね。では、いきます。イザヤ、それにルカさん。目的もない私が生きようとするあなたたちの道を奪うこと……恨んでくれて結構です」

※

白い光がリオの手元から放たれる。正確には、それは白い光などではなく、鞘から抜き放たれた刀の斬撃に他ならないのだが、少なくとも、セトには一瞬の閃光のようにしか見えなかった。

手にしていた剣が弾かれる。弾き飛んだ剣が地面に刺さる音をセトが耳にしたとき、リオはふたたび刀を鞘に納めていた。

次いで放たれた二の太刀がセトを狙う。かろうじて見えた剣閃に、セトは体勢を低くする。掠った毛髪が地面に数本落ちた。

「……〈水の神魂〉ですか。このような水気のない場所ではさして恐れるほどでもないと思っていましたが」

リオが手の甲から滲み出る血を舌で舐めながら言う。手の甲だけでなく、リオの二の腕まで覆う黒手袋にはいく筋もの切れ目ができていた。

身を起こしながら、セトはそばにあった木の幹に手を当てる。

「水分はどこにでもありますよ。この木の根にも、地面にも」

「もっと言えば、この空気中にもありますね。つまり私は、見えな

い凶器に囲まれているようなもの、ということですか」

ため息をつくりオに、セトは頷いてみせた。セトが力を使えば、すぐにでも彼女の背後に水の針を作り出し、突き刺すこともできる。さきほどリオの腕を裂いた水も、リオの攻撃を避けながらセトが側面からしかけたものだ。が、リオが受けた傷はセトが想定していたものよりも遥かに浅い。信じられないことだが、リオは攻撃を仕掛けながらセトの攻撃に気付き、脇腹を挟むはずだった水針を掠り傷で済ませたのだ。

いったいどのような身体能力と判断力をもってすれば、そのような動きができたのかはリオの動きを見ていなかったセトには知る由もない。しかし、彼女がこれまで相対したどの魔族よりも手強い敵であるということは疑いようもなかった。

（だからこそ、ここで仕留める）

リオをリリースの元へ行かせてはならない。リリースにイザヤを倒す策がある以上、イレギュラーになりかねないリオはここで絶対に足止めさせる必要がある。

確かに、セトの力である〈水の神魂〉が一番の力を見せるのは水辺だ。解放者にとって、〈神魂〉の力を水に変換して戦うよりも、周囲に元々ある物質を操るほうが、はるかに負担は少なくて済む。いくら地面や木、空气中に水分があるとはいっても、量はたかが知れており、広範囲から水分を集めようとすれば相応の負担がかかる。自身の力量について十二分に理解しているセトは、リリースやバラクのような持久力が備わっていないことも承知していた。だからこそ、無謀な真似はできないことも。

しかし、今の相手は、力を出し惜しみして勝てる相手ではない。最良の手は、時間を稼ぎつつ、リオの体力を少しでも多く奪うことだ。

次に仕掛ける攻撃の方針が決まったセトは、立ち上がった。

リオは口に薄い笑みを浮かべると、刀の柄に手を添えたまま地面を蹴って飛び上がった。

数瞬前までリオが立っていた地面から、ぼこり、と水が湧き上がる。湧き上がった水は形を縄のように細長く変え、中空にいるリオの足に絡みついた。

（捕らえた――！）

意識を集中させ、手を引く。セトの動きに呼応するかのようになり、水縄はリオを地面に叩きつけるべくうねる。

刀では斬ることができない水の縄。足の自由を奪われたリオはもはや地面に伏すしか道はない。あとは、いくらでもやりようはあった。

勝てる、そうセトが確信し、リオが地面に強く叩きつけられる音を聞いた瞬間、セトは脇腹に鋭い痛みを感じた。

「え……」

痛みの正体がなんであるのかをセトが理解するよりも早く、額から血を流したリオが立ち上がる。彼女の腰にある鞘が空っぽになっていることに気付いたセトは、自分の身に起きたことをようやく悟った。

脇腹に突き刺さっている刀。叩きつけられる瞬間、リオが投げたのだ。

（まったく……信じられない、女性だ）

セトは、込み上げてくる苦笑を飲み込むことができなかった。地面に叩きつけられる刹那、リオは、受身を取るでもなく、セト

に牙を剥くことを選んだ。無理な体勢で投げたため、セトに刺さった刀はさほど深い傷を与えてはいない。

しかし、セトは、リオの相手に一撃を与えられるのなら自身が傷つくことを厭わない戦いのへの姿勢に、畏怖を感じた。

同時に、リオには勝てないという現実が、たしかな重みを持ってセトに降りかかってきたのだ。

腕に絶対の自信があったというわけではない。もとより、セトは自信などというものを何一つ持っていなかったし、持とうとも思っていないかった。

自分に必要なものは、リリースの為にこの命を使う、そう心に決めた誓約だけだ。彼女の為に生き、彼女の為に死ぬ。彼女を尊重し、彼女に従う。――それが、セトのすべてだった。

だからこそ、強さは必然なものだった。リリースの歩く道は常に戦いを伴うものであり、弱ければ後ろを歩くことすらできない。

(なのに、このザマとは……)

震える手で、刀を引き抜く。崩れるように膝をついたセトを、リオは少し離れた場所で腕を組んで見下ろしていた。

「刀を投げるのは少々邪道でしたかもしれませんがね。私にこの古流剣術を教えた方に怒られてしまうかもしれません」

「古流剣術……たしか、アルトリスタ王国に伝わる、剣術でしたか……」

「ええ。随分と昔のことになりますが、アルトリスタの武人に教わったものです。確か、イアイ、と言っていたような気がします」

「古流の技は……アルトリスタの鎖国と同時に姿を見せなくなった、と……聞いていましたが……魔族から、見せられることになる」とは

傷は浅くとも、流れ出る血を止めることができず、セトは手で傷

口を強く押さえた。

「――辛そうですね。そろそろ、終わりにしましょう」

刀を拾い上げたりオがそれを鞘に納めて、数歩後ずさる。リオが刀の柄に手をかける。セトは無意識に腰に帯刀していた短剣を顔の前に立てていた。その短剣が、中ごろから二つに斬れる。視界が赤く染まり、額にすさまじい熱が走った。

すぐに左手から出した水で顔を洗ったが、次から次へと溢れ出る血は留まることを知らず、視界を覆う。

痛みに耐えながら、セトは草を踏む音を聞いた。身体をバネのようにしならせて、横に飛ぶ。地面を抉るような音がしたが、目を潰されていては確認のしようもない。

気配と音でリオの位置や動きをある程度察することはできる。しかし、リオ相手にそのような戦い方が通じるとは思えなかった。

偶然手に当たった感触ですぐそばに木があると気付いたセトは、その後ろに回り込み、木を背にして走った。脇腹が引き裂かれるような痛みを訴えてくるが、今は走るしかなかった。

このまま戦っても勝ち目はない。人質になっても、殺されても、リリースの足を引っ張ってしまうことになる。セトが人質になればリリースは迷わず死を選ぶだろうし、セトの死を聞けば彼女は動揺する。どちらにしても、リリースの命を脅かす結果にしかないのだ。

だとすれば、セトにできることはただ一つ。この場から速やかに離れ、逃げ切ることだけだ。

（申し訳ありません……リリース様）

手探りで、森の中を駆け抜けながら、セトは一心にリリースのことだけを考えていた。

※

「拳銃か。そんなもん、不意打ちでもなければ解放者の前には力不足だぜ？」

ソレイユが放った弾は、すべて隆起した土壁の前に防がれた。めり込むことさえせずに勢いを殺された弾が、重力に従って地面に落ちる。

「みたいだな」

そう言うや、ソレイユは撃鉄を引き起こしながら土壁を回り込んだ。ソレイユの動きを予想していたのだろう。バラクの槍が心臓目掛けて突き出される。ソレイユは身体を捻らせると、槍の柄を脇でしっかりと挟んだ。

動きが止まった。そう思ったソレイユはすぐに引き金を引こうとした。が、ふいに脇に挟んだ槍に力がなくなり、体勢を崩す。

（こいつ……自分の武器を）

何のためらいもなく、バラクは槍を捨てたのだ。

逆に動きを止めてしまったソレイユの脇腹にバラクの足が叩き込まれる。太い櫓の棍棒で殴られたような衝撃に、ソレイユは肺から息を吐き出しながら吹き飛んだ。

地面に倒れるソレイユに、バラクはにやりと笑う。

「使えねえもんは捨てちまったほうがいい。武器でも人でも同じだ」

簡単な理屈だろ、とバラクは蹴られた際にソレイユが放してしまった槍を拾い上げながら言った。

ソレイユは、激しい痛みを訴える脇腹を手で押さえながら、身体を起こす。バラクの筋力は並外れている。思わず気絶しかけたほどの衝撃だった。

幸いだったのは、バラクは根っからの戦闘狂であり、すぐさまソレイユに止めをさしにかなかったことだ。彼は戦いが早く終わることを望んでいない。だからこそ、倒れて隙だらけだったソレイユがこうして立ち上がるまで待っていたのだ。

ソレイユが立ち上がったのを見ると、バラクは地面を蹴って真っ向からぶつかってくる。

休む間もなく突き出される穂先を銃身で受けながら、ソレイユは口を開く。

「あんたはさ、なんで使徒なんかやってるんだ？」

「――退屈だからだよ。こうして刺激を受けていないと、人生は長すぎて、狂っちまう」

「長い？　まさか。人間は、どんなに長くても百年が限度だって聞いたぜ？　普通は、その半分くらいだって。どこが長いんだ？」

片眉を上げてソレイユが問い返すと、バラクはため息をつくように笑みを零した。

「おまえたちと同じモノサシで俺たちを図れるかよ。いいか、俺たち人間とおまえたち魔族は違う。だからこうして戦争してんだろ？」

「違うのはわかる。でも、違うことと、戦うことがどうして繋がる？」

「わからねえからだよ。理解できないもの同士は、結局ぶつかるしかねえ。殺し合って、奪い合って、はじめてわかったよ。戦争から生まれる恐怖や憎しみこそが、俺たちがもっとも理解し合えるもの

だ。だから、俺はこの戦いのない世界の奴らより、イザヤのような人間やおまえたちみたいな魔族とのほうが、理解し合えると思ってるぜ」

バラクの目には少しの揺らぎもない。おそらく、彼は自分の道をもう決めてしまっているのだろう。

そして、ソレイユが目指すべき道は、バラクとは 似て非なる道だ。

生命は分かり合えるものだ。それがたとえ、どんなに“違う”ものでも、信じて歩み寄りさえすれば、ヒトとヒトとの間にある隔たりをいつか越えていける。時にはバラクの言うようにぶつかり合わなければならぬときもあるだろう。

しかし、それがすべてではない。ソレイユが選んだ道は、信じることだ。他者に対する信頼。それこそが、ソレイユが作り上げようとしている架け橋。たとえ一方通行だったとしても、いつか、向こう岸からも、きっと橋は下ろされる。

——もし、君が一度決めたら、信じることをやめては駄目なんだよ。

途中で投げ出してしまえば、もう二度と橋は下りないかもしれない。

それに、たとえ橋が下りなくても、きっと何かは残り、いずれ何かを変えていくんだ。

だからね、ソレイユ。私はきっと、死ぬまでこの道を歩き続けるんだと思う。

ふいに、頭の中に響いた懐かしい声は、ソレイユの目の前を明るくしてくれた。薄暗いはずの森の中に、光が差し込んだように、景色が鮮明に映る。

「ああ、やっぱり俺は、あいつの考え方が好きだ。だから、あんたの言うことには納得できないな、バラク」

「そうかよ。まあ、俺は退屈しなけりゃそれでいい。――だから楽しませてくれよ、ソレイユ」

止まっていた時間が動き出したように、バラクの槍にこめられていた力が増し、穂先を銃身で受けていたソレイユを突き飛ばす。

バラクの大振りの攻撃を、ソレイユは身軽に飛び回って避ける。が、その合間に繰り出されるソレイユの銃弾も、バラクに届くことはなかった。

お互いの攻撃を受けないまま続いた攻防は、しかし、徐々にバラクの有利へと傾いていった。

銃弾が切れ、ソレイユが弾を補充しようとした大きな隙。その隙を、バラクは見逃さなかった。

槍で銃を跳ね上げる。無防備になったソレイユの心臓にバラクは槍を突き立てようと構えた。が、突然バラクの背後から現れたリオが、音に反応してふり返ったバラクの顔右半分を切り裂く。ソレイユの目の前で、バラクが大声をあげて仰け反った。

「遅くなりました。お怪我は？」

血しぶきを飛び散らせながら倒れるバラクには見向きもせず、リオは平時と変わらない調子で尋ねた。

「いや、大丈夫だ。それより、リオこそ怪我してるだろ？」

「掠り傷ですよ。――それよりも、戦っているうちにずいぶんと距離が開いてしまったようです。早く、イザヤたちと合流しましょう。少し、嫌な予感がします」

「嫌な予感？」

「……あの使徒、リリースと言いましたか。彼女が無策で闇の神魂の使い手であるイザヤに挑みにかかってくるとは、どうしても思えません。私たちをわざわざ切り離れたことといい、なにかあるよ

うな気がしてならない」

リオの冷ややかな金の双眸にソレイユは口を閉ざし、ふと視線を向けた先に倒れているバラクの口角が歪んでいることに気付く。

「行くぞ、リオ」

「ええ、彼はどうしますか？」

バラクを目で指すリオに、ソレイユは首をふった。

「今はイザヤとルカのところに行くのが先だ」

そう言って走り出しながら、ソレイユもまた、胸の内にかすかな不安がうごめいているのを感じていた。

1-23 突破、闇の落とし穴

二人がかりでなお、イザヤとルカはリリスを攻めきれていなかった。

理由は二つ。イザヤとルカがそもそも複数で協力して戦うことに慣れていなかったこと。もう一つは、リリスが戦い慣れしすぎたことだ。

ルカ的能力が後方援護に適しており、かつ、ルカ自身も近接戦闘に不慣れであるとならずかな打ち合いで悟ったリリスは、巧みな足遣いで常にルカと自身を繋ぐ直線上にイザヤを置くように移動し、イザヤが距離を取ろうとするのを許さなかった。

そうなれば、ルカは簡単には手を出せない。直線的な攻撃はできず、範囲の広い攻撃ではイザヤを巻き込んでしまう。必然的に、ルカの攻撃は到底リリスには意味のない消極的なものとなる。

しかし、それだけならまだイザヤは不安に駆られることはなかった。むしろ、リリスが最初にルカを片付けてしまうかもしれないという予想が裏切られたことに安堵していたほどだ。

(だが……こいつは、さっきからなにをやっている?)

イザヤの心中を巡る不安。それは、先ほどからリリスが無意味とも取れる行動が続けていることだ。

左手に剣を持ち、右手にはく雷の神魂>で作り出された青白い剣を持ち、イザヤのすべてを消し去る黒紫の剣を、雷の剣だけで受けているのだ。

当然ながら、リリスの〈雷の神魂〉で作られた剣はイザヤの剣に斬られた箇所から二つに分かれ、消滅する。リリスはすぐに剣を生成する。そして、また、イザヤによって斬り消される。それを何度も繰り返し返していた。が、いまだリリスには傷一つつけられていない。

この一見無意味な行動を、馬鹿な奴だ、とあざ笑う気にはなれなかった。リリスの目に、口に、かすかな笑みが浮かんでいたからだ。これでいい、と、彼女の瞳は静かに言った。

背筋から首筋をすっと冷たいなにかが這うような錯覚に、イザヤは息を飲みながら、何度目かわからないリリスの剣を斬った。

「イザヤ様！ 後ろに飛んでください！」

瞬間、頭上から聞こえた叫び声に、イザヤは考えるよりも早く地面を蹴っていた。

イザヤが後退するより早く空高く飛び上がっていたルカは、腕を天へと伸ばした。同時に、リリスの前後左右四箇所地面から、細い竜巻が立ち昇った。それは瞬く間にリリスの背を追い越し、ルカが伸ばした腕を捻ると、高速で彼女の周りを回転し始める。

規模こそ人一人覆えるほどの小さなものだが、中の様子が見えないほどの速さで回る竜巻に、イザヤは唾を飲んだ。これでは、中にいるリリスは身動きすらとれずに風に身体を刻まれていることだろう。

小さいとはいえ、やはり竜巻。その回転に引き込まれないよう注意しながら、イザヤは、肩で息をしているルカのそばに駆け寄る。

「これは、どれくらい持つ？」

「正確なところは試したことがないのでわかりませんが、少なくとも……時間的にはわたしの意識がある限り。ただ、わたしがこの場から離れた場合、どこまでもつかは……」

「わかった。それなら、いますぐ逃げるぞ」

「え……で、ですが、これは足止めだけで、それほどの威力はありません。追ってきたら……」

「奴らが私たちの逃げた方角を見失う程度まで距離を離せば十分だ。森の中でなら、私のほうが有利に動ける」

これまで幾つもの山や森に踏み入ってきたイザヤは、山での逃げ方はしっかりと心得ていた。だからこそ、一度こちらを見失わせてしまえば、逃げ切ることができるかと踏んだのだ。

「走れるか？」

イザヤの問いに、ルカは息を整えて大きく頷いた。慣れない戦いの緊張と、〈神魂〉の行使でルカがまいつているのはわかっていたが、今は踏ん張ってもらうしかない。

まずはソレイユたちと合流するところから始めなければならないと、ひとまずコランの方角へと戻ろうとしたイザヤは、ぞっとするような気配に、考えるよりも早くルカの手を掴んで横に飛んでいた。白い稲光をともなった雷鳴が森を照らす。地面を揺るがすどろきき、イザヤたちがいた場所に大きな穴を作っていた。白煙が立ち昇るそれを目を見開かせて見ていたイザヤは、ゆっくりと首を竜巻へと向け、息を飲んだ。

轟々と唸りを上げて回転する竜巻から少し離れた場所に、リリスはいた。

一つに纏められていたはずの金糸を風になびかせ、緋色の服を赤く染め上げて、それでもなお、リリスは冬の湖面のような静かな顔で立っている。

リリスは、目に入りそうな血を袖で拭うと、口元に緩やかな弧を描いた。

「油断しました。私が倒れる前に、次の可能性を検証させていただきますましう」

そう言うや、リリスは腰に帯刀していた両刃の剣を抜くと、それを両手で構えてイザヤに突進した。

イザヤは、左手に持っていた黒紫の剣で受ける。

(どういうこと、だ……)

リリスの剣は、しかし、健在だった。消滅することなく、〈闇の神魂〉による剣と鏢迫り合いをしている。

言葉を失うイザヤとは裏腹に、リリスは微笑んでいた。

「その様子だと、気付いていなかったようですね。あなたの力の弱みに」

「弱み？」

そのとき、イザヤの思考がわずかに戦いから逸れたのを、リリスは見逃さなかった。両刃の剣を放すと、前のめりになったイザヤの背に、瞬時に作り上げた青白い電流を纏う剣を振り下ろす。が、それはイザヤが倒れながらにかまえた剣に当たって消滅した。

イザヤの体が地面に倒れる前、ルカがリリスに向けて風の刃を撃つ。リリスは苦もなくこれを避けたが、イザヤが起き上がるには十分な時間をとれた。

距離を置いて、イザヤとルカと向かい合ったリリスは、手のひらをイザヤに向ける。手のひらの中心が火花を散らせたかと思うと、弾丸のような光が放たれた。一直線に飛んでくるそれに、イザヤは弾の軌道上に剣を立てる。当たった弾は消し飛んだが、それでもリリスは攻撃をやめなかった。

一定の短い間隔を置いて次々に同じ場所へと撃たれるそれを受けるのは簡単だった。イザヤはただ、こうして構えていればいいだけなのだから。

(こいつは……いったいなにを狙っている)

焦りにも似た不安が、イザヤの眉間に寄った皺を深くする。

「おまえ、なにがしたい？　こんなことを続けていても、おまえが倒れて終わりだぞ」

「どうしてそれを私に言いますか？　本当にそう思っているのなら、愚かな行為だと笑って、黙っていたほうがいいでしょう。――それをわざわざ問いただすのは、あなたが不安を感じている証拠です」

凶星をつかれ、イザヤは黙り込む。リリスは、地面を這うようにして迫ってくる風の衝撃波を軽く飛んで避けながら、翡翠の瞳を細めた。

「焦らないでください。私の考えがあっていれば、もうすぐ、あなたにもわかるはずです」

「だから、それはどういう――！」

言い終わる前に、イザヤの体が唐突に崩れ落ちる。

なにが起きたのかわからず、ただ、身体に一切の力が入らなかった。

「イザヤ様！」

耳元で叫ぶルカの声すら、遠い。

「まさか、毒……」

「違いますよ。彼女は、〈神魂〉を使いすぎた。それだけのことで」

ルカの言葉を柔らかく遮り、リリスはぼろぼろになった服の袖を破った。

「使いすぎたって……イザヤ様は、そんなに」

「そうです。彼女が力を使っていたのは、このわずかな時間です。ですが、その時間の中で彼女は一体何度、私の〈神魂〉を消しましたか？」

「どういう意味ですか？」

怒気を含んだルカの声に、リリスは涼やかな顔で言った。

「――彼女の力は、相殺、です」

少しの間を置いて、リリスは続けた。

「毒をもって毒を制す、という言葉がありますが、まさにそれだと私は考えています。彼女の力は、自身の〈神魂〉に触れ合った相手の〈神魂〉に流し込み、相殺する。だから、私や騎士たちの力は消された。私たちが、例えば〈雷の神魂〉で〈火の神魂〉で作り出した武器を交えた場合、形ないものとはいえ、刃を交えることが可能です。力の差が大きければ、また違いますが。――しかし、彼女の力はその優劣なく、相手の力を消し去るのです」

「なんで――おまえが、そんなこと……」

地に伏しながらリリスの声を聞いていたイザヤが問う。リリスは、自分の肩に触れながら答えた。

「完璧な力など、存在しないと思ったからです。あなたに受けた傷、私の肩に受けた傷は、刀傷には見えなかった。それこそ、触れた部分が消されたように綺麗なものでした。ですが、服は普通の刀傷でした。カルディアの騎士たちが受けた傷も、同じく。だから、あなたの力は〈神魂〉しか消せない、という結論に至りました」

「じゃあ、あの剣を消せなかったのは……」

地面に転がる鋼の剣に視線を向けながら言うルカに、リリスは頷く。

「あれは、〈神魂〉の力などもたない、ただの剣からです。服や鎧も同じこと。私たちの身体には、常に〈神魂〉が満ちていますから、消されてもおかしくはありません。イザヤの剣は、〈神魂〉の力に関係していないものに対しては、ただの剣と大差ない力しか発揮しない、ということです」

淡々と語るリリスだったが、イザヤでさえ気付かなかったことを、たった一度の戦いと、関与すらしていないカルディアの一件だけで見破ったという事実が、イザヤの目の前を暗くさせる。

とんでもないものに目を付けられた、という実感が、いまになって身に沁みた気がした。

イザヤは、ゆっくりと震える腕で身を起こしながら、乾いた笑みを零した。

「なるほど。たしかに、おまえの言うとおり……私の力が相殺だと、だとするのなら……この疲れも、納得できる」

イザヤの力がただ相手の〈神魂〉を消し去るだけというものならば、イザヤ自身の力が削られることはないはずだ。だが、それが相殺となると話は違う。

相手の力を消した分だけ、こちらと同程度の力を持っていかれているということだ。

イザヤは、腰から剣を引き抜き、それを支え代わりにして立ち上がった。

「だとしたら、おまえも相当消耗しているんじゃないか？」

リリースとて、いく度もイザヤに力を掻き消され、その度にまた力を搾り出していたはずだ。だとすれば、相応の力は奪われているだろう。

しかし、リリースは疲れた様子も見せず、それどころか、一瞬の間に、彼女を囲うように浮遊する十本の雷剣を作り出して見せた。

「残念ながら、イザヤ、私はこれまで、〈神魂〉の限界を感じたことは一度もありません」

「な……」

「だからこそ、あのような無茶なやり方であなたの力を破ろうと思っただけです」

「それはまた随分と厄介なですね」

ふいに聞こえた第三者の声に、リリースは声の聞こえた方も見ずに手を軽くふった。彼女の周囲に浮かんでいた剣が、空気を裂いて飛翔する。

青白い電流を纏ったそれらの剣は、木々を穿ち、枝を抉り、影に隠れていた二人の魔族の姿をあらわにした。

ふりかえったリリースは、大した傷も負っていない彼らの姿に、整った眉を曇らせた。

「……あなたがこうしてこの場に現れるということは……」

「ええ、彼らは殺しました」

リリースが目を見開く。

「梟、おまえっ……」

「黙りなさい、イザヤ」

左目を押さえたイザヤが呻くように言ったが、リオが鋭い声で遮る。

リリスの唇から始まった震えが指先にまで到達したとき、リオが刀の柄に手をかけたまま走った。

白光のようなリオの斬撃を、リリスは咄嗟に後方へ飛ぶことで避けた。

剣を抜きながら着地したリリスの首に、赤い筋が入る。完全に避け切れなかったのだ。しかし、今のリリスには、自身の身体を蝕む痛みなどどうでも良く思えた。

（セト……バラク……）

彼らの名前を思い浮かべたとたん、体が鉛のように重くなった。剣も、纏っている服さえ、酷く重く今にも落としてしまいそうだった。

戦うことが運命の＜使徒＞である以上、いずれこうなることは予想していた。しかし、心のどこかで樂觀視していたのかもしれない、とリリスは唇を噛んだ。

あの、傍若無人なバラクが死ぬはずはないと。いつも傍にいられたセトが死ぬはずはないと。そんな夢みたいなことを、考えていた。

（死は、唐突に……無慈悲に、理不尽に訪れるものだということを、私は知っていたのに）

ソレイユが撃った銃弾がリリスの肩を抉る。よろけたリリスに斬

りかかってきたリオの刀を、リリスは受け止めた。

降り注ぐ剣閃と銃弾を、リリスは身体が動くままに受け続けた。まるで頭と身体が切り離されたような感覚の中、リリスの腕や足に傷が刻まれていく。

（私はまた……守れなかった……）

もう二度と、大切なものを失う痛みを受けたくはないと手に入れた力が、今はただ虚しいだけのものに感じる。

強さを手に入れても、大切なものはいとも容易く擦り抜けてしまう。指の隙間から零れ落ちる水のように、それは、受け止めることができないのだ。

この力は、自身を生かし、他者を殺すばかりで、何一つ守ることなどできはしなかった。

服だけではない。いつの間にか、手も、心さえも血にまみれていたのだと、リリスは肩を貫く凶器を見つめながら、ぼんやりと考えていた。

歪んでいた視界が空を映す。木々の隙間から見える鈍色の空に、リリスは幼い頃、数年間だけ暮らしていた雪しかない故郷を重ねる。

（私は……いつになったら、もう一度あの空を見れるんだろう……）

灰色の空しか知らなかったリリスが、昔、一年ほどのわずかな間だけ青空を見ていた時期があった。

騎士として、生涯守り通すと誓った唯一の人。彼女のために修行を重ねていたあの一年は、この上ないほど充実していた。

しかし、今はもう、リリスの目に青空は見えない。

剣を命を捧げると誓った主君がこの世から消えてしまったあの日から、リリスの目には、いつも太陽の見えない空ばかりが広がっていたのだ。

仰向けに倒れたまま動かなくなったりリスに、リオはゆっくりと近づくと、白い喉に刀の切っ先を当てた。ゆっくりと上下する喉に、細い血の筋が流れた。

「少し、惜しい気はしますね。これほどの力を持っているなら、使い道もあるでしょう」

「このような力に、もはや……意味はありません……守るものがない、力など……ただの、暴力です」

かすれた声でささやくリスに、リオはため息をつく。

「力など、どんな理由があろうと暴力以外の何者でもない、と私は思いますけれど」

「……そうですか。ただ、それはあなたの考えですね……私は、違います」

「なるほど。私たちに力を貸す気は一切ないようですね」

リスは、首をかすかに動かして頷いた。

それが合図であったかのように、リオは一度刀を引くと、リスの首目掛けて振り下ろした。

ためらいなく迫る、命を刈り取る凶器。

その向こうに見える空を見つめていたリスの瞳に、拳大ほどの大きさの水の塊がゆるやかに滑り込んだ。次の瞬間、リスの翡翠の双眸に光が宿り、身体は生へ向けて動き出した。

喉を貫こうとする刀を両手で掴む。手の肉は切れたが、切っ先は、リスの喉に届くことなく静止していた。

しっかりと刀を掴んで見上げてくるリスに、リオの表情が曇る。

先ほどまで光を失っていたリリスの目には、今やその暗たんたる色は見られなかった。

リリスは、手から血が吹き出すのもかまわず、さらに強く刀を握り締める。リオは、その手からわずかな青い火花が散るのを見るや、すぐさま手を放して後退する。その瞬間、刀を稲妻が走った。火花を散らせる刀に、リオは肩を竦めて笑った。

「……どうしました？ 急にやる気を見せられても困るのですが」
「嘘をつきましたね。セトは生きています。そしておそらく、バラクも」

血まみれの手で、刀の中ごろを握ったリリスの手から勢いよく青白い電流が迸る。刀身が赤く白熱し、リリスの血と交じり合い、赤い溶液となって滴り落ちた。

ふたつに分解されて地に落ちた刀を、リリスはブーツの底で踏みつける。リオは、まるで珍しいものを見るかのようにリリスを見ると、悪びれもなく頷く。

「ええ、そうですね。生きていますよ。とどめは刺しませんでしたから」

腰に手をあて、リオは首をふる。

「ですが、これもまた一つの策というものでしょう。嘘も方便。そんなことで一々怒られては――」

言いかけて、リオは視線を感じてふり返った。そこにあったイザヤとルカ、そしてソレイユの不満そうな顔に、リオは訝しげな顔をする。

「なんですか……私が悪いとでも言いたげな目ですね」
「当たり前だ。嘘をついたきさまが悪い」

うつ伏せの状態ではっきりとイザヤが言い放った。

「ええと、さすがに人の生死に関わるような嘘は、ちょっと……」

ルカが苦笑いを浮かべる。

「ハハ、リオ、完全に悪役だな」

ソレイユは笑っている。

リオは、げんなりとした風に眉をひそめると、据わった目で前に向き直った。

「……なんでしょうね、この疎外感は。かまいませんけれど」

ため息を吐き、リオは雷剣を手を持ったリリスを見た。

「まあ、生きているでしょうけれど、重傷には代わりありませんよ。早急に然るべき手当てをすべきかと思いますが？」

「そうですね。では、手短にあなたたちをねじ伏せ、彼らの救助に向かいます」

リリスが雷剣を天へと掲げた。剣先から一筋の電流が天へと伸び、木を越す高さまで伸びると、一気に網目状に広がった。

イザヤたちの頭上の広範囲を覆う、まるで蜘蛛の巣のような電流の網。それを目にしたとき、リオの顔に焦りの色が浮かんた。

空から降り注ぐ光が暗い森の中を眩く照らす。リオは、声を荒げながら踵を返した。

「主様、イザヤを！」

その瞬間、一切の音が消え、光が一際強い輝きを放った。

「逃がしません。今度こそ……」

リリスの透き通った声の余韻が消えた、一瞬の静寂のあと。――
大地を鳴動させる轟音を伴う落雷が、森を貫いた。

1-24 現る、第二の魂

土煙が晴れていく。ほんの少し前まで森であったそこは、荒地と化していた。

地面は抉れ、草や木々は焼け焦げ、いまだ、燃え盛っている木が、炎を周囲に広げていく。

この光景は、ルカに自身が滅ぼしてしまった故郷を思い起こさせた。しかし、ルカの目は、そんな荒れ果てた大地ではなく、ルカを守るように地面に手について覆いかぶさる女性だけを見つめていた。

「リオー―さ、ま……」

名前を呼ぶと、リオはゆっくりと目を開け、微笑んだ。

「無事……なようですね、ルカ……」

掠れた声で、リオは言った。ルカは嫌な予感を抑えきれずにリオの肩に触れる。と、急に力を失ったように、リオの身体が崩れ落ちた。

「リオ様！」

リオを支えるように背中に手を回したルカは、大きくリオが震えたのを感じ取り、慌てて手を離れた。

ルカは、背中に触れないよう、ゆっくりとリオをうつ伏せに地面に寝かせ、否応なしに視界に入ったそれに思わず息を飲む。

肩から腰にかけて、リオは酷い火傷を受けていた。おそらく落雷の直撃を受けたであろう一撃は、彼女の背中の皮膚を焼き焦がしていた。

「ひ、どい……リオ様！　リオ様！」

苦悶に満ちた表情を浮かべたまま目を開けないリオに、ルカは強く呼びかける。

「ルカ！」

そこへ、イザヤに肩を貸したソレイユが木の影から現れる。ソレイユはリオの傷を見るなり、動きを止めた。イザヤもまた、目を見開かせて言葉を失っている。

ルカは、リオの手を強く握ると、涙を溜めた瞳でソレイユたちを見上げた。

「……わたしを、庇って……こんな……」

ソレイユはイザヤを地面に座らせながら、ぼろぼろと涙を流すルカの肩に手を置いた。

「あんたのせいじゃない。それに、大丈夫だ。——リオは、大丈夫だ」

「ば、馬鹿か！　この傷、大丈夫なわけがないだろう！」

イザヤが声を荒げる。ソレイユは気を失っているリオの頬に触れながら、もう一度強く言い切った。

「大丈夫だ。リオは死なない」

「でも——」

「一人だけですか。ですが、その一人が彼女だったのは好都合です」

ルカの言葉を遮ったのは、立っているのもやっと、といった足取りで一步一步近づいてくるリリースだった。

赤く染まった手に青白い剣を携え、リリースは、ゆっくりとイザヤたちとの距離を縮めている。

ソレイユがリリース目掛けて何発か発砲するが、苦ともせずに出て防がれた。イザヤもなんとか剣を作り出そうとはしているものの、＜神魂＞を使い果たした身体は、立つことすらままならないようだ。

（このままじゃ……）

リリースのブーツが地面を擦る音を聞いたび、ルカは心臓が大きく脈打ち、胸が熱くなるのを感じた。

視線を、リオへと向ける。ソレイユの背中に庇われたリオは目覚めることなく、荒い呼吸を繰り返すだけだった。

（リオ様……わたしの、せいで……）

リオがこうなってしまったのは、ソレイユがなんと言おうと自分のせいだ。

もし、リオがルカを庇わなければ彼女がこんな傷を負うことはなかった。リオが無事ならば、リリースをどうにかできたかもしれない。

（わたしの、せい……）

そう、ルカが思ったとき、これまでにないほど心臓が大きく脈打った。思わず身体が仰け反るほどの激しさに、ルカは目を見開く。

（この感覚……でも、早すぎる）

間違いなく、この動悸は暴走の予兆に他ならなかった。しかし、

前回の暴走からわずか数日。あまりにも短すぎる。

得体の知れない不安がルカを襲う。胸を押さえて力を押し込めようとすることが、そんなことで防げるのなら苦労などしないことはわかっていた。

「おい、エルフ！ どうした！？」

イザヤの声すら遠く感じる。

ルカは、今にも飛びそうな意識の糸を必死に手繰り寄せながら、吐き出すように言った。

「……にげて、くださ……もう、おさえ……」

そこで、ルカの意識は深い水の底へ沈んだ。

「梟を連れて離れろ！」

ルカの言葉を聞いたイザヤが叫んだ。ルカの声が聞こえていなかったソレイユは、首を傾げながらもリオを背負う。

「ど、どうしたんだ？」

「暴走だ！」

短く放たれた返答に、ソレイユの顔が引き攣る。

イザヤも同じ気持ちだった。目の前のリリースをどうにかすることさえできない状況での暴走。先が見えない暗闇に引きずり込まれたような絶望感が、イザヤの胸に重く押し掛かる。

しかし、幸か不幸か、もう一つの問題であるリリースもルカの異変

には気付いたようだ。足を止め、剣を正眼に構えたままルカを見つめている。

イザヤが差し出されたソレイユの手をとって立ち上がると、これまでびくりとも動かなかったルカが突然身を起き上がらせた。そして、瞬きの間にイザヤの前まで移動する。

ルカの手がゆっくりと伸ばされる。イザヤは咄嗟に片手でソレイユを突き飛ばした。

「イザヤ！」

「私にかまうな！」

痙攣する足をなんとか動かしてルカの手から逃れながら、イザヤはなおもこの場に留まり続けようとするソレイユを強く睨んだ。しかし、ソレイユとて、このような状況下でイザヤをひとり残せばどうなるのかわからないわけがないのだ。

「死ぬ気か!？」

イザヤは答えなかった。

ただ、軽く息を吸い込むと、神妙な顔でイザヤたちの動向を探るように見すえているリリスを一瞬だけ見つめ、また視線を戻した。

「考えがある。私はエルフがこうなった以上逃げるわけにはいいかないし、こいつに殺されるわけにもいいかない」

「……あんたにはふたりとも生き残る策がある。そう思っているんだな？」

頷くイザヤに、ソレイユはため息を吐いて、言った。

「わかった。リオを安全な場所まで連れて行ったらすぐに戻る。そ

れまで、なんとか頑張ってくれ」

「駄目だ。残りの使徒が動けない梟を襲わないとも限らない。そうしたら、誰がそいつを助ける？ おまえしかないだろう」

「だったら、イザヤは——」

「かまわない。——ずっと、ひとりだったんだ」

イザヤからすれば、当たり前のことを言っただけだった。が、ソレイユにとってはそうでなかったということに、イザヤは翳った彼の表情を見て悟った。

しかし、言及している時間はない。ルカはまた動きを止めているが、それも時間の問題だろう。

「とにかく行け。おまえがいても……役に立たない」

かすかに、胸が痛んだ。ソレイユの顔を見ることができず、イザヤは彼に背を向けたまま、そう言った。

ソレイユはイザヤの背中を見つめていたが、顔を俯かせると、素早く踵を返す。

「必ず戻るからな」

イザヤが言い返す間もなく、ソレイユはリオを背負ったまま轟々と燃え盛る倒木を飛び越え、森の中へと姿を消した。

ソレイユの気配が遠ざかっていくのを確認しながら、イザヤは、いまだに状況を図りかねているリリスに言った。

「力を貸せ、使徒」

リリスにとって、それはまるで予想外の言葉だったのだろう。大きく見開かれた瞳は、しかし、すぐに落ち着きを取り戻した。

「どういう意味でしょう？ 私には、今の状況がまるで飲み込めていません。彼女はいったいどうしたと――」

言い切る前に、リリスはイザヤとルカとの間に雷の障壁を作り出す。ルカの手から発せられた風の刃が、障壁にぶつかり火花を散らせた。その隙に、リリスは怪我を負っているとは思えない速さでイザヤの背後に回ると、腕を掴んでルカから引き離す。

「今の、あなたに危害を加えようとしているようにしか見えませんでしたか？」

眉をひそめるリリスに、イザヤはフードの下からルカを見すえた。

「暴走しているんだ。前に見たときと比べて随分と大人しいが、いまのエルフに自我はない。ただ周囲にあるものをすべて壊そうとしている」

「暴走？ 彼女は〈覚醒者〉なのですか？」

イザヤが頷く。リリスはようやく得心がいったように目を細めた。

「事情は理解しました。それで、力を貸せとは？」

剣でルカを牽制しつつ、リリスが尋ねる。イザヤは低く落とした声で言った。

「おまえは私が死ぬと困るんだろう？ このままだと、私はあいつに殺される。だから、そうならないためにもあのエルフを止めるのを手伝え」

「――彼女を殺し、その上であなたを捕縛することもできます」

「もし、おまえがあいつを殺さずに止めてくるのなら、私はおまえに大人しく捕まってもいい」

「……本気、ですか？」

驚きを隠せないリリスに、イザヤは首肯した。

この場でイザヤがルカに殺されず、かつルカを死なせないためには、リリスの力を借りるほかない。そして、ルカが止められれば、どのみちろくに動けない自分は捕まるしかないと、イザヤは理解していた。

ならば、せめてルカを生かす道を選ぶべきだ、と、イザヤは思ったのだ。そして、この命を絶つ罪は教団に背負わせればいい、ルカにこれ以上の重荷を背負わせてはならない、と。

リリスはイザヤの決意がこもった声に、しばし逡巡してから頷いた。

「いいでしょう。そうすることで、あなたが大人しく教団へ投降するというのがなら」

ためらいがない、と言えば嘘になる。教団に捕まったイザヤの行き着く未来は火を見るより明らかだ。そのことに、なんの思いも抱かないわけがない。

それでも、イザヤは後悔などしていなかった。ルカを助けたことを、間違っていたなどと思う気持ちは、イザヤの中に一片たりとも存在しない。

（これでいい。私は、間違っていないんだ）

人気がない森の奥、地下水が湧いている場所の近くで足を止めた

ソレイユは、水辺にそつとリオを横たえさせた。

いまだ、荒い呼吸を繰り返してはいるが、リオの意識ははつきりしていた。真剣な顔で見下ろしてくるソレイユに、リオは、痛みを堪えながら微笑んだ。

「行って、ください……心配なのでしよう、彼女が」

「それはそうだ。だけど、イザヤの言う通り、リオをひとりにするのは……」

セトとバラクと交戦した場所とは、まったく違う方向へ走ってきただけだ。だが、それでも確実とは言えない。

しかし、イザヤも心配だった。あの少女は、冷静なようであり、ときおり信じられないほど無謀な真似をする。

リオは思い通りに動かない腕をなんとか持ち上げると、視線を伏せるソレイユの頬に当てた。

「……私なら、大丈夫です。それは、主様……あなたがよく、知っているでしょう……？」

「ああ、知ってる。おまえは、強いから」

ソレイユの言葉に、リオは嬉しそうに目を細めた。

「わかっていないではないですか。なら……行ってください……私は、大丈夫……」

リオの手がソレイユの頬から滑り落ち、薄っすらと空いていた目が閉じる。

ソレイユは眠りに落ちたリオの顔を見つめ、それからおもむろに立ち上がると、来た道を全力で引き返し始めた。

軽く息を吸って、イザヤは肩越しに見つめてくるリリスの綺麗な瞳を見返した。

「ああ、それでかまわ——」

「滅多なことは口にするものじゃないぞ、娘」

イザヤの言葉を遮ったのは、聞きなれたようで、まったく聞き覚えのない口調の声だった。イザヤはルカに視線を向ける。そこにいたのは、先ほどまでの抜け殻ではなく、腰に手を当て、高圧的な笑みを浮かべるルカの姿だった。

「誰だ……おまえ」

ルカではない。直感でイザヤは思った。

血のような眼は、ソレイユのそれとよく似ていて、彼女の穏やかな紫色の瞳は欠片も見られない。

「……嵐の、聖霊」

リリスが押し殺した声でささやく。隣にいるイザヤに聞こえるか聞こえないかのささやきだったにも関わらず、ルカは口元を歪めて笑った。

「いかにも。わたしは嵐の聖霊だ。名は——メルキセデク。しかと覚えよ、人間」

馬鹿な、と呟くように零すイザヤにリリスは首をふった。

「なにもおかしいことはありません。〈覚醒者〉とは、聖霊が眠らない状態で身体に入り込んでいることを言います。だとすれば、その聖霊が表に出てくることもありえないとはいえないでしょう」

「……聖霊なんて、〈神魂〉を説明するときのたとえ話だろう」

「そうですね。私も、正直眉唾物だと考えていました。これまで〈覚醒者〉の中でこのように聖霊が自我を持って現れることなど、聞いたことはありません。しかし、イザヤ。これはルカさんの演技ですか？」

そんなはずはない。今、目の前にいるそれは、ルカの形を成しているだけで、まったくの別人だ。

しかし、それでも、そう易々と信じることなどできず、イザヤが眉をひそめていると、メルキセデクは、くつ、と喉を鳴らせた。

「信じぬか。このわたしが、確かに聖霊であると断言しているというのに、“その目”をもつそなたが信じぬと言うか？」

弾かれたように、イザヤは左目を押さえた。

あまりに唐突のことに、失念していた。これで二回。メルキセデクは自身を聖霊だと名乗った。そのとき、この目は痛まなかった。

「……おまえが、そう思い込んでいるだけかもしれないだろう？」

私の目は、当人が自覚している嘘しかわからない」

「ハ、なるほどそうきたか。まあ、嘘だと思っていたければ思うが良い。——しかし、感謝するのだな、娘。わたしがこうしてわざわざ出てきたのは、そなたを救うためなのだからな」

「嘘だ」

「駄目か。間接的に救うことになるから間違いではないと思ったのだが……ふむ、なかなか面倒だ」

左目を押さえたまま呻くように言い切ったイザヤに、メルキセデクは腕を組んだ。

「では、真実を言うことにしよう。わたしは、我が器となっているこの娘の守り手としてそなたを認めた。自身を犠牲にしてまでこやつと交わした契りを破ろうとしなかったそなたを、ここで死なせるわけにはいかぬ。とどのつまり、わたしが救いたいのはそなたではなく、我が器だ。そのためにそなたを生かす。――理解したか？」

清流のように滑らかに流れ出る言葉は、微塵の嘘も含まず、今度こそイザヤの瞳に納得の色を浮かばせた。

「なるほど。それなら、納得がいく」

「理解が早くて助かるな。さて、それでは早急にこの場を治めるとするか。こうして出てくるのは、なにぶん疲れるものでな」

口元に手を当てて妖艶に笑うメルキセデク。その赤い双眸に見すえられたリリスの身体が強張った。

メルキセデクは剣を構えるリリスに言った。

「赤騎士の娘、ここはすなおに引くがいい。さすれば、命までは――」

一陣の風が駆ける。

目に見えぬ俊足で横を通り過ぎたリリスに、メルキセデクは頬から流れる血を舌で舐め取りながら口角をあげた。

「そなたは、もう少し賢い娘かと思っていたのだがな」

「たしかに、あなたが聖霊だとするならば、私は足元にも及ばないかもしれません。ですが、身体はあくまでもエルフのもの。そして

なにより、私は聖霊と戦ったこともなければ、その強さも知らない。勝てないと判断するには、早すぎるでしょう」

「正論だ。だが、そなたは勘違いをしているな。わたしはそなたの力がわたしに及ばぬなどと言うつもりはない。むしろ、この脆弱な身体では、そなたに勝てるかどうかすら危うい」

「では、どういう意味でおっしゃるので……」

いいさして、リリスはいつの間にか気配が一つ増えていることに気付いた。

反射的に顔を木陰へと向けたリリスの視線を追うようにイザヤも木陰へと目を向けると、そこには全身を外套で覆った小柄な人影が、静かに佇んでいた。

「イザヤっ！」

そして、人影がいる反対側から、ソレイユが姿を見せる。ソレイユはイザヤの無事を確認してほっと息をついたが、すぐに場の異変を感じ取った。

「ルカ？」

「あれはエルフじゃない。エルフの中にいる聖霊だ。それより、おまえはなんで戻ってきた？」

「心配してくれてありがとな。でも、リオなら大丈夫だ」

笑みを見せるソレイユに、イザヤの頬にさっと赤みがはしる。

「なっ……だ、誰が心配なんてするか！」

「なんだ、嘘は嫌いではなかったの——おお、怖い」

眉を怒らせて睨み付けてくるイザヤにメルキセデクはおどけてい

った。そして、一瞬、ソレイユを見つめると、すぐに視線をリリースに戻した。

「どうする？ その幼子の目的など知らぬが、少なくともそなたの増援、というようすでもないな？ となれば、四対一……いや、五対一か」

視線だけを背後の森に向けながら、メルキセデクは言った。

「それでも勝てると思うのなら、かかってくるがいい。相手になろう」

メルキセデクの足元から、風が舞い起こる。大気をも揺るがす風の唸りに、リリースはしばし黙し、やがて肩の力を抜いて雷剣を消した。

「見逃していただけるのなら……是非にも」

言って、リリースは踵を返すと、肩越しにふり返った。

「すみませんが、セトとバラクはどこにいますか？」

「あっちだ」

ソレイユが指で方向を示してやると、リリースは頭を下げて礼を言った。

そして、そのまま歩き出そうとしたリリースは、メルキセデクが巻き起こした風にあおられてとれたフードの下から見えたイザヤの顔に、軽く目を見開く。足を止めたリリースだが、すぐにかぶりをふると、足早に森の中に消えていった。

いまさらリリースに顔を見られたところでどうということはないと

思っていたイザヤは、しかし、去り際に彼女が見せた驚愕に染まった表情を忘れることができなかった。

1-25 交渉、金髪の情報屋

贅沢にも二つのランプが照らす明るい室内で、イザヤは椅子の上に両足を抱えるようにして座っていた。

目の前に据え置かれたベッドにはリオが寝ている。人間やエルフとは違うその青白い顔はまるで死人のそれで、かすかに上下する胸の動きがなければ死んでいるのではないかと思うほど、彼女の眠りは静かだった。

リオの寝顔から視線を窓の外へと移したイザヤは、四角く切り取られた空に見える双子月を目に映し、小さくため息を吐いた。

(疲れた……)

思えば、今日ほとんど一日だった。問題なくコランを抜け出せたまでは良かったが、予期せぬ使徒の襲来。わずかな手がかりからイザヤたちの居所を突き止めただけではなく、＜闇の神魂＞の弱点すら見抜いてしまったリオスの脅威を改めて思い知らされることとなった。

しかし、なによりもイザヤを驚かせたのは、そのあとだ。

嵐の聖霊メルキセデク。――ルカの内に宿りしもう一つの魂が、姿を見せたのだ。

姿を見せたといっても、外見は瞳の色以外はルカそのものだ。しかし、その雰囲気、口調、態度。それらすべてをとってもルカと通ずるものではなく、彼女が嵐の聖霊であることを疑う要素は少なかった。

リリスが退いたあと、メルキセデクはイザヤたちの質問にろくに答えることなく姿を消した。

ただ一つ、彼女が言い残したことは、自身が現れたことをルカには知らせるな、と、それだけだった。

結局メルキセデクについてイザヤはろくな答えを出せなかった。ソレイユはなにか知っていきそうな気配を見せていたが、メルキセデクのことよりも、優先すべきことが残っていた。

メルキセデクが現れた最中に姿を見せた、全身を外套で覆った小柄な人物は、ソレイユが呼び止めるのもかまわず、森の中へと消えた。

そして、代わりに姿を見せたのは、

「おう！ 帰ったぜ、姫さん」

「その呼び方はやめろといった」

けたたましい音をたてて扉を開けて入ってきた長身の男に向かって、イザヤはぴしゃりと言いつつ放った。普通の街人の格好をした男は、そんなイザヤの険悪な態度を露ほども気にせず、片目を瞑って笑った。

「おっと、そいつはすまない。俺にとっちゃ女の子はみんなお姫様みたいなものなんだね」

「あら、ならどうしてわたしは、穰ちゃん、なんですか？」

「リオのことはリオちゃんだしな。適当なことばっか言うなよ、おっさん」

男に続くように、ルカとソレイユが大きな袋を抱えて入ってくる。二人のからかうような視線に、男は肩をすくめてみせた。

「呼び分けてるんだよ。みんな姫さんじゃ混乱しちまうだろ？」
「だったら私以外をそう呼べ。そこの魔族でいいだろ」

心無いイザヤの言葉に、ソレイユが真顔で言った。

「いいのか？ 気持ち悪いだろ？ 本当にいいのか？」

「おまえが変態と言われようが馬鹿と言われようがいい加減に魔界へ帰れと言われようが、私には関係ない」

「それあんたの言いたいことじゃないのか！？」

「うるさい。怪我人があるんだから少しは静かにしろ馬鹿魔族」

「ふふ、これは意外ですね。あなたが私の心配をするなど」

背後から聞こえたかすかな笑い声に、イザヤは仏頂面のままふりかえった。

「あの馬鹿を黙らせる口実だ。――起きていたのか？」

「いまですよ」

首をふるリオに、イザヤは返事を返さずにまた顔をそらした。

ルカが荷物を机の上に置き、リオの傍に歩み寄った。

「まだ痛みますか？」

「いえ、痛み止めが効いているようです。傷もそう酷いものではありませんから、明日には動けるようになるでしょう。だから、もう気にする必要はありませんよ、ルカ」

言って、リオはゆっくりと身を起こした。ルカが慌てて止めようとするが、リオはそれを手で制した。

「おいおい、無理するなよ、リオちゃん。いくら魔族っていても、あの雷が効かないわけじゃないだろう？」

「ええ、まあ。ですが、私は少しばかり頑丈ですから」

それよりも、とリオは一度イザヤに目配せをしてから口を開いた。

「ラケル、でしたね。この場所を提供していただいたことには感謝せねばなりません、そろそろあなたの目的を教えてください」

それは、イザヤも気になっていたところだった。

なんの前触れもなく、ラケルはあの場に現れた。そして、まるですべての事情を知っているかのような素振りで、イザヤたちにコランにある自分の家で休まないか、と告げてきたのだ。

疑わなかったわけではない。むしろ、ラケルの行為はイザヤばかりかソレイユにさえ不信感を抱かせた。

それでも、このまま彼の申し出を断るには危険が伴いすぎた。痛手を受けたまま森を抜けることは自殺行為にも等しく、またコランに戻るにしても数時間と経たずに引き返してきたのでは怪しまれずとも門兵の記憶には残ってしまうだろう。できるのなら、イザヤたちはコランを出たまま戻っていない、と思わせることは望ましい。そうすれば、たとえリリスがコランにイザヤたちが居たと証言しても、教団はコランの中を念入りに探すことはしないだろう。

だから、荷馬車にイザヤたちを隠してコランにふたたび入る、というラケルの申し出はイザヤたちにとって悪い話ではなかった。

しかし、ここまで上手い話をただの善意として鵜呑みにできるはずもなく、イザヤはひとまず、ラケルの、敵ではない、という言葉が嘘ではないことに賭けてみることにしたのだ。

コランに戻ったイザヤたちは、ラケルに導かれるまま、街の一角にある一軒屋に入った。

そして、リオの手当てに必要なものを含め買い物に行きたいと申し出るラケルに、目を覚ましたルカと怪我の少ないソレイユが念の為に同行することとなり、今に至る。

「目的、ね。まあそうだな。そこんところはつきりさせないと、やっぱり駄目か」

大きな紙袋を机の上に置きながら、ラケルは苦笑した。

疑いの目を向けるリオとイザヤ、困り顔のルカとソレイユを見渡し、ラケルは顎に手を当てて頷く。

「いいだろう。だが、その前に一つ確認したい。――君は、蒼眼のイザヤだな？」

「……ああ」

わずかばかりの沈黙のあと、イザヤは首肯した。ラケルの目が、意外そうに丸くなる。

「すんなりと認めたな。もう少し粘られるかと思ったんだが」

「すでに答えを見つけているやつに対して偽ってどうなる？ おまえ、初めて会ったときから私のことについてわかっていただろう？」

淡々とした口調で言うイザヤに、ラケルはにやりと笑みを浮かべた。

「確信をもったのは君と話してからだ」

「それで、なにが狙いだ？」

「そんなのは決まっている。君だ」

真っ先に反応したのはソレイユだった。無言のまま、ラケルからイザヤを庇うように立ちふさがる。

「どういうことだ、おっさん。あんた、俺たちの敵じゃないって言ったよな？」

「ああ、言った。だが、味方だ、と言った覚えはないぞ、ソレイユくん」

「……この状況で、そのような言葉を口にできるとは……なかなかの度胸です」

ベッドのすぐ傍にある棚の上に置かれていたイザヤの短剣を手に取ったリオが、片手で身体を支えながら言った。ルカは武器こそ抜いていないものの、ラケルに対して戸惑うような視線を向けている。ラケルは肩をすくめると、両手を肩の高さにまで上げた。

「やれやれ、せっかちは損しか生まんぞ。話は最後まで聞くものだ」
「時には先手を打つことも必要ですよ。——たとえば、あなたを生かして私たちが被るかもしれない痛手とあなたを失うことで生じる痛手、はたしてどちらが重いのか、とか」

リオが短剣を手で弄びながら言う。彼女の身体はまともに動ける状態ではないはずだが、それでもラケルが隙を見せた瞬間、その喉を一突きしてしまえそうな雰囲気がりオにはあった。

「そいつは難しい判断だな。一つ言えることは、俺を殺したら正解は永遠にわからなくなる、ってことだ」

「逆に言えば、殺してしまえば正解もなにもない、ということになりますね」

張り詰めた緊張が走る。お互いに口を閉ざしたりオとラケルを見て、視線を右往左往させるルカに目をやったイザヤは、軽いため息を吐いて立ち上がった。

「やめろ。その男を殺すのは、話を聞いてからでもできるだろう」

元より、殺すつもりなど毛頭なかったのだろう。リオは、くすりと笑って短剣を手放した。その横でほんと胸を撫で下ろすルカの頭

に、ソレイユは軽く手を乗せた。

リオの視線から解放されたラケルは、顎を撫でながらイザヤを見すえた。

「いつでも殺せる、ってことか。まあそう思っていてもらったほうがこちらの話を聞いてくれるか」

「……話は聞く。おまえが、なんの目的で私たちを助けたのか、その理由も含めてだ。恩を仇で返すような真似はできるならしたくないが、返答次第では容赦はしない」

「ああ、話そう。そして、その上で判断してくれ」

そこで一呼吸置き、ラケルは唇にかすかな笑みを浮かべて言った。

「俺が、君たちに同行してもいいかどうかを、な」

※

月明かりが照らす城の廊下を歩いていたエレミヤは、ぼんやりと光る蠟燭の明かりと正面から歩いてくる人影に軽く目を見張った。

そして、お互いの顔が見えるほどの距離にまで近づくと、エレミヤは恭しく頭を下げる。

「ご無沙汰しております。お戻りになられていたのですね、父上」

エレミヤの前に立つ、二人の騎士を両脇に従えた初老の男は、毅然とした光が浮かぶ金色の瞳をエレミヤへ向けた。

「久しいな、エレミヤ。ここしばらく、そなたやメトセラに政務を

押しつける形となってしまった。すまなかったな」

「いえ、私やメトセラはなにも。政務のほとんどは、宰相や大臣たちに頼ってばかりいましたので」

「そなたらはまだ若い。そうして経験を積むうちに、わかることが増えてくるだろう」

クレストラム王の言葉に、エレミヤはまた頭を下げた。

そして、顔をあげると、王としっかり目を会わせて尋ねる。

「また、すぐに出立なさるのですか？」

「いや、しばらくは国に留まる。ずいぶんと留守にしてみましたからな」

「わかりました。それでは、すぐにでも寝所を暖めさせましょう。そろそろ、夜が冷える季節になりましたから」

言って踵を返そうとするエレミヤを王が呼び止める。

「よい」

「いえ、しかし……」

「私はオルヤ離宮に行くつもりだ。妃がそう望んでいるのでな。少々不便だが、政務もそちらから執り行う」

「母上が……なるほど、たしかに母上はこの城がお嫌いでしたね。

あのことが……」

いいさして、エレミヤは口をつぐんだ。王の隣に付き従う騎士たちに一瞬視線を走らせ、咳払いをする。

「……では、今から離宮へ？」

王が頷くと、エレミヤは黒く染まった市街へと目を向けながら言

った。

「くれぐれもお気をつけて。近頃、国内で物騒な事件が発生しております」

オルヤ離宮はデバイラから近い場所にある。また整備された街道も通っており、離宮には護衛士が。しかし、一国の王であり、かつアルヴィア教団の教皇でもあるこの父を狙うものは少なくはない。教団に反抗意識をもつものもそうだが、魔族が狙ってくる可能性もあるのだ。

王は息子の不安を感じ取ったのか、口元に笑みを浮かべて、エレミヤの肩に手を置いた。

「暇を見つけて、メトセラやカイファを連れて離宮に来るといい。妃もそなたたちの顔を見たがっていた」

「必ず。母上にも、そうお伝えください」

エレミヤの返答に、王は満足したように頷いた。そして、従騎士を伴って歩き出した王は、急に足を止めて振り返った。

王が去るのを姿勢を正したまま見送っていたエレミヤが、何事かと目を瞬かせる。

「父上、なにか？」

「リリスが〈蒼眼のイザヤ〉を追っていると聞いたが、まことか？」

突然出てきた名前に、エレミヤがかすかに表情を引き締める。

「ええ、そのようです。三月ほど前から、と私は聞いております」

王は、束の間目を閉じ、ゆっくりと衰える気配のない光を宿した

目を開いた。

「……会ったのか？」

「私が確認した限り、一度は。その際、イザヤの〈神魂〉が目覚めたことでとり逃したそうです。――父上、使徒たちから報告は入っていないのですか？」

リリスがイザヤと接触し、彼女の〈神魂〉が目覚めてから大分経つ。イザヤ捕縛の命を出した王に報告がいつていないはずはない、とエレミヤは眉を潜めた。

「いや、そのことについては報告が入っている。それで、リリスの様子はどうか？」

「どう、とは？」

王がなぜそのようなことを尋ねるのか、エレミヤにはわからなかった。王はエレミヤの反応に、しばし逡巡してから口を開いた。

「動揺してはおらぬか？」

「……動揺、ですか。いえ、それはおそらくないかと。ただ、重ねてはいました」

誰と、とはエレミヤは言わなかった。否、言えなかった。

しかし、言わずとも、王はわかっているはずだという確信もあった。

王はエレミヤの言葉を黙って受け取ると、表情を和らげた。その安堵したような表情に、エレミヤはますます眉をひそめる。

「父上？」

「いや、なんでもない。――ビンディ」

王が、騎士の一人に声をかけると、若い騎士はすぐさま返事をする。

「は」

「リリスの居所を掴み、私のもとへ来るように言ってほしい。なるべく、早急に」

「御意」

騎士が頭を下げる。王は視線をエレミヤに戻した。

「すまぬな、長く引き止めてしまった」

「とんでもありません」

「……では、私は行こう。エレミヤ、待っているぞ」

そう言い残し、今度こそ王は立ち止まることなく去っていった。その後姿が廊下の先に広がる闇の中へ消えると、エレミヤは冷たい壁に寄りかかった。

（……父上はなぜ、あのようなことをお聞きになったのか）

父が無意味なことを聞かないことなど、エレミヤは重々承知していた。先ほどの問いは、クレストラウム王にとって――父にとって必要な情報だったのだろう。

だが、その理由がわからない。

エレミヤは一つため息を吐くと、窓から見える宵闇に浮かぶ月を見上げた。

（リリス、おまえはいま、なにをしている？）

※

コランより西、首都へと続く街道沿いの小さな街にある聖堂で、セトは目的の人物を見つけた。

壁にすえつけられた燭台の点々とした灯が照らす中で、彼女は跪き、アルヴィア神の像に祈りを捧げている。

真新しい緋色の使徒装束をまとったリリスは、すっと立ち上がってふり向いた。

「セト……もう、起きても？」

その顔のなんと弱弱しいことか。

浮かべる微笑は風に流されれば消えそうなほど危うく、翡翠の瞳は今にもその光を失ってしまいそうなほど揺れていた。

おそらくリリス自身は気付いていないこの儂げな表情の意味を、セトは知っていた。――同時に、知っていてもどうすることもできないこともまた、知っていた。

「それは自分の台詞ですよ、リリス様」

だからセトは、なにも言わない。

リリスが苦しんでいるのはわかっている。それでも、『彼女』を知らない自分はリリスに言葉をかける資格はないのだと、セトは理解していた。

「いくら傷の治りが早いからといっても、無理は禁物です」

〈神魂〉の開放者は総じて治癒能力が高いことは知られていた。しかし、リリスのそれは他の開放者よりも遥かに優れていた。セトはその理由を、彼女の底なしの〈神魂〉がもたらすものだと考えていたが、真実は定かではない。

「ふふ、セトは本当に心配性ですね。大丈夫です、見た目ほど大した傷ではないですから」

「……ですが、せめて手当てはしっかりと受けてください。あのような処置では、傷が残ります」

「私はもう王女ではなく騎士です。傷など気にしてはいませんよ」

おかしそうに笑って、リリスは袖を捲くって包帯だらけの腕を晒すと、それからセトを見て眉を下げた。

「ほら、もうとっくに傷だらけなんです」

「リリス様……」

「ですが、私は騎士になったことを後悔してはいません。あの灰色の街では決して手が届かなかったものに、一時でも触れることができたのですから」

袖を戻し、リリスは瞳を伏せると、すぐに顔をあげて微笑んだ。

「――とはいっても、セトに心配をかけるのは本意ではありませんし、殿下やメトセラ様にも注意を受けてしまいますね。あとで司教の方に言って、もう一度手当てを受けてきます」

言って、リリスはセトの横をすり抜けて聖堂から出て行った。

セトは音を立てないようにリリスのあとを追って聖堂を出ると、裏手へと周った。そして、小さな鳴咽を耳にすると、足をとめて壁に背をつける。

風の音を嗚咽に乱されて、声はよく聞こえなかった。ただ、ときおり聞こえる名前に、セトはやはり、とため息を吐いた。

（イザヤ……蒼眼だけでなく、外見まで似ていたのか）

リリスの心に深く根付いている少女。

灰色の街で、そこに転がる石のようになってしまったリリスに生きる理由をくれた少女。

リリスはその少女とイザヤを重ね、自分勝手な希望に縋ろうとしている自身を責めているのだろう。自身の心が弱いせいで、そのような幻想を抱くのだ、と。

（そうしてあなたは、どこまでご自分を責め続けるおつもりか）

冷たい石の壁に拳を押し付けながら、セトは顔も知らない少女を思う。

イザヤと同じ蒼眼を授かり、リリスに生きる理由を与え、そして死んでいった少女のことを。

1-26 見上げる、冬の空

「馬鹿なのか？」

ラケルの申し出に対し、イザヤの第一声はこれだった。

呆れ返ったような表情を浮かべたイザヤは、目を丸くさせるラケルを見て、重ねて言った。

「同行を許可？ 馬鹿馬鹿しい。どうして私がおまえのような得体の知れない男を連れる必要がある？」

「うぐっ……いきなり話の流れをぶった切るとは……」

大袈裟な反応を見せるラケルに、イザヤの眉間に寄った皺はますます深くなる。

「いいからさっさと目的を話せ。それ以外に興味なんてないし、得体の知れないやつなんてもう十分だ」

「言われてるぞ、ルカ」

「言われてますよ、ルカ」

「まあ」

「おまえたちのことだ、馬鹿魔族と陰険梟」

すぐ隣で交わされるふざけた会話をイザヤが青筋を浮かべながら止める。そして、その様子をおもしろそうに眺めていたラケルに探るような視線を向けた。

「おまえが答えないのなら、私から聞いてもいい。虚言は意味ないこともわかるだろう。沈黙は、肯定ととる」

鋭い紫の瞳に、ラケルは小さく息を吐き出した。

「やれやれ、せっかちな姫さんだな。いいだろう。俺の目的はな、一言でいうなら君が教団の手に落ちるのを防ぐこと、だ」

予想だにしていなかった返答に、イザヤは一瞬言葉を失った。が、すぐに気を引き締めると、口を開く。

「どういうことだ？　それでおまえになんの得がある？」

「最初に言っただろう。俺は教団が嫌いなんだ。だから、教団のためになるようなことは少しだってしたくはないのさ」

蒼眼は痛んでいない。

少なくともラケルが嘘を言っているわけではないようだが……。

「――本当の目的も、言っていないな」

イザヤの横に立っていたソレイユが口を挟む。

「ふざけたように見えて意外と食えないおっさんだな、あんた。本当のことを隠して会話するのがうまい」

「……ソレイユくんもなかなかどうして抜け目ないねえ。俺、ちょっと見直しちゃったかも」

ずっと、ラケルの金色の瞳が細まる。

「まあ、正解だ。俺の目的はそれだけじゃない。ただな、姫さんを教団に渡したくない、これは本当だし、かなり優先順位も高い」

「なぜ、イザヤ様を？」

「それについては言えない。俺自身、まだ答えを出していないから

な。今回俺が君たちに同行を申し出たのも、それを確かめるためだ
と認めてくれていい」

言って、ラケルは腰に手を当てて笑みを浮かべた。

「加えておくが、俺は君たちに敵意を向けるつもりはない。俺の目的はあくまでも教団でね、そのために君たちを利用できると考えている。――以上が俺の目的だが、納得してくれたかい？」

「するわけない」

「……本当にはつきりものを言う子だな、君は」

間髪いれずに返された答えに、ラケルは肩を落として脱力する。
イザヤはため息を吐いた。

「おまえは私の質問にほとんど答えてない」

「だが、今の俺にはこれしか答えられない」

「なら話は終わりだ」

「いいや、君は俺を連れていけなくちゃいけない」

席を立とうとしたイザヤにラケルは頭をかきながら言った。イザヤの動きが止まり、訝しげな視線がラケルを捉える。

「どういうことだ？」

「姫さん、君はこのまま逃げ続けられると本気で思っているのか？」

ほんの一瞬、ラケルの視線がルカに向く。それに目ざとく気付いたイザヤの表情が歪んだ。

「教団は現段階で第十一使徒リリスにく蒼眼のイザヤを捕縛を一任している。だが、リリスの失敗はこれで二度目。そろそろ、潮時だ

ろうな」

「……関係ない。あの使徒だろうが、他の使徒だろうが、そんなものはどうでもいいことだろう」

「君の処遇は、な。ただ、穰ちゃんに関してはそうもいかない」

ルカが顔をあげる。眉を潜めるルカは、まだなにを言われているのかわかっていないようだった。

「ソレイユくんやリオちゃんはいいだろう。彼らなら上手く逃げおおせるだろうし、いざとなれば魔界へ逃げることもできる。だが、穰ちゃんはどうする？ 陽の民であるエルフは光ない世界では生きられない。つまり、魔界へ逃げることは不可能だ。そして、彼女はエルフ界へも行けない。逃げ場がない」

ラケルの言葉に、ルカは膝の上に置いた手を強く握り締めた。

「わかっていると思うが、姫さんさえ捕まえられれば他に危害は加えない、なんて抜かすのはリリスくらいなものだぞ。まず間違いなく、穰ちゃんも捕らえられる。処刑や監禁ですめばいいがな」

ただでさえ珍しいエルフだ。加えて、ルカほどの容姿である。捉えた人間が欲の塊なら、恩赦欲しさにルカを裁きの場には出さず地位のある人間に売りかねない。

そうなれば、まず間違いなくルカに待っているのは苦痛と恥辱の道だ。

齒を食いしばるイザヤに、ラケルは追い討ちをかけるように言う。

「俺なら、各地にいる教団関係者の動きをある程度把握できる。穰ちゃんを守るためには、どうすべきか。——君なら、答えはわかっているだろう？」

「……っ」

ラケルの言う事はもつともで、イザヤには返す言葉もなかった。今すぐにルカと分かれるという選択肢も考えたが、なによりルカが納得しないだろう。

だからといってラケルは信用できない人間だ。彼の思惑が読めない限り、いつ背中を刺されることになるかわかったものではない。それに、こうした脅迫まがいの取引もイザヤは嫌いだっただけ。

しかし、ルカのことを考えるなら、ラケルと手を組むほか道はない。教団が本腰を入れて動き出せば、逃げ切るのは難しいこともまた、事実なのだ。

そう頭では理解していてもなかなか口を開けないイザヤの手を暖かいなにかが触れた。弾かれるように顔をあげたイザヤは、そこにあったルカの笑顔に目を見張らせる。

ルカは柔らかくイザヤに微笑みかけると、凜とした目でラケルを見つめた。

「そのような脅しは無意味ですよ、ラケル様。もし、イザヤ様が教団に捕まるならば、わたしも逃げるつもりはありません。共に捕まり、共に逝きましょう」

「死なせてくれればいいがな」

「わたしは一度、絶望の只中に立ちました。この身が受けるであろう痛みなど、きつとその足元にも及ばないでしょう。ですから、その絶望からわたしを救い上げてくれたイザヤ様のためならば、わたしにはなにも怖いものなどありません」

澄み切った紫水晶の瞳には、一片の曇りもなく、ラケルはしばし呆然とルカを見ていた。

そして、ゆっくりと息を吐き出すと、肩を竦めて乾いた笑みを零す。

「小娘の強がり、ってわけじゃあなさそうだ」

「ええ、そういうわけですから、イザヤ様。このような戯言に耳を傾ける必要はありませんよ。いざとなれば、この場でラケル様を尋問にでもかけて情報を吐かせるだけ吐かせて捨て置くという手もありますから」

「か、可愛い顔してエグいこというね、穰ちゃん」

「その場合、発見されにくい場所に放置させていただきますよ。――どうやらラケル様には相当数のお仲間がいらっしゃるようですから」

ふいに剣のような鋭さを含んだルカの声に、ラケルの動きが止まる。そして、ゆっくりと口端をあげた。

「……どういことだい？」

「おかしいとは思っていたのです。教団からイザヤ様を捕まえるように命が出ていたのに、コランの検問はあまりにぞんざいでした。まるで、ここにイザヤ様がくるはずがない、とでもいうように」

「なるほど。そうすると、イザヤがコランではなく別の場所にいた、という信憑性に足る情報が流れていたと考えるのが自然ですか」

ルカの言葉を継いだリオに、ルカは頷く。

「はい。そして、先日、リリス様が仰っていた言葉。イザヤ様、覚えておいでですか？」

「ああ」

ここまでの話の流れを聞いていれば、ルカがリリスのどの言葉を言っているかなどすぐにわかる。

彼女と交わした会話の中で、特に不自然だったリリスの言葉。

「あなたの後ろには誰がいるのか……あれはおまえのことだったのか」

あの時、リリスの元にも偽情報は流されていたのだろう。それでも、リリスには通用しなかったわけなのだが。

イザヤたちの視線がラケルに集まる。ラケルは、両手を肩の高さにまであげると、困ったように笑った。

「ソレイユくんといい、君たちには驚かされるな。まあ、隠すつもりはなかったんだがな」

ため息をつくラケル。

イザヤが黙り込む。その間、誰も言葉を口にしなかった。

そして、時間にして数分ほど流れたあと、イザヤは顔をあげて言った。

「おまえの情報網はどこまで調べられる？」

「人間界なら、どこでも。精度はまちまちだがね。――ただ、カナンに関してはあまり期待しないでもらいたい」

カナンといえば、アルヴィア宗教団体の総本山エレバンがある島だ。エレバンは元より、聖地として崇められているカナンは特に教団にとって重要視されている。ラケルの情報網も、さすがにそこまでは及ばないということだろう。

「とはいえ、エレバンにいる重要人物くらいならおおよそは把握できる。内部情報は無理でも、人の出入りならどうにか付け入る隙があるからな」

「イザヤを教団から隠す具体的な策はあるのか？ どこかに匿うな

んていうのは、たぶん納得しないぞ？」

ソレイユが口を挟む。ラケルは頷いた。

「それは承知している。具体的には、そうだな。主に情報操作と、こいつみたいな各地にある俺たちが所有する建物の提供、になるだろうな。よほどの無理を言わなければ物資の支援も可能だ」

「なかなか魅力的な内容ですね。情報操作に関してはリリスのこともありますし期待はできませんが、宿に泊まるリスクが減るのはありがたい」

「こいつは手厳しいな。リリスに関してはすまなかった。まさかあいつがここまで成長しているとは思わなくてね」

背もたれに深く背を預けつつ言うリオに、ラケルの苦笑はますます深まる。

「……相応の金銭を支払えば、おまえは私たちにも情報を売るか？」

ふたたびイザヤが問う。ラケルは片目を閉じて笑った。

「そりゃもちろんさ。教団関係者以外には誰でも低価格で情報提供、が俺のモットーだからな」

「わかった。私がいくつかの条件を飲むというのなら、勝手にすればいい」

「い、イザヤ様？ いいのですか？」

うろたえるルカに、イザヤは首肯する。

「かまわない。今は、こうするのが一番の道だ。それに、正直な話、そいつの言い分はもっともだし、なにより正確な情報源はあったほ

うがいい」

「安心しました。生き残るために必要なものを見極められないほど、愚かな人ではないようですね」

ふいに聞こえた第三者の声に、イザヤたちは一斉に扉のほうをふり向く。

いつの間にか入り口に立っていた黒髪の少女は、冬の湖畔のような冷たさをもった眼差しでイザヤを見すえていた。

「……誰だ、おまえ」

「イスカ。俺の仲間の一人だ。これから主な情報はこいつに運んできてもらう。君たちもなにか知りたいことがあるならイスカに頼むといい。腕は確かだぞ」

少女に代わって答えるラケル。イスカ、と呼ばれた少女は軽く頭を下げると、感情のこもってない声で言った。

「ラケルの同行を許可していただいた以上、情報料は概ね免除させていただきます。——それと、余計なお節介かもしれませんが、彼はこう見えて義理堅い人間です。ある程度は信頼してもいいかと」

「それは私が決めることだ。おまえに言われる筋合いはない」

「……もつともな意見です。——では、ラケル、わたしは戻りますが、くれぐれも羽目を外しすぎないように」

イスカの大きな目がすつと細められる。その視線の先には、ラケルが購入してきた大きな紙袋。

ラケルはイスカから紙袋を隠すように移動する。

「わ、わかってるわかってる。ほら、イスカ、おまえはそろそろ戻れ。な？」

「言われずともそうしますよ。それでは、失礼します」

言って、イスカは赤い服の裾を翻して部屋から出て行く。
ラケルはしばらくイスカが階段を下りる音に耳をそばだてていたが、その音が完全に聞こえなくなると、とたんに破顔して紙袋を漁り始めた。

そして、その中から液体の入ったビンを取り出すと、イザヤたちを見渡しながら齒を見せて笑った。

「そんじゃ、この巡り会わせを祝して乾杯するでしょうや」

※

冬の夜風が吹きつける小さなベランダで、イザヤは手摺に身を預けてぼんやりと空を眺めていた。

かすかに火照った頬にひんやりとした風は心地良く、ふわふわと浮かれている頭さえも優しく冷やしてくれる。

（こんな風に酔ったのは、久しぶりかもしれない）

片手にもったグラスにはぶどう酒が半分ほど注がれている。それを一口あおり、息を吐いた。いつもなら酒はただ気分が悪くなるだけのものだが、いまは違う。自制心を働かせていないと、いくらでも飲んでしまいたいになるほど美味しく感じた。

階下からはラケルやルカの笑い声が聞こえてくる。よくも飽きないものだ、とイザヤの口からは苦笑が零れ落ちる。

祝杯と勝手に名付けられた酒盛りが始まってだいぶ経つが、どうやらこの調子では当分終わる気配はないのだろう。

そのようなことを考えながら飲んでいるうちに空になってしまったグラスを手摺に置く。と、横から手が伸びてきて、グラスに並々とぶどう酒を注ぎ足した。

イザヤはグラスを手にとると、手摺に背中を預けるようにして寄りかかるソレイユを見上げた。

「おまえか」

「こんなところにいたら風邪ひくぞ」

「そんなに柔な身体じゃない。――それより、なにしにきた？」

「避難」

「は？」

ソレイユのいった言葉の意味が掴めず、イザヤが首を傾げる。ソレイユはボトルの口を顎につけたまま、困り顔で言った。

「いや、なんというか……ラケルとルカが飲み比べ始めてさ、ちょっと手に負えなくなったから逃げてきた」

「手に負えなく――って、エルフに酒を飲ませたのか!？」

「ああ、イザヤがいなくなってから、ぐいぐいと」

「な……さすがに早いだろう。あいつには」

裕福な家庭なら酒を飲む子どもがいけないわけではないが、それでもいまイザヤたちが飲んでいる酒はそれなりに強い部類に入る酒だ。ルカのような子どもが飲むでは、それこそ身体を壊しかねない。

微妙な表情を浮かべるイザヤに、ソレイユは頬をかいて黙っていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「二十三、だって」

「ん？ なんのことだ？」

「いや、だからルカの年。二十三歳らしい、ぞ？」

「嘘をつ——いてるわけではない、か……」

思わず声を張り上げて否定しようとしたイザヤだが、すぐに気付いて尻すぼみになる。

「……酔って言うているだけじゃないのか？」

もはや願望だ。

「いや、ボトル七本開けてもしらふだったな。いま、ラケルが死にそうになってる」

聞かなければ良かった。——心底そう思い、イザヤは急速に冷めていく酔いを繋ぎとめるように酒をあおった。

しかし、ありえない話ではないのかもしれない、とイザヤは眉根をよせる。

エルフは長寿の民。人間はもとより、魔族でさえ足元にも及ばないほどの年月を生き続ける種族なのだ。だとすれば、その気が遠くなるほどの一生に合わせて体の成長も遅くなると考えることも難しいことではない。

それに、ルカが二十三歳だとするならば、あの大人びた雰囲気も納得できる。が、いまいち信じる気になれず、イザヤはひとまずこの話を忘れることにした。

「梟は？」

「別の部屋で寝てるんじゃないか？ あいつ、酒弱いし」

イザヤが目を瞬かせる。

「へえ、あの梟に苦手なものなんてあったのか」

「ははっ、あんたってばリオのことなんだと思ってるんだよ。完璧超人とか？」

おかしそうに笑うソレイユに、イザヤは星が瞬く夜空を仰いで言った。

「否定はしない。——なんでもできるだろう、あの梟は」

遠くを見つめるイザヤの横顔を見て、ソレイユは首をふった。

「そんなことないさ。リオだって最初からああだったわけじゃない。俺と会った頃のリオは、あんたによく似ていた——ってそうあからさまに嫌な顔するなよ」

これでもかというほど眉間に皺を寄せるイザヤ。ソレイユは声をたてて笑った。

眉間に寄った皺が一層深くし、イザヤはソレイユになにか言い返そうと口を開く。が、すぐに閉じると、ため息を吐いてまた手摺に寄りかかった。

「反撃はなしかな？」

「おまえの相手をするだけ馬鹿らしい」

「いくら俺でも傷つくぞ」

まったくそのような素振りを見せずに言うソレイユに、イザヤは、言っている、と返す。

そして、二人の間に緩やかな沈黙が流れる。不思議と気まずくならないその沈黙を破ったのはイザヤだった。

「本当に変な男だな、おまえは」

「それをいうならイザヤだって相当変な女じゃないか」

「そんな女にどうしてかまう？ おまえの目的にはまったく役に立たないのに」

ソレイユが見たイザヤの瞳は思いのほか真剣だった。視線こそ向けられていないものの、意識はしっかりとソレイユにあることがわかった。

ソレイユは爪先で地面をとんとん、と蹴ると、空を見上げて呟く。

「そうだな。理由はいろいろあるけど、一番は楽しいから、かもな」
「楽しい？」

イザヤは首を傾げる。ああ、とソレイユは頷いた。

「リオと二人だったのが、イザヤと会って、いまはルカやラケルもいる。ルカも、ラケルだってきつといいやつだ。人間とか魔族とかエルフとか、そんなの関係なしに俺たちは一緒にいる。気の合う友だちができたみたいで、俺は楽しいよ」

言って、ソレイユは穏やかな笑みをイザヤに向ける。横目でソレイユを見ていたイザヤは、すぐに目をそらしてグラスに残った酒を一気に飲み干した。

喉を鳴らして酒を飲み込んだイザヤは、かすかに火照った身体を手摺に深く預ける。

「……そうだな」

「ん？ なにがだ？」

「こういう生活も……悪くは、なかったのかもしれない」

ソレイユの驚く顔が見える。だが、それもどこか遠くの景色を見

ているように霞んでいて、はっきりしない。

頭と身体が切り離されたような感覚。頭がひどくぼんやりとして、足元がふらついた。

（わたし、らしくない……こんなこと、言うなんて）

きっと、酒のせいだ。——そんな言い訳を心の中に思い浮かべて、イザやはゆっくりと目を閉じた。

（私には、そんな夢を見る資格なんてないのに……）

1-27 祈り、叶わなかった夢

オルヤ離宮内、クレストラウム王の執務室で、リリスは絨毯の上にひざまずいて頭を垂れた。

リリスの前には、装飾が一切なく、しかし質は一級品の椅子に腰をかける初老の男性。

彼こそが東の大国、聖クレストラウム王国が国王にして、人間界を統べるアルヴィア宗教団体の最高指導者でもある、アザルヤ・エнде・クレストラウムその人なのだが、その顔は部下を前にする教皇ではなく、むしろ、娘を見る父のように穏やかな面持ちだった。

「よく来た、リリスよ。わざわざ遠い場所から呼び寄せてすまなかった」

「もったいないお言葉です、教皇様」

心からの敬意を表して答えるリリスに、しかし、教皇は浮かない顔をしていた。

「誰もみてはおらぬ。そのように畏まらずとも良いのだぞ」

顔をあげて教皇を見たリリスは、困ったように笑った。

「そういうわけにもいきません。私はあくまでも、あなたに仕える身なのですから」

「……そうか」

諦めたように、教皇はただ一言、そう返した。

リリスは教皇の寂しげな瞳に気付いていたが、見てみぬふりをして口を開いた。

「ところで、本日のご用件は？」

「ああ、そうであったな。単刀直入に言おう、そなたは本日限りで〈蒼眼のイザヤ〉を捕えるする任から外れることとなった」

瞬時にリリスの瞳孔が開かれる。思わず立ち上がりそうになるのを、リリスは膝を強く押さえ込むことで堪え、代わりに両の目で教皇を見すえた。

「……理由を、お聞かせ願えますか？」

「そなたには別件の任務が入った。カイサリア共和国のゼンジュで大規模な反乱が起きている」

リリスは驚かなかった。近年、教団に対する反乱は増加する一方で、リリスもこれまでに何度か反乱を鎮圧するための任務に赴いたことがあったからだ。

資源豊かな聖クレストラム王国領内では反乱はさして多くはないが、北のリンツィアフィール、そして教団の目が届きにくいカイサリア共和国では、反乱は頻繁に勃発している。

反乱の主だった理由は、階級間の格差の広がり。教団が定めた基準以上の富を得ようとする人間たちが、下級の人間たちの糧を奪うことによって生じる問題だ。下級の人間は上級に逆らうことはできず、教団も慢性的な人手不足のためにその穴を埋めることができない現状。教団への不信感が高まり、市民の不満が募るのは必然だった。

そして、そこに付け込むようにして、教団の歯向かう組織の動きが活発化し始めている。

教団を滅ぼして真の自由を手にすることを謳った彼らの行動は、今の時代、夢物語と切り捨てられるには現実味を帯びすぎていた。

世界から武力を奪い、完全なる仕分けを行うことで保ってきた平

和。

教団による世界統治が始まって数百年、その綻びは早くも見え始めていた。

「恒久的平和など存在しないことは、わかっていたことだが……」

深いため息と共に押し出された教皇の嘆きがリリスの胸を打つ。教皇がどれほどこの世界を愛し、そのために力を尽くしてきたか、リリスはよく知っていた。が、いま、問題なのはそのようなことではない。

「教皇様、カイサリアへ赴くこと、異存はありません。ですが、私よりも適任のものなどいくらでもおりましよう。いくら使徒に任命されたとはいえ、私はまだ若輩の身です。私のような者の言葉に、いったいどれほどの人々が耳を貸すでしょうか」

リリスには、これが自分をクレストラウムから——イザヤから遠ざけるための口実に思えてならなかった。

暴徒を鎮圧するだけなら、リリスの力をもってすれば片付けることは容易だろう。しかし、問題はその後だ。反乱を収めたあと、彼らを説得するだけの人望がリリスにあるとはとても思えない。

〈使徒〉には——〈使徒〉でなくとも、腕の立つ人間はいる。そして腕だけでなく、経験に富み、暴徒を鎮めるだけの弁が立つ人間はいるのだ。

そのようなことは、当然教皇とてわかっているはずだ。だというのに、彼はリリスに行けという。それはおかしい話だった。

そもそも、ただそれだけの用件ならどうしてわざわざ呼び出す必要があるのか。人づてで済む話を直接命令する理由、それはつまり、確実にリリスをイザヤを追う任から外させるために教皇自ら釘を刺すにきたということではないのだろうか。

教皇はリリスの内心に気付いたのか、顎に手を当てて言った。

「ふむ、そなたは私がイザヤ拿捕の任からそなたを外そうと考えていると思っているのだな」

「そのようなことは——いえ、仰るとおりです。申し訳ありません」
「謝るな。そなたの考え、外れてはおらぬ」

え、とリリスは目を瞬かせる。教皇がどう思っているように、まさか素直に口を割ってくれるとは思っていなかったのだ。

「そなたはイザヤが蒼眼の所有者だからこそ躍起になって追っているのだと思うが、私としては、これ以上そなたに蒼眼に関わってほしくないのだ」

「それは、なぜでしょうか？」

「イザヤを捕まえれば、死刑は免れないだろう」

それはそうでしょう、とリリスは頷く。

蒼眼所有者は教団の定めた掟において罪人の扱いを受けるが、なにも即刻処刑というわけではない。蒼眼所有者は生まれ落ちたときに親から教団へ引き渡される可能性が極めて高いため、実際に罪を犯すことなく捕まる者が大半だ。そして、そうした蒼眼所有者は教団の監視下の元、終身刑を課せられるのが常となっている。

しかし、イザヤの場合は状況が異なる。

彼女は蒼眼所有者でありながら教団に捕まることなく逃げ延び、罪を犯してしまった。

小さな窃盗から殺人まで、イザヤが犯したとされる罪の数は、証拠が出揃っているものだけでもかなりの数に昇る。

それらの罪は、一般市民でさえ極刑となるに値する基準を超えている。いくら弁明しようとも、イザヤの死罪が覆ることはないだろう。

（イザヤが、死刑。それは当然のこと）

リリスとて、そのようなことは理解している。――していた、つもりだった。

とたんに胸に重く圧し掛かってきた目に見えない重みに、リリスは息を吐き出す。心臓が早鐘を打つように鳴り響く。酷く耳障りなその音は、リリスの顔から表情を奪った。

「――やはり、遅かったか」

低く、唸るような教皇の声に、リリスは息苦しさを堪えながら視線を上げる。教皇は歪んだリリスの顔を見て、眉根を寄せた。

「リリス、そなた、イザヤにシーリスを重ねているのだろう」
「――ッ！」

さっとリリスが顔を逸らすが、それは教皇の言葉を肯定している行為にしかない。

苦渋に満ちた顔で唇を噛みしめるリリスに、教皇は言った。

「私は二度もそなたに同じ苦しみを味合わせたくはないのだ。……
わかってくれるな」

リリスはただ、頷くことしかできなかった。

「そんじゃあ、次の目的地はカイサリアか。船、嫌いなんだけどな」

オルヤ離宮の敷地を出た先にある林道で、バラクがごちた。

教皇が離宮にいることを外部の人間に悟られないよう、警備の騎士はその過半数が離宮の中に潜んでいる。そのため、林道に人の気配はなく、静かだった。

道沿いに立ち並ぶ木々に残った少ない枯れ葉が風に煽られて舞い落ちる中を、リリスは暗たんとした表情のまま馬の手綱を引いて歩いていた。

セトも、バラクでさえ、いまのリリスに声をかけることはできず、三人は無言で林道を進んでいく。

しばらくして、オルヤ離宮の影が見えなくなるまで歩いた頃、リリスはふいに茂みを掻き分ける音を聞いた。同時に、頭で考えるよりも早く、リリスは手綱を放し、頭めがけて振り下ろされた角材を素手で受け止めた。

「く、くそっ！」

角材を振り下ろした男は、失敗したとわかるや、たたらを踏んで後ずさった。

リリスは片手で掴んだ角材を地面に落とすと、男の顔を見据える。身に付けている服装や風貌から、男は平民階級だということが見て取れた。年は三十代半ばといったところなのだろうが、目元に刻まれた隈ややつれた顔のせいで、余計に老け込んで見えた。

「ずっと見られているのはわかっていたが、まさかこんな暴挙に出るなんてな。おまえ、俺たちが誰なのか知らないわけじゃないだろう？」

口元を歪めてバラクが笑う。男は短い悲鳴をあげて地面に腰をついた。

バラクは馬に背負わせた長槍を手にとると、それを男の眼前に突

きつける。

「使徒に対する敵対行為は、正当な理由がない限りは極刑、または終身刑。いまここで殺されても文句は言えねえぜ？　まあ、正当な理由があるなら話は別だがな」

「バラク、武器を下げてください。そのような状態では、話もできないでしょう」

嗜めるようなリリスの声に、バラクは肩を竦めて槍を肩に担ぐ。リリスはバラクが下がったのを確認すると、男の前に膝をついて目線を合わせる。

「あなたはなぜ、このような――」

その言葉は、思わず目を瞑りたくなるような鈍い音によってかき消された。

一瞬、目の前が白く染まったが、リリスは自身の身になにが起きたのかを確かめる前に叫んでいた。

「セト、止まりなさい！」

すぐ横で、息を飲む音が聞こえた。鈍い痛みを訴え続けるこめかみを押さえて目を開けたリリスは、いままさに剣で男を斬ろうとしているセトに視線を向けた。

「私は大丈夫です。大したことはありません」

言って、リリスは額から流れる血を拭おうともせず男に視線を戻した。

リリスの頭を角材で殴打した男は、リリスに威圧され、手足を大

きく震わせながら、しかし目だけは負けじとリリースを睨んでいた。

「俺の娘は、奴隷にされて……貴族どもに散々弄ばれたあげくに殺された！ おまえの、おまえたちのせいで娘は死んだんだ！ おまえたちがこんな制度を作らなければ、おまえたちがしっかりと秩序を守っていれば！ 娘は！」

喉が張り裂けるのではないかと思うほど、男は強く叫ぶ。リリースは静かに言った。

「……あなたとご息女のお名前、登録された聖堂、そしてその貴族の名前を教えてください。調査をした後、もし貴族に問題があったならば、しかるべき処罰を与えます」

「そんなことをしたからといって娘が生き返るのか！？」

「じゃあ、こいつに怒りをぶつけたところで、あんたの娘は生き返るのかよ？」

割り込んできたバラクの言い分に、男は言葉を詰まらせる。

「そ、それは……」

拳を握り締めて俯く男に、バラクは鼻を鳴らせて顎で林道の外を示す。

「さっさと行きな。これ以上は、さすがに見過ごせねえぜ？」

「……なにが、教団だ。結局おまえたちは、世界を自分たちの都合のいいように管理しているだけの独裁者じゃないか」

喉の奥から押し出すような声で囁き、男は最後にリリースに憎悪のこもった視線を向けて走り去った。

「独裁者、ねえ。じゃあ、その独裁者がいなりや殺し合いを続けるやつらは、いったいなんなんだろうな？」

喉を鳴らせて、バラクは笑う。

男の去った方角を見つめたまま動かないリリスの顔を汚す血をセトは布で拭う。と、リリスはかすかに笑みを見せて布を受け取った。

「ありがとうございます、セト。あとは自分で」

「離宮に戻りましょう。医術に長けた司教に見ていただいたほうがいいと思います」

人間の身体の中でも、頭の怪我は特に危険な部類に入る。ほんの少しの衝撃でも大事に至ることもあれば、後々になって突然倒れ、そのまま死んでしまう例もある。

だからこそ、セトが心配するのは当然のことなのだが、リリスは首を横にふった。

「平気です。私の身体は、私がよくわかっていますから」

「しかし……」

「それよりも早くカルディアに行きましょう。できるだけ早く、カイサリアへ行かなければなりません」

こうしている間にも、反乱の渦は肥大し、多くの犠牲者を生み出していることだろう。

（私にできるのは、それを力づくで押さえ込むことだけだけれど……）

それでも、なにもしないよりはいいと。少ない血を流すことで、

多くの人々の命を守れるのなら、それが正しい道なのだと、リリスは信じてきた。――信じなければ、この脆く弱い心は己の剣が血で染まっていく様を見続けることができなかった。

赤く染まった布を見下ろし、リリスは思う。

流れるのが自分の血だけですむのなら、それはどんなにいいことだろう、と。

しかし、そのように都合がいい現実などは存在せず、流される血はいつも、罪ない人々のものばかりだ。

「……バラク、教団は……私たちは正しいのでしょうか」

ふいに口をついて出たリリスの疑問に、バラクは、さあな、と返す。

「確かに、教団は神魂による身分制度を作り、誰もが平等に権利を手にする機会を与えた。そして、百年の統計が導き出した神魂の発現率から作られた身分制度は、貴族、平民、奴隷を都合のいい割合で振り分けることにも成功した」

饒舌に滑り出るバラクの言葉を、リリスは黙って聞いていた。

「だが、それだけだ。教団はなにも正しい制度を作り出したなんて言っちゃいねえ。現段階で、もっとも平和を維持するために有効な制度を作っただけだ。そいつが正しいのか正しくないのかわからない。自分で考えることだろう？ 万人に受け入れられる正しいなんてものはこの世に存在しねえんだからな」

「いま、カイサリアで反乱起こしている人たちや、あの男の人は、正しくないと思っているのですね」

「そういうこった。だから抗う。――おまえの仕事はそういうやつらを潰すことだ。もし、おまえが教団の在り方に疑問を抱いている

のなら、いますぐにでも止めちまいな。そんな悩みを抱えたままじゃ、いつか死ぬぜ」

それは、バラクなりの気遣いだったのだろう。言葉の節々に感じる優しさにリリスが表情を綻ばせると、バラクは罰が悪そうに顔をそらしながら言った。

「だいたい、おまえはなんで使徒なんかやってるんだよ？ どう考えたってガラじゃねえだろ」

「さあ、どうしてでしょうか」

「はあ？」

投げやりなリリスの返答に、バラクは素っ頓狂な声をあげる。リリスはそんなバラクの反応に、ことさら困ったように整った眉を下げた。

「私もわからないんです。本当にやりたかったことは、もうできなくなってしまうて……それがどうしようもなく辛くて」

なにかもを諦めたような、そんな響きをもった声が静寂な林道に溶け込んでいく。

「バラク、私ね、守りたかった人がいたんです。その人を生涯守り通すと誓って、その為の強さを手に入れるために騎士団に入りました」

でも、とリリスは乾いた笑みを零した。

「守れませんでした。私があの方の下に戻った日の前日に、亡くなってしまうんです」

「……殺されたのか？」

リリスは頷く。

「犯人はいまだにわかっていません。いえ、そもそも探すことすらできなかった。――けれど、そんなことは問題じゃないんです。私は、本来なら一日早く戻る予定だった。でも、正騎士として認められた祝宴を開いていただくことになって、そのために帰国を一日遅らせたのです」

そして、その一日の間に、彼女は死んでしまった。

「私が、あの方を殺したのも同然です。私が力を手に入れたのは、教団のためでも人を殺すためでもない。ただ、あの人を守りたかったそれだけだったのに……」

言いかけて、リリスは口を手で覆った。

いつの間にか、余計なことを話してしまった。誰かに話すつもりなどなかったのに、教皇の口から彼女の名前を聞いて心が弱っていたのかもしれない。

気まずそうに口を閉ざしたリリスに、バラクはため息を吐いて言った。

「おまえ、バカだろ？」

「え？」

「聞いてりゃなんだ？ おまえのせいでそいつが死んだ？ そんなわけあるか。おまえは一切関わってないだろうが」

「でも、私が一日早く帰っていれば――」

「守れた？ そんな保障どこにもねえだろうが。自惚れんな。てめえは全能の神にでもなったつもりかよ」

鋭いバラクの視線に、リリスは言い返すことができずに黙り込む。

「いいか、リリス。おまえが一日早く帰ったところで、そいつを絶対に守れたなんていう保障はどこにもねえんだよ。もしかしたら、おまえが帰ってくる前にケリをつけようとしてたのかもしれない。そしたら、またさらに一日前に殺されてたかもしれない」

「そんな、推測……」

「じゃあ、おまえの守れていたかもしれない、は推測じゃないのか？」

今度こそ、リリスは完全に返す言葉を失って項垂れた。

バラクの言うとおりだった。一日早く帰っていれば守れていた、などというのは、推測どころか願望に過ぎない。そう思うことで、リリスは自分を戒めていたかったのだ。

最初からなにもできなかった。そのような可能性を、認めたくはなかった。

「そもそもおまえは柔軟性がなさ過ぎるんだ。人の一生は長いんだ、目的一つ失ったぐらいでへこたれてんじゃねえよ。まだ若いんだからよ」

「……なんですか、それ。バラク、まるで年寄りみたいですよ」

小さく、リリスが吹き出す。バラクは鼻を鳴らせて笑った。

「ハ、これでもおまえより十年は長く生きてるんだ。年季が違うんだよ、年季が——って、なんだ、その顔」

まるで珍しいものでも見たかのように呆けているリリスとセトの間抜け面に、バラクが訝しげな視線を向ける。

リリスははっとして、それから曖昧な笑顔を浮かべた。

「い、いえ、てっきりバラクはセトと同じで二十歳くらいだと……」
「自分もです。まさか、あの言動と行動で二十半ばとは……信じられないな」

セトもため息をつく。

「おい、いま俺の素行の話はどうでもいいだろ。つーか、セトこそ枯れすぎてんだよ」

「君に落ち着きがなさすぎるんだ」

「年上に対してちっとは礼儀を払えねえのか、おまえは」

「それらしい振る舞いをしてくれれば考えるさ。いまの君では無理だけどね」

そうして、いつものような言い争いへと発展していく二人を見ていると、少しだけ胸の内が晴れていくような気がして、リリスは口元に緩やかな笑みを浮かべた。

（ありがとう、バラク）

声に出して言っても、バラクは素直に受け取らないだろう。

だから、彼への礼はこれからの行動で示そうと、リリスはひそかに思った。

まだ、リリスの中で彼女に対する罪過の念は消えない。――おそらく、一生消えることはないのだろう。

しかし、それでも、彼らとこうして過ごす日々もまた、そう悪いものではないのだと、リリスはようやく認めることができたような気がした。

「行きましょう、セト、バラク。急がないと、船の時間に間に合いません」

空はまだ、青さを取り戻してはいないけれど、剣以外にも、この暗闇の中で手にできるものがあつた。

彼らが一緒にいてくれる限り、自分はまだ大丈夫——そう思い、リリスは歩き出すのだった。

1-28 捧ぐ、月の花草

情報屋を名乗るラケルの同行を許可してから一週間もの間、イザヤたちはコランに留まっていた。

ラケル——実際にはイスカから伝えられた情報によれば、ラケルの思惑がうまく働いたらしく、イザヤたちがコランにいると教団は考えなかった。だからこそ警戒が厳しくなった周辺の街や村にでるのはかえって危険なことであり、イザヤたちはこうしてほとぼりが冷めるまでコランに滞在することとなったのである。

その間、イザヤたちはラケルから新しく仕入れた情報の整理、ルカは老エルフの残した手がかりについて読みすすめたが、どちらも有力なものは得られなかった。

ラケルに関しては、彼の扱う主となる情報が教団関連、または各国の動きについてなどで、おとぎ話の類に入る〈ノアの物語〉は専門外ということだった。

しかし、教団関連の情報についてはさすがに信憑性に足るものばかりで、現に今もコラン周辺を調べていた教団関係者たちの数が減ったという知らせを受け、イザヤたちはようやくコランから出ることを決めたのである。

「それで、コランを出るのはいいが次にどこに行くかは決めてあるのかい？」

日持ちする食料を入れた皮袋の口をきつく縛りながらそう問いかけてくるラケルに、イザヤは外の景色を気にしながら頷いた。

「デバイラに行くつもりだが、その前に少し、行きたい場所がある」「行きたい場所？」

イザヤにしては珍しく歯切れの悪い言い方に、ソレイユが聞き返す。

「サイガ」

「サイガというと、コランの北にある小さな村ですね。しかし、どうしてまたそのような場所に？」

ルカが不思議そうに首を傾げた。

サイガは数あるクレストラウム領内の村の中でも一際小さく貧しい村であり、目立った特産品もなければ観光地ですらない。人も少なく、およそ情報収集とは無縁の場所だ。

「なにか理由があるのでしたら止めませんが、あまり勧めませんよ。サイガほどの小さな村にこの人数で入れば目立ちますし、なによりデバイラに近い。さすがに騎士がいることはないでしょうけど、目撃される可能性は高いと思います」

もう昼だというのに、ソレイユの肩にとまるリオの声は眠たげだ。しかし、それでいて口に行っていることは的を射ているのだから可愛げがない、とイザヤは思う。

「わかってる。だから、サイガには私一人で行く。おまえたちはそれまでデバイラにいてくれ。情報屋、正門を使わずにデバイラに入るルート、いくつか知っているな？」

「そりゃもちろんだが、デバイラなんかに行って大丈夫なのか？」

「あ、それは私が頼んだのです。首都の図書館なら、なにかめばしい情報があるのではないかと思って」

ルカが控えめに名乗りをあげると、ラケルは、なるほど、と頷いた。

「よし、それじゃ俺と嬢ちゃんは先にデバイラへ行こう。姫さんとソレイユくん、リオちゃんはあとから合流してくれ」

「いや、私は一人でじゅうぶ——」

「ほい、ソレイユくん。こいつに書かれている通りにすれば安全にデバイラに入れるから、よろしくな。ああ、俺たちが根城にするつもり、その建物の位置も書いてあるから。ついでにこれがデバイラでのイスカとの連絡の取り方な。間違うなよ」

「おい、だから私は……」

「了解。ありがとな」

「聞け！」

「痛い！　なんとなく殴られるのはわかってたけどなんで俺だけ！？」

後頭部にイザヤの拳を食らったソレイユが涙目で訴えるが、イザヤは相手にもせず、ラケルに詰め寄る。

「この馬鹿もおまえたちと連れていけ。私は一人で十分だ」

「いやあ、そういうわけにもいかないだろう。せつかく人数がいるんだ。いざというときのためにも、頭数はわけておいたほうがいい」

「それは納得しますが、どうしてわたしとラケル様なんですか？」

「そりゃ俺としては色気のない姫さんより嬢ちゃんかリオちゃんのほうが嬉しいからさ。でも、リオちゃんを選ぶともれなくおまけがついてくるからなあ」

「……聞かなければよかったと思いました」

ルカがげんなりと肩を落とす。おまけ扱いされたソレイユは自分のことだと気づいていないのだろう、へらへらとした笑顔を浮かべている。

「と、そういうわけだ。いいかい、姫さん？」

「はあ、勝手にすればいい」

深いため息をついてイザヤはベッドに腰をおろす。その様子を見て満足気に頷いていたラケルをルカはじっと見つめていたかと思うと、眉をひそめながら言った。

「そういえば、ラケル様」

「ん？ なんだい？」

「イザヤ様と最初に会ったとき、わたしのことを伝えましたよね。ということは、ラケル様は前からわたしがエルフだということを知っていたのですか？」

そういえば、とイザヤが顔をあげる。

ラケルはイザヤの目的がエルフだということを知っていてイザヤとルカを引き合わせた。となれば、少なくともイザヤがコランに来るより前から、ルカの正体に気づいていたことになる。

「はっは、俺は情報屋だぞ！ 嬢ちゃんがあの酒場で働きはじめてすぐに調べはついた」

「……そんなにわかりやすかったでしょうか？」

ルカが不安そうな表情を見せる。ラケルは片目を瞑って笑った。

「いや、そんなことはない。嬢ちゃんの正体には俺以外誰も気づいていないさ。最初は俺だって気づかなかったくらいだからな」

「ならどうしてラケルは気づいたんだ？」

ソレイユが興味津々に身を乗り出す。

ラケルはにやりと笑みを浮かべると、腕を組んでふんぞり返った。

「そりゃ、嬢ちゃんほど可愛い女の子見たらあとをつけて近づこうとするのが男の性ってもんだろう」

「つまり、その途中でルカの正体に気づいた、と？」

「その通りだ」

瞬間、暖炉によって暖められているはずの室内に冷風が吹き込んだ。——当然、誰かが戸を全開にしたというわけではなく、ルカをのぞく全員の感覚の問題である。

無言のまま身震いをしたイザヤたちが、おそろおそろ元凶と思われる少女のほうへ視線を向け、またすぐに逸らした。

「おい、おっさん。嘘でもいいから謝つといたほうがいいぞ。ルカのこんな人を軽蔑しきった目、初めてだ。絶対嫌われたぞ」

両腕をさすりながら、ソレイユがラケルに耳打ちをする。

「そ、そいつは困る。よし、そんじゃあ——」

「まあ、嘘の謝罪なんてしたら今度はイザヤに嫌われるけどな」「どうしろと!？」

思わず叫ぶラケル。

（なんなんだろうこいつらは……馬鹿なんだろうか）

その背中にイザヤが冷めた視線を送るが、どうやらラケルはそれどころではないらしい。イザヤの何十倍も冷たい、絶対零度の視線が氷柱のような鋭さをもってラケルに突き刺さっていたからだ。

「ラケル様」

口元は笑っているのに、目はまったく笑っていないルカが言う。
ラケルの顔からさっと血の気が引いた。

「死んでいただけませんか。五回ほどいいので」

「嬢ちゃん、ラケルの命は一個しかないのよ？」

普段のラケルからは想像もつかないような小さな声での殊勝な抗議だが、ルカにとってはどうでもいいことだ。

「じゃあ、限界まででいいです。手当しますから、それを十回繰り返してください」

「増えてる」

「お早く」

「自傷行為の催促をそんな笑顔でするとか！——って君たちも見てないで助けてくれ！」

情けない顔で振り返ったラケルは、頬を膨らませて笑いを堪えているソレイユの頬を見るなり無言でその風船のような頬に拳を叩き込んだ。

破裂音と共に細かな唾液を飛ばしてに仰向けに倒れるソレイユ。

ソレイユを殴ったラケルの背後に音もなく佇むルカと、そんな周りの様子などまるで気にせずにくたた寝をしているリオ。

窓から差し込む冬の日差しを受ける彼らの横顔を見つめながら、イザヤはふいに胸の内に生まれたなにかに気づいていた。

それは、遠い昔に感じていたものとはよく似ていて、けれどもそうだと認めたくはなくて、イザヤはそのなにかをかき消そうとするかのように胸を掴んだ。

(……気のせいだ、こんなものは)

しかし、いくらイザヤが否定しようと、胸のうずきが消えることはなかった。

※

コランからサイガへ行くには、一度デバイラへと続く街道に戻り、そこを北上、デバイラを過ぎた後に東に逸れる、という道順がもっとも一般的なものだ。しかし、いくら周辺の警戒が緩まったとはいえ、首都へ続く街道は警備も厳しく、なによりも人目につく。そこでラケルが提案した道が、コランをそのまま北上し、その途中で西に逸れるというものだった。

もちろん、その道のりに街道はない。街道もなければ、街もなく、途中で停泊できる宿さえ望めない。道なき道を進んでいくわけだから、当然その道のりは厳しくなるのだが、それに加えて魔物の出没も予想される極めて厳しい道りとなる。

しかし、それでも騎士と遭遇するよりは安全だ、というのがイザヤとラケルの見解だった。

実際に歩いた人間がいるわけではないので正確なことはわからないが、地図上の距離と状況を見て、サイガまでは常人の足であれば一週間。イザヤたちなら、たとえ魔物の襲撃があっても五日あれば到達できると、ラケルは言った。

そして、その推測は間違っではおらず、出発から四日目には、イザヤたちはサイガの目前まで歩を進めていた。

「で、どうして私がおまえを運ばなければならない？」

不機嫌丸出しの声で、イザヤは頭の上に鎮座するリオに言った。

まだ朝方ということもあり、リオは欠伸をかみ殺しながら答えた。

「仕方ないではありませんか。主様が年も考えずにふらふら歩き回るものですから、ついていくの正直面倒くさいんです。なにより揺れますし」

「……おまえにとってあいつは乗り物か」

忠誠心の欠片さえ感じられないリオの言動に、イザヤはため息を吐いた。しかし、現にソレイユは朝食になりそうな食材を探しにいったまま戻ってこない。向かう方角は教えてあるため、合流はできるのだろうが、彼の姿が見えなくなって早一時間。いくらなんでも遅すぎる。

「道がわからなくなっているんじゃないだろうな」

「それは大丈夫でしょう。帰巢本能だけは一人前ですから、道がわからなくなっても最終的には感覚で戻ってきます」

「犬か」

「――ほら、噂をすれば、ですね」

直後、騒がしく茂みを掻き分ける音がしたかと思うと、薄暗い森の中でも目立つ白銀の髪がひょっこりと顔を出した。

「一体どこまで行っていたん――」

頭を抱えつつ振り返ったイザヤは、ソレイユが両手に抱えているものを見て、動きを止める。

柔らかなような薄桃色の毛と、天へ向かって長く伸びた耳。愛くるしい黒目と――顎まで伸びた鋭い八重歯。

「なんだそれはっ!？」

思うより早く口が動いていた。

「見てわからないか、兎だ」

真剣な顔でソレイユは兎を差し出し出してくる。瞬間、大きく口を開けた兎に、イザヤは咄嗟に身を引く。あと一步遅ければ、手を食いちぎられるところだった。

「そんな凶悪な歯の兎がいてたまるか。捨ててこい」
「なに！？　せっかく苦勞して捕まえたのにか！」

言って、腕の噛み傷を見せるソレイユ。

「兎は腕に穴を開けない。捨て、て、こ、い」
「いえ、捨てるには惜しい。あの歯以外は普通の兎と遜色ないようですし、朝食にはもってこいでは？」

「わかった。逃がしてくる」
「できるだけ遠くにな」

金目を細めながら喉を鳴らすリオに、ソレイユはイザヤの後押しを受け、脱兎の勢いで森の奥へと走り去った。

「逃がしてきた」

数分後、戻ってきたソレイユは肩で息をしながら言った。その時、頭上で聞こえた舌打ちは聞かなかったことにして、イザヤは木の根元に下ろしていた腰を上げる。

「じゃあ、行くぞ。このまま行けば、今日中にはつけるだろう」

「おう——と、そうだ。イザヤ、これやるよ。帰る途中で見つけた」

ソレイユが差し出してきたのは、花卉だけでなく、葉や茎まで純白の花だった。淡い光をまとっているかのように神秘的な美しさをもつその花に、イザヤは目を奪われる。こんなにも綺麗な花を見るのは、初めてだった。

「それは、月光草ですか」

先ほどまで目を閉じて蹲っていたリオが、いつの間にか身を起こしてソレイユの手元を覗き込んでいた。

「月光草？ 草なのか？」

「ええ、花のように見えますが違います。そのせいで、偽花、とも呼ばれています。月光草のほうが一般的でしょうね。太陽ではなく月の光で成長する珍しい種類の植物です」

「月の光、か。なんだ、じゃあイザヤにぴったりだな」

笑顔で月光草を差し出してくるソレイユに、イザヤは首を傾げる。

「どういうことだ？」

「イザヤって古代語で月って意味だろ？ 前にルカから聞いた」

「名前の意味なんて、どうでもいいことだ」

「そっか。それじゃあ、これ、いらないか？」

「……いや、もらう。手間が省けた」

「手間？」

首を傾げるソレイユに、イザヤは月光草を受け取りながら言った。

「供える花を摘んでいくつもりだった。これは花じゃないみたいだが、白が好きだったから、たぶん喜んでくれる」

懐かしそうに目を細めるイザヤに、しかしソレイユは素直に喜ぶことができなかった。

イザヤが言った、供える、の一言。

それは、つまり……。

「もしかして、サイガに行く理由ってというのは、墓参りなのか？」

「……ああ」

イザヤが首肯する。ソレイユはリオと顔を見合わせると、頬をかく。

「そうか。なんか、悪いな。ひとりで来たかった、よな」

「そうだな。有り体に言えば――邪魔」

「少しは柔らかい布にでも包んでくれるとありがたい。俺の心的に」

ざっくりと言い切るイザヤに、ソレイユは痛みを訴える胸を押さえながら懇願する。が、当然そのようなことをイザヤが聞き入れるはずもない。

足早に歩き出したイザヤに、ソレイユは慌てて小走りになりなりながら追いつく。

「なあ」

「なんだ？　くだらないことを言ったらここに捨ておくぞ」

「……」

とたんに黙り込んでしまったソレイユに、イザヤが訝しげな視線を送る。

「なぜ黙る？」

「いや、あんたからすれば俺の言ってることってほとんどがくだらないことなんじゃないか、と。俺は常に本気だけだな」

「……めんどろくさい。早く言え」

イザヤは眉間によった皺を指で押さえる。

ソレイユは、そうか、と相槌を打つと、すぐに切り出した。

「その人は、あんたにとって大切な人だったのか？」

「え……」

「こう言っちゃなんだけどさ、イザヤが誰かの墓参りなんて想像つなくて。だからたぶん、本当に大切だった人なんじゃないかって思っ、な」

イザヤの驚いた顔を見つめながら、ソレイユはその人が、以前カルディアの海岸でリオが言っていた、イザヤに愛情を与えた人ではないかと思っていた。

だが、そうだとすると、一つ納得いかない部分もある。

リオは、イザヤの在り方から、彼女に愛情を与えた人間は最後に彼女を裏切った可能性が高いと言っていた。ソレイユもそれには同感だ。イザヤの他人に対する不信、小さな積み重ねはあれど、その決定打となったのは、おそらく信頼していた人間からの裏切りだったのだろうから。

だからこそ、ソレイユにはわからなかった。いくら一度は愛情を注いでくれた人間とはいえ、自分を裏切ったもののためにわざわざ花を捧ぐだろうか。

そのようなことを考えながらイザヤの返答を待っていると、イザヤは半ば開いていた口を閉じて、足元に視線を落とした。そして、口元に薄っすらとした笑みを浮かべて、首肯する。

「そうだな。たぶん、この世界で一番大切だと思える人だった。いまでも、それは変わらない」

「……そうか。それじゃあ、早く行こうぜ」

聞きたいことは山ほどあった。イザヤがそこまで言う人は、いったいどのような人間なのか。

けれど、止めにした。きっと、そうして思い出を掘り返されることをイザヤは望まないと思ったからだ。

「ほら、どうやら目的地に着いたみたいだしな」

言って、ソレイユが指差した先には、低い石壁に囲われた村があった。周囲には農地が広がっており、数は少ないが牛や鶏などの家畜の姿も見受けられる。

石壁の内側で点々と建つ家々は、荒土を用いて建てられた質素な住居で、家を囲うようにして並ぶ小さな柵の中には古ぼけた小屋や納屋があった。

「おいおい、あんな低くて脆そうな壁で魔物の侵攻を阻めると思っているのか？」

その気になれば軽く飛び越えられそうな石壁を見て、ソレイユは呆れたように言った。

「丈夫な外壁を建てるだけの余裕がないのでしょうか。むしろ、このような村で外壁があるだけましですよ。酷いところは、壁どころか

柵ですからね」

「それはもうなくてもいいんじゃないか」

「人間は囲いを作るのが好きですから。それがどんなものでも、内側に入りたがるのです」

「……行くぞ。墓地は村の一番奥にある」

短く言い、イザヤは村へと足を踏み入れた。村人の大半は農地へ出ているらしく、村の中は閑散としていた。

ときおり、村の中で戯れていた幼子が視線を向けてきたが、すぐに興味を失くしてどこかへ走り去っていった。

そうして、なるべく人目を避けるようにして村を進んだイザヤたちは、少し小高い場所にある墓地へと辿り着いた。

墓地とはいっても、都市にあるような立派な敷居の中にあるものではない。草地に十字架と名前が刻まれた石が刻まれただけのものだ。それでも、やはりこの規模の村の墓にしてはしっかりしたものだったが、このように小さな村だからこそ、しっかりと吊ってやっているのかもしれない、とソレイユは思った。

冬ということもあり、墓地に花はなかった。イザヤはある墓の前で足を止めると、フードを取り、膝について月光草を供えた。

そして、墓石の上に被った土を手で優しく払うと、そこに刻まれた名前を見て、かすかな笑みを見せる。

「ごめんね、アベリア。また、ずいぶんと来るのが遅くなった」

それは、この静かな村の墓地でさえ、よく耳を澄ましていないと聞き取れないほどに小さな声だった。

初めて聞く、イザヤの柔らかな声。その声と、彼女の表情を見ているだけで、いま、この冷たい土の中で眠っているであろう女性がイザヤにとってどれほどかけがえのない存在だったかがわかる。

「リオ、少し外そう」

イザヤに聞こえないよう、ソレイユは自分の肩にとまるリオにそっと耳打ちをした。リオも頷き、ソレイユは踵を返して振り返った。

「ん？」

そこには、いつの間にかいたのだろうか、赤い髪の女性が立っていた。年は二十代半ほどの、白い服を纏った、美しい女性だった。

赤い髪の女性は、まるで信じられないものを見たかのような目で、墓の前にしゃがみ込むイザヤを見ている。

「どうしたんだ、あんた」

ソレイユの声に気付いたのだろう、イザヤが立ち上がって振り返る。――その顔が女性と同じく、驚愕に染まる瞬間をソレイユは確かに見た。

「あ、べりあ？」

イザヤが口にした名前に、ソレイユとリオは眉を潜める。

アベリア。それは、いままさにイザヤが悼んでいた故人の名前だ。

「アベリア、だよね？」

イザヤがおそるおそる問う。そして、女性に近寄ろうと足を前に踏み出したとき、女性は口を押さえて走り去った。

「アベリアっ！」

イザヤが呼び止めるが、女性は足を止めることなく、村の中に消えていった。すぐにその後を追おうと足を踏み出したイザヤの腕を、魔族の姿に戻ったりリオの手が掴む。

イザヤは振りほどこうと腕を強く振るが、リオの手は緩むどころかぴくりとも動かなかった。

「離せ、梟！」

「落ち着きなさい。こんな狭い村で目立つ行動をすればどうなるか、わからないわけではないでしょう」

リオの鋭い視線を受け、イザヤはようやく腕から力を抜いた。頭に血が昇っていたことに、おそらく自分でも気付いたのだろう。

「……悪かった」

囁くようにそう零したイザヤに、リオはため息を吐いて手を離す。イザヤが走り出すことはなかった。

「わかればそれで。まあ、無理ありませんね。死んだと思っただけの人が生きていた。――あなたの反応は普通です」

「イザヤ、あいつはいい……」

言いさしたソレイユの言葉を、イザヤは静かに、だが強く遮った。

「事情は話す。だが、その前に、アベリアを探したい」

縋るようなイザヤの視線に、リオはもう一度深いため息を吐いて額に手を当てた。

「……自分がどのような身の上か、理解してそれでも彼女と接触し

たいというのですね？」

「わかつている。今の私がアベリアと会ったら、迷惑をかけてしまう。でも、それでも……もう一度話したい。確かめたい」

「そこまでわかつているなら、止めませんよ。ただ、この人数では目立ちます。行くのは、あなたひとりです」

頷いて、イザヤは小走りに女性が消えた方向へ向かって走り出した。

1-29 再会、打ち明けられた過去

アベリアを追って村の中へと戻ったイザヤは、人目につかないよう慎重に歩き回っていた。とはいえ、狭い村だ。都市のように高い住居が密集しているわけでも、人通りが多いわけでもない。見るからに余所者のイザヤは目立たないはずがなかった。

今はまだいい。村にいるのはほとんどが子どもで、大人の影は見られない。

だが、正午の鐘が響く頃には、農耕に行っている大人たちも戻ってくるだろう。それまでには村を離れなければならない。

焦りと不安がイザヤの胸に押し掛かる。

言葉に表せないような様々な感情がせめぎ合い、いつしか、イザヤは足を止めていた。

（私は……なにをやっているんだろう）

アベリアが生きていた。死んだと、九年前のあの日に殺されたのだと聞いていた。

それが、生きていた。

（なら——それで十分じゃないか）

そこに、どんな経緯があったにせよ、生きていてくれたならそれでいい。

犯罪者として教団に追われる身である自分が彼女と関わりがあると知れたら、また迷惑をかけてしまうことになるだろう。リオには、それでも会いたい、と言ったが、それはあくまでもイザヤの都合だ。彼女のことを考えるのなら、きつと会うのは間違いだ。そしてなにより、アベリアが逃げた、という事実がイザヤの足を動かなくさ

せていた。

逃げた――それはつまり、自分に会いたくなかった、ということに他ならないだろう。

(……やめよう)

イザヤは決心を固めた。もし、彼女がここでつつがない生活を送っているのだとすれば、それでいい。

そして、ソレイユたちのところへ戻ろうと踵を返したイザヤは、ふいに、背後から誰かに抱きしめられた感触に目を見開いた。

咄嗟に腰にさした剣に添えられた手は、懐かしい匂いを思い出したとたん、力なく落ちた。

首にしっかりと回された腕に手をあて、イザヤは目を強く瞑る。

「私のこと、覚えていてくれたんだ……アベリア」

背中越しに、イザヤを抱きしめたアベリアが頷く気配を感じた。

「良かった……」と、イザヤの声が震える。「本当に、私……ずっと」

言葉にできないほどの感情が胸の内から湧き上がってきて、いまにも溢れ出してしまいそうだった。

イザヤがなにも言えずに涙を堪えていると、アベリアがさっといザヤの手を引いた。そのまま、すぐそばにあった家の中に連れ込まれたイザヤは、扉が閉まる瞬間、数人の男たちの話し声を聞いた。

「……ありがとう。危なかった」

そう言うと、アベリアはにっこりと笑って首をふった。イザヤは

そんなアベリアを見つめ、視線を伏せる。

「やっぱり、声は出ないままなんだ」

少し間を置いて、アベリアはかすかに笑みを見せて頷く。

「ごめん。苦勞、させてしまっ——」

懺悔を口にするイザヤの口は、アベリアの長い指で閉じられた。アベリアは片手でイザヤの頭を撫でると、また柔らかく笑ってイザヤの手をとった。

そして、ゆっくりと、手のひらの上で指を動かしていく。

随分と久しぶりだというのに、彼女の声は難なく読み取ることができた。

アベリアの声を感じ取った手のひらを握り締め、イザヤはくすぐったそうに笑いながら頷いた。

「ただいま、アベリア」

束の間、ソレイユは目の前にいる少女が誰なのか理解できなかった。

自分の知っている少女は、いつも無愛想で、笑うことなど数えるほどしかなくて、いつも寂しそうにしていた。

それがどうしたことだろうか。息を切らせてソレイユたちの元へ戻ってきたイザヤは、まるで長年背負ってきた重りがなくなっってしまったかのような雰囲気を持っていた。

リオですら目を丸くさせる中、イザヤに案内されるまま辿り着いた家でソレイユたちを待っていたのは、さきほど墓地にいた女性だ

った。

女性の名前はアベリアといって、イザヤの古い友人であるという。ある事件がきっかけで声を失ってしまったというアベリアは、当初、ソレイユとリオの正体に驚きを隠せない様子ではあったが、イザヤの「馬鹿だから心配ない」という一言で笑顔をみせてくれた。そして、しばらくの間二人で話がしたいというイザヤの申し出を、ソレイユとリオは快諾し、納屋へと移った。

「なあ、アベリアって本当にただの友人か？」

農耕に使う道具や、木箱などで埋め尽くされた狭い納屋の中、唯一のフリースペースとも言える干草の上に寝そべりながら、ソレイユは梟の姿に戻ったりリオに尋ねる。

「さて。どちらかといえば、姉妹に近いように見えましたか？」

興味なさそうにリオは答える。

「だよな。それにしても、イザヤ、友達がいたんだな」

「……失礼なことを言いますね」

そうは言っているものの、リオもソレイユに同感、といった風な口調だった。

ソレイユは納屋へと移る前、扉の隙間から垣間見たイザヤの、まるで無邪気な子どものような笑顔を思い浮かべながら、ごろりと身を横に倒した。

（見たかったもののはず、なんだけどな）

イザヤの心から笑う姿。――それは、ソレイユが見たかったもの

の一つのはずだった。

だというのに、この釈然としない気持ちはなんだろうか。根拠のない不安が胸の中に押し寄せている。

（気のせい、だな）

きっと、戸惑っているだけだ。いきなり、あんな笑顔を見せるから、これまでのイザヤを知る身としては、どこか違和感を覚えているだけなのだろう。

「本当に、似合わない笑顔するよな」

「だから失礼ですよ。――まあ、確かに気持ち悪いですね。寒気がします」

どこまでも素直な従者に、ソレイユは小さく笑って目を閉じた。

※

それから、どのくらいの時が経っただろうか。半ば夢の世界に入りかけていたソレイユは、納屋の扉が開く音で目を覚ました。

視線を向けると、イザヤが後ろ手に納屋の扉を閉めている。

「イザヤ」言って、ソレイユは上半身を持ち上げる。「もういいのか？ アベリアは？」

「昼からは、また仕事に出なければならないと。――日が沈む頃には戻ってくるそうだから、それまではここにいたほうが安全らしい」

確かに、とソレイユは頷く。家の中では万一誰かが尋ねてきた場

合どうしようもない。あの狭い家では隠れる場所もないだろう。その点、納屋は家主以外が立ち寄ることなど滅多にないのだから、安全といえど安全なのだろう。

ソレイユがなにとなく体をずらすと、イザヤは素直に干草の上に空いた場所に腰をかけた。他に座る場所がないとはいえ、こうもあつさりと来るとは思わず、ソレイユは頬をかいた。

少し動けば肩と肩が触れ合ってしまうほどの近い距離にソレイユが僅かばかりの居心地の悪さを感じていると、樽の上で目を閉じていたリオが口を開いた。

「イザヤ、彼女は本当に信頼できる人間ですか？　もし、彼女があなたを通報した場合、ここは安全とは――」

「それはない。アベリアは、そんなことは絶対にしない」

リオの言葉を遮り、イザヤは強く言い放った。リオは軽く息を吐くと、満月色の双眸をイザヤへ向ける。

「根拠は？　あなたは事情を話す、と言いましたね。では聞きましょう。彼女は何者で、あなたとはどういった関係なのですか？」

澁みない声を納屋に響き渡らせるリオの鋭い視線に、しかしイザヤは焦る様子もなく静かな瞳でリオを見返していた。

「リオ、やめておけ。イザヤも、別に言いたくないなら無理しないでいいぞ」

ソレイユとて、イザヤとアベリアの関係が気にならないと言える？になる。誰にも心を許そうとしないイザヤがああまでして拘る女性。

人間界では家族に対し、思いいれは少ないと聞く。だからといっ

て安易に姉ではないと判断するには早い気もするが、とにかく家族にせよ友人にせよ、ただの知り合い程度の関係でないことは事実だろう。

だからこそ、彼女との関係をむやみやたらと掘り返すべきではない、とソレイユは考えていた。イザヤにとつて大事な女性。そのような女性を疑いの目で問いただされることは彼女にとって決して快いことではないはずだ。

しかし、リオの言い分もまた、ソレイユには理解できた。リオはなにも、好んであのようなことを言ったわけではない。リオはただ、ソレイユの害となり得る事柄に対し、事前に情報を取りえることを大事と考えただけだ。自らの優先順位を情に流されることなく判断できる。――それこそがリオがこれまで無茶ばかりを通すソレイユを守り通すことができた理由の一つだ。

しん、と静まり返った納屋に最初の音をもたらしたのはイザヤだった。イザヤはリオを見据えていた視線を逸らすと、正面――扉を見つめて口を開いた。

「梟――おまえ、人間が……特にクレストラウムの人間が嫌いだったな？」

「軽めに八つ裂きにしたいくらいには」

どこが軽めなのかまったく理解できなかったが、リオの目は本気だった。冷や汗を流すソレイユの横で、イザヤは口角をあげた。

「私がクレストラウムの人間だといったら、おまえはどうする？」

「――クレストラウム出身だったのですか。――まあ、我慢しましょう。正直、あなたがクレストラウム出身だろうとなかろうと、私はあなたのこと嫌いですから。あまり違いはありません」

「リオ。おまえさ、少し……こう、言葉を選ぶとかしないのか？」

言葉を選んでいたのはソレイユの方だが、リオは平然と言った。

「選ばなければならないときは選びますよ」

あっさりと言って、リオは黙って先を促した。

イザヤはリオの言い分に腹を立てるでもなく頷くと、片膝を抱え、明瞭な声で言った。

「私は――クレストラウム王家の王女だった」

動きを止めたソレイユとリオに、イザヤは声なく笑った。やはり、こうなるか、と。

隠そうと思っていたわけではなかった。ただ、言う機会がなかったことと、彼らに話すべき理由など一つたりとも思いつかなかっただけだ。

なによりも、認めたくなかった。自分があの腐った親から生まれた子だと。――ただ、認めたくはなかったのだ。

そう、イザヤが考えていると、ふいに前髪を掻き分けて冷たい手が額に触れた。驚いて身を下げると、ソレイユのなんとも言えない表情が見えた。

「な、なんだ？」

「いや。熱でもあるのかと。――そうか。どうりで今日は変だと思ってたんだ」

「その冷え切った手で触ればなんでも熱く感じるだろ、馬鹿か」

ふたたび伸びてくる手を払いのけ、イザヤは額に青筋を浮かべながら言った。

ソレイユははたかれた手を摩りながらますます眉を顰める。

「いや、だっておかしいだろ。俺の想像していたお姫様となにもかもが違う！」

「おまえの想像の姫がどんなものなのかは知りたくもないが——無礼なことを言われているのはよくわかった」

「こう、清楚でおしとやかで、気品があって、笑顔が優しくて……ああ、こうやって殴ったりしない」

殴られた頭を撫でながらまじまじと見つめてくるソレイユから視線を逸らすと、樽の上で固まっていたリオと目があった。

リオはイザヤと目が合うと、弾かれたように身を起こし、冷めた視線を向けてきた。

「——クレストラウム王家にしては、容姿が随分と異なるようすが？」

クレストラウム王家に連なる王族は、例外なく絹のような漆黒の髪と黄金色の瞳を持つことは周辺各国にまで知られていた。つまり、王家にとって、容姿こそが絶対の証となっていたのである。

だが、イザヤの容姿とはそれとはまるで異なる。朝焼けの空のような藍色の髪と、紫水晶の右目。——そして、空を映したかのような蒼い左目。

そのどれをとっても、クレストラウム王家の人間には似ても似つかない。

イザヤはリオの視線を受けると、肅然とした声で返した。

「確かにおまえの言うとおりだが、私は間違いなく、クレストラウム王家の人間だった。現国王——アザルヤ・エディ・クレストラウムの娘だ」

「現国王って教団の教皇だったよな。……じゃあ、あんたを捕まえようとしているのは——」

「私の父親だ。もっとも、もう父親などとは思っていないが」

ソレイユの表情が歪む。——本当にわかりやすい男だ、とイザヤは声を立てずに笑った。

だからこそ、わからなくなる。ソレイユのような自らの心に偽らない魔族もいれば、あの男のように表面だけを取り繕い人を欺く人間もいる。

いっそのこと、すべてを疑い、すべてを拒絶できたのなら、それはどんなに楽なことだろう、とイザヤは思う。けれど、それはできなかった。

アベリアがいたから。

ただ一人、心からイザヤを愛し、イザヤを守る為に命を投げ出そうとした彼女のような女性がいたからこそ、イザヤは世界すべてを憎み切ることができなかった。

「梟、おまえの質問に答える。アベリアは私がまだ城にいた頃、私の世話係だった侍女だ」

そして、とイザヤは膝を抱える手を僅かに震わせた。

「九年前、私を殺そうとした国王の謀略から私を逃がすため、殺された……はずだった」

1-30 花散る、幸福の終わり

シーリス・エンデ・クレストラウムにとって、世界とは王族以外は立ち寄ることを許されない王城の上層に作られた庭園だった。

王城の周囲に広がる庭園とは比べものにならないほど小さな庭園は、しかしシーリスにとってとても大きく見えた。

種類だけでいえば、どの庭園よりも多くの花が咲き乱れていた。そこは、冬でさえ花がすべて枯れることなどなかった。庭園の中だけで咲き、そして散る花を見守りながら、シーリスは自分もまた一生ここで暮らすのだということを、彼女は幼いながらに理解していた。けれども、シーリスはそれでいいと思っていた。なぜなら彼女は一人ではなかったからだ。

優しい両親がいた。姉と兄もいた。二人と顔を合わせることは多くはなかったけれど、聡明な姉と兄であり、心の内はどうあれ、決してシーリスを邪険にはしなかったことを覚えている。

頻繁ではなかったが、両親は時間にあるときにはシーリスの相手をしてくれた。父は外の世界について語り、母は物語を紡いで聞かせてくれた。彼らの話は、狭いシーリスの世界を広げてくれたのだ。

――そしてなによりも、アベリアがいた。

アベリアは、シーリスが覚えている限り、彼女が六歳のときに初めて見えた五人目の侍女だった。それまでの侍女は、長くても一月ほどこしかシーリスと一緒にはいられなかった。嘘をつくとき苦しき機嫌を損ねる王女。心を見透かす異端の蒼。彼女の目を真正面から受け止めることが、彼女たちにはできなかったのだ。

シーリスも、三人目の侍女がいなくなる頃には自身の異質さを理解していた。左目を隠すように前髪を伸ばし始めたのは、その頃からだったと記憶している。

そして、同時に、人は嘘をつく生き物なのだと考えるようになって。――無意識に、そして無慈悲に。

——四人目の侍女はシーリスを悪魔だと罵って姿を消した。

シーリスの心は冷えた。

悪魔はどちらだ。平然と嘘をつくおまえたちのほうが、より悪魔に近い存在ではないか、と。

そうして、シーリスが両親以外に心を開かなくなったとき、アベリアはきた。

林檎のような赤い髪を靡かせて、見ているこちらまで笑顔になってしまうようなたおやかな笑みを浮かべた少女。当時齢十四の少女は、幼いシーリスの前に膝をつき、無礼をわびてから彼女の前髪を手のひらで押し上げ、こう言った。

「綺麗な瞳ですね。——シーリス様、せっかくの美しいお顔が台無しです。もったいないと思いますよ」

彼女の声はとても綺麗で、少しの痛みもなくシーリスの心に響いた。勝手に閉じてしまった扉の鍵が開く音が聞こえ、そこに風が吹きぬけたような気がした。

「でも」と、シーリスは視線を足元に落として言った。「わたしの目は、怖がられているから」

「そのように思う人は放っておけば良いのです」

あっさりと言い切ったアベリアに、シーリスが目丸くさせていると、彼女は両腕を伸ばしてシーリスを抱き寄せた。

「不安なのですね。いったいどれほどの言葉があなたを傷つけてきたか、私にはわかりません。——けれど、シーリス様。不安ならば私が何度でも言いましょう。私はあなたを恐れない。私はあなたのことを、とても愛らしい王女様だと思っています」

蒼い目から流れ落ちたのは、血の涙ではなく、透明な雫だった。そうして、シーリスはこのときようやく気付いたのだ。自分がどれほどの目のことで恐れられることに傷ついていたか。

最初は自分の目が悪いのだと偽り、次は他人が悪いのだと蔑んだ。そうするうちに、いつの間にか本当の心に気づくことを忘れていたのだ。

——受け入れて欲しかった。両親だけでなく、他者からも。

そんな簡単なことを、シーリスはこれまで忘れていた。

泣きじゃくるシーリスを抱きしめたまま、アベリアは微笑んだ。

「私が傍におります。——だからもう、寂しい思いはしなくても良いのですよ」

アベリアはシーリスにとって初めて心を許せる他人となった。彼女の嘘のない言葉、優しい笑顔。それらはシーリスにとって、なものにも変え難い幸福の形だった。

彼女と出会ってからちょうど半年の月日が経とうとした頃、シーリスはアベリアの出自を知った。アベリアは三年前に逝去した前教皇の娘だった。

人間界の頂点に立つ教皇の娘でありながら、しかしアベリアの階級は平民だった。いかに教皇の娘といえど、王族以外の例外は許されない。平民階級の家に引き取られ、その出自を理由に嫉みや蔑みの目で見られ苦しんでいたアベリアを見かねて救い出したのが現教皇である。

だからこそ、シーリスの父であるクレストラウム王には感謝しているのだと、アベリアは言った。

当時のシーリスには、アベリアが話す難しい政務の話も、身分制度もろくに理解していなかった。シーリスにとって重要なことは、

アベリアが傍にいてくれるか否かであり、最後にその質問をしたときに彼女が返してくれた「シーリスが望むのなら」という言葉だけで充分だった。

その後、何事もなく順調に時を過ごしたシーリスをある事件が襲ったのは、その半年後。アベリアがシーリスの侍女としてかしづかえてから、およそ一年後のことだった。

夜半過ぎ、王城に賊が入った。厳重な警備を掻い潜った賊が目指した場所は、王城の宝物庫でも王の寝所でもなく、シーリスとアベリアがいる庭園だった。

普段ならその時間には庭園の傍にある寝所へ入っていたはずのシーリスは、この日、アベリアと庭園の上に空いた吹き抜けから見える夜空を眺めていた。王族以外立ち寄ることのできないこの場所に当然警備の兵はおらず、突然現れた賊と見たのは幼いシーリスとアベリアだけだった。

襲いかかってくる賊に、しかしアベリアは凜然と立ち向かった。だが、相手は騎士を含む警備の兵をことごとく打ち倒すほどの腕を持った賊。戦闘経験などないに等しいただの侍女であるアベリアには打ち勝つどころか、退けることさえできないのは明白だった。

それは、対峙するアベリア自身が一番よくわかっていたことだろう。

恐怖で声さえでないシーリスはただ、賊の鈍色に光る凶器が彼女の喉を裂き、そこから噴出する血を眺めていることしかできなかった。

そこから後に起こったことを、シーリスは覚えていない。目を覚ませば両親がいて、その後ろには、痛々しい包帯を首に巻いたアベリアがいた。

寝台から跳ね起きてアベリアに縋りつくシーリスを、アベリアは微笑みながら抱きしめた。泣き喚くシーリスに、けれどもアベリアは一言も声をかけてはくれなかった。

いつものように、「大丈夫です、シーリス」と、そう言ってくれ

る彼女の美しい声が聞きたくてせがむシーリスを、母親はそっと引き止めた。

——アベリアは、もう声が出せないの。

そのときに感じた失意と絶望、その他のありとあらゆる想いをシーリスはいまでも思い返すことができる。

幼くとも、賊が誰を狙い、誰のせいでアベリアが犠牲になったかを理解できないほど、シーリスは無知ではなかった。

——私のせいで、アベリアは声を失ったのだ。

放心し、静かに涙を流すシーリスを見て、アベリアはそっと背中から小さな身体を抱きしめた。そして、シーリスの手を取り、手のひらに指先で文字を綴った。

——あなたが無事で、本当に嬉しい。

アベリアの声は、確かにシーリスに届いた。朝の森に響き渡る小鳥の囀りのような声は聞こえなかったけれど、代わりに降り注ぐ陽光のごとく暖かな指先が彼女を声をたしかにシーリスに伝えた。

そして、アベリアが声を失ってから一年後。シーリスにとって彼女の運命を大きく変える最大の悲劇が訪れる。

八歳に成長していたシーリスは、人気のない庭園で驚くべき事実をアベリアから聞いた。

それは、国王——シーリスの父親が、シーリスを殺そうとしているという謀略だった。

この年になる頃には、シーリスも自身の目についてある程度の理解は得ていたし、教皇でもある父親が掟を破ってまでシーリスを王

城に匿っていることも知っていた。世間には、シーリスの存在は陰徳されているということも。しかしそれはあくまでも、自分を愛しての行動だと、彼女は信じていた。

だが、それは違った。

国王は妻から忌み子が生まれたなどという事実を世間に公表したくはなかった。だからこそシーリスを目の届く王城に閉じ込めたのだという。

しかし、その事実がいま明るみに出ようとし、それを恐れた国王が密かにシーリスを謀殺する決意を固めたのだ。そして、その役目をあろうことかアベリアに押し付けた。いまやシーリスが一番に信頼を置く彼女に。

アベリアはシーリスの侍女とはいえ、国王に雇われた身であり、ただの平民階級の間人である。命令に逆らうことはできない。けれど、アベリアは自分にはシーリスを殺すことはできないと言った。

だから、逃げてほしい、と。

けれどもシーリスは首を横にふった。自分が逃げたとき、アベリアがどうなるかは容易に想像がつく。国王への反逆罪は死に値する。アベリアもシーリスがそう言う事など承知していたのだろう。アベリアはかすかに微笑むと、うまくシーリスが死んだことにするか、大丈夫だと語った。ここへは一度賊に入られた前例がある。それをうまく利用すれば、誤魔化せないこともない、と。

それに、死んだことにすれば追われる心配もなくなる。事態が落ち着いたら、必ずシーリスを追いかけるから、また一緒に暮らそう、とアベリアは言った。

幼かったシーリスは、絶望の只中で、彼女が提示した夢のような策を信じた。信じたかったのだ。二人で生きる道がないとは思いたくなかった。

そして、シーリスは逃げた。花咲き乱れる庭園から、外へ。世界へと足を踏み出したのだ。

そして、アベリアの助言のまま城下に隠れたシーリスは一週間後、

潜伏場所の前を通りかかった男たちから、彼女の訃報を聞いた。シーリスの存在は決して世に出ていない。だからこそ公にはされなかったが、王城に使えていた侍女が一人、謀反の罪で殺されたのだと、密かな噂がたっていたのだ。――その女は、前教皇の娘だった、と。シーリスは信じなかった。そんなはずはない。アベリアは来ると約束したのだから、来ないわけない。

そう信じ、待ち続けた。けれども、半月待って、備蓄の食糧が尽きてアベリアは来なかった。それからさらに半月の間、シーリスは待ち続けたが、アベリアが姿をみせることはついぞなかった。アベリアが死を覚悟して自身を逃がしたことを知るのは、シーリスが彼女の策がいかに無謀なものだったかを理解できる年齢にまで成長したときだった。

「あとは、話すまでもない。アベリアが殺された場所から逃げるようにデバイラを離れた。それから生きるためになんでもやった。どんな馬鹿にも飼われた。――生きる為に。生きて、生き抜いて……いつか国王と妃に復讐するために」

長い話を終えて、イザヤは深く息を吐いた。過去を語るのは、これが初めてだった。これまで接触したどんな人間にも、決して出自のことは話さなかったのに、彼らにならいいと思ってしまっている自分がおかしかった。

それとも、アベリアが生きていたという事実が緩んでいるのかもしれない。

どうして彼女が生きていたかなど、問いただす気もない。ただ生きていてくれただけで充分なのだ。九年も経ってしまったけれど、アベリアは変わっていなかった。

九年前に果たせなかった約束を、共に暮らすというささやかな願

い。それをいまなら、成就できるかもしれない。——そう思うだけで、イザヤの胸は踊った。

凄惨な過去を語りながら、それでも口元を綻ばせるイザヤを、ソレイユは言葉もなく見つめていた。

聖クレストラウム王国の王女。本来ならば輝かしい人生を歩んでいたはずが、蒼眼という異能のせいで隠匿された王女と、彼女に仕えた侍女を襲った悲劇は、ソレイユが想像していたイザヤの過去よりもはるかに陰惨な話だった。

シーリス・エンデ・クレストラウム。——それが彼女の本当の名前。

(シーリス……)

口の中で呟いて、ソレイユは似合わない、と思った。儚く美しく、滑らかなその響きは、この少女には似合わない。彼女にはもっと、凜とした響きを持つ名前こそが相応しい、と。

イザヤでいい、とソレイユは勝手に納得していた。彼女にはイザヤのほうがよく似合う。毅然で豪胆、それでいて呼べば口の中に余韻が残る——そのような名前こそ、彼女をよく表している。

ソレイユは視線を手元に落とした。いまなら、イザヤのことを少しは理解できるような気がした。

イザヤをこのような性格にしたのは、確かに信頼していた者の裏切りだった。国王と妃、両親の裏切り。彼らを親として信じていただけに、二人がとった行動はイザヤにとって耐え難く辛いものとなった。

イザヤの時折見せた憎悪の目。あれは両親に向けられたものだったのだ。

幸せだった時間を引き裂き、アベリアを奪った彼らを、イザヤは許すことができなかったのだろう。――だからいつか復讐するために、生きなければならなかった。

どんなに苦しくとも、どんなに汚れても、彼らに復讐を果たすまで、イザヤは死ねなかった。

それは、なんという悲しい人生だろう、とソレイユは思った。

大切な人は信じた親に殺され、そこに希望はなく、背中を狙うのは死の凶器、目の前にそそり立つのは復讐という名の高い壁。越えた先にはなにもないと知りながら、それでも越えるしかなかった彼女の人生。

そんな時間を、九年間も生きてきたのだ。助けを求めることもせず、たった一人で。孤独な復讐者として、イザヤは生きてきた。

（なんだよ、それ）

ソレイユは知らずのうちに強く膝を握っていたことに気付いた。

皺だらけになった布を見下ろし、目を閉じる。

居た堪れなかった。これまでのイザヤの人生を思うだけで、激しい怒りが込み上げてくる。それは、彼女をここまで貶めた人間に対してもだが、ソレイユはイザヤにも怒りを覚えていた。理由はソレイユ自身にも判然としない。けれど確かに、彼女に対する憤りがあった。

「でも……もう、いいのかな」

ふいに耳に届いたイザヤの力の抜け切った声に、ソレイユは顔をあげた。

イザヤは、ソレイユの顔を見ることなく、屋根に空いた小さな穴から降り注ぐ光を浴びて目を細めていた。

「アベリアは生きていた。——だからもう、私は復讐をやめても、いいかな……」

「当たり前だろ」

口は勝手に動いていた。驚いて振り返ったイザヤの目を見つめ、ソレイユは繰り返した。

「当たり前だ。やめていい。あんたはもう、楽になっていいんだよ。イザヤのやりたいことをやっていいんだ」

「おまえ」イザヤは笑った。柔らかな笑顔。それは、初めてイザヤがソレイユに向けた心からの笑顔だった。

「本当に、お節介焼きの馬鹿だな」言って、イザヤは肩の力を抜いた。「でも、ありがとう。少し楽になった」

言葉が出なかった。あのイザヤが、「ありがとう」と言った。目を瞬かせるソレイユを見て、イザヤははっとして、罰が悪そうに視線を逸らした。

「あ——いや、誰かに昔のことを話したことなんてなかったから……違う。そうじゃなくて……れ、礼を言うくらい普通だろう！」

怒られた。それもいたく理不尽な理由だが、ソレイユはむしろ心地良く彼女の言葉を受け止めた。

「なにを笑っている？ ——梟、おまえもだ！」

「いえ——ちよつとあまりにも酷い言い訳で……あ、お腹振れそう」「そのまま死んでしまえ」

全身を震わせて笑いを堪えるリオにイザヤが手近にあった鎌を投げる。当然当たるはずもなく、リオはついに堪えきれなくなったの

か声をたてて笑った。

顔を赤く染めたイザヤがリオに怒鳴る。

その様子を見つめていたソレイユは、口元が綻ぶのを抑えられなかった。

イザヤはこれ以上苦しまなくてもいい。これからは、自分のためだけに生きればいいのだ。

それを素直にイザヤが認めたら、できる限りのことをしてやろう、とソレイユは思った。

人間界に居辛いのなら、魔界へ住まわせても良い。いまなら、イザヤも魔界に行くことを拒否はしないだろう。

ソレイユの中で、彼女を自分の部族のために戦わせるという意思は既になかった。ソレイユはただ、見てみたかったのだ。彼女の理想が間違っただけでなかったということ。そして、イザヤがヒトを信じるようになることは、ソレイユの望みでもあった。

だから、イザヤを戦わせようという意思はソレイユにはない。リオは呆れるだろうが、納得もしてくれるはずだ。リオもまた、彼女の理想を夢みた一人なのだから。

イザヤはもう、戦わなくていい。傷つかなくていいのだ。イザヤのような人間こそ、幸せにならなければならない。

そう思い、ソレイユは暖かな光を感じながら目を閉じた。

これから訪れるであろう、イザヤの光に溢れた人生を夢見ながら。

1-31 崩れた、積み重ねた箱

納屋に零れ落ちる光が柔らかな黄色から橙色へと変わる頃、村の中に鐘の音が響き渡った。今頃農夫たちは作業の手を止め、帰り支度を整えている最中だろう。あと数十分としないうちに、アベリアも帰ってくるはずだ。

——だというのに、イザヤの顔は浮かなかった。昼間、あれだけ浮かれていたのが嘘のように、その顔は不安に満ち、口からはため息ばかりが落ちていた。

（馬鹿なんだろうか、私は）

一緒に暮らせる、そう思い気持ちを高鳴らせていたイザヤだが、時間をおいて冷静になってみれば、根幹となる問題が一つ消えただけで、自身を取り巻く問題はなに一つ解決していないことに気付いたのだ。

イザヤは教団に追われている。——それはつまり、もしアベリアと共に暮らすことになった場合、彼女もまた教団に追われる身になってしまうということだ。

一所には長く居つけない、平穏とはかけ離れた生活。既に慣れてしまっているイザヤはまだしも、アベリアにそのような生活を送るだけの体力があるとは到底思えない。

旅生活とは言葉で言うよりも楽なものではないのだ。食料に気を配り、時には野宿もやむなく、近場に街や農村のない場所での病気は死に直結する。加えて、野生動物や魔物の脅威。危険な場所では眠らずに山道を歩き続けることさえ珍しくはない。

（無理。たぶん……いや、絶対無理）

口を手のひらで覆い、イザヤは頭をふった。アベリアの性格を考えれば、笑顔で「大丈夫」くらいは言っただけそうだが、彼女のような町や農村に居を構え、他の町との間さえ滅多に出歩かない人間は旅の恐ろしさをわかっていないことが多い。

なによりも、イザヤ自身がアベリアにそのような、危険に晒される生活を送ってほしくはなかった。

——もし、アベリアがここでの生活を気に入り、満足しているのなら……。

無理にイザヤと共にいることはないのではないだろうか。それが、アベリアの幸福に繋がるのなら、自分は身を引くべきなのではないか。

本音を言えば、イザヤはアベリアと共にいたいと願っている。自分の力で彼女を守り、慎ましい生活でも守っていけるのなら、そうしたいと切に祈っている。

けれども、現実はその甘くはない。イザヤを狙うのはそこいらにはびこる野党やごろつきではなく、人間界を牛耳る宗教団体なのだ。それに、とイザヤは横目でいつの間にか眠りこけているソレイユを見下ろす。

（こいつとの約束は、どうなるんだろう。……それに、エルフも）

そこまで考え、イザヤは軽く息を吸った。納屋に吹き込んだ新鮮な空気が胸に広がり、曇っていた頭を透明にしてくれる。

（もし、アベリアがこのままでもいいというなら、私はエルフたちとこのまま旅を続けよう）

たち、に誰が含まれるのか、イザヤにははっきりしなかった。

ソレイユはどう思っているのかはわからないが、イザヤはアベリアが人間界にいる以上、魔界に行くつもりはなかった。もし彼女に

なにかあった場合、すぐにでも駆けつけられるようにしておきたかった。

そうなれば、ソレイユがイザヤという理由はない。彼は魔界で起きている王権争いのためにここにいるのだから、イザヤに魔界へ行く気が一切ないとわかれば、大人しく身を引いて姿を消すだろう。それに、とイザヤは己の手を見下ろして目を細めた。

（私は、アベリアというには汚れすぎている）

夕焼けの色で赤く染まった手のひらを握る。

やはり、楽園を探す旅は続けなければならない、とイザヤは思った。最も大きな理由は消えてしまったが、それでもイザヤにはその旅に殉じるだけの理由があった。

——決心は固まった。胸は痛むけれど、今日感じた喜びに比べれば些細なことだ。

（これからもう、復讐のために生きなくていい。あとは……償うためだけに生きればいいんだ）

アベリアが納屋に姿を見せたのは、それから間もない頃だった。太陽はすぐに地平線に沈み、サイガの村には真っ暗な夜が訪れる。蝋燭をもって納屋へ入ってきたアベリアは、細やかな灯りでイザヤの顔を照らして微笑んだ。

「おかえり、アベリア。お疲れさま」

言うど、アベリアは頷いた。近づいてきて頭に乗せられた手が、「ありがとう」と告げていた。

アベリアはイザヤの頭から手を離すと、指で家がある方を指差し、続けて口の前で握った手を軽く動かした。

これは、「ご飯にしよう」という彼女の仕草だ。

声を失ってから会話は手のひらや油紙に羽ペンを使う筆談だったものの、ある程度の日常会話は手の動きや視線で行っていた。もう九年も前のことだが、変わらずそれを使っているアベリアが、イザヤにはとても嬉しく思えた。

アベリアに促されるまま、慎重に納屋から出たイザヤたちは家へ入った。

すぐになにか作るから待っていて欲しい、と言ったアベリアを、イザヤはなにか手伝おうとしたが、そこはやんわりと止められた。彼女が料理を作っている間、イザヤはどこか申し訳ない気持ちでその背中を見つめていた。家の中を見渡す限り、決して裕福な生活を送っているわけではないだろう。その中から、食料を削ってイザヤたちに出そうとしている。

アベリアはまったく気にしていない様子だが、農村で暮らす人々にとって食料は貴重だ。奴隷階級がなる農村の働き手たちは食べていくのがやっとの生活を送っていることにイザヤが気付いたのは、王城を出てすぐのことだった。

城下では見えにくい貧困が、少し外に行くだけではっきりと見えってくる。王城でなに不自由なく暮らしていたイザヤは、その日生きるだけで精一杯の人間が溢れ反っている外の世界にはひどく衝撃を受けた。

平民階級であるアベリアは本来、このような場所で農耕に携わる仕事にはつかないはずだ。だが、彼女がどうやって生き延びたかは知らないが、こうして彼女が昔引き取られた家の領地に住んで農耕に従事しているところを見ると、すでに階級によって保障された枠組みの外側に弾き出されたのだということは、想像に難くない。

本来の階級である平民並みの生活すら、アベリアには与えられていないのだ。

そのことを思うと、イザヤの胸は軋んだ。なにかもが、自分のせいなのだ。

アベリアに少しでも楽をさせてやりたい。けれど教団に追われる身であるイザヤに社会的権力などなく、できることといえば魔物を狩って得た金銭を与えることだけだ。

だが、イザヤは必要以上の殺しはしたくなかった。たとえそれがアベリアのためだったとしても、命を奪って金を得るという行為は、イザヤにとっていつまでも慣れることのないものなのだ。

そしておそらく、アベリアは受け取らない。王城にいた頃も、国王がアベリアの働きを認め、さらに給与を上げようとしても彼女は頑なに首を振っていた。自分はいまのままの生活で充分だと。必要以上の恵みを受け取れば、それはいつか私の身を滅ぼしかねない。それが彼女の言い分だった。なによりも、アベリアは植物や動物を愛する女性だ。いくら魔物とはいえ、それらを殺して得た金銭をアベリアが受け取るとは、到底思えない。

(でも……)

椅子に座って俯いていたイザヤの前に、湯気のたったスープが置かれる。野菜とわずかばかりの肉が入ったスープに黒パン。時には一日一食で過ごさねばならない農民にとって、これだけの料理でも充分な食事なのだ。

アベリアは申し訳なさそうな顔をしていたが、普段生野菜を齧っているだけで事足りるイザヤはなんの不満もなかったし、もとよりソレイユは食べられればなんでも食べる。リオもスープの味付けに賛辞さえ送るほどには、不満を抱いてはいないようだった。

(懐かしい)

大抵、王城にいるときに食べていた料理は城の料理人が作ったも

のだが、時折アベリアが腕を振るってくれるときがあった。豪華さには天と地ほどの違いがあるとはいえ、紛れもなくあの頃に食べたアベリアの料理の味に、イザヤは昔を思い出しながらスープをすった。

※

翌日の朝、イザヤが目を開けると、アベリアの笑顔があった。一瞬、イザヤは状況が掴めず呆けていたが、アベリアの手がイザヤの前髪を梳いたとき、ようやく昨日の記憶が蘇った。

おはよう、も言わず、イザヤはアベリアにしがみ付いた。彼女の体温は暖かくて、本当に生きているのだと実感できた。

——夢じゃない。何度も夢見たことが、いま目の前にあるのだ。まるで昔に戻ったようだった。いつもアベリアが傍にいて、笑顔しかなかったあの頃。剣を振るうことでできた血豆の痛みも、生臭い血の匂いや味も、生き物の断末魔も知らなかった過去。無知だった。世界のことをなにより一つ理解できていしなかったのだ。

けれども、そんな幸せな日々は決して悪いものではないのだと、イザヤはいま強く思っていた。真実を知らぬまま息をした愚かな生だったけれど、幸福と呼べる時間は確かにそこにあったのだから。

昼、サイガの南に広がる森で薪や家屋の修復などに使う木材を得るため、イザヤたちは容赦なく木を伐採していた。

当初はアベリアが農地に出ている間、食料になりそうな動物や植物を探そうとしていたが、冬に入れば森の実りは極端に少なくなる。結局成果は上がらず、ならば冬を前にして必要なもの——つまり木材へと繋がったのだ。

イザヤとリオが切り倒した木の枝を斧で切り落しながら、ソレイユはサイガの方に顔を向けて言った。

「それにしても人間は色んなことを思いつくもんだ。痩せた土地を割って作物を輪作する、なんて発想魔族じゃまず出ない。それで随分と収穫率が違うんだってな。――アベリアも言ってたけど、最初に思いついたやつはもっと褒められるべきだ。誰かは知らんけど」

「私です」

大木を沈めたリオが、振り返りながら無造作に言っただけだ。

「寝言は寝てから言え。この農耕技術が作られたのは千年近く前だぞ」

「あら、意外と博識ですね。ええ、確かそうです。千年ほど前、ここ、クレストラウムで生まれた技術ですよ」

イザヤの容赦ない言葉に、リオはかすかに笑って頷いた。

「さて」と、リオは新調したばかりの刀を鞘にしまう。「そろそろ運びますか。夕暮れ前には完了させないといけませんからね」

言って、ソレイユが持ち運べる大きさに切った木材を持ち上げ、リオは颯爽とサイガへと歩き出した。

その後ろ姿を見送っていたイザヤは、はたと動きを止め、左目に触れた。

「……いま、たしか」

その日の夜、床につこうとしたアベリアの背中に、イザヤはやや声を落として言った。

「アベリア、私……明日には、行くから」

アベリアが振り返る。その顔は落ち着いていた。

「……アベリアは、ここの暮らしは好き？」

少しの間を空けて、アベリアは頷いた。イザヤは笑う。

「そう。なら、アベリアはここにいたほうがいい。昨日も言ったけど、私はあいつに追われているから。危険なんだ、一緒にいるのは」

昨夜、アベリアから九年前の出来事を聞いた。

シーリスが逃げた後、アベリアは寢所に火をかけ、そこでシーリスが死んだことにしようとした。火をかけることには成功した。大量の油を使ったため、寢所は跡形もなく焼け、そこにシーリスの遺体があったかを確認することさえ困難なほどの有様になった。

国王はこれを喜んだ。アベリアの嘘とも気付かずに。

だが、形式上の罰は必要だった。シーリスのことは国王と妃、長女であるメトセラと長男エレミヤを除いても、何人かには知られていた。

彼らに国王の謀略を悟られないためにも、この事件はアベリアが行ったものとし、彼女には相応の刑を与えねばならなかったのだ。

そこで国王は表向きアベリアを死刑とし、彼女の身柄をデバイラから追放した。行き場を失くしたアベリアは各地を点々と彷徨い歩き、そして一年ほど前にサイガへと住み着いたのだ。

「本当は、アベリアと一緒にいたいと思う。でも、それはできない

から」

顔を上げて、イザヤはアベリアの赤い髪を見つめた。

「だから、私は行くよ。――でも、たまに……会いにきても、いいかな」

そう尋ねたイザヤは、暗闇の中でも見えたアベリアの沈んだ表情に柳眉をひそめた。

首をかしげるイザヤに、アベリアは顔を俯かせると、小さく――首を横に振った。

「え」と、イザヤは目を見開き、それからすぐに苦笑した。「そ……そうだね。やっぱり、迷惑になってしまうか。ごめ――」

いいさしたイザヤの腕をアベリアが強く引く。

抵抗することもできずに彼女の腕に収まったイザヤは、驚いて顔をあげた。

「あ、アベリア？」

アベリアは何度も何度も首を振っている。けれど、イザヤには彼女の言いたいことがわからず困惑するばかりだ。

「わからないよ、アベリア。なにが言いたいのか？」

困ったふうにはイザヤが言うと、アベリアはイザヤからそっと身体を離し、手のひらを取った。

ゆっくりと震える指で綴られる声に、イザヤの表情が強張っている。

「死ぬ？　――なに、それ。死ぬって、死ぬからもう会えないって
どうということ!？」

病氣か、とイザヤは拳を強く握り締めた。

「どこが悪いの？　だったら、医者に行こう。お金なら私が用意するから」

アベリアの目が伏せられる。長い睫が彼女の綺麗な瞳に影を落とした。

ふたたび動き出したアベリアの指を、イザヤは食い入るように見つめた。

――そして、絶句する。

「な、んで――どうしていまさら!」

彼女は信じられないことをイザヤに伝えた。イザヤの疑問に答えるように、アベリアの指は手のひらの上で踊る。

アベリアの声が伝わるたびに、イザヤの顔は憎しみに彩られていく。顔だけではない。胸の内から、這い出るように湧きあがる憎悪。そして、アベリアがすべてを語り終えたあと、イザヤの瞳はこれまでになく濁り、深い闇をたたえていた。

「そう。あいつはまた、保身のために……」

嘲るような笑みを浮かべ、イザヤは低く押し出すような声で言った。そのまま足を動かし、壁にたてかけてあった剣をとって振り返る。

「大丈夫、アベリア。そんなことはさせない。——絶対だ」

言って、イザヤは引きとめようとするアベリアの手を擦り抜けて家を出た。

「リオ、俺たちこれからどうすっかな。イザヤにはフラれたし」
「とうに彼女を引き込む気などなかったくせによく言いますよ」

ため息を吐くリオに、ソレイユは笑みを返した。

アベリアと一緒に魔界に來ないか、というソレイユの誘いをイザヤははっきりと断った。それも、これまでの彼女のような拒絶ではない。しっかりとソレイユの目を見て、自身の考えを話して、イザヤは首を振ったのだ。

アベリアを守りたいから。——そう言ったイザヤの穏やかな目。

ソレイユは諦めた。わかったのだ。イザヤが残りの人生を幸せに歩むことができる道は、ここにしかないのだと。

イザヤはきつと変われるだろう。そして、いつか来るはずだ。彼女が自身の意思でヒトを信じ、笑える日が。

できることなら、その瞬間をこの目で見たいとも思う。

「ま、さすがにな」

人間界に戦力確保の目的で訪れてから早くも数ヶ月。まだ猶予はあるとはいえ、そう長居もしていられないだろう。そろそろ、目的を遂行するために動かなければならない。

ソレイユがそう考えていると、リオの深々としたため息が零れた。

「かまいませんよ」と、リオは黒い前髪の間から覗かせた目を細

めた。「あなたが納得するまでいればいい。正直に申し上げますと、あなたを人間界に行かせた理由は戦力確保を第一の目的にはしていないのですから」

「どういうことだ？」

「別の目的があつて、ということです。——その為に彼女は適任でしたけど、まあ、無理ですね」

やれやれと首を振るリオ。ソレイユは初めて耳にする事実首を傾げる。

「別の目的って、なんだ？」

「それはまだお教えできません。けれど、その目的を達成するためには、イザヤといやほうがなにかと都合がいいのです。彼女といれば、否応にも厄介ごとが舞い込んできます」

「いや、だからそれはどういう——」

言いかけたソレイユは、納屋の扉が開く音に気づいて振り返った。そして、息を飲む。濃紺から覗く蒼が、おぞましい光を携えてソレイユを見下ろしていた。

「……イザヤ？」

月明かりを背中から受けてそこに立っていたイザヤは、冷淡な視線でソレイユを睥睨する。

昼間とはあまりにも違う雰囲気、ソレイユが言葉を失っている、イザヤはまるで温度を感じさせない、抑揚のない声で言った。

「情報屋からデバイラに入るルートを受け取っただろう。貸せ」

「お、おい。どうしたんだ、いざ——」

「聞こえなかったか？」

イザヤは手に持った剣をソレイユに突きつける。鞘にこそ収まっているが、彼女はいま、本気の殺気をぶつけてきている。狭く、静かな納屋に緊張が迸った。

「いい加減似なさい、イザヤ」

割り込んできたのはリオだ。イザヤの剣を片手で掴む。イザヤが強くリオを睨んだ。

「どけ、梟」

「ええ、どきますとも。きちんと理由を説明していただければ」

「情報屋に聞きたいことがある。……これでいいだろう。さっさと渡せ」

リオは剣を離れたが、イザヤの前からどうとはしなかった。目に見えて苛立っているイザヤを澄ました顔で見下ろし、リオは腕を組む。

「聞く？ なにをです？」

「きさまに話す理由などない」

「そんなもの聞かずとも」と、リオは喉を鳴らして笑う。「ねえイザヤ。あなたのその顔、誰かが憎くて仕方ないという顔ですね。――ラケルに聞くのは、相手の居場所ですか？」

イザヤが瞠目し、ソレイユが腰を浮かせる。

「イザヤ、それは本当か？」

リオの横に並んだソレイユがイザヤを見つめる。イザヤはしばし

口を閉ざすと、剣を握る手に力を籠めて言い放った。

「私はクレストラム王を――教皇を殺す。邪魔をするなよ、魔族」

1-32 侵食、見えない亀裂

早朝、イザヤはアベリアを連れてサイガを出た。

森を歩いている途中、イザヤはよくアベリアを気遣って笑顔を向けていたが、目を離れた瞬間、彼女の目には暗い影が落ちていた。

リオと後ろを歩いていたソレイユは、そんなイザヤを見ては、意味もなく拳を握った。

（イザヤ……）

昨晚、事情を問いただしたソレイユにイザヤが語ったこと。

それは、国王がアベリアの殺害を目論んでいるということだった。今更、とりオは否定したが、なんでも少し前から首都デバイラで〈蒼眼のイザヤ〉が王家に隠匿された王女ではないか、との噂が広まりつつあるとのことだった。そのことを知る人物は限られる。国王がアベリアを疑ったのも、自然の流れなのだろう。

現に、最近教団の騎士が近隣の村や町で見受けられ、赤毛の女はいないか、と聞き回っていることが、アベリアの耳に届いていた。そして、騎士たちはサイガの隣村まで迫ってきており、見つかるのも時間の問題だった。

すぐに殺されるとは限らない、と反論するソレイユに、イザヤは首を振った。

自分の娘でさえ噂の種になるなら殺すことを選ぶ男だ、と。

——だから、殺さなければならない。アベリアが平穏に暮らしていくために、あの男は生かしてはおけない、とイザヤは冷えた声で言ったのだ。

イザヤの言い分も彼女がどれほどアベリアを大切に思っているかということも、ソレイユには理解できる。

（けど、これでいいのか）

もし、そうすることでイザヤの心が晴れるのなら、止めるつもりはなかった。それで彼女が満足し、今度こそ自分のために生きるようになるのなら、それでもいいと。

ソレイユにとって、顔も知らない国王などはどうでもいい存在だった。生きようが死のうが、それはさほど気にすることではない。大事なものはイザヤであり、彼女の敵となるのなら戦うことも厭わない。

（アベリアを狙う以上、国王は——教皇は敵だ。だから、俺は……）

纏まらない考えに苛立ちながら、ソレイユは顔をあげた。イザヤの後ろを歩くアベリアが目に入る。

アベリアはイザヤを見て、どこか沈んだ表情を浮かべていた。喉に手を当て、かすかに口を開く仕草は、声が出たらと切に望んでいるように見えた。

もし、彼女の声が出たら——幼いイザヤの心を開いたアベリアの言葉が滞りなくイザヤに届けることができたのなら、イザヤを止めてくれるだろうか。

（無駄……だろうな）

昨晚、ソレイユはイザヤを止めた。

そんなことをすれば、ただではすまないのではないかと。

クレストラウム国王はアルヴィア教団の教皇だ。彼を殺すということは、すなわち教団を、世界を敵に回すということ。そうなれば、まず間違いなく教団はイザヤを死に物狂いで見つけ出し、殺すだろう。

だが、イザヤは澀みない声で言った。

かまわない、と。国王と妃さえ殺せば、他にはなににも望まない、と。

今朝方、アベリアがイザヤを止めている姿も見た。けれど結果は同じ。イザヤはもう復讐しか目に入っていないのだ。

果然とイザヤの背中を見つめるアベリアの目には涙が浮かんでいて、ソレイユが声をかけると、彼女の口は小さく動いた。

どうして、と。

おそらくアベリア自身、こうなることを望んでいたわけではないのだろう。

（そんなことはわかってる。でも、だったらどうして……）

前髪を無造作に掴み、ソレイユは奥歯を噛み締めた。

夜は野宿となった。デバイラへ着くのは明日の昼前。イザヤたちだけなら強行できないこともないが、予想以上にアベリアの疲労が激しかったのだ。

寝る場所が確保できるほどに木々が生えていない空間を見つけたイザヤは、火を起こし、布を重ねて寝床を作った。アベリアをそこへ寝かせ、ソレイユたちは交代で番をすることになった。

そして数時間後、イザヤはソレイユと交代で眠りについた。

静かだった。火が薪を燃やす音だけが夜の森に響いている。ソレイユは燃え盛る火を眺めながら、ときおり杖を投げて弱まった火を起こした。

「……起きたのか？」

毛布が動く気配がして、アベリアが起き上がった。アベリアは寝起きとは思えないほど落ち込んだ顔でソレイユを見つめた。ソレイユは手に持っていた枝を火に放ると、腰をあげてアベリアの傍まで移動した。

「ん」と、手を差し出す。「なにか言いたいこと、あるんだろ？」

しかし、アベリアは首を振った。ソレイユは「そうか」と返して手を下げると、束の間沈黙し、口を開いた。

「俺はあんたに言いたいこと、ある」

アベリアが首を傾げる。ソレイユは炎で揺らめくアベリアの双眸を見据えて言った。

「あんたさ、本当にイザヤのこと大事に思っているのか？」

え、とアベリアの口が動いた。——もちろん、音は出ていないが、おそらくそう言ったのだろう。

ソレイユは続けた。

「本当に大切に思っているなら、どうしてイザヤにこんなことをさせるようなことを言ったんだ？」

困ったように、アベリアの整った眉が下がる。

「イザヤ、やっと笑ったんだよ。あんたに会って、これまでずっと抱えていた重りが取れたみたいだった。……復讐もやめて、ふつうに生きていこうと思っていたんだ。そういう生き方だってあいつはできたんだ。それを——なんでっ……」

言い差して、ソレイユは口を噤んだ。

思わず声を荒げてしまっていたことに気付いたのだ。

アベリアを見ると、彼女は顔を伏せていた。前髪に隠れて表情は見えないが、口元が小刻みに震えていた。

「あ——悪い。あんたを責めるつもりじゃ……いや、違わないな。あんたにあたってた。悪いのは、あんたじゃないのにな」

アベリアが首を横に振る。そして、ソレイユの手を取ると、手のひらに文字を書いた。慣れないことで戸惑ったが、アベリアがゆっくりと書いてくれたので、どうにか読み取ることができた。

——シーリスに嘘をつきたくなかった。どんなことでも、私だけはおの子に嘘をついてはいけないうちだと思っていた。ごめんなさい。

これに返す言葉を、ソレイユは持ち合わせてはいなかった。

※

「姫さん、そいつは……自殺行為だ」

無事にデバイラへと入ったイザヤたちは、所定の建物でラケルとルカと合流した。

そして、事情を話し終えたあと、ラケルは渋い顔を浮かべて言った。

「君はどれだけ無謀なことを言っているのかわかっているのか？」

「……おまえたちに迷惑はかけない。私一人でやる」

短く言い放ったイザヤに、しかしラケルは首を縦には振らない。

「そういうことを言っているんじゃない。姫さん、俺にこんな当たり前のことを言わせんでくれ。……絶対にうまくいくはずがない。無駄死にするぞ」

「イザヤ様、わたしも……ラケル様の仰るとおりだと。もし、もしですよ。うまく事が運んだとしても、その後はどうなるのですか？」

ルカが両手を握り締めてイザヤを見上げた。イザヤはそんなルカを光無い目で見下ろす。

「後なんてどうでもいい。——情報屋、ならばおまえはアベリアにみすみす殺されろというのか？」

「そうは言っていない。とにかく落ち着け。冷静になれば、なにも教皇を殺さなくても済む方法があるかもしれندろ」

「かも？ そんな不確定なものを探している時間はない。私が国王と妃を殺せば済む話だ。答えろ、情報屋。国王と妃はどこにいる？」

頭を抱えるラケルに、イザヤは苛立ちを露に詰め寄った。

「なぜだ？ おまえは教団が嫌いだと言っていただろう？ その教皇を殺すんだ。止める理由がどこにある？」

「俺は、教団の体制が気に入らないだけだ。トップを殺しても組織が変わるとは限らない」

「死んだところで不利益にはならないだろう。それに、もし失敗しても私が死ぬだけだ。おまえたちにはなんの迷惑もかからない！」

「イザヤ！」

突然の大声に、イザヤは身体を竦ませて声の主がいるほうへ振り返った。そこにいたソレイユは、かすかに表情を歪ませてイザヤを見ていた。

「あんた、それ……本気で言っているのか？」

イザヤには、ソレイユの言葉の意味が理解できなかった。どうしても彼が、こんなにも辛そうな顔をするのかさえ、わかってはいなかった。

「本気に決まっている。アベリアを殺そうとしている連中を生かしておく理由はない」

「殺せば、あんたは満足するのか？」

「満足？ いや、そうしなければ気が済まないだけだ」

「そうか」と、ソレイユはイザヤから視線を外した。「ラケル、居場所を教えてください。俺もイザヤと一緒に行く。一人よりは二人のほうが、生き残る確率もあがるだろう」

「ソレイユくんまで……」頭を振るラケルに、ソレイユは苦笑した。

「悪いな。このままじゃイザヤは一人で王城に突っ込みかねないんだ」

「……ついてくるな。邪魔だ」

イザヤが吐き捨てるように言った。ソレイユは肩を竦めて見せた。

「邪魔ってことはないだろ？ 四は一人でも多い方がいい。――イザヤ、あんたが本気でアベリアのために国王と妃を殺したいのなら、俺の命なんか気にするなよ。見殺しにしても、目的を果たせばいい」

静かに告げるソレイユに、イザヤは言葉を詰まらせる。

ソレイユの言うことはもっともだった。アベリアの命を優先するのなら、目的達成率を少しでもあげるのなら、ソレイユがいることは決してマイナスにはならない。

彼が敵を少しでも引きつければ引きつけるだけ、イザヤの負担も減るのだから。

（だが、こいつは無関係だ……）

イザヤとて、国王と妃を殺して無事に生き延びようなどとは最初から思っていない。ただ、殺せばいい。そうすればアベリアを狙うものはいなくなるのだから。

死地に赴く覚悟はとうにできている。目的を果たせて死ねるのなら本望だ。

だが、それはあくまでもイザヤは、だ。イザヤにはアベリアを、大切な人を守るという目的がある。けれどもソレイユは違う。彼が死ななければならない理由はどこにもない。

イザヤが押し黙っていると、リオがため息を吐いて椅子から立ち上がった。

「私も同行しましょう。主様も、もう意見を曲げそうにありませんから」

「……わたしもイザヤ様が行くというのなら、黙って待っているわけにはいきません」

ルカも続く。イザヤは呆然と彼らの顔を見渡した。

——どうして彼らは、理由もなく死ぬかもしれない場所へ行こうというのだろうか？

戸惑うイザヤをよそに、リオはラケルに言った。

「さて、そういうわけですから教えてくれますよね。あなたが言わなければ私が調べます。結果は同じなのですから、手間を省いてくれると助かるのですが」

微笑むリオに、ラケルは口を開けて固まっていたが、やがて喉の奥から押し出すような笑いを零した。

「ハハッ……参ったね。姫さん、あんたはもう少し自覚したほうがいい。……まあ、それはいいさ。穢ちゃんたちにまでそう言われたんじゃないあ、俺も腹を括るしかないな」

「おまえまで、ついてくるのか？」

「ああ。確信がもてたところをぶち壊されて躍起になってるもんでね。ちよつと憂さ晴らしをしないと気が済まないんだ。——かまわないだろ、シーリス王女？」

「かまいません」と返事をしたのはリオだ。「的が増えてくれるなら、ありがたい」

ラケルは肩を竦めると、どさりと椅子に腰を下ろした。

「国王と妃はいま、オルヤ離宮にいる。詳しい警備の数や離宮の見取り図はすぐにイスカに調べさせる。姫さん、決行はいつだ？」

「あ……ああ、遅くとも明日の夜には」

とんとん拍子で進んでいく話に当惑するイザヤが答えると、ラケルは片手をあげて扉へと向かった。

「了解だ。明日の昼までには用意を整えよう」

1-33 引き抜く、復讐の刃

ラケルが去り、リオもいつの間にか姿を消して、部屋に残ったのはイザヤとアベリア、そしてソレイユとルカだけとなった。

重苦しい沈黙が流れる。イザヤは軽く息を吸い込んで口を開いた。

「おまえたちがついてくる理由はない」

「ある」と、ソレイユは窓の外を眺めながら言った。「イザヤは死なせない。理由なんてそれだけあればいい」

「わたしも……イザヤ様に助けられた命です。あなたが望むことをいたします。けれど、イザヤ様……わたしは」

最後まで言う事なく、ルカは軽く首を振って部屋を出て行った。

ソレイユも最後にイザヤにかすかな笑顔を見せてからいなくなる。

彼らが去った扉を、イザヤは胸を押さえて見つめていた。

「わからない……私が死んでも、もうおまえには関係のないことじゃないのか」

魔界には行かないと言った。ソレイユも納得していた。だということに、なぜ彼はいまもこうして一緒にいるのだろうか？

ルカに関しては、イザヤも悪いと思っていた。彼女との約束はまらず守れない。目的を果たそうが果たせまいが、おそらく自分は死ぬ。できるならば、ルカには生きてほしかった。

シーリスと同じように、生まれもった力のせいで死を望まれ、ささやかな幸福から突き落とされ、そして一人になった彼女には、自分とは違った道を歩いて欲しいと願った。

（いまならまだ……考え直すかもしれない）

そう思い、イザヤがルカを追おうとしたとき、アベリアに手を引かれた。

「ああ、ごめん、アベリア。もう少し待っていて。すぐに、またふつうの暮らしができるようにするから」

上手く笑えているかさえ、イザヤにはわからなかった。
アベリアは眉を曇らせてイザヤを見つめると、イザヤに語りかけた。

——シーリス、あなたが彼らを憂うのなら、あなたは彼らを守って生き延びて。——それは私の願いでもあるから。あなたに生きていてほしいと、みんなが思っているの。

流れるように綴られた声に、イザヤは目を瞬かせた。

「私に、生きてほしい……?」

なぜ、と聞き返したイザヤに、アベリアは困ったように笑った。

「ソレイユ様……本当にこれでよかったのでしょうか?」

イザヤとアベリアがいる部屋より二つほど離れた部屋で、ソレイユとルカは沈鬱な表情で言葉を交わしていた。

ルカは寝台に腰を下ろし、震える手を必死に押さえている。

「わたしは、いいとは思えません。確かにアベリア様を助ける方法は少ないと思います。けれど、他にもあるでしょう」

具体的にいうのなら、最も簡単な道は魔界へと逃がすことだ。そうすればさしもの教皇として手は出せない。アベリアの身の安全は確保される。

魔界も戦争の最中である以上絶対安全とはい切れない。しかし、現状すぐにどうこうなるというわけではないのだ。

「そういうことじゃない。アベリアの安全もあるが……なによりもイザヤはアベリアを殺そうとしている両親が許せないんだ。自分を裏切って、さらに大切な人間まで奪おうとするやつらが、憎くてしかたないんだよ」

だからこそ、イザヤを止めるのは難しいとソレイユは思ってしまった。

「イザヤも歯止めが利かなくなっているんだ。アベリアの説得にさえ耳を貸せないほど、あいつは冷静に考えられなくなってる。俺にはよくわからないが、憎しみっていうのは、そういうもの……なんじゃないのか、きっと」

ルカは顔を両手で覆った。

「でも……そんなのはあんまりです」

「ああ、そうだな。けどどやるしかない。ルカ、あんたは外れてもいい。イザヤもきつと、あんたが加わることが一番気にかかっているはずだ」

「いいえ」と、ルカは指で目尻に溜まった涙を掬いながら言った。

「行きます。止めることが叶わないのならば、罪を共に背負うまでです」

明瞭な声でルカは言いきり、毅然とした立ち振る舞いで腰をあげた。すべてを受け入れたかのように微笑むルカに、ソレイユは口角を上げた。

「そうだな、ルカ。一緒にあいつの出す結果を見届けようぜ」

同時刻、城下町に潜り込んでいたりオは、通りを歩く人々の声に耳を傾けながら歩いていた。さすがにコランと違って活気のあるこの街には人の声が溢れている。

なにげない会話。興味深い噂話。穏やかではない陰謀策。――それこそ、二つの耳では拾いきれないほどの言の葉が嵐のように飛び交っている。

（……なにかがおかしい。けれど動機も目的もはっきりはしていないのでは、動きようもない）

警告信号は見えているのに、危険そのものが姿を見せない。

（あと少し……情報が足りない）

休むことなく思考を働かせながら、リオはまた雑踏の波に飲まれていった。

「あなたが言っていた切り札とはこのことだったのですね。でしたら、ラケル。いまあなたがしようとしている行為は無意味だ。イザヤがシーリスだと確信したなら、早く彼女を捕まえ——」

手を伸ばし、ラケルはイスカの口を塞いだ。

路地裏の奥で男と少女が二人。どうにも誤解されかねない状況で、しかし二人の表情は険しかった。

「そうだな、イスカ。だけど俺には止められんよ。姫さんは本気だ。本気で命をかけてあの娘さんを守ろうとしている。やろうとしていることは褒められたもんじゃないかもしれないが……俺も、わからなくはない」

「ですが」

「わかつている。いざとなったら姫さんだけ連れてとつとずらかるさ。その時になって教皇がまだ生きていたら利用価値は大いにあるし、もし死んでいたとしても姫さんの力は使える。——全部を無駄にはさせん」

「……わかりました。これ以上なにを言っても無駄なようです。ただ、ラケル。もし危険だと判断したのなら、最悪あなた一人でも逃げ帰ってください。これは最大の譲歩です。これ以上は譲りません。絶対です」

淡々とそう告げるイスカの声はいつものように凍ってはいなかった。ラケルはふっと笑うと、小さな頭に手を乗せて頷いた。

「心得た。あいつにもそう伝えてくれ」

「ええ。――それで、離宮の戦力状況と見取り図でしたね。どちらも現地に潜伏している人と連絡を取ればすぐに用意可能です。ただし、ラケル。彼らはあくまでも諜報員です。露見しては二度目の潜入は望めない。離宮で彼らの応援は期待できませんよ」
「そいつもわかってるさ」

言って、それからなにかを考え込むように視線を足元へ落としたラケルに、イスカが首を傾げる。

「どうかしましたか？」

「いや」と、ラケルは笑う。「ちょっと、昔を思い出していただけだ。そんな人には……見えなかったんだがな」

※

双子月が薄い雲にかかって霞んでいる。高い建物が立ち並ぶ通りに人の影はなく、ときおり、脇道に入った暗がり蹲っている男が生気のない目で見上げてきた。

イザヤは、しかしそんな彼らのことなどまるで気にせず、ただ物思いに耽っていた。

冷たい風が肌をさす。無意識のうちにイザヤは大通りから脇道へと足を進め、暗い路地へと入り込んでいた。

闇へ、もっと暗く、深い闇へ。

暗い、一寸先さえろくに見えない路地裏を歩きながら、イザヤは唇を噛んだ。

本当にこれでよかったのだろうか、と。

――アベリアの反対を押し切ってまで、教皇を殺すことに意味はあるのだろうか。

いや、とイザヤは頭を振る。本当に教皇を憎んでいるのは、殺したいと願っているのは、他ならない自分自身ではないのだろうか。だから、戻れない。教皇を殺そうと望んでいるのは、アベリアのためなどではない。ただ、自分が彼らに裏切られた痛みを忘れることが、許すことができないからではないか。

そうだとすれば、イザヤはただ、アベリアを言い訳に使っていることになる。

（そんなこと……許されるわけがない）

ふいに、脳裏にソレイユの顔が浮かぶ。あのソレイユが、いつもお気楽で、笑っていた彼の顔が曇っていた。

胸がかすかに痛んだ。イザヤは瞳を強く閉じる。

「もし、これが私個人の恨みなら……あいつらを巻き込んでまで、エルフたちの命を犠牲にしてまで……貫き通すほど価値のあるものなのか」

そう、思わず零したとき、背後で物音が聞こえたような気がして、イザヤは剣の柄に手を添えて振り返った。だが、先にある闇に人の姿は見えず、気配さえ感じられなかった。

気のせいかな、と手を柄から離し、イザヤは来た道に戻ろうとしたとき、くぐもった声が路地の奥からかすかに漏れていた。

音はそれだけではなく、鈍い音や、怒声のようなものも聞こえた。声に引かれるまま、イザヤは奥へと足を進めた。

そして、そこで目に入った光景に、イザヤは目を見開く。

「やっ、やめて……もう、許し——」

両手で顔を覆って蹲る少年を、男が蹴りつけている。容赦なく、

何度も。その横では女が口元に笑みを浮かべて立っていた。

少年は何度も「やめて」と懇願しているにも関わらず、男は足を休めない。そればかりか、これまで傍観していた女さえ、同じように少年をいたぶり出したのだ。

どうしたものか、と目を細めていたイザヤは、次の瞬間、少年の口から出た言葉に動きを止める。

（え——あいつ、いま）

お父さん、と少年は確かにそう言った。「やめて、お父さん」、と。

——あれは、父親か。

あれが父親ならば、隣にいるのは母親だろう。彼らは自分の子どもを虐待しているのだ。

柳眉を曇らせたイザヤの前で、男は少年に唾を吐きつけて言った。

「けっ。なんでてめえなんか生まれてきたんだろうな。この役立たずが。おまえなんか、生まれてこなければ良かったんだ!」

イザヤの目が見開かれる。唇が震え出し、少年の姿はいつしか幼い日の自分に重なっていた。

「そうよ。あなたみたいなんの役にも立たない子がいるだけで、迷惑なの。生まれてくる価値なんてなかったのよ。ねえ、そんな使い物にならない目じゃあこの先生きていけないでしょ? いっそこで死んだほうが幸せよ」

——使い物にならない。死んだ方が……幸せ?

激しい痛みと、身の毛がよだつようなざわめきを覚え、イザヤは物陰から姿を見せていた。壁を背に力なく項垂れていた少年を一瞥

し、イザヤは訝しげな目を向けてくる男女を見据える。

「死んだ方が幸せって、どういうことだ？」

「なんだ、おまえ」

男が片眉を上げる。イザヤはふらりと一步、男に近づいた。

「どうしてきさまが決める？ なんの権利があつてだ？ 子どもが死にたいと、死んだ方がいいと言ったのか？ 違うだろう？」

「ちよっと、頭おかしいんじゃないの、この子」

女の嘲りがやけに耳につく。苛立った。

「やはり、きさまたち大人はそうなのか。いつも、いつも自分たちのことばかり考えて、都合が悪いと斬り捨てる。斬り捨てられる、抵抗さえできない無力な子どもたちの気持ちなんか少しだって考えないんだ」

無意識にイザヤの手は剣を抜いていた。

男がにやりと笑って、腰からナイフを引き抜く。そのまま襲い掛かってきた男のナイフを、イザヤは軽く剣を振っただけで弾き飛ばした。

たたらを踏んで男は地面に腰をつく。

「な……こいつ、マジでやべえ。おい——こんなのはもう！」

言って逃げようとした男は、しかしその場から一步も動くことはできなかった。

身動き一つ取れず、男はまるでその場に縫い付けられたかのように微動だにしなくなる。そして、それは女も同じ。男の後ろで、引

け腰の体勢で固まっていた。

得体の知れない恐怖に血の気を失わせる男女は、イザヤの背後に、楕円形の亀裂があることに気付いた。幅一メートルほど、なにもない場所にぽっかりと空いたその亀裂の奥は、街を覆う夜よりもさらに深い闇が広がっていた。

その、楕円の闇に、ふいに蒼い円が浮かび上がる。

黒い楕円の中心で小さく動く蒼。――まるで、眼球のようだった。

「な……んだよ、これ。おまえ、なんなんだよおっ！」

「いや……こ、こんなの……私たち」

恐怖におののき、慄然する男女。見開かれた双眸からは涙が零れ落ち、鼻と口からも汚らしい体液を垂れ流していた。

「一つ、聞きたい」と、イザヤは左目を隠す包帯に手をかけた。「おまえたちは、落ち度がある子どもを――そいつを、殺したいほど嫌いなのか？」

包帯が地面に落ちる。左目を隠す前髪を片手で押し付けたまま、イザヤは剣の角度を変え、男の喉に突きつけた。

「ひっ――いや、そんなことはない！　かつ、可愛いと思ってるぜ！　なあ？」

「え、ええ、そうね。ちょっと、お仕置きが過ぎちゃっただけよ。可愛いわ。私の子ですもの」

イザヤの口元が歪んだ笑みを見せた。

男たちがそれを勘違いして顔を綻ばせた瞬間、これまで半眼だった亀裂が、大きく開眼した。限界まで見開かれ、楕円から真円になった目を男女が見た瞬間、彼らの身体の関節という関節は本来有り

得ない方向へと振れた。

首も振れ、悲鳴をあげることもさえ叶わず、二人はイザヤの蒼い目が見下す中、夥しい量の血を迸らせて絶命した。

イザヤの元から逃げ出した少年は、路地裏を全力で駆け抜けていた。壁に肩をぶつけ、足元の障害物にけ躓きながら、少年は涙で顔をぐちゃぐちゃに汚して走った。

複雑な路地を通り抜け、そのまま大通りへと飛び出そうとした少年は、通りへ出る直前、突然なにかに押し潰されるような重みを感じて地面に倒れこんだ。

少年は追いつかれたのかと両手両足を振り回して全力で暴れる。

が、背中から聞こえたのは、あの少女の声ではなかった。

「ラケル。対象確保。どうしますか？」

同じように冷たいが彼女ではない。その瞬間、少年は心の底から安堵し、意識を手放した。

急に暴れるのをやめた少年を見下ろしたイスカは、彼が意識を失っていることに気付き、彼の上から身をどけた。

そこへ、ラケルが歩み寄ってくる。

「イスカ……この坊主を最低でも明日一日はどこかに監禁しておい

てくれ。それ以降は金でも持たせて解放しろ。無駄かもしれんが、口止めもしてな」

「了解しました。あちらの始末はお任せします」

言って、イスカは少年を担ぎ上げると姿を消した。

ラケルはイスカの背中が見えなくなったのを確認すると、壁に背を預けて息を吐き出した。

ただの肉塊となった男女を見下ろしたイザヤは、蒼眼から流れ落ち、頬を滑る赤い筋に指先で触れた。

どろりと指先に付着したそれを舌で舐めとり、イザヤは身体を揺らす。

「ふふ……はは、あははっ！」

吊り上がった口元からもれる笑い。狂気に染まった蒼が赤い月を映して歪んだ。

「ハ——ハハ……アハハハハハハハッ！」

壊れた少女の哄笑は、闇を切り裂いてデバイラの夜に轟いた。

1-34 振れる、人の思惑

いまより昔、まだアルヴィア教団が世に姿を見せていない頃、聖クレストラム王国と西のカイサリア帝国は敵対関係にあった。

当時、強大な軍事力をもってハマ大陸の三分の一を支配し、数多の国々を属国としていたカイサリア帝国に対し、聖クレストラム王国はあまりにも貧弱だった。歴史が深い故に自尊心ばかりを大切にする貴族たち。選民意識が強い彼らに食いつぶされる領土や国税。戦時中ですらそれは変わらず、民は飢え、兵の士気は下がり、ついには国王が暗殺されるという事態にまで陥った。

もはやクレストラムの敗戦は確実。誇り高き王族たちもこの状況で王位に立とうとするものもおらず、嫡子は雲隠れまでする始末。神聖なる夢の名を冠する王国も地に落ちた。――そう囁かれ始め、貴族たちがカイサリア帝国での身の振り方を画策しているとき、一人の王族が立ち上がった。

齢十五歳だった少女は、足を竦ませる兄妹たちを踏み越え王位についた。

そこから、わずか数ヶ月。少女は様々な奇策を編み出し、カイサリア帝国軍をことごとく打ち破ってみせたのである。

そして、敗戦を認めたカイサリアに対し、新王は即座に和平を申し入れた。カイサリア帝王は屈強な自軍を完膚なきまでに叩きのめされたにも関わらず、立腹するどころか新王の手腕を高く評価し、彼女の提案を快く承諾した。

そして、帝王は友好の証と、新王への敬意を込め、彼女に宮殿を送ったのである。贈り物としては前代未聞のものに家臣たちは反対の意を示したが、新王はこれを快く承諾した。

そして、約二万五千人の人夫と二十五年もの歳月をかけ完成に至った建造物こそが、セイ・シオン宮殿。――現在のオルヤ離宮である。

「まあ、当の国王様は宮殿が完成する前に病でぽっくりと死んでしまったらしい。記録には二十二歳没年、と書かれていたかな。えらく優秀な王だったみたいだが、いつの時代も天才というのは短命なのは変わらん」

オルヤ離宮前の林道脇に潜んでいたイザヤたちは、日が落ちるまでの時間にラケルのオルヤ離宮の歴史について聞いていた。とはいえ、実際に耳を傾けているのはルカくらいで、イザヤは昨晩からずっと黙り込み、リオも興味がないと背中を向けてしまっている。ソレイユはイザヤの様子が気になるのか、先ほどから視線をイザヤに向けては眉を顰めていた。

「〈光王〉と謳われた彼女が生きてさえいれば、教団に代わってクレストラウムが世界を統べていたかもしれないって言われているくらいだから、まあ、かなり優秀な王だったのは確かだな。貴族制度の廃止は彼女が行った政策の中で最も周囲の度肝を抜いたものの一つだ」

「それはさぞ反感を買ったことでしょうね」

ルカが苦笑する。いまでさえ貴族とはただの身分にしか過ぎないが、当時の情勢を考えれば、その策がいかに無謀なものであったかは一目瞭然だった。

「ああ。王が生きていた頃はうまくいくように見えたんだが、完遂する前に死んだ。――結局、王の死と共に貴族制度は復活し、クレストラウムは戦前と変わらない姿に戻ってしまった」

「……無念ですね。そのような志半ばで」

「だろうな」とラケルは目を細める。「民や兵からは好かれていた

王だが、貴族から当然のごとく邪険にされた。王の死後、カイサリア帝国に示しのつく言い分を取り繕い、この宮殿の名も変えられたんだとさ」

言って、ラケルはイスカの用意した離宮の見取り図を広げた。

「この庭園の中心にある噴水には、いまはアルヴィア神の像が据え置かれている。だが、本当は王の像だった、なんて噂もある。そこらへんはわからんがな。なにせ、〈光王〉に関する情報はほとんどが謎なんだ。――彼女を疎ましく思っていた貴族が民の記憶から彼女を消すためとも言われているし、真実はなにかの陰謀によって葬り去られたとも言われている」

「無駄話はそこまでだ」

イザヤの一言で、周囲はしん、と静まり返った。

太陽の断末魔と共に、闇が落ちてくる。あたりの音がやけに大きく響き、誰かの息遣いさえ、はっきりと聞こえるほどに静かだった。闇に目が慣れてきたことを確認し、イザヤは茂みから立ち上がった。続いてソレイユたちも腰をあげる。

イザヤは一度離宮のある方を冷淡な瞳で見据えると、ソレイユたちに振り返って言った。

「手筈通り、三手に分かれて侵入する。エルフと情報屋は右、おまえと梟は左。目指す場所は離宮二階にある〈太陽ノ間〉だ。この時間、教皇と妃はそこにあるアルヴィア神像に祈りを捧げるのが日課で、護衛には衛兵が二人つくだけ。そこを狙う。――見つけても、殺すな。私が殺す。もし私より先に到達した場合は二人が逃げないようにだけしておけ」

「離宮内の兵士の数は、騎士が三十の王国衛兵が三百でしたね。接触しないよう注意しますが、もし接触した場合はどういたしますか

？」

「別に」と、イザヤはルカを一瞥した。「どうでもいい。あの男に従うようなやつら、死んだってかまわない」

冷然と言い放ち、イザヤは深くフードを被った。

彼女の隣に立ったソレイユは、イザヤを横目で見つつ、同じようにフードを被った。

——そして、五人は影になって離宮へと潜入する。

オルヤ離宮は二階建ての宮殿で、四方を高い外壁に守られていた。高さおよそ四メートルの壁をよじ登るのは至難であり、もたつていれば庭園にいくつか設置された監視用の尖塔に常駐する見張りに見つかって捕まるのが関の山だ。

——だが、それはあくまでももたついていればの話。事前情報により見張りの交代時間を熟知し、かつルカの神魂によって難なく壁を越えたイザヤたちは兵士に発見されることなく庭園への侵入を成功させた。

そもそも魔族の侵攻が途絶え、仮初の平和を謳歌しているいま、兵たちの危機感は薄らいでいる。いかに教皇がいるとはいえ、それは知られていない情報のはずであり、騎士が三十人も警備についているこの要塞に侵入する不届き者がいるなどとは微塵も考えないのだろう。

イザヤたちが侵入したのは、正門から見て左奥。離宮の背面だった。

巡回中の兵士に見つからないよう、イザヤたちはそれぞれ所定の場所から離宮内に潜り込んだ。

極力音を立てないよう窓ガラスを割って潜入したソレイユとリオ

は、一度辺りを見渡して敵の影がないかを確認した。

高い天井を広い廊下。廊下には絨毯が引かれ、脇には豪華な甲冑や彫像が立ち並んでいる。長い廊下に点々と灯る蝋燭の明かりに照らされるそれらは、しかしソレイユの目には不気味しか映らなかった。

壁に飾られている絵画さえ、まるで自分を見張っているようなおぞましさしか感じない。しかし、この暗さならばよほど近づかなければこちらの姿は見えないだろう。おそらく巡回の兵士は灯りを持っているだろうから、闇に紛れて討つことは可能はずだ。

「リオ」周囲に警戒を配りながら、ソレイユは言った。「おまえは一人でも――」

「かまいませんよ。あなたが言わなければ、私から言いだそうと思っていたところです」

あっさりとそう言って微笑むリオに、ソレイユは肩を竦めた。

「そうか」

「ええ。私としても、これからあまりあなたには見られたくはないことをするつもりですので好都合です。それに、昨晚からイザヤの様子がおかしいのはまず間違いない。――頼みましたよ、主様。嫌な予感がしてなりません」

リオにしては珍しく弱気ともとれる発言だった。リオはあまり憶測で物事を言わない。彼女がなにかしらの考えを口にするとき、それは絶対の確信か、あるいは確信に限りなく近い予測を立てているときなのだ。

だからこそ、リオの警告を無視することはできない。

神妙な面持ちで頷いて、ソレイユはリオの肩を軽く叩いて走り出した。

リオの予感をはたして的中した。いや、彼女が『これ』を指して言ったとは限らないが、ソレイユにとって、いま目の前で起きている現実には充分に嫌なものに当てはまる。

赤い液体が絨毯をゆっくりと伝って流れてくる。蠟燭の細々とした明かりに照らされた足元に転がる“なにか”に目をやらないようにして、ソレイユは屍の上に立つイザヤに声をかけた。

「イザヤ」

その瞬間、ソレイユは身を屈めていた。――そうしなければ、彼の首は今頃絨毯の上を転がっていたことだろう。

一切の躊躇なく剣を薙いだイザヤは、しかし相手がソレイユとわかっていても謝罪の言葉一つせずにただ剣を下ろした。

「きさまか」

「……ああ」と、ソレイユは半歩後ろに下がりながら頷いた。「これは、あんたが？」

足元を指しながら言うと、イザヤは剣を収めながら冷めた目をソレイユに向けた。

「見ればわかるだろう。――邪魔だから斬った」

見つかるようなヘマをした、わけではないのだろう。おそらくイザヤは、通りかかった兵士をただ斬った。やり過ぎことだってできたはずなのに、イザヤはあえて斬ったのだ。

闇の中で、しかし彼女の長い前髪の隙間からのぞく蒼い瞳だけが炯々と光っている。

「そんなことよりもどうしてきさまがここにいる？　梟はどうした？」

「リオなら大丈夫だ。あいつは単独行動のほうが――」

「別に心配しているわけじゃない。ただおまえが予定とは違う行動をとった理由を聞いたかったただけだ。……どうせ、大した意味などないと思うが」

感情が根こそぎ奪い去られたような平坦で色のない声に、ソレイユは言い返す言葉一つ見つけることができずに頷いた。

イザヤはそんなソレイユを一瞥すると、剣についた血を払って鞘に収め、兵士たちの遺体を手際良く物陰へと押し込み、絨毯についた血をならした。目を凝らせばすぐに気付かれるぞんざいな処置だが、それを上回るぞんざいな見回りでは気付かれる可能性も少ないだろう。

イザヤを手伝い、全部で三体の遺体を回収したソレイユは、彼らの四肢が異常な方向に振れていることに気付いた。しかしイザヤに問い詰めることはしなかった。――聞くだけ無駄だとわかっていたので。

「なあ」と、ソレイユは走りながらイザヤに声をかける。「昨日、あんたはどこへ行っていたんだ？」

「おまえには関係ない」と、イザヤは言った。

「アベリアとなにかあったのか？」

「なんでそうなる？」

イザヤが眉を曇らせる。どうしてそこでアベリアの名前が出てくるのかは知らないが、彼女に関わることとあっては無視もできない。ソレイユはイザヤの反応が意外だったのか、やや間を置いて、言

い辛そうに口を開いた。

「いや、昨日の夜、アベリアがあんたの姿が見えないからって探しに出たんだよ。でも、二人とも別々に帰ってきただろ？　だから、なにかあったのかと思ってな」

「……そういうことだ、とイザヤはソレイユから視線を外しながら思った。

「昨晚、確かに出歩きはしたが、アベリアには会っていない。探しに行った、ということなど、彼女は昨晚も今日の出立の際も一言だと言って言わなかった。

「……その様子だと会ってないのか。入れ違ったんだな」

一人納得するソレイユの横で、イザヤは不意に脳裏を過ぎった考えにずっと身体から血の気が抜け落ちていくのを感じた。

——もしか、昨晚の惨劇を見られていたのではないか。

おびただしい血が咲き乱れ、異臭が漂う空間。もはや人とは呼べないほどに変貌した肉の塊を踏みつけている自身を想像し、イザヤは無意識に口元を手で覆った。自分でさえ吐き気をもよおすほどおぞましい光景だというのに、それをアベリアに見られていた可能性がある。

思い返せば、出立前のアベリアの様子はどこかおかしかった。ラケルの用意した建物の前で見送ってくれた彼女は、俯いていてイザヤと顔を合わせようとはしなかったのだ。

（まさか……でも、あのときの私は、周囲に気なんて配っていなかった）

一度浮かんでしまった悪い考えは沸き立つ水と同じように次々と

留まることなく溢れ出る。

（そうだとしても）イザヤは唇を嚙んで前を向いた。（それがいまさらどうしたという。私がやるべきことはアベリアを守ること。…それだけ、それだけを考えればいいんだ）

そう自分に言い聞かせるように口の中で呟いて、イザヤはふたたび前を見つめた。

どこまでも続く闇が口を開けて待ち構えている。怖いとは思わなかった。自分の歩く道は光差す陽だまりではない。果てない闇に薄く浮かぶ細い道の上だ。

この道を歩いた先になにもないことなどイザヤにもわかりきっていた。けれど進むしかないのだ。引き返す道などとうとう高く詰まられた憎しみや怒りで埋まってしまっている。分かれ道もない。選べるのは、進むか、立ち止まるか、あるいは落ちるかだ。

そんな救いのない道の中で、イザヤはいま、ただ一つの光を見つけた。

アベリアを守ることができる。――それはこの道に迷い込んでから初めてイザヤが見出した希望だった。たとえ自己満足でも、彼女に嫌われたとしても、最後の最後、この意志を貫き通すことができるのなら、イザヤにはもうなんの悔いもない。

（私の行く末が破滅だということくらい、ずっと前からわかっていたことなんだから）

※

同時刻、オルヤ離宮〈太陽ノ間〉の最奥にてアルヴィア神像を仰

ぎ見ていた教皇と妃の下へ、一人の騎士が訪れていた。

「失礼いたします、教皇様」

「ビンディか。なにごとだ？」

教皇が問うと、ビンディと呼ばれた若い騎士は頭を垂れたまま言
った。

「離宮に賊が入り込みました」

教皇は眉を顰め、それからすぐに納得がいったように頷いた。

「なるほど。その賊とは、〈蒼眼のイザヤ〉か？」

隣に立っていた妃が驚いたように息を飲んだ。

ビンディは頷いた。

「はい。おそらく間違いはないかと」

「よく報せてくれた。――ビンディ、離宮内にいる兵をすべて下げ
るがいい」

「……教皇様、せめて私だけでも」

「無用だ。なに、心配せずともそなたが想像しているようなことは
ならぬ」

言って、教皇は目を細めて笑った。

「あれは私たちの娘だ」

1-35 静まる、伽藍堂の離宮

ルカは咄然として目の前に倒れる兵士を見下ろしていた。

あわや廊下で挟み撃ちに会うかもしれないという状況で、咄嗟に入った部屋には数人の兵士が身支度を整えている最中だった。ラケルはその予想だにしない状況に、しかし思考を休ませることはなかった。ラケルの獲物である折りたたみ式の槍は一度として抜かれることなく、彼は腕一本で五人もの兵士が敵襲を知らせる間も与えることなく彼らを沈めてみせたのだ。

瞬きの間に終わった戦闘に、ルカはただ咄然とするばかりだった。

「すごい」と、ルカは首を振ってラケルを見上げた。「見直しました、ラケル様」

「そりゃ嬉しいねえ。惚れてもいいんだぜ」

「見損なっていたという事実があってこそ見直したという言葉が出てくるのです」

笑顔一閃。ルカはにっこりと片目を瞑ったままの表情で固まるラケルを一瞥し、それから後ろを振り返った。

「……イザヤ様たちは大丈夫でしょうか」

「身の安全を言うのなら、大丈夫だろうな。ソレイユくんはともかく、姫さんとリオちゃんはそう簡単にやられはしないさ」

「身の安全を言うのなら、ですか」言って、ルカは困ったような、あるいは呆れたような笑みを浮かべた。「遠回しな表現がお好きですね、ラケル様は。――はっきり仰ったらどうですか？」

「君は随分と俺に対して厳しいな。姫さんにはあんなに優しいのに」

わざとらしく肩を落としてみせるラケルに、ルカは口元に刻んだ

笑みを一層深くさせる。

「それは当然です。いまのわたしにとって、イザヤ様はとても大切な方ですから」

明瞭な声で言い切ったルカの瞳には迷いの欠片もなかった。窓から差し込むかな月光を受けて穏やかに光る紫の瞳を見据え、ラケルは問う。

「どうしてそこまで姫さんを？」

「あの方はわたしを救おうとしてくれた」

胸に手を当て、ルカは微笑んだ。

「イザヤ様はわたしから逃げなかった。この、厄介者以外の何者でもないわたしをイザヤ様は見捨てなかった。わたしですら諦めていたことを、あの方は諦めなかったのです。イザヤ様が嫌う嘘をつき続けていたわたしを、それでもあの方は救おうとしてくれた」

「だから君は姫さんについていくと？」

「ええ。けれど、感謝の意だけではありません」と、ルカは視線を伏せた。「心配なのです。死を否定なさる割に、イザヤ様は優しくします。あのような立場にいる方は本来、生きるためには鬼にならねばなりません。なのに、イザヤ様はできない。悪いことではないのです。悪いのは、人が優しいまま生きることができない世界です。……自分を省みない優しさはいずれイザヤ様を殺すでしょう。わたしはそんな結末を見たくはない」

胸の前で拳を握り、ルカは堅固たる意思のこもった視線をラケルに向けた。

「だからわたしはイザヤ様の傍にいます。いざというときは、たとえイザヤ様にどう思われようとわたしはあの方の命を脅かす存在を排除します。……わたしにはイザヤ様の心をお救いすることは、できそうにありませんから」

悲しそうに微笑むルカ。

「そうか」頷いて、ラケルは聞こえてきた足音に振り返った。「君は俺が思っていたよりもずっと強いな」

ルカは微笑んで、鉄扇を畳んで起き上がりかけた兵士の首を強く打った。声をあげることなくふたたび沈んだ兵士を呆氣にとられたように見下ろすラケル。

「やるねえ」と、ラケルが口笛を吹く。

ルカは苦笑して、それから倒れる兵士たちを見下ろし、眉をひそめた。

「ラケル様」ルカが低く抑えた声で言った。

「どうした？」

「あの、わたしはあまりこちらの事情には詳しくはないのですが、こういった場所に常駐する兵士たちは普通、勤務時間が終われば自宅にでも帰るものなのでしょうか？」

その一言で、ルカの言わんとしていることはラケルにも伝わったのだろう。しっかりと整えられた荷物を見やり、ラケルは首をふつた。

「いや、ないな。兵士の見張りは交代制だ。普通なら、ここで寝泊

りをする」

「では、この方はどうして？」

「わからん。引退する年でもないし、なにより時間もタイミングもおかしい。教皇がいるこの場からどうして離れようとする」

そう、ラケルが口にしたとき、扉の向こうがやけにざわついていることに気付いた二人は手早く兵士たちを寝台の下や物陰へと押し込み、灯りを消した。

そして、扉が開く。そこから顔を出した若い兵士は手に持った燭台を掲げると、首を傾げた。

「あいつら、先に行ったのか」

そう言い残し、兵士は扉を閉じた。カーテンの裏に隠れていたラケルとルカはお互いに頷き合い、足音を殺して扉に近寄った。耳を済ませて外の様子を聞き取ると、かろうじてだが少しばかりの会話を聞き取ることができた。

その話を総合したラケルとルカは信じられないと頭をふった。

「まさか、兵士や騎士たちが全員離宮を離れる……？」

「ありえん。俺たちが潜入していることがばれていないにせよ、そんなことはありえない」

ラケルも頭を抱える。ラケルとルカは自分たちの潜入が露呈し、この混乱に紛れて教皇を離宮外へと逃がす算段かとも考えた。が、兵士たちの会話を聞いている限り、教皇と妃は離宮に残っているという可能性の方が高い。

「この会話や騒動自体が罠だということとは？」

ルカの推察に、しかしラケルは頷かなかった。

「ないだろうな。これほどの人数を揃えているんだ。たかが賊を炙り出す程度のことまでここまで大掛かりな真似はせんだろうよ。全員を叩き起こし、離宮中を洗わせれば済む話だ」

「だとしたら、これはどういうことなのか？」

もしこれが罠でないのだとしたら、教皇はみすみす自分の命を投げ捨てたようなものだ。賊が入っていることが知られているなら尚のこと。知られていないにせよ、この行動にどのような意図があるのか、ルカにはまるで見当がつかなかった。

そしてそれはラケルも同じで、顎に手を当てたまま、唸るような声で言った。

「わからん」

「……ラケル様、この騒ぎはイザヤ様の耳にも？」

「当然届いているだろうな」

「では、イザヤ様は……」

言葉を詰まらせるルカに、ラケルは溜息を吐いて頷いた。

「兵が引き次第動くだろう。どう考えても怪しいことなどは姫さんも重々承知で、それでもあの娘は行く。たとえ、その先になにが待ち受けていようともな」

暗闇の中、ルカの耳に兵士たちの規則正しい足音が響く。それがまるで死神の足音のように聞こえ、ルカは宮殿のどこかで同じようにこの音を耳にしているイザヤの姿を思い浮かべ、強く自身の手を握りしめた。

「待て！ なにかがおかしいぞ、イザヤ！」

兵士の大半が離宮から離れたのを確認するなり潜んでいた部屋を飛び出したイザヤは、ソレイユの制止の声も聞かずに走った。

絶好の好機だ。いまを逃せば教皇と妃を殺す手立てはない。たとえ罠だったとしても、どのみち引き返す道などもう存在しないのだ。だとすれば、この可能性に賭けるほかなかった。

廊下を走りぬけ、階段を一段上るたび、イザヤの胸は熱くなった。ようやく、ようやくこの手で彼らを殺せるのだ。イザヤとアベリアの人生を踏み躪った彼らに復讐が叶うときがきた。

もはやイザヤの頭には教皇と妃を殺すことしかなかった。

「イザヤ！」

ソレイユの声さえ耳に届かない。

所詮は魔族。所詮は他人。彼にイザヤの気持ちを知ることなどできるはずがない。その証拠に彼は待てといている。そんなことできるはずがないのに。――やはりソレイユには、イザヤを理解することなどできないのだ。

そうして、階段の折り返しまで上ったイザヤは、咄嗟に剣を抜いて飛んできたなにかを弾いていた。

「よくぞ防いだ」

声は、上から聞こえた。剣をふった姿勢のまま、イザヤは階段の上を見上げた。

そこにいたのは、青銅の鎧を纏った若い騎士。真っ直ぐにイザヤを見下ろす瞳にははっきりとした敵意が感じられた。

「ここを通すわけにはいかん」
「なら死ね」

二度。たった二度の跳躍で、イザヤは階段を上り、騎士の頭上から剣を振り下ろしていた。

金属がぶつかり合う音が響く。力強く衝突した剣から弾ける火花が闇を裂いた。

剣を振るいながら、イザヤは舌打ちをした。この騎士はかなり強い。訓練だけを重ねた騎士とは違い、確実に何度も実戦を経験していることがありありと伝わる強さだった。

舞うように滑る剣裁きもさることながら、厄介なのはその合間に的確に繰り出される〈氷の神魂〉。彼は多くの開放者がそうであるように、〈神魂〉を武器に付与する戦い方はしなかった。彼は剣を交えている最中、ふいにイザヤの背後から氷を凝縮させた刃で攻撃をしかけ、イザヤが跳躍すると、その落下地点を凍らせる。

これではたといイザヤが〈闇の神魂〉で作り出した剣を用いたところで、彼が構えるただの剣の前には無意味だ。彼はイザヤの力の弱点を理解している。

（なら……）と、蒼眼に力を入れ、イザヤは奥歯を噛んだ。（駄目だ。あれは使えない）

この力を初めて行使したときも、さっき一度使ってしまった後も、イザヤは酷い眩暈に襲われてしばらく立ち上がることもさえできなくなった。残る騎士がいけないという確信がない以上、リスクの高い賭けには出られない。あれを使うならば、あくまでも最後。闇と並ぶ最強の力〈光の神魂〉の使い手である教皇を殺すときだ。

だが、この騎士とイザヤとの実力はほぼ互角。このままでは平行線だ。

(どうする)

そうイザヤが騎士の剣を受け流したとき、一発の銃声が響いた。

「イザヤ」と、銃を構えたソレイユが真剣な声で言った。「最後に聞きたい。本当に……いいんだな？」

「当然だ」

一切の迷いなく、イザヤは答えた。ソレイユは一瞬の沈黙のあと、口元をあげて笑った。

「そうか。それが、あんたの出した答えなら」

銃口が火を吹く。続けざまに同じ場所へと放たれた三発の銃弾が騎士の剣を弾く。

「くっ」騎士が怯む。

「行け！ イザヤ！」

ソレイユが階段を駆け上がり、騎士とイザヤを引き離すように威嚇する。

一瞬、イザヤとソレイユの視線が交錯した。

出会ったときから少しも変わらない赤い瞳を視界の端に映しながら、イザヤは足を止めることなく騎士の横をすり抜けて走った。

※

窓の近くに置かれた椅子に腰掛けたイスカは欠伸を噛み殺して本に目を落としていた。窓からは隣の建物が良く見える。その内の一室には明りがついていて、黒い人影がイスカと同じように窓辺の近くに座っているのが見えた。おそらく彼女も自分と同じく本を読んでいるのだらうと思いながら、イスカは目を擦る。

いつも各地を駆け回っている彼女にとってこれほど長い時間を特にすべきこともなく過ごせるというのは大変珍しいことだ。

特にすべきことがない、というのは少し間違っているかもしれない。確かに彼女は任務の最中だ。けれどイスカにとって、この状況はなにもすべきことがない、という状況とさして代わりはなかった。

（動かない人間の見張りや監視なんて、わたしじゃなくてもいいのに……）

そう思ったイスカの耳に、くぐもった声が聞こえた。ついと視線を寝台へと向ければ、簡素な寝台の上に両手両足を縛られ、かつ口を布で塞がれた少年がイスカへ必死な視線を向けている。

「うるさい」と、イスカはぴしゃりと言い放つ。

しかし、少年はなおも暴れる。

昨晚から丸一日気を失い、ようやく目覚めたと思えば暴れるなどという了見だ、とイスカはどこかずれた感性で思いながら、溜息を吐いて立ち上がった。本は閉じて机の上へと置く。どうせ内容など覚えていなかった。

寝台に近づいて、イスカは眉をひそめたまま少年を見下ろした。

「なに？　言っとくけど、時間まで逃がす気はないから」

少年が首をふる。またなにかを言おうとしているが、布が当てら

れた状態では伝わるわけがない。そんなこともわからないのか、とイスカは苛立つ。

「うるさくしたら落とすから」

そう脅しかけて、イスカは青くなった少年の口から布を剥ぎ取った。大袈裟に息を吐き出した少年は、何度か大きく深呼吸を繰り返して、それから早口に言った。

「あ、あの女は？」

「あの女？ だれのこと？」

「あの化け物女だよ！ 藍色の長い髪の！」

ああ、とイスカはようやく合点がいったように目を細めた。彼はイザヤのことを言っているのだろう。

「ここにはいない」

イスカが言うと、少年は見るからに安堵の表情を滲ませた。イスカはそんな少年から視線を逸らすと、窓辺に近づいた。影はまだ窓辺にいた。

軽く息を吐いてふたたび本を手にとったとき、少年の独り言のような呟きが耳に入り、イスカは思わず振り返っていた。

「いま、なんて？」

「いや、だからこんなことは二度とごめんだって――」

「その前！」

イスカの剣幕に気圧された少年が口にした言葉を聞くや否や、イスカは窓から飛び降りた。壁を使って難なく地面に着地したイスカ

はそのまま隣の建物へと飛び込み、階段を駆け上ってある一室に入り――顔を歪めた。

「そういう、こと……！」

即座に踵を返したイスカはまた窓から飛び降り、建物のそばに繋いであった馬に飛び乗るなり、一目散にデバイラを飛び出した。

※

その頃、伽藍堂となった離宮の正門の前に、全身をフードで覆い隠した人影が立っていた。影は広すぎる庭園を横切ると、中心に据え置かれた噴水の前で一度足を止め、夜の蚊帳に包まれた離宮を仰ぎ見た。

「急がないと」

そう囁き、影は足早に走る。

影が目指すは離宮二階奥――へ太陽ノ間へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1388p/>

うたかたの嘘

2012年1月10日20時47分発行